

# 小松市高堂遺跡

一般国道8号改築事業(金沢西バイパス)  
関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1990

石川県立埋蔵文化財センター



# 小松市高堂遺跡

一般国道8号改築事業(金沢西バイパス)  
関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

- 1 本書は石川県小松市高堂町地内に所在する高堂（たかんどう）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 高堂遺跡の発掘調査は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所管内の一般国道8号改築事業（金沢西バイパス）に係る調査で、建設省からの委託を受け、石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。調査は3カ年にわたり、昭和54年度に第1次調査、昭和55年度に第2次調査、昭和56年度に第3次調査を実施した。
- 3 高堂遺跡の発掘調査は、本報告のほか第1次・第2次発掘調査概報（昭和56年）、第3次発掘調査概報（昭和57年）を刊行しており、あわせて活用願いたい。
- 4 高堂遺跡の発掘調査は、第1次発掘調査を戸潤幹夫、田嶋明人、浅田耕治、第2・3次発掘調査は戸潤幹夫が担当した。  
各次の発掘調査および出土遺物については、高堀 勝喜（石川考古学研究会名誉会長）、桜井 甚一（前石川考古学研究会会長）、藤 則雄（金沢大学教授）、鬼頭 清明（東洋大学教授）、吉岡 康暢（国立歴史民俗博物館教授）、浅香 年木（元金沢女子大学教授）、犬丸 博雄（加南地方史研究会会員）杉野洋一郎（石川考古学研究会会員）らの指導と協力を得た。
- 5 発掘調査の実施にあたっては、建設省金沢工事事務所、小松市教育委員会、高堂町町会の協力を得た。
- 6 出土遺物の整理作業は、昭和60年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。また、出土遺物の写真撮影は田畑 弘の協力を得た。
- 7 本報告書の編集は戸潤と湯尻修平が担当し、報告は戸潤幹夫、栃木英道、田嶋明人、山本直人、藤田邦雄、湯尻修平が分担して執筆した。各執筆分担は目次に表示した。なお、高堂遺跡出土の木製品樹種鑑定については、鈴木三男・能城修一両氏による結果がまとめられており、第6章第2節に収録した。
- 8 本報告書の挿図番号は、各章、各節単位に扱うものとし、章、節、図番号の順に表記した。文中の用語については必ずしも統一していない。例えば土壇の「壇」は壇、壙、あるいは坑となっている。
- 9 高堂遺跡の遺構実測図、現場写真、航空写真、遺物実測図等の発掘調査記録及び出土遺物等の資料は、埋蔵文化財センターが一括して保管している。

# 高堂遺跡 目次

第1章 高堂遺跡の環境	1
第1節 位置と地理的環境（戸澗）	1
第2節 歴史的環境（戸澗）	1
第2章 調査の経緯と概要（戸澗）	9
第3章 弥生・古墳時代の遺構と遺物	13
第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の建物・溝・土壙（栃木）	13
1 建物（栃木）	13
2 溝（栃木）	22
3 土壙他出土土器（栃木）	60
4 まとめ（栃木）	69
5 観察表（栃木）	72
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物群（湯尻）	81
第3節 古墳時代中・後期の土壙（田嶋・戸澗）	86
第4章 奈良・平安時代の遺構と遺物	97
第1節 北調査区掘立柱建物群（田嶋）	97
第2節 南調査区掘立柱建物群（湯尻）	101
第3節 1号溝（田嶋）	105
1 1号溝（田嶋）	105
2 観察表（田嶋）	134
第4節 木簡と銅銭（戸澗）	148
第5節 今後の課題　－まとめにかえて－（戸澗）	153
第5章 中世の遺構と遺物	157
第1節 遺構と遺物の概要（藤田）	157
第2節 遺物の組成（藤田）	163
第3節 土師器皿の分類（藤田）	164
第6章 高堂遺跡出土の木製品	169
第1節 木製品（山本）	169
第2節 高堂遺跡出土木製品の樹種（鈴木・能城）	182

## 高堂遺跡 写真図版目次

高堂遺跡第1次～第3次各調査区全景等	図版 1～8
遺跡周辺の航空写真	図版 9
遺構（第1次）	図版10～17
遺構（第1次県道北側）	図版18・19
遺構（第2次）	図版20～30
遺構（第3次）	図版31～62
出土遺物	図版63～89



# 第1章 高堂遺跡の環境

## 第1節 位置と地理的環境

高堂遺跡は、小松市高堂町を中心にして、一部能美郡寺井町寺井にかけて所在する。小松市は、石川県の西南部に位置し、加賀平野と総称される穀倉地帯の一部をなしている。市域の北部から西部にかけての加賀平野は能美平野ともいわれ、西部の梯川下流域の沖積平野の一部は狭義には市街地が形成されている。市域の西南部は白山連峰に連なる丘陵・山岳地帯であり、南部は加賀三湖をとりまく江沼平野が広がっている。本遺跡は、市街地から北へ約5 km隔てた市域最北端の標高約6 mを測る能美平野の水田地帯に占地している。この能美平野北部地域は、霊峰白山（標高2,702m）に源を発する県下第一の大河を誇る手取川によって形成された手取扇状地の南縁と接しており、関係する水系は、西部の梯川よりも手取川の影響の強い地域であるといえる。



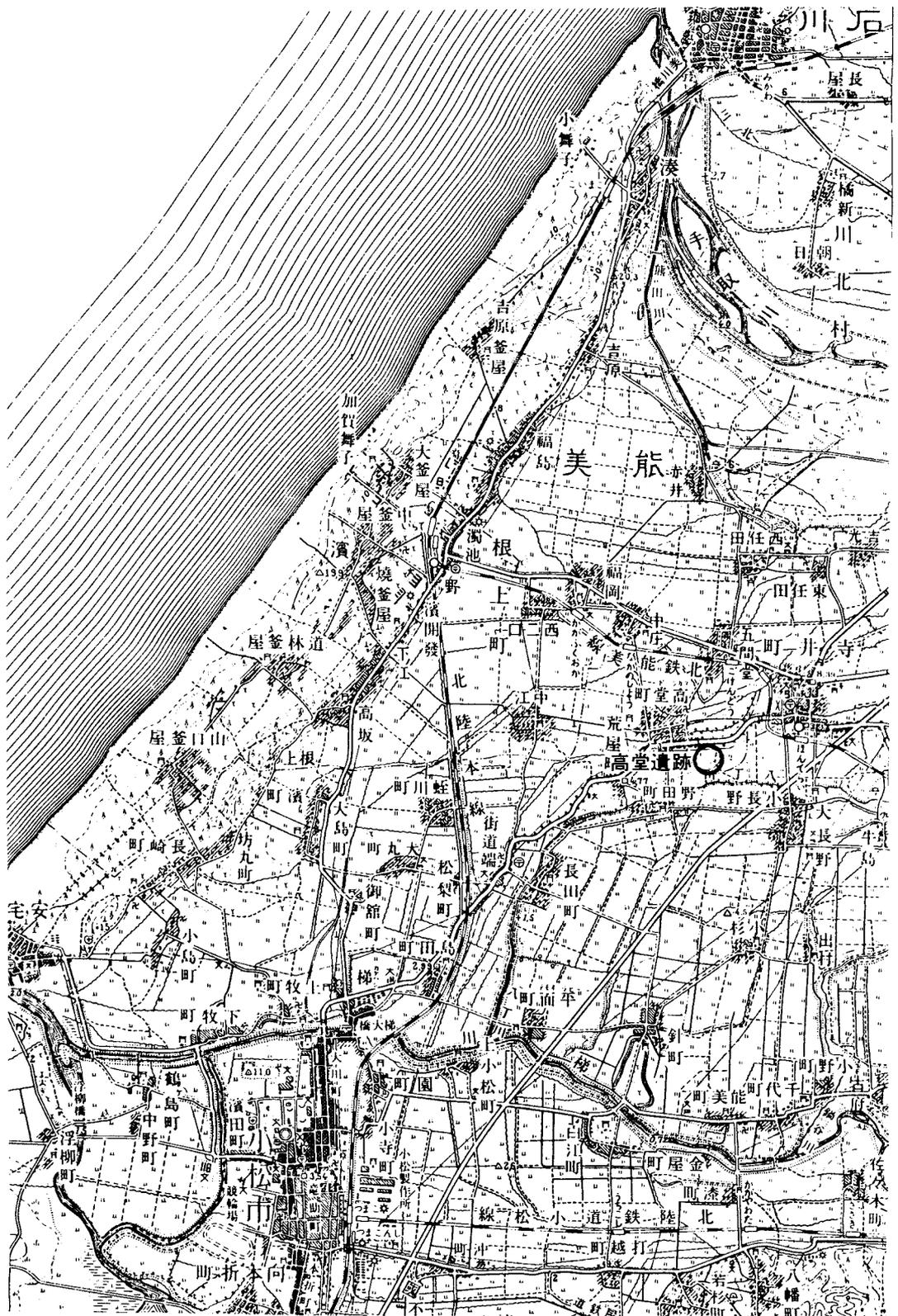
第1-1-1図 石川県小松市の位置

手取川は、本遺跡の北約4 kmにあって日本海に注ぐが、古来より“暴れ川”の異名をとり、本流河道の変遷が激しかった。現在の手取扇状地に網状にめぐる七条の用水（「七ヶ用水」）は、その分流・支流の旧河道と考えられている。『川北村史』によれば、弥生時代後期～古墳時代初頭頃には、現在の河道が本流をなしていたと考えられており、これを「古手取川」と呼称している。飛鳥～平安時代には松任市にある山島用水（「北川」）が本流となり、平安時代後期から鎌倉時代には現手取川の北方約4.5kmの大慶寺用水が本流となり、古手取川が現河道として復活したのは、藩政期頃とみられている。本遺跡が営まれた時代的推移が弥生時代末期から中世であることからすると、最も影響があったのは古手取川の段階であったとみられる。

さて、本遺跡は手取川の末流にはさまれた周囲より1 mほど高い<sup>からす</sup>鳥と称する微高地上に立地しており、手取川の濫流からも孤立できたといわれている。北には、手取川を取水口とする宮竹用水が遺跡の北限を画し、南には八丁川が西流して遺跡の南限を画している。八丁川以南は、急激に地形高度をさげて梯川沖積地へと統いており、八丁川は能美平野の北部と南西部を画す地形変換線をなしているといえる。東方には、更新世中期の海成段丘であるなだらかな能美丘陵を望み、その手前約2 kmの至近距離には、平野にとりのこされた独立小丘（西山・秋常山・末寺山・和田山・寺井山）が点在している。西方は、約3 kmで日本海に至る。

## 第2節 歴史的環境

能美平野北端部周辺における歴史は、本遺跡の東方にある能美丘陵から始まった。手取扇状地



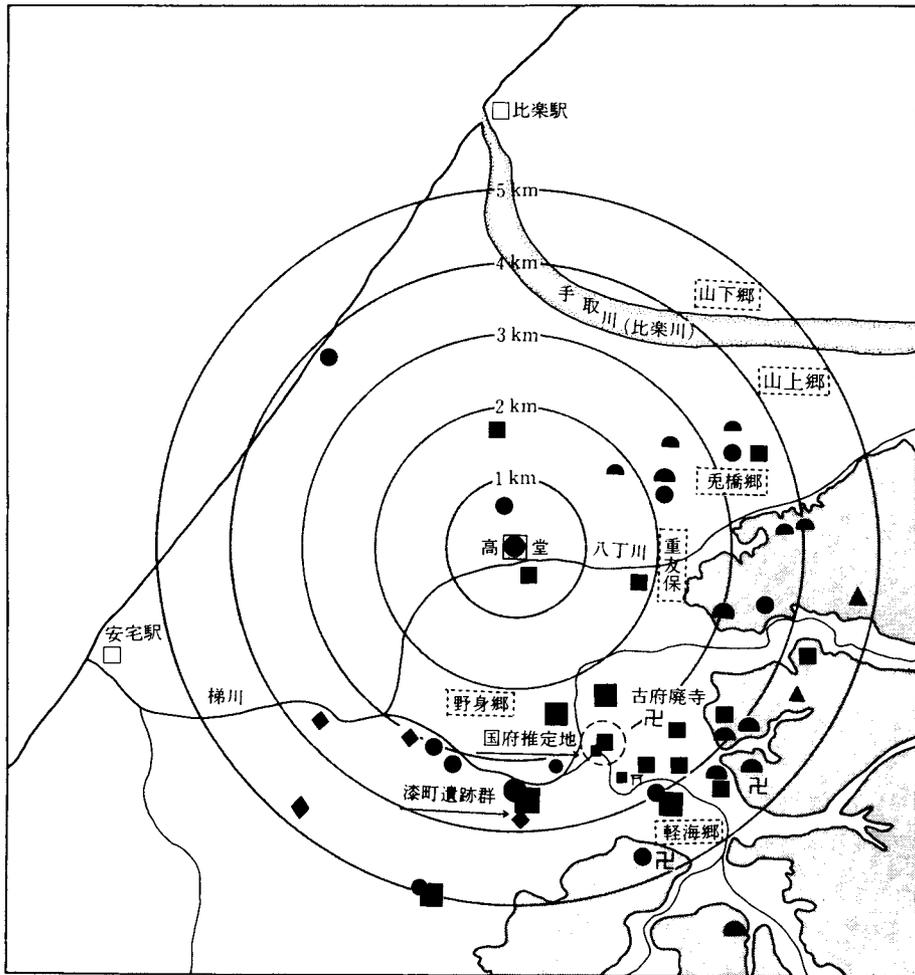
第1-2-1 高堂遺跡周辺の地形

を臨む能美丘陵上には、県内で最初に学術発掘が行われた旧石器時代遺跡として著名な灯台笹遺跡をはじめ、縄文前期の旭台A遺跡や火釜A遺跡などの能美地域の黎明期を物語る遺跡が点在している。縄文中期から後期になると、丘陵縁辺部に宮竹遺跡、長滝遺跡、筋生遺跡、来丸遺跡などが立地し、後期から晩期には、本遺跡の東約4kmほど隔てた扇状地上にも、下開発遺跡、徳久・荒屋遺跡、和田山下遺跡などの集落跡をみることができる。

弥生時代では、前・中期に遡るものは極めて少なく、わずかに寺井山丘陵や和田山下遺跡から中期の土器片が数点採集されているのみである。中期の集落分布は、おもに小松市街地周辺の梯川下流域を中心に展開したとみられ、そこでは「小松式土器」の標式遺跡として知られる八日市地方遺跡や梯川鉄橋遺跡が存在する。しかし、後期後半ころより、梯川中流域や本遺跡跡周辺の能美平野北端部にも集落設営が盛んになった。本遺跡の東約2kmにある標高35m前後の和田山丘陵には、堅穴住居跡や高床式倉庫跡が発見されている。また、東方の平地では、和田山下遺跡、高座遺跡、荒屋遺跡があり、北約2kmには中ノ庄遺跡が、南には高堂四方堂遺跡が近接している。こうした後期末の爆発的ともいえる集落の急増とともに、西山・和田山・寺井山といった丘陵上では、円形周溝墓や方形周溝墓などがつくられるようになり、能美地域の首長層を擁立させる兆しがみえはじめた。なかでも、和田山につくられた第14号方形周溝墓は、他の支群の周溝墓よりも一際大きく、他の支群よりも優位にあったとみられ、後に北加賀最古の古墳とみられる和田山九号墳の被葬者を生み出す前提になったとみられる。

古墳時代になると、寺井山、末寺山、和田山、西山といった独立丘陵は、能美地域の首長層の奥津城となり、総数約60基を数える古墳が継起的に築造され、それぞれ支群を形成した。これらを「能美古墳群」と総称している。能美古墳群の形成は、方墳の和田山九号墳を最古にして末寺山五号・同六号墳の前方後方墳へと継続したが、中期には、北陸でも屈指の副葬品が出土したことも知られる、全長56mの前方後円墳の和田山五号墳が築造された。また、和田山の北東にある秋常山では、全長110mの県内最大規模を誇る前方後円墳の秋常山一号墳があり、五世紀以降幾内王権との関係を深めた王墓をみることができる。これらの支群は、後には横穴式石室を有する後期古墳へと推移するが、なかでも西山支群では、凝灰岩切石積の石室墳が五基確認されている。

さて、律令時代に入ると、加賀立国以前は越前国江沼郡に属した。周辺の奈良時代頃からの遺跡には、本遺跡の東約5kmにある徳久・荒屋遺跡や下開発遺跡がある。両遺跡は、初期庄園として文献にみえる東大寺領幡生庄に擬定されており、「庄」と墨書された須恵器が出土している。また、周辺の能美丘陵北麓一帯は、長岡京木簡に初見する山上郷に編成されていたと考えられており、奈良時代後半頃より扇状地周辺の開発が進んでいたことが推測されている。弘仁14年(823)の加賀立国後は、当遺跡周辺は加賀国能美郡に属した。能美郡には、国府・国分寺がおかれ、『和名抄』に軽海・野身・山上・山下・兎橋の五郷がみえ、『延喜式』・『和名抄』からは、比楽・安宅の二駅が存在を知ることができる。本遺跡の南3kmにある梯川右岸の古府町付近は、国府推定地にされており、条理の復元も試みられている。また、近接する古府台地には、加賀国分寺跡として有力視されている十九堂山遺跡(「古府廃寺」)があり、その南西には加賀総社の府南社(石

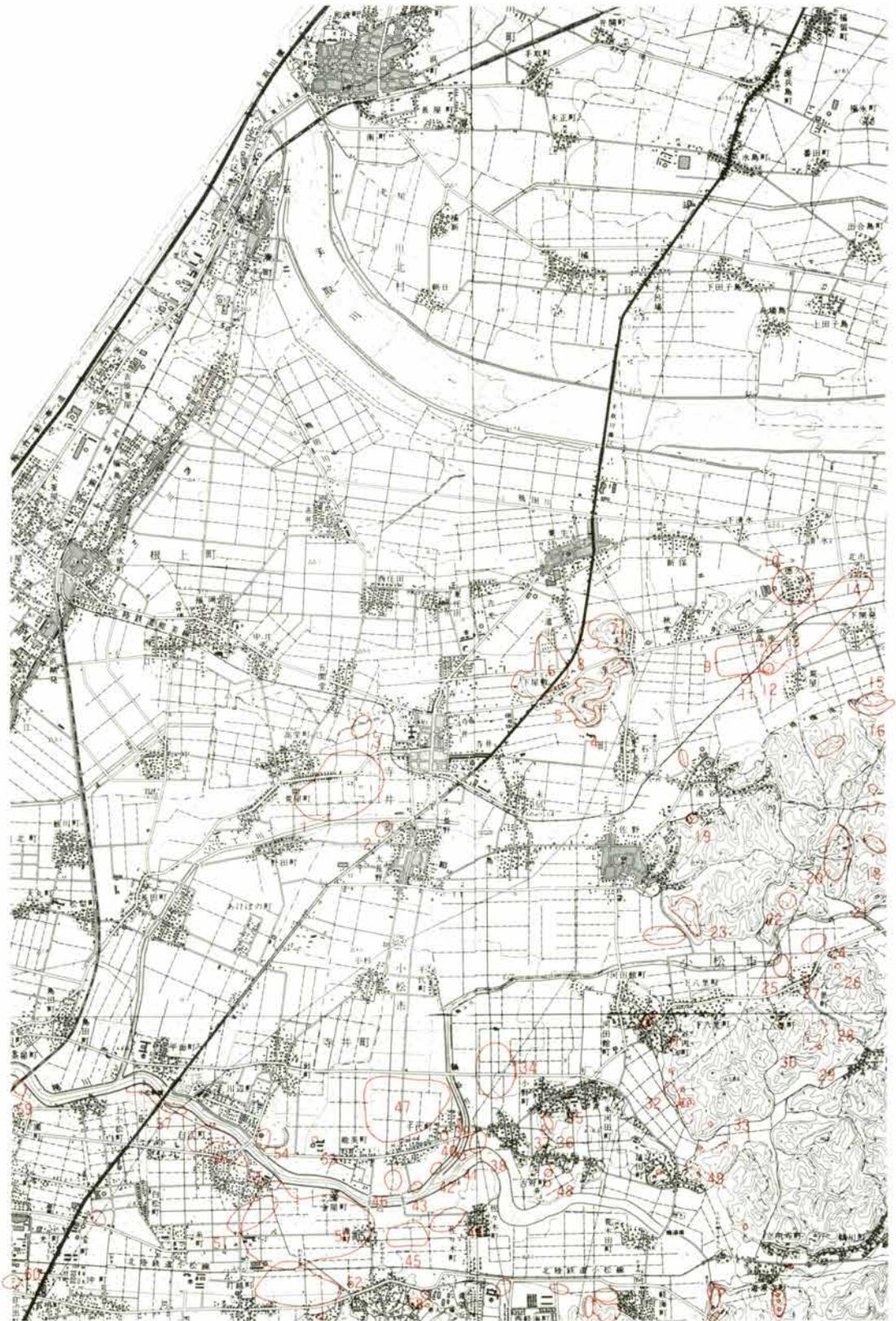


第1-2-2図 高堂遺跡周辺の歴史的環境

- ◆ 弥生時代 ● 古墳時代
- 古墳群 ▲ 窯跡
- 奈良・平安時代
- 卍 廃寺跡 卍 戸総社

遺跡名	時代	弥生時代	古墳時代	奈良時代	平安時代
	高堂遺跡			▬	
能美古墳群			▬		
高座遺跡			▬		▬
和田山下遺跡			---		---
大長野遺跡					---
中ノ庄遺跡					---
漆町遺跡群			▬	---	▬

第1-2-3図 高堂遺跡とその周辺遺跡の年代



第1-2-4図 高堂遺跡周辺の遺跡

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
1	高堂遺跡	弥生～中世	31	谷内横穴	古 墳
2	大長野遺跡	弥生～中世	32	河田B遺跡	奈 良
3	高堂四方堂遺跡	弥 生	33	河田山古墳群	古 墳
4	和田山下遺跡	縄文・弥生	34	しのまち遺跡	平 安
5	和田山古墳群	古 墳	35	小野窯跡	近 世
6	寺井山古墳群	"	36	十九堂山遺跡	平 安
7	末寺山古墳群	"	37	十九堂山中世墳墓群	中 世
8	末寺山下遺跡	平 安	38	古府遺跡	平 安
9	高座遺跡	縄文～中世	39	小野町遺跡	古 墳
10	徳久山上郷館跡	不 詳	40	千代城跡	中 世
11	徳久A遺跡	縄 文	41	フドンド遺跡	平 安
12	徳久B遺跡	平 安	42	横地遺跡	縄 文
13	徳久C遺跡	縄文～平安	43	本村遺跡	古 墳
14	荒屋・下開発遺跡	縄文～中世	44	佐々木ノテウラ遺跡	弥生～中世
15	茶臼山古墳群	古 墳	45	佐々木遺跡	平 安
16	茶臼山製鉄跡	不 詳	46	千代マエダ遺跡	古墳～平安
17	下徳山A遺跡	奈良・平安	47	千代オオキダ遺跡	奈良～中世
18	下徳山カネダシ遺跡	不 詳	48	南野台B遺跡	古 墳
19	湯谷遺跡	古 墳	49	後山明神古墳群	古 墳
20	和気古窯跡群	平 安	50	漆町遺跡	弥生～中世
21	和気下和気窯跡	"	51	念仏寺塔遺跡	"
22	向山遺跡	古 墳	52	打越遺跡	古墳～中世
23	河田向山古墳群	"	53	定地坊跡	中 世
24	上八里中世墓跡	中 世	54	一針遺跡	縄 文
25	上八里A遺跡	縄 文	55	白江遺跡	中 世
26	上八里B遺跡	奈 良	56	白江梯川遺跡	弥生～中世
27	上八里2号窯跡	不 詳	57	平面梯川遺跡	弥 生
28	上八里横穴古墳群	古 墳	58	八幡古墳群	古 墳
29	上八里1号窯跡	不 詳	59	梯川鉄橋遺跡	弥 生
30	穴場横穴	古 墳	60	八日市地方遺跡	弥 生

部神社)がある。梯川右岸には、古府遺跡や古府しのまち遺跡があり、対岸には漆町遺跡郡をはじめ荒木田遺跡、佐々木ノテウラ遺跡などの律令期の遺跡が密集するが、おもに平安中期を盛期としており、加賀立国当時の九世紀前半から中葉に比定される顕著な遺跡は認められておらず、立国当初の国府所在地について再検討が迫られている。一方、梯川河口には、長岡京木簡に初見する安宅駅の推定地があり、本遺跡の南に流れる八丁川は梯川に注いでおり、本遺跡と安宅駅との関連も看過できないであろう。

ところで、文献史料からみた本遺跡周辺は、嘉応三年(1171)2月の散位中原頼貞讓状案に「牛島界板津庄訪示外重友村」と初見する板津庄の庄域にあたるものと想われる。板津庄は、その後重友保となるが、宝治元年(1247)に初見する郡家庄の別名とする説が有力視されており、その位置については、建仁元年(1201)の地頭介某讓状案に「東限秋恒、西限郡家長野、南限得橋郷、北限郡家東吉光保」の記載があり、本遺跡とは東に隣接する地域を示している。これらの史料から、郡家庄は能美郡家を中心に成立したとみられ、浅香年木氏は、寺井町西部から根上町東部ないし小松市北端部に、加賀立国当時の能美郡家があったと推定されている。能美郡の郡領層については、立国以前の江沼郡司に名を連ねた財氏が、長岡京木簡に「山上郷戸主財益国」や「安宅駅戸主財豊成」の名がみえることや、『統日本紀』承知4年11月17日条に「能美郡人財部造

継磨」の名があることから、財一族が郡司の主力を占めていたと推定されている。しかし、本遺跡から、加賀郡司に名を連ねた大私造一族とみられる人名木簡が出土しており、本遺跡の性格とともに平安新政のなかでの能美郡司についても再検討が必要とみられる。

#### 参考文献

- 『角川日本地名大辞典』17 石川県 1981年  
『川北村史』 1970年  
『辰口町史』第2巻 前近代編 1987年  
吉岡康暢「平安前期の地方政治と国分寺（上）」（『日本海域研究報告第8号』1977年）  
浅香年木『古代地域史の研究』 1978年  
『辰口西部遺跡群』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1988年



## 第2章 調査の経緯と概要

高堂遺跡の調査の歴史は、昭和32年（1957）2月、加賀地方の遺跡調査に意欲的であった上野与一氏が、高堂町の通称「まめ田」と呼ばれる水田を発掘したことにはじまる。その場所は、今回の発掘調査区の南側西隣りにあたる地点であった。その調査については、当時の地元紙が多量の弥生式土器が出土したと伝えるのみで、その詳細な内容は明らかでない。その為、研究者の間でも高堂遺跡の存在を知る人は少なく、遺跡地図にも掲載されることはなかった。

昭和52年ごろ、金沢西バイパス建設計画が進められるようになり、郷土史に関心の深い地元民から遺跡の一部が路線予定地となることを危ぶむ声が出てきた。同54年5月、当センターでは、その声を受けて建設省金沢工事々務所と協議し、路線予定地内の分布調査を実施した。その結果約10,000㎡におよぶ範囲に遺物の散布と遺構の存在を確認し、同年7月18日より発掘調査に着手した。調査対象が広範囲にわたるため、建設省と協議のうえ三年間に分けて実施することとした。

調査区の設定は高堂町ハノ部の路線敷約10,000㎡について、5m×5mのグリッドを設定した。グリッド原点は路線センターにおき、南北軸をN7°30'Eとする直角座標を決定した。グリッドの明示は東西軸を1・2・3……とし、南北軸をA・B・C……とした。なお、県道北側の拡張区については、マイナス（-）をつけて表した。

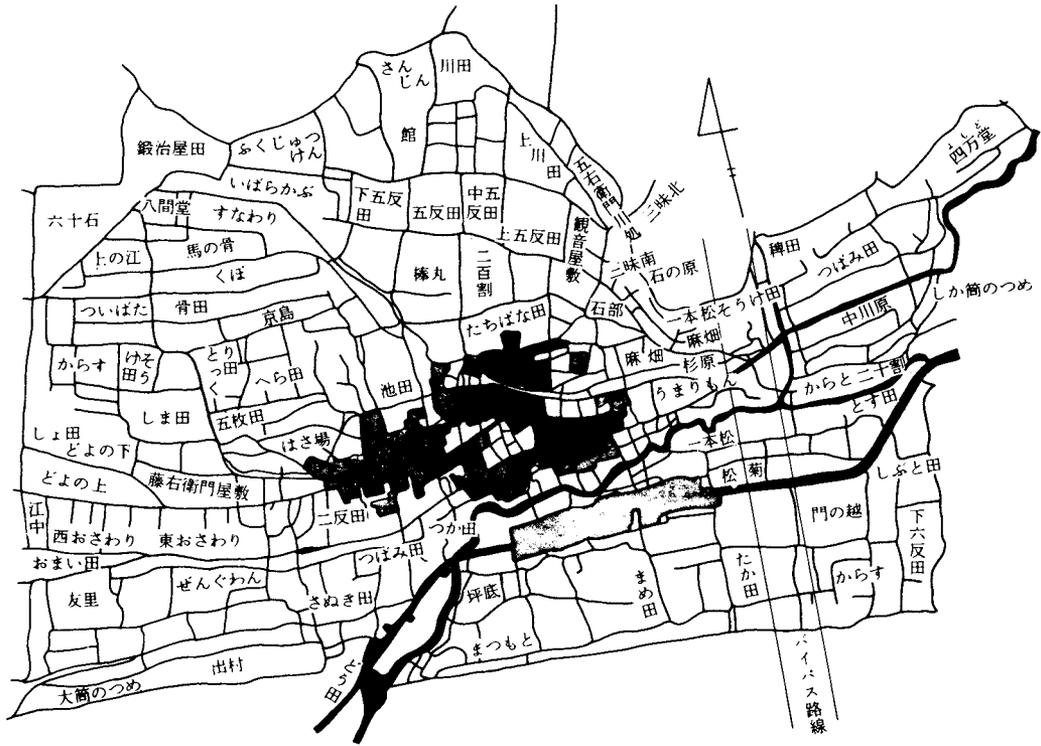
第1次調査区域は、路線予定地の南側に設置される橋脚部の一画と、集落を横断する県道寺井小松線の北側の二ヶ所で実施された。調査当初は、調査員が不足していたため小松市教育委員会の協力を得て実施した。南側調査区では、弥生終末期の大溝や土坑のほか、鋤・鉢などの木製品が出土した古墳時代後期の土坑などが検出された。県道北側では主に中世の溝と土坑を検出した。調査は12月26日に終えたが、地元民の理解を得るため公民館において調査成果の説明会を実施した。

第2次調査は、昭和55年8月18日から12月26日にかけて実施した。調査区は、県道南側部分を中心にしておこなった。ここでは、平安前期ころの掘立柱建物群がⅡ期にわたって「コ」の字形に配置され、その広場には、和同開珎をはじめとする皇朝十二銭を埋納したビット二ヶ所と、焼痕をともなう竪穴遺構が検出された。また、西側には建物域を画したとみられる南北溝も検出され、多数の墨書土器が出土した。建物域のさらに南側では、弥生終末期の溝状遺構・方形周溝状遺構・土坑のほか、古墳時代中・後期の土坑も検出した。なお、第二次調査では、建物群を中心とした調査区の約2,700㎡について航空測量を実施した。

第3次調査は、昭和56年5月18日から11月7日にかけて実施した。調査区は、南側橋脚付近を中心とした約5,300㎡を対象とした。第1次調査区の南にあたる遺跡南端部では、第1次調査区で検出された弥生終末期の大溝の続きが検出され、蛇行して東西に走る実態が明らかになった。また、第2次調査区の建物域を画した平安期の南北溝の伸びも確認でき、曲物をはじめとする木製品のほか多数の墨書土器が出土した。橋脚部北側では、弥生終末期から平安期にわたる建物が重複していた。平安期の南北溝からは、2点の木簡の出土が特筆され、その1点には「金光明最勝王経四天王護国品」と記されており、遺跡の性格を考えるうえで大きな示唆を与えるものと

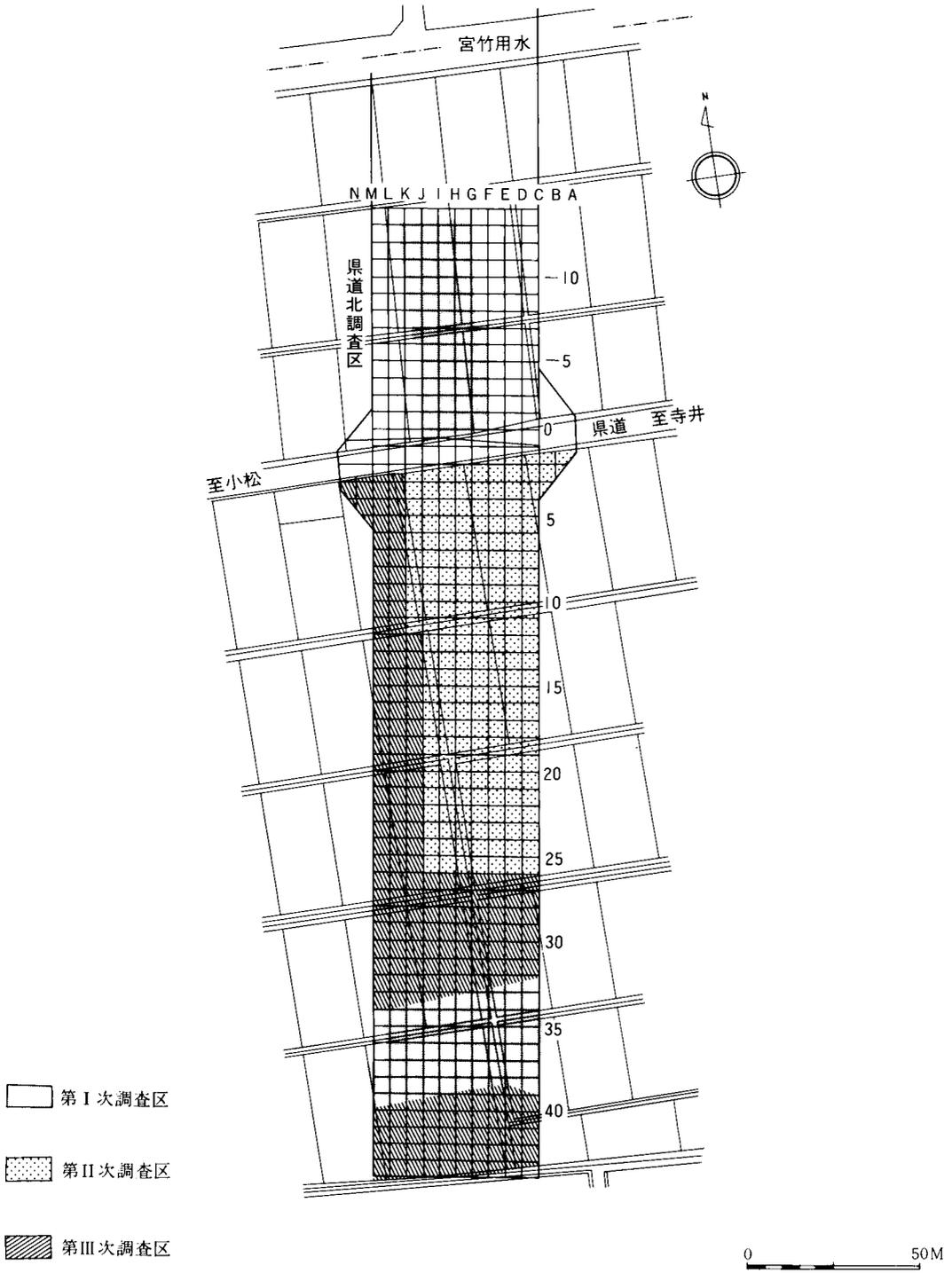
なった。

Ⅲ次にわたる調査から、弥生終末期では微高地の南端を蛇行する大溝で画した集落設営が窺え、平安期の遺構は、条理とも考えられる南北溝の東側に主要施設が展開している様子が明らかになった。

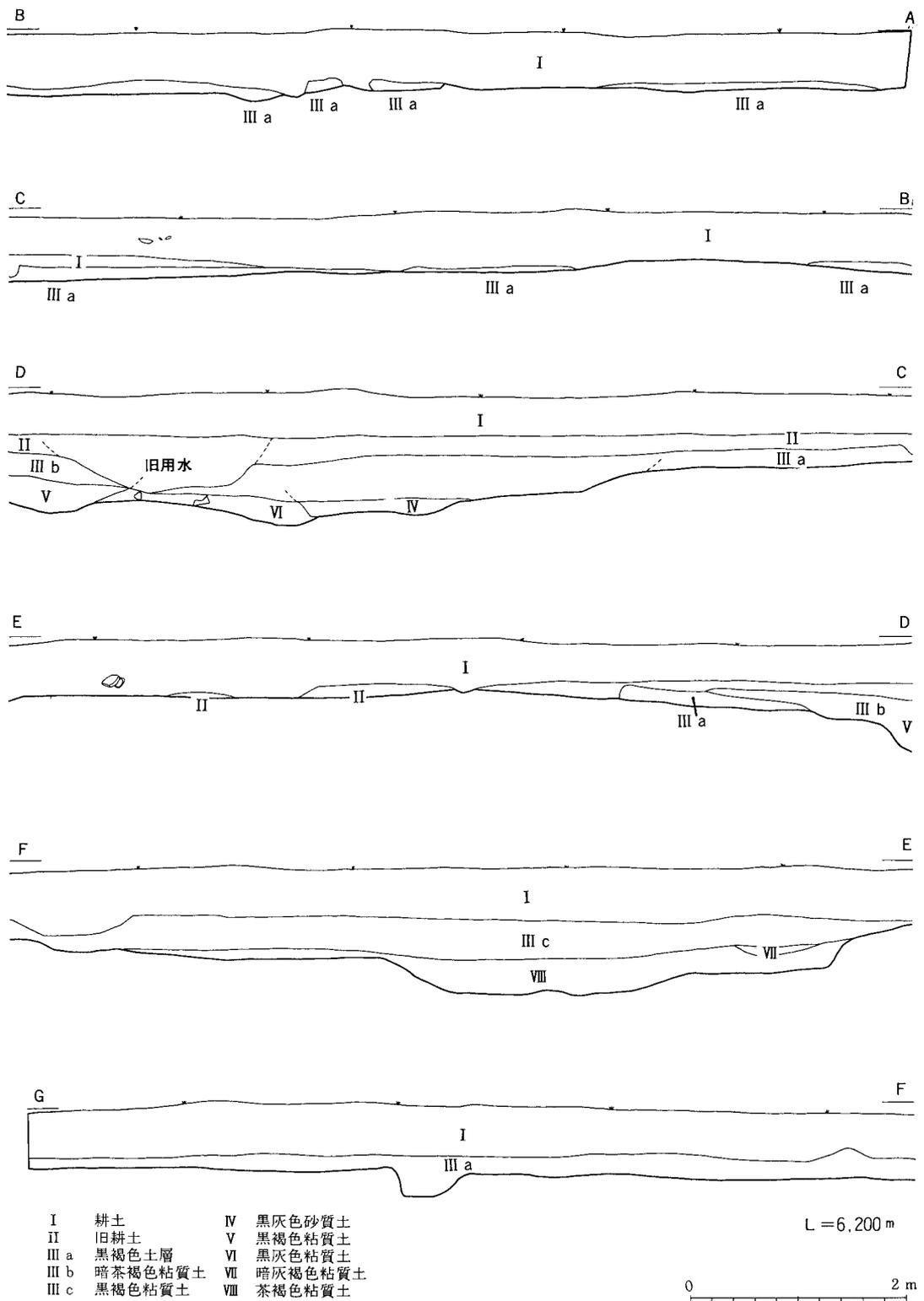


第2-1-1図 明治時代の高堂と地名

(犬丸博雄著「高堂町の宅地調査」『加南地方史研究』第27号より転載)



第2-1-2図 グリッド模式図と調査区



第2-1-3図 第1次調査区中央東西セクション

## 第3章 弥生・古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の建物・溝・土壇

本節では、弥生時代後期～古墳時代前期の建物・溝・土壇について、第1項 建物（掘立柱建物は第2節参照）、第2項 溝、第3項 土壇他出土土器の順に報告する。なお、個々の出土遺物の法量等については、第5項 観察表1～9を参照されたい。

#### 1 建物

##### 第2次調査1号建物（第3-1-1～5図、観察表1）

**位置と概要** 調査区中央からやや南西部へよったC～F-20～23区に位置する。方形に4個の柱穴を配置し周囲に溝を巡らせたもので、堅穴状の掘り込みは確認されていない。

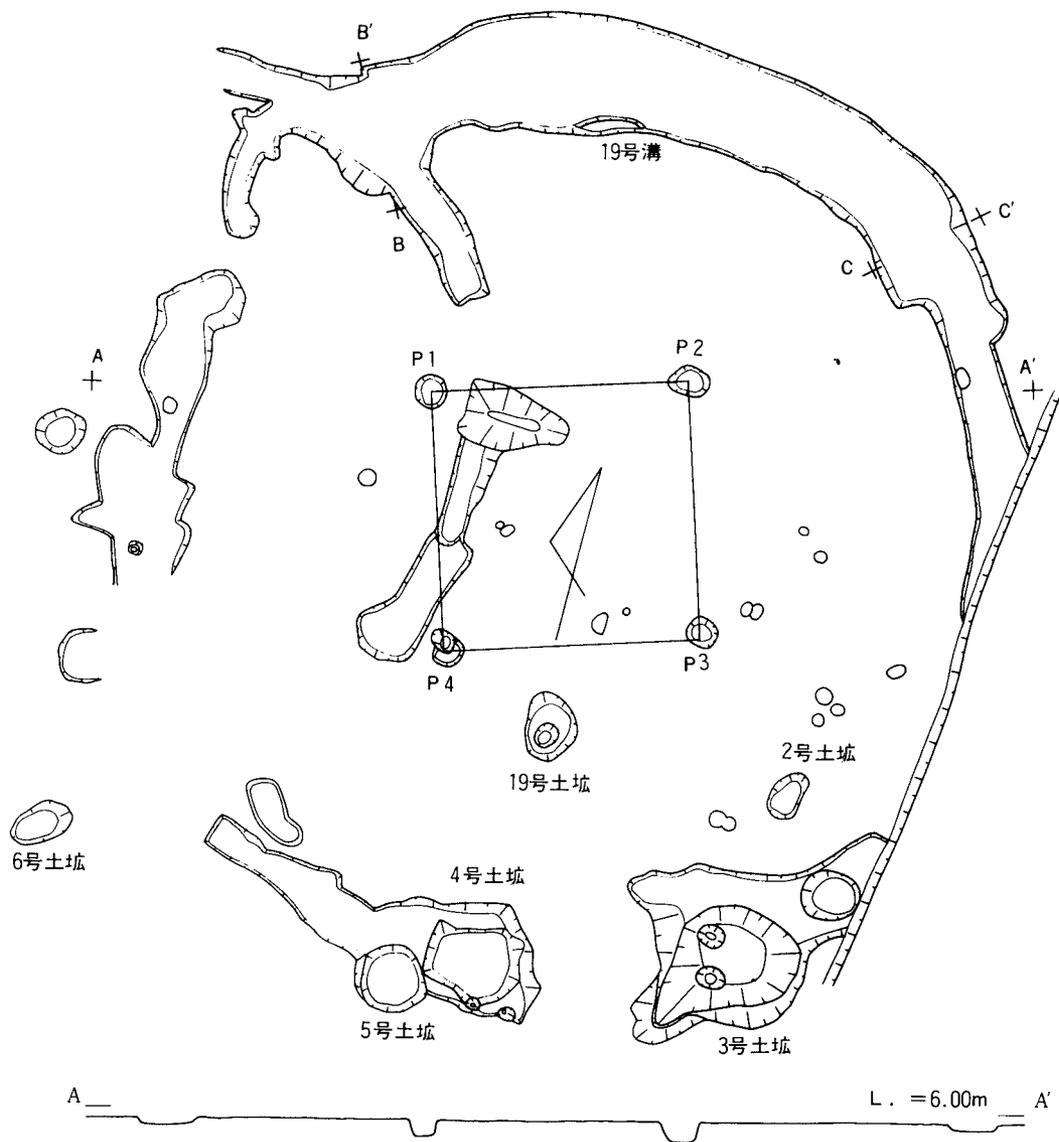
**規模と形状** 柱穴は平面円形ないしは隅丸方形を呈し、検出面（海拔約5.8m）での長径・短径・深さは、それぞれP1 66×60・31、P2 78×62・39、P3 62×56・37、P4 62×54（推定）・18cmを測る。柱穴間距離はそれぞれP1-P2約5.1、P2-P3約5.0、P4-P1約5.2mを測る。P1-P3間、P2-P4間はそれぞれ約7.2mである。炉などの中心施設は確認されていない。

**周溝（19号溝、3・4号土壇）**は平面形が不整形な隅丸方形を呈し、内径15～17、外径18～21m程度を測る。幅は0.5～3.1m、深さ10～40cmを測り、ともに変化に富んでいる。北西・北東・南・東側の各部で溝がとぎれており、いわゆる開口部は特定できないものの、建物軸に平行（もしくは直交する）南側である可能性が考えられる。

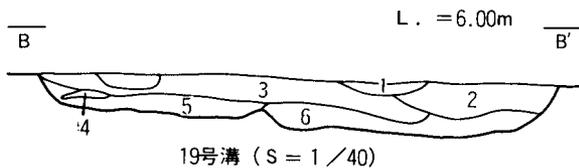
**覆土と遺物出土状況** 周溝の覆土は地山土ブロックを含んだ黒褐色粘質土を基調とする。実測し得る遺物（土器）が出土したのは周溝南側の3～5号土壇とした地点に限られ、4号土壇とした地点では、一部溝底に接するものもあるが、大部分は溝底から10～20cm浮いた状態で出土している。

**出土遺物と所属時期** 3号土壇とした地点からは、壺・甕・器台が各一点（1～3）出土している。2は小片である。4号土壇とした地点からは、甕3点（4～6）、底部・高杯・器台各一点（7～9）が出土している。4はほぼ完形である。1・8・9は、東側でそれぞれ単独に近い状態で出土。5～7は、西側で他の若干の土器片とともに出土しているが、いずれも大形破片ではない。

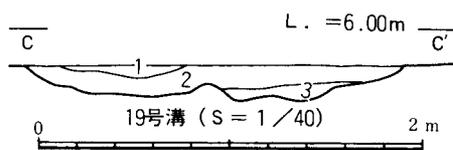
5号土壇からは甕3点（10～12）が出土している。11・12は小片である。5号土壇は平面円形（径1.3m前後）、検出面からの深さ80cm弱を測る大型土壇で、第1次調査1号土壇などと同様の性格をもつ、おそらく独立した土壇であろう。周溝（4号土壇地点）との切り合い関係は不明だが、4号土壇地点西側で出土した土器群（5～7他）が、5号土壇上では確認されていないことから、5号土壇が後出する可能性が考えられる。したがって5号土壇出土土器が、本来4号土壇西側地点出土土器群の一部であった可能性も否定できない。



第2次調査1号建物 (S = 1/150)



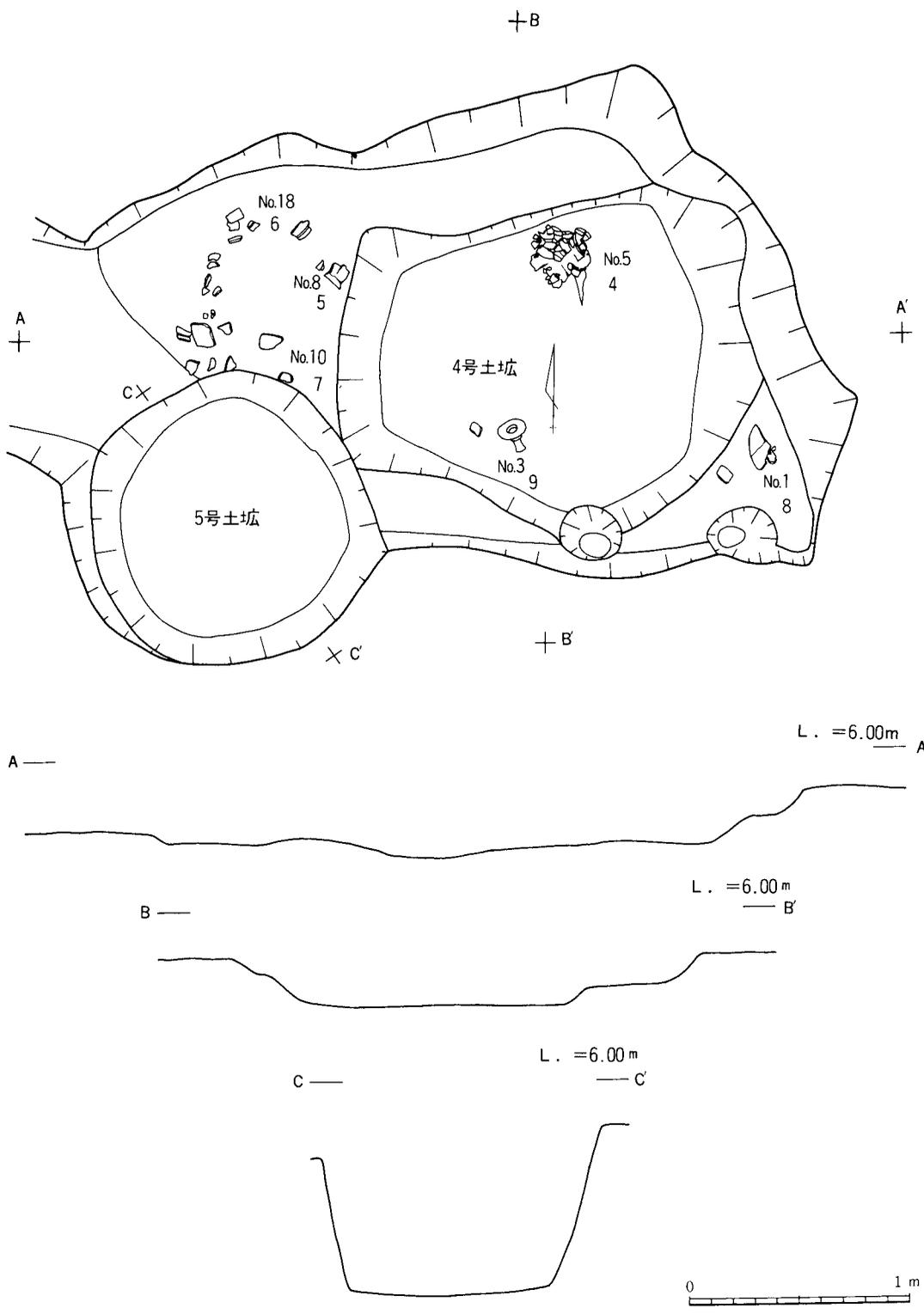
19号溝 (S = 1/40)



- 1 攪乱土
- 2 黒褐色粘質土(地山ブロック少量混入)
- 3 黒褐色粘質土(地山ブロックをやや多く含む)
- 4 黒褐色粘質土
- 5 地山(ブロック)土
- 6 黒褐色粘質土(やや大きな地山ブロックを少量含む)

- 1 黒褐色粘質土(地山ブロック少量混入)
- 2 黒褐色粘質土
- 3 黒褐色粘質土(地山ブロックを多量に含む)

第3-1-1図 第2次調査1号建物 (S = 1/150・S = 1/40)



第3-1-2図 第2次調査1号建物周溝遺物出土状況 (S = 1/30)

3・4号土壇地点出土土器（1～9）は、いずれも弥生時代終末期（月影式期）に属し、1号建物の（廃絶）時期をあらわすものであろう。5号土壇出土土器のうち11・12の甕は、4号土壇地点出土甕（5・6）に比較して退化傾向にあるといえなくもないが、出土状況を考慮すれば、両者のあいだに明瞭な新古関係を想定することは難しく、ここでは10の甕を含め、11～12は1～9とほぼ同時期の所産と考えておきたい。なお10～12の甕が、5号土壇の時期をあらわさない可能性があることはすでにふれたとおりである。

小結 本遺跡では、1号建物周溝と同様に建物を構成する可能性のある溝は、1号建物の西側3分の1に重複して半環状に巡る溝（推定内径約12m、幅0.5～1.8m、深さ約10cm、1号建物との切り合い関係は不明）、1号建物の南側約30mに位置する半環状の第3次調査31号溝（幅0.2～0.9m、深さ5～30cm）などがある。また、1号建物の北側約30mに位置する第2次調査方形周溝状遺構（第3-1-6図）も全くその可能性がないわけではない。同遺構は内径で一辺が7.0～7.6m、幅0.5～1.2m、深さ10～20cmを測り、覆土は暗茶褐色土を基調とする。いずれも柱穴などが確認されておらず確証はない。図化し得る遺物も出土していないため、時期も明らかではない。

1号建物に類似する建物（堅穴状の掘り込みをもたない（確認できない）建物で、平面・断面ともに不整形な周溝をとともなうもの）は「周溝を有する建物<sup>(1)</sup>」などと呼称され、北陸各地で検出例が増加している。柱穴・周溝ともに確認できるものを類例A、どちらかあるいはその一部しか確認できないものを類例Bとすると、類例Aは北陸地域では新潟県柏崎市下谷内遺跡（越後<sup>(2)</sup>）、富山県中新川郡江上A遺跡（越中<sup>(3)</sup>）、石川県金沢市磯部運動公園遺跡（北加賀<sup>(4)</sup>）、同小松市漆町遺跡（南加賀<sup>(5)</sup>）、福井県坂井郡三国町下屋敷遺跡（越前<sup>(6)</sup>）他9遺跡で約20基が検出されており、資料整理中の石川県鹿島郡鹿島町藤井サンジョガリ遺跡（能登<sup>(7)</sup>）、同金沢市戸水B遺跡<sup>(8)</sup>・上荒屋遺跡<sup>(9)</sup>や、類例B（石川県金沢市寺中遺跡など）を含めると50基前後に達する。全国的な分布状況は不明だが、大坂府岸和田市下池田遺跡例（和泉<sup>(10)</sup>）などが類例Bとなるのであれば、北陸地域にとどまるものではないという印象をうける。

最古の例は、下谷内遺跡・下屋敷遺跡などで弥生時代中期中葉（若干前後する可能性がある）に属する。以下中期後葉（磯部運動公園遺跡他）中期末葉（戸水B遺跡他）、後期後半（江上A遺跡他）、終末期（漆町遺跡他）と続き、最新の例は上荒屋遺跡で古墳時代前期に属するものが確認されている<sup>(11)</sup>。

柱穴配置は、弥生時代中期中葉を中心とするものが多角形8～10本（下谷内・下屋敷他）、中期後葉～末葉が多角形6本（磯部運動公園他）、後期前半は不明だが、後期後半以降が方形4本（江上A・漆町他<sup>(12)</sup>）である。柱穴からは土器などはほとんど出土しないが、柱根・礎板（根がらみ・枕木を含む）の検出例（戸水B・江上A・漆町他<sup>(13)</sup>）は比較的多く、その頻度は堅穴式建物や掘立柱建物に比べやや高いようにみえる。中期では（中央）炉の確認例（磯部運動公園他）が少なくない。

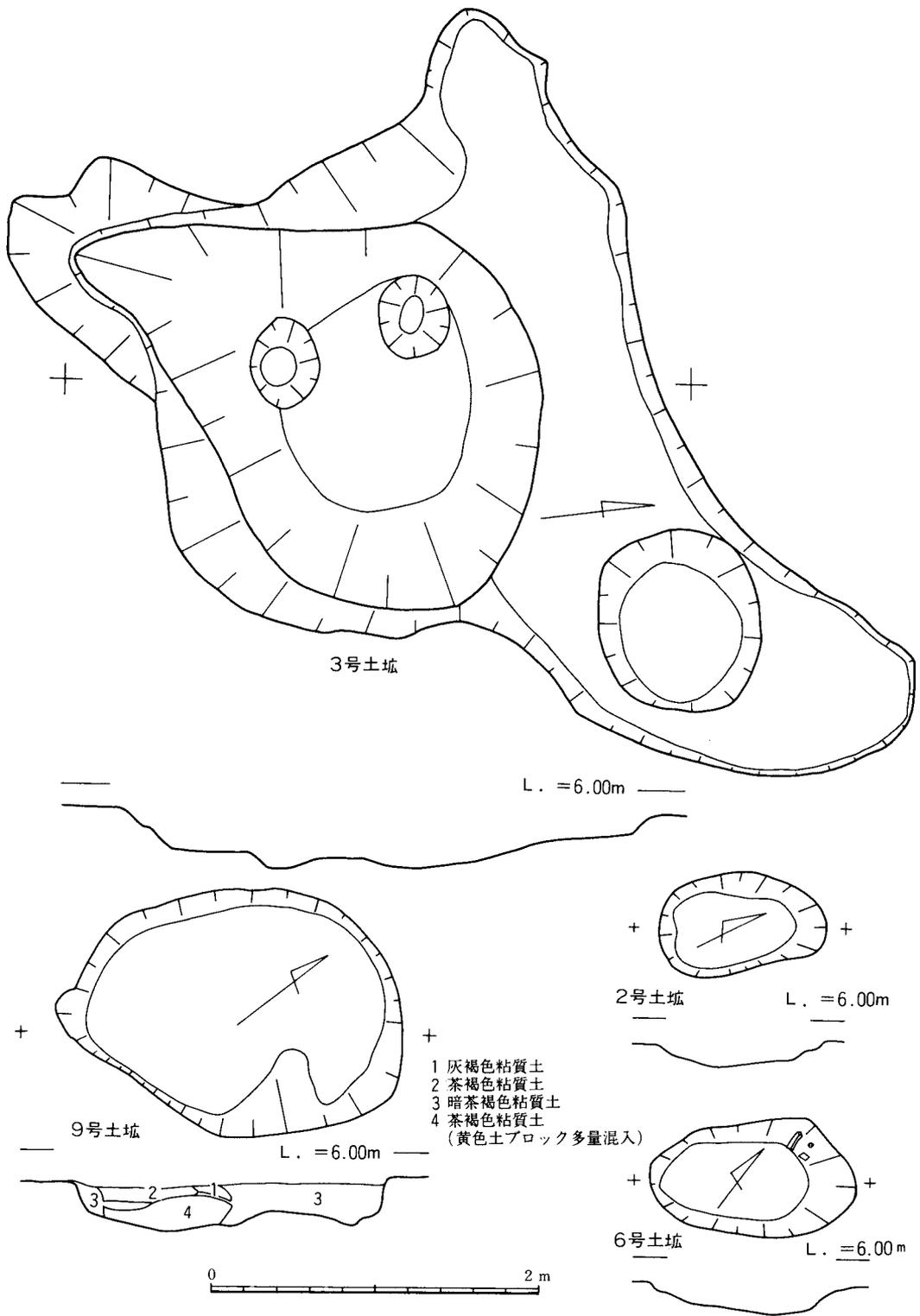
柱穴間の対角距離・周溝内径は、多角形配置のものでそれぞれ4～8m・8～16m、方形配置では3～7m・10～17mを測る。周溝の平面形は中期の例が円形、後期後半以降が隅丸方形ないしは方形を呈し、直接あるいは小溝を介して周辺の大溝と接続する例（江上A他）が知られてい

る。周溝の幅と深さは前者がそれぞれ数10cm～3.0m、10～50cm、後者が数10cm～3.0m、10～40cm程度を測り、一般に周溝は全周せず開口部をもつ。周溝覆土には複数の炭化物の薄い層が介在する例（磯部運動公園・漆町他<sup>(5)</sup>）がある。

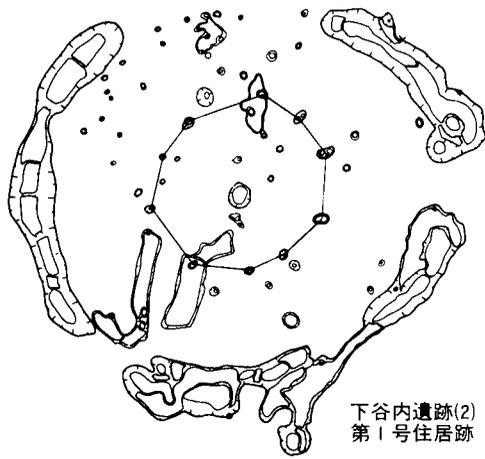
同例は、低湿地の遺跡や墓域と推定される遺跡（地区）に多く、掘立柱建物・土坑（土墳墓・貯蔵穴などを含む）・方形周溝墓などに隣接する例が多いとされている<sup>(1)</sup>。周溝については湿気抜きの機能が考えられているが、丘陵（縁辺）部にもみられ（金沢市額谷ドウシダ遺跡、北加賀・類例B）、周溝が確認できないものもあるため、周溝が同例にとって必要条件であるかどうかはさらに検討が必要である。

以上、1号建物の類似例の概要を紹介した。同例はこれまでに堅穴住居<sup>(3)</sup>・掘立柱建物<sup>(5)</sup>などされているが、他方では楠正勝氏が平地式建物の可能性を指摘している<sup>(1)</sup>。弥生時代中期の例が多角形の柱穴配置をとり炉も確認されることから、掘立柱建物との相違は明瞭であるが、堅穴式建物との違いはどうであろうか。同例の周溝と堅穴式建物の周壁溝とは平面・断面ともに形態を異にしており、本遺跡例のように周溝内径が15～17mにもおよぶ範囲を床として4本の支柱で支えるような堅穴式建物の例はなく、同例が堅穴式建物の周溝が削平された（流出した）ものとしても、本来の周壁は周溝の内側にあり、周溝は堅穴式建物の外郭溝としなければならない。しかしながら、堅穴式建物の外郭溝は同例の周溝とは異なり、平面・断面ともに整った形態をとり幅も数10cmと比較的狭いものた一般的である<sup>(4)</sup>。また仮に削平高を20cm程度とした場合、周溝の本来の深さは30～70cmとなり、特に最深部の数値は外郭溝としては異例のものといえる。50基前後の類例のなかに、削平をうけた外郭溝をもつ堅穴式建物が皆無とはいえないが、現状では同例は掘立柱建物・堅穴式建物などとは異なる構造の建物である蓋然性が高いと考えられる。炉・支柱配置など堅穴式建物との類似性を重視すれば、検出面をほぼ床面とし、周溝の内側に盛土による周堤をもつ、求心支柱配置構造の建物などが想定される。なお多くの検討が必要であるが、同例は今後も調査例の増加が見込まれることから、堅穴式建物などと比較検討をしていくうえで、当面は「平地式建物」と仮称したほうがよいのかもしれない。

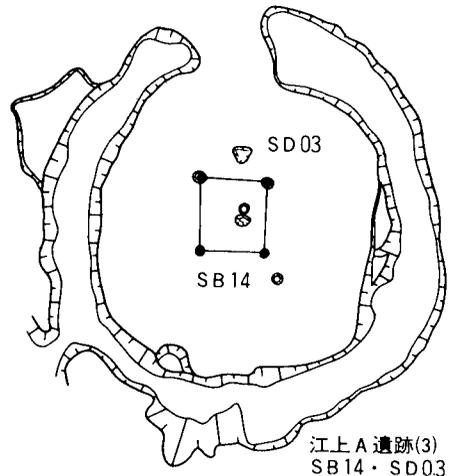
- (1) 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』 金沢市教育委員会 1989 金沢。
- (2) 『北陸自動車道 埋蔵文化財調査報告書 下谷地遺跡』 新潟県教育委員会 1979 新潟。
- (3) a 『北陸自動車道遺跡調査報告 —— 上市町遺構編 ——』 上市町教育委員会 1981 富山県上市町。  
b 『北陸自動車道遺跡調査報告 —— 上市町土器・石器編 ——』 上市町教育委員会 1982 富山県上市町。  
c 『北陸自動車道遺跡調査報告』 —— 上市町木製品・総括編 ——』 上市町教育委員会 1984 富山県上市町。
- (4) 『金沢市磯部運動公園遺跡』 金沢市教育委員会 1988 金沢。
- (5) 『第一小学校々々地内漆町遺跡発掘調査報告書』 小松市教育委員会 1987 小松。
- (6) 『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1988 福井。
- (7) 『拓影』 第31号 石川県立埋蔵文化財センター 1990 金沢。平成元年、石川県埋蔵文化財保存協会調査、藤田邦雄氏御教示。
- (8) 『拓影』 第31号 石川県立埋蔵文化財センター 1990 金沢。平成元年、石川県立埋蔵文化財センター調査。
- (9) 『昭和63年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』 金沢市教育委員会 1989 金沢。出越茂和・小西昌志両氏御教示。
- (10) 『金沢市寺中遺跡』 金沢市教育委員会 1977 金沢。
- (11) 下記文献、下池田遺跡第2次調査円形周溝 SD001他。  
「10. 下池田遺跡」『定型化する古墳以前の墓制』 第Ⅱ分冊——近畿、中部以東編——（第24回埋蔵文化財研究



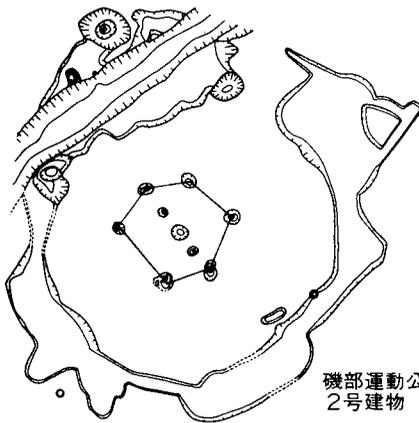
第3-1-3図 第2次調査1号建物周溝(3号土坑)・周辺土坑(S = 1/40)



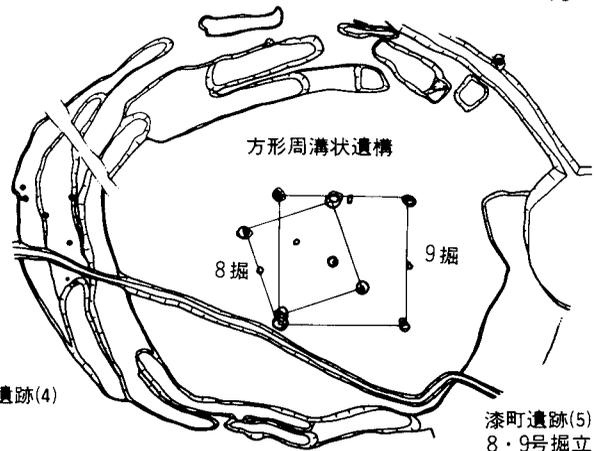
下谷内遺跡(2)  
第1号住居跡



江上A遺跡(3)  
SB14・SD03



磯部運動公園遺跡(4)  
2号建物



漆町遺跡(5)  
8・9号掘立

第3-1-4図 第2次調査1号建物類似例((2)~(5)文献より、一部改変)(S=1/300)

集会)埋蔵文化財研究会 1988 小郡市。

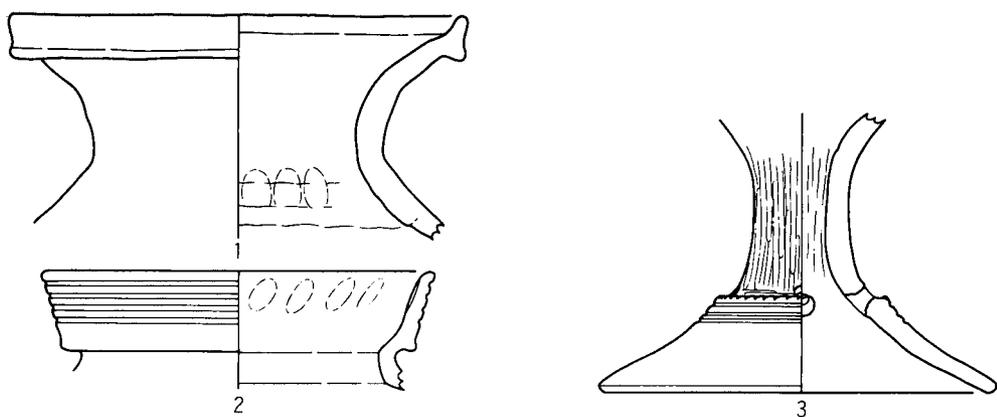
(12) 下記文献報告の環状に巡る土壇群(金屋・サンパンワリ地区 286・289・300・309・311・313・318・319号他土壇群)が類似Bとなるのであれば、同例の下限はさらに降りる可能性がある。

(13) 『金沢市額谷ドウンダ遺跡 金沢市無量寺B遺跡 II』金沢市教育委員会 1984 金沢。

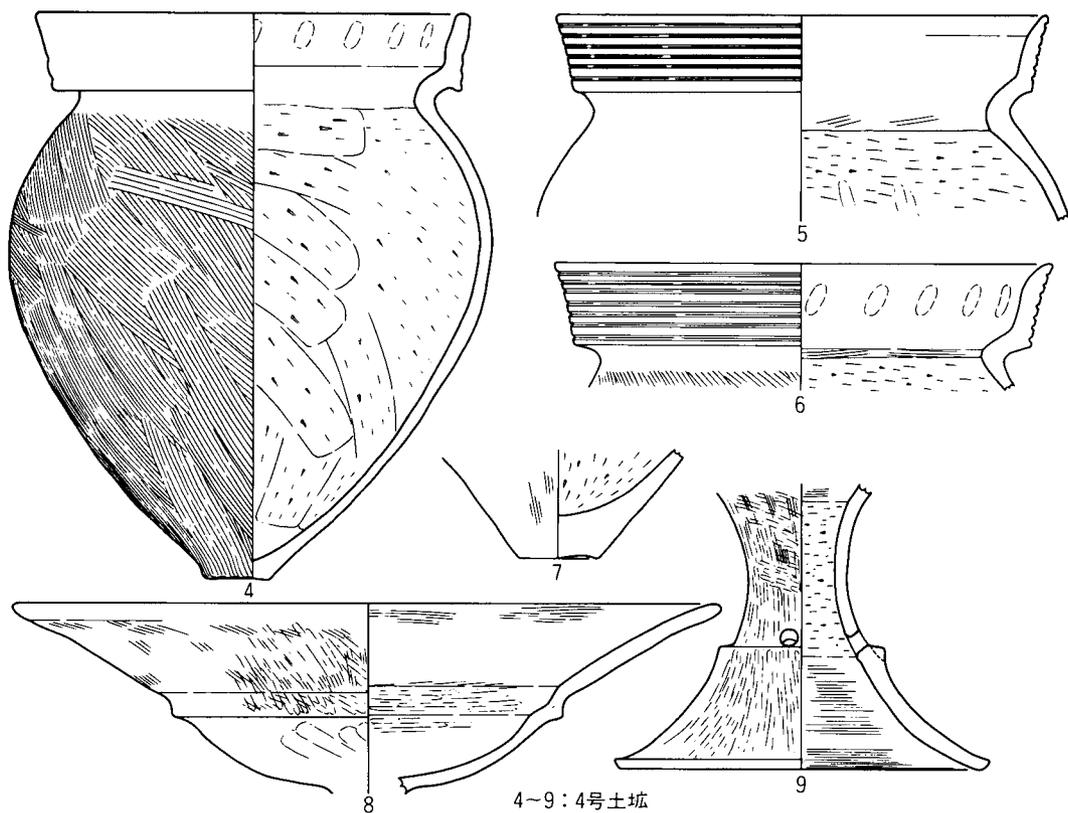
(14) 下記文献、漆・チュウデン地区1号竪穴他。

『漆町遺跡』I 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。

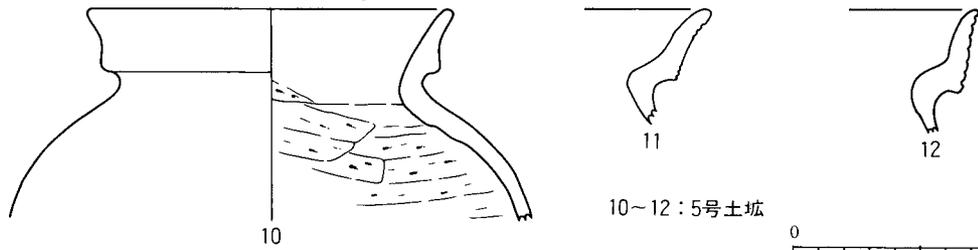
(15) 都出比呂志 「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部 1985 大阪。



1~3: 3号土坑



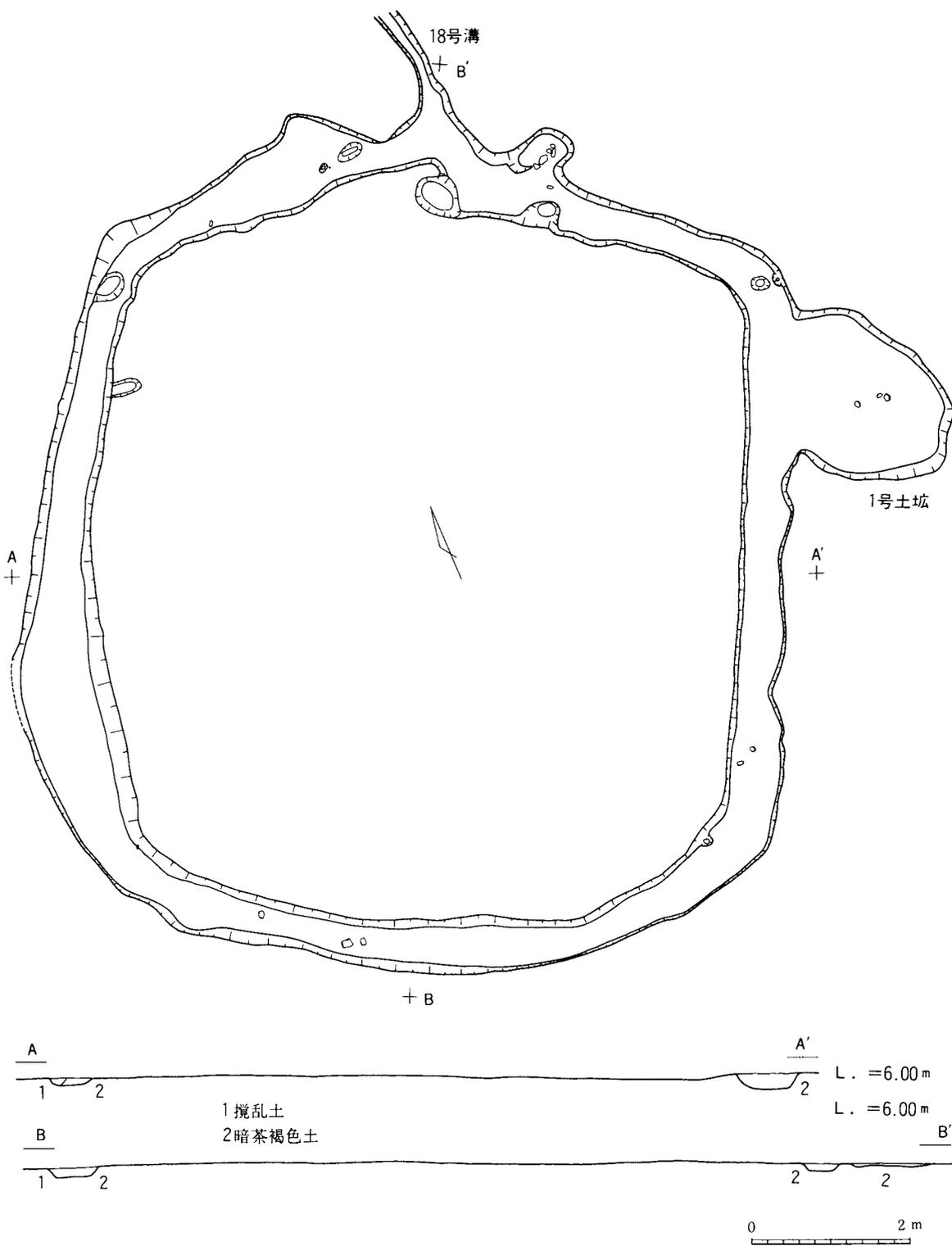
4~9: 4号土坑



10~12: 5号土坑



第3-1-5图 第2次調査1号建物周溝出土土器 (S = 1/3)



第3-1-6図 第2次調査方形周溝状遺構 (S = 1/80)

## 2 溝

本項では、弥生時代後期～古墳時代前期に属すると考えられる主な溝を、調査区の南側に位置するものから順に報告する。

### 第1次調査2・14号溝、第3次調査2号溝（第3-1-7～26図、観察表1～7）

**位置と概要** 調査区の南側C～L-33～40区に位置する。調査区を東西に横断するが、中央部では角度を直角にふり南側へ大きく流路を変えている。西側と東側は第1次調査で検出し、それぞれ2・14号溝とした。中央部の南側は第3次調査で検出2号溝とした。3次にわたる調査で同一の溝と確認されたものである。遺物は特に東側の14号溝とした地点から多く出土している。

**規模と形状** 東側から西走（約10m）、南走（約25m）、西走（20m）、北走（25m）、西走（約20m）をくりかえし、延長約100mを検出している。幅は2～9m、東側がやや広く南側から西側にかけてやや狭い地点がある。検出面（約5.5m）からの深さは40～70cmを測り、南側が深く東側と西側はやや浅い。

**覆土と遺物出土状況** 覆土は、上層が黒褐色（粘質）土、下層が茶褐色粘質土を基調とする。第1次調査2号溝・第3次調査2号溝地点の遺物の出土は散発的だが、第1次調査14号溝地点では遺物が多量に出土し、その多くは下層上面からのものである。位置は全体的に北側肩部～中央部にかけてのものが多く、おそらくは、溝がその機能を停止したのは下層堆積段階で、その後北側から遺物が投棄された（あるいは流入した）ものであろう。

**出土遺物と所属時期** 第1次調査2号溝地点出土遺物では、土器14点を実測し得た（1～14）。1は擬凹線文有段口縁台付甕、2・3は有段口縁台付壺である。外面をハケ調整する6も台付甕の可能性もある。4は台付鉢、外面中位・内面口縁～体部の赤彩の有無は確認できない。5・12・14は器高10cm未満の小型土器、甕形（5）、鉢形（14）などがある。8は小形の無文有段口縁甕。9は有段口縁鉢、台付かどうかは不明である。7・9は高杯の有段脚、ラッパ状脚。13は器台。11は外面突帯部にスタンプ文（2重の同心円文）を施すもの、内面をヘラ磨き調整することから天地を逆に凶化した可能性があるが、いずれにしても器種は不明である。

第1次調査14号溝地点出土遺物では、土器225点を実測し得た（1～225）。1・3～5は直口の短頸壺、2・7は長頸壺、7は台付で胴部片側に把手をもつ。9は無頸壺（または鉢、把手の有無は不明）。8も胴部片側に把手をもち、7あるいは9と同様の器形をとるものであろう。8・9が台付かどうかは不明。6は細頸壺、外面胴部に突帯をもち赤彩されている。10・13・14は擬凹線文有段口縁中型壺。10は口縁部下位に一对の孔を穿つもので、11の脚台と同一個体の可能性がある。12・15・17・18は有段口縁大形壺、15は（おそらく16も）特大形とすべきかもしれない。19～27は小形～中形壺。くの字口縁（22）、有段口縁（19・21・23～26）などがある。24の口縁部外面屈曲部の斜行刻目は、文様というより工具による調整痕のような印象をうける。29は、おそらくは無頸壺で、胴部外面上位にヘラ先による直線文・綾杉文を施している。同様の文様を施す28の蓋とセットをなすものであろう。30は皮袋形土器、完形品である。

31～88は、擬凹線文有段口縁甕。32・33の口縁部外面の擬凹線文は、幅が狭くかつ浅く施され



第3-1-7図 第1次調査14号溝遺物出土状況 (S = 1/80)

るもので、一見するとハケ調整痕のようにみえる。46 a（口縁部～肩部）・b（底部）は、胎土・焼成の様子から同一個体の可能性がある。89～105は、無文有段口縁甕。89の口縁部外面の痕跡は、ナデ調整によるものである。106はくの字口縁甕、107～113はくの字口縁布留型甕。107と108は同一個体で接合した。114～124は小型土器。擬凹線文有段口縁（甕形、114～116）、無文有段口縁（甕形、118～123）などがある。125～179は壺・甕・鉢などの底部・脚台である。171・172は底部に孔を穿つ。

180・181・183・188（189もか？）は有段口縁鉢（180・183・188が台付かどうかは不明）で、180・183は口縁部外面にスタンプ文（4重の同心円文）を施している。180・183および218（器台）に施文されたスタンプ文は同一原体の可能性がある。182は深みの鉢、184・185は尖底の鉢（184は外面赤彩）、186・187は碗形を呈する鉢である。190～195は蓋、192は体部外面にスタンプ文（3重の同心円文）を施している。

196・200・206は有段口縁鉢形高杯、196・200は脚も有段である。198・207・208は体部と口縁部との境界が屈曲するもの（有段鉢形とは異なる）、198は有段脚である。201～203は高杯脚部、202は脚部外面にスタンプ文（3重の同心円文・S字状渦文）を施すもので、破片は第1次調査2号溝地点からも出土している。202のS字状渦文は、長さ10.3mm、幅5.0mm、S字状を呈する。摩耗が著しく判然としないが、渦の中心部が連結しないもので、吉竹遺跡の分類<sup>(1)</sup>ではⅡ類に属するものであろう。202および219・220の器台（？）に施文されたスタンプ文（3重の同心円文）は同一原体の可能性がある。

211・212・217・222・223は有段受部有段脚器台。209・210・213・214の脚部、218～221も（高杯の可能性がないわけではないが）、同様の形態の器台と考えられる。218～221は、外面にスタンプ文（218～220は同心円文4重・3重・3重、221はS字状渦文）を施す。221のS字状渦文は、長さ18.0mm、幅8.7mm、S字状を呈する。渦の中心部が反転し巻き戻すもので、吉竹遺跡の分類<sup>(1)</sup>ではⅢ類A<sub>2</sub>に属する。

224・225は結合器台（装飾器台）。224は体部に雨滴形透穴が正逆交互に7～8組配される。225は体部に正立の雨滴形透穴が10個配される（体底部にも1個以上の円形透穴を穿つ）が、間に逆立形の透穴が配されている可能性が残る。

第3次調査2号溝地点出土遺物では、土器18点を実測し得た（1～18）。1は大形装飾壺。4は中形有段口縁壺、台付かどうかは不明。2・3・8は（有孔）底部片、5は鉢形のミニチュア土器（器高3.7cm）。9・15はそれぞれ脚台部・底部片、10は台付鉢、やや深みで碗状を呈する。6・7は有段受部有段脚器台、11・14は棒状有段脚高杯、17は有段口縁鉢形高杯、16は蓋である。13は碗状の杯部をもつ小型高杯、12（15もか）は高杯脚部、15は外面にスタンプ文（3重の同心円文、S字状渦文）を施す。同心円文は192（蓋）施文のそれに類似し、S字状渦文は、長さ20.9mm、幅10.9mm、S字状を呈する。吉竹遺跡の分類<sup>(1)</sup>ではⅢ類C<sub>1</sub>に属する。

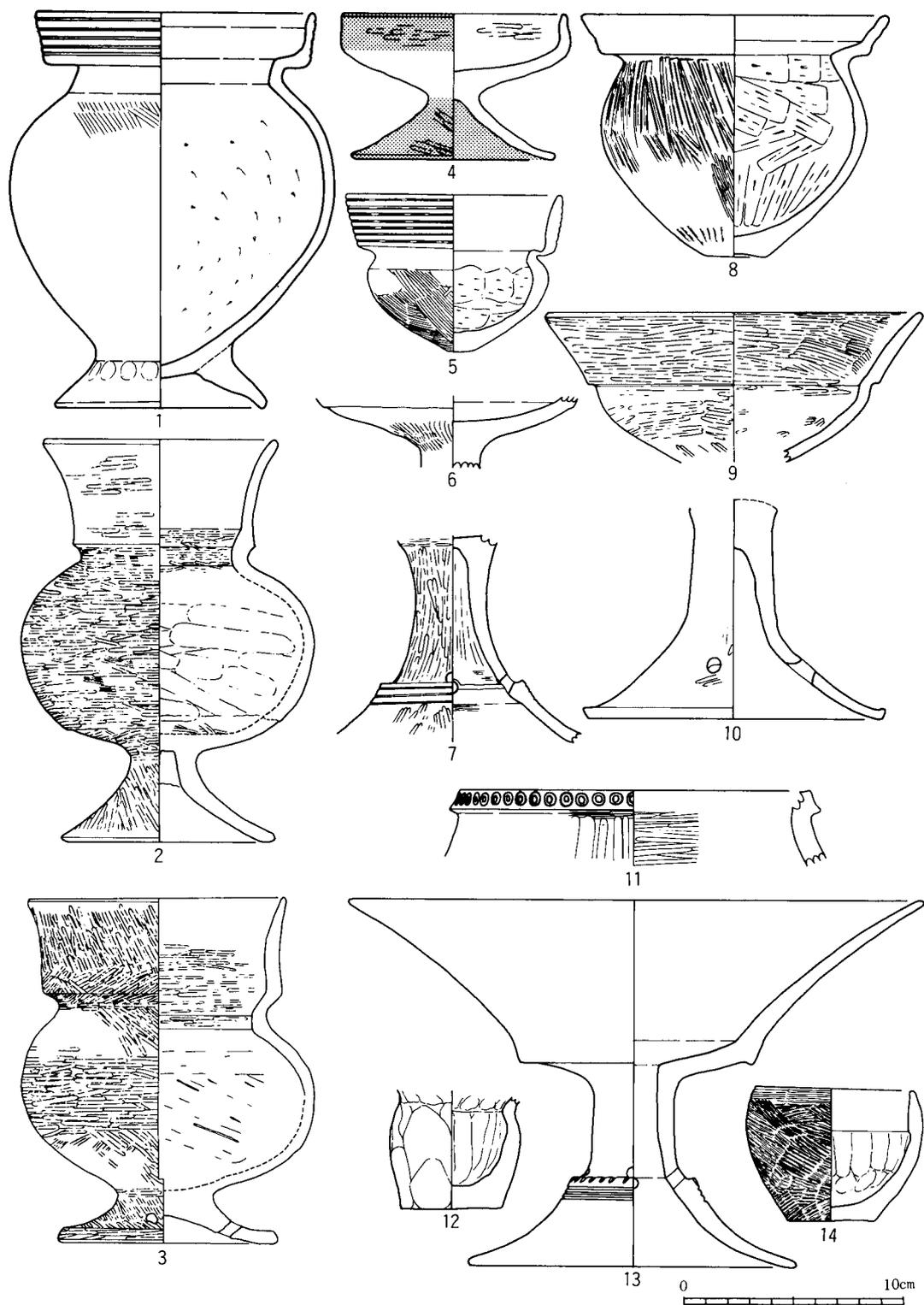
以上、第1次調査2・14号溝・第3次調査2号溝（地点）出土土器は、全体的にみれば弥生時代終末月影式期に属するものが大半であるとはいえ、弥生時代後期後半（法仏式期）から古墳時代前期後半（漆・9～11群土器並行期）に属するものを含んでいる。当該時期の南加賀について

は、特に弥生時代後期後半～終末期の良好な資料が絶対的に不足しており、こうした時期幅のある大溝出土土器を個々に細かく位置づけることは難しい。たとえば、第1次調査14号溝地点出土1の短頸壺、6の細頸壺、31の擬凹線文有段口縁甕、180・183（有段口縁鉢）、192（蓋）、202（高杯）、218～221（器台？）のスタンプ施文土器、第3次調査2号溝地点出土11・14の棒状有段脚高杯、15のスタンプ施文土器などは、従来法仏式期の所産とされているものであるが、組成としてはともかく個々の土器については、現段階の資料からは後統する月影式期に残存しないとはいえない。一方、第3次調査2号溝地点出土1の大形装飾壺、12の高杯（第1次調査14号溝地点出土28（蓋）・29（壺）もか）は古墳時代前期前半（漆・5～8群土器並行期）の、第1次調査14号溝地点出土107～113の布留型甕は前期後半（一部遡るものがあるかもしれない）の所産と考えられるが、筆者の力量不足はもちろん、当該時期の土器細分編年が一部を除いては単独資料をもって各々の時期に位置づけられる性格をもたないため、時期を細かく限定することはできない。今後の良好な資料の増加を待ちたい。

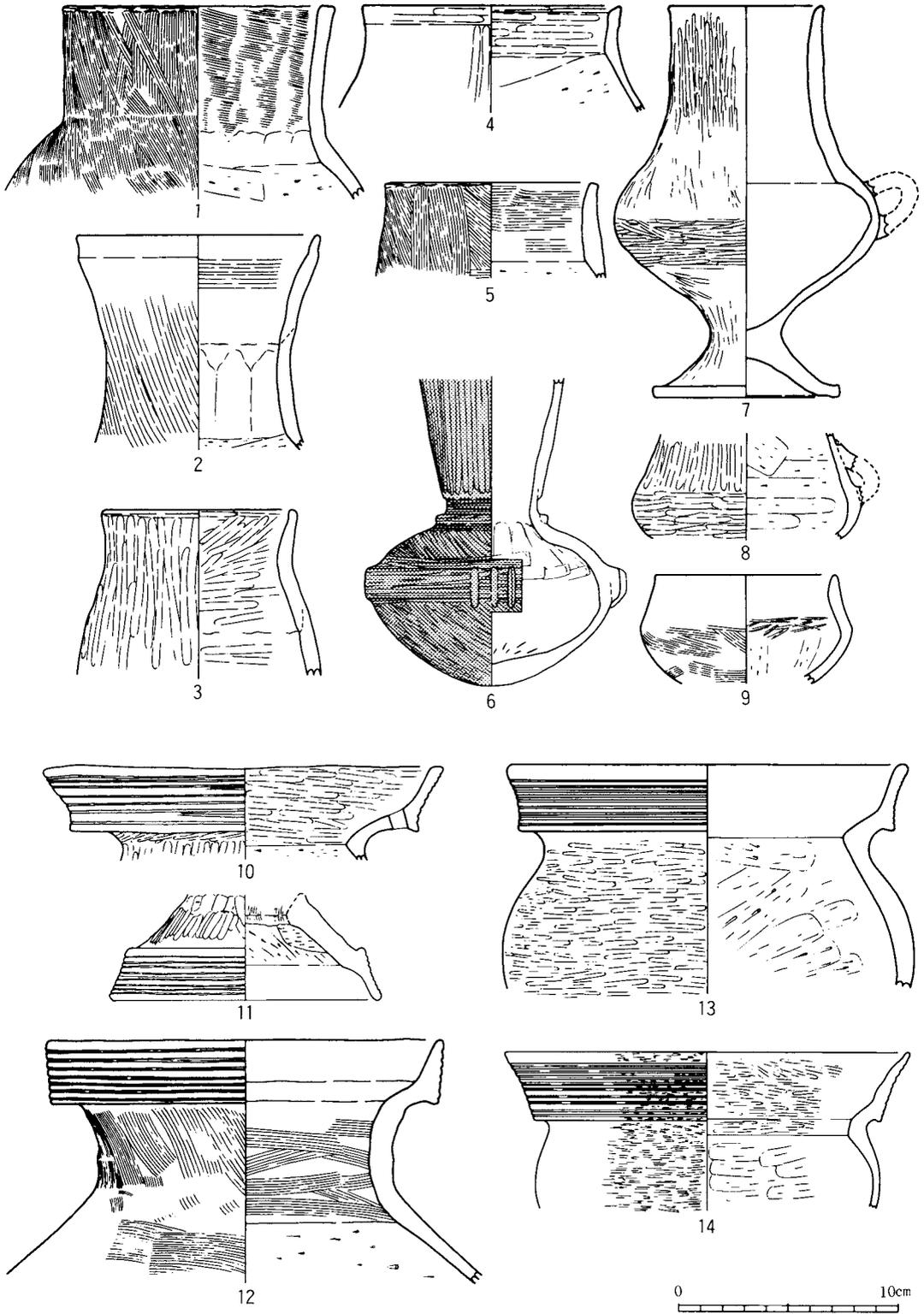
なお、第1次調査14号溝地点出土7の把点付台付長頸壺は、現状では類例の少ないものである。加賀市敷地天神山遺跡群B<sub>2</sub>区出土把手付長頸壺<sup>(2)</sup>に後統するものであろう。30の皮袋形土器は、鹿島郡鹿島町徳前C遺跡第2次74～76ライン溝状遺構<sup>(3)</sup>、羽咋郡押水町竹生野遺跡第1次調査24・26号土坑<sup>(4)</sup>、金沢市南新保三枚田遺跡A-2区沼状遺構<sup>(5)</sup>などで、月影式～白江式（漆5・6群土器）並行期までのものが確認されている。184・185の尖底の小形鉢は、石川郡野々市町御経塚ツカダ遺跡80-3号住居跡<sup>(6)</sup>など、月影式（～白江式）期によくみられるものである。

以上のことから、本遺構の使用時期の下限は概ね月影式期におくことができよう。上限については法仏式期に遡る可能性がある。白江式期以降の土器は、廃絶後の鞍部に投棄された（流入した）ものと考えられる。

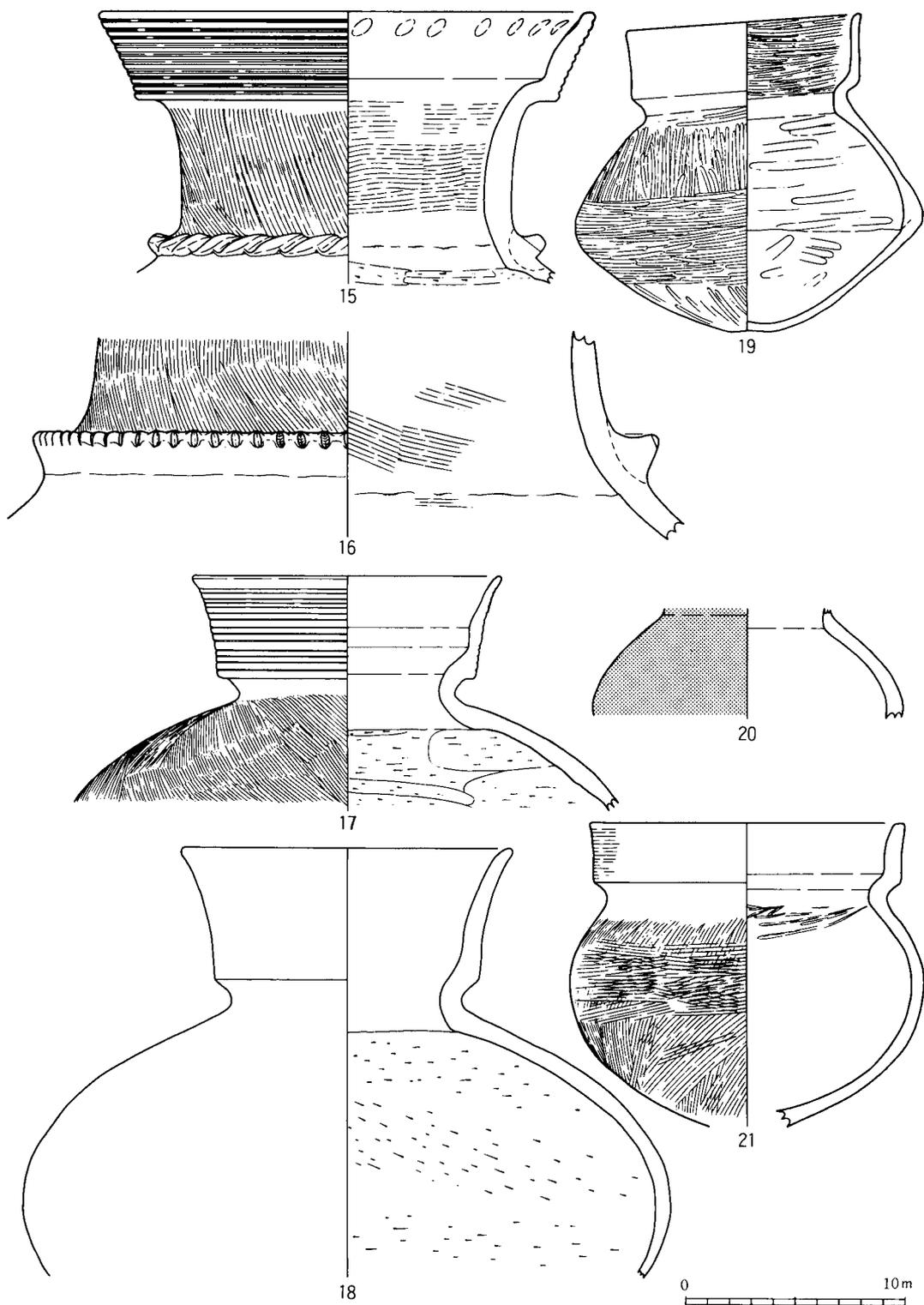
- (1) 『吉竹遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987 金沢。
- (2) 『敷地天神山遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター 1987 金沢。
- (3) 『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (4) 『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1988 金沢。
- (5) 『金沢市南新保三枚田遺跡』 金沢市教育委員会 1984 金沢。
- (6) 『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書』 1 石川県野々市町教育委員会 1984 石川県野々市町。



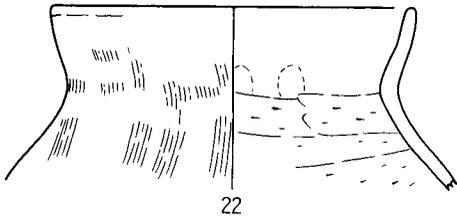
第3-1-8図 第1次調査2号溝出土土器 (S = 1 / 3)



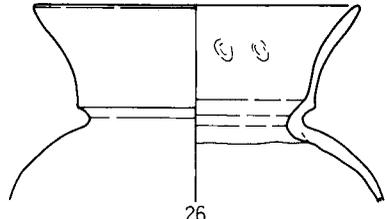
第3-1-9図 第1次調査14号溝出土土器1 (S = 1/3)



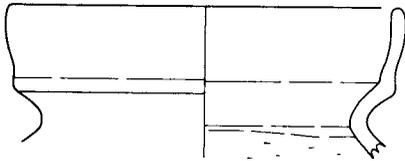
第3-1-10図 第1次調査14号溝出土土器2 (S = 1/3)



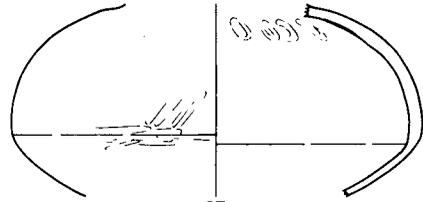
22



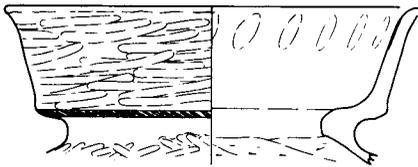
26



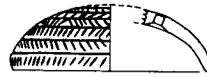
23



27



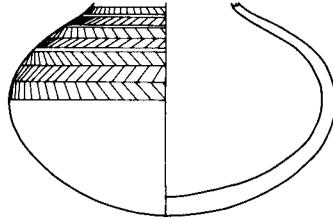
24



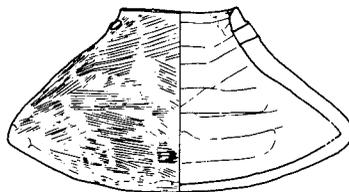
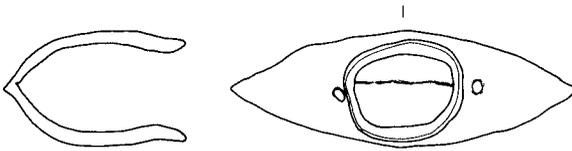
28



25



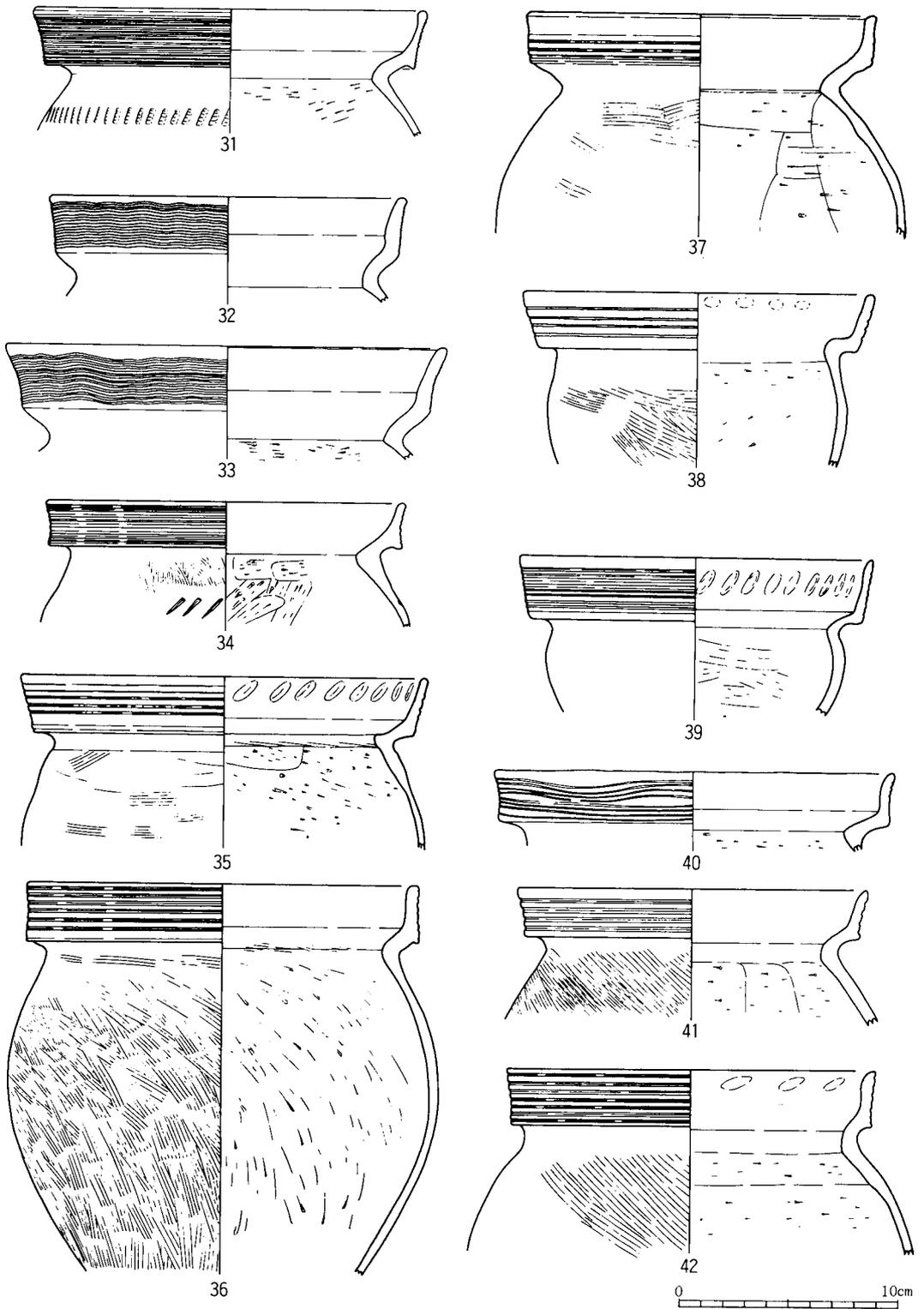
29



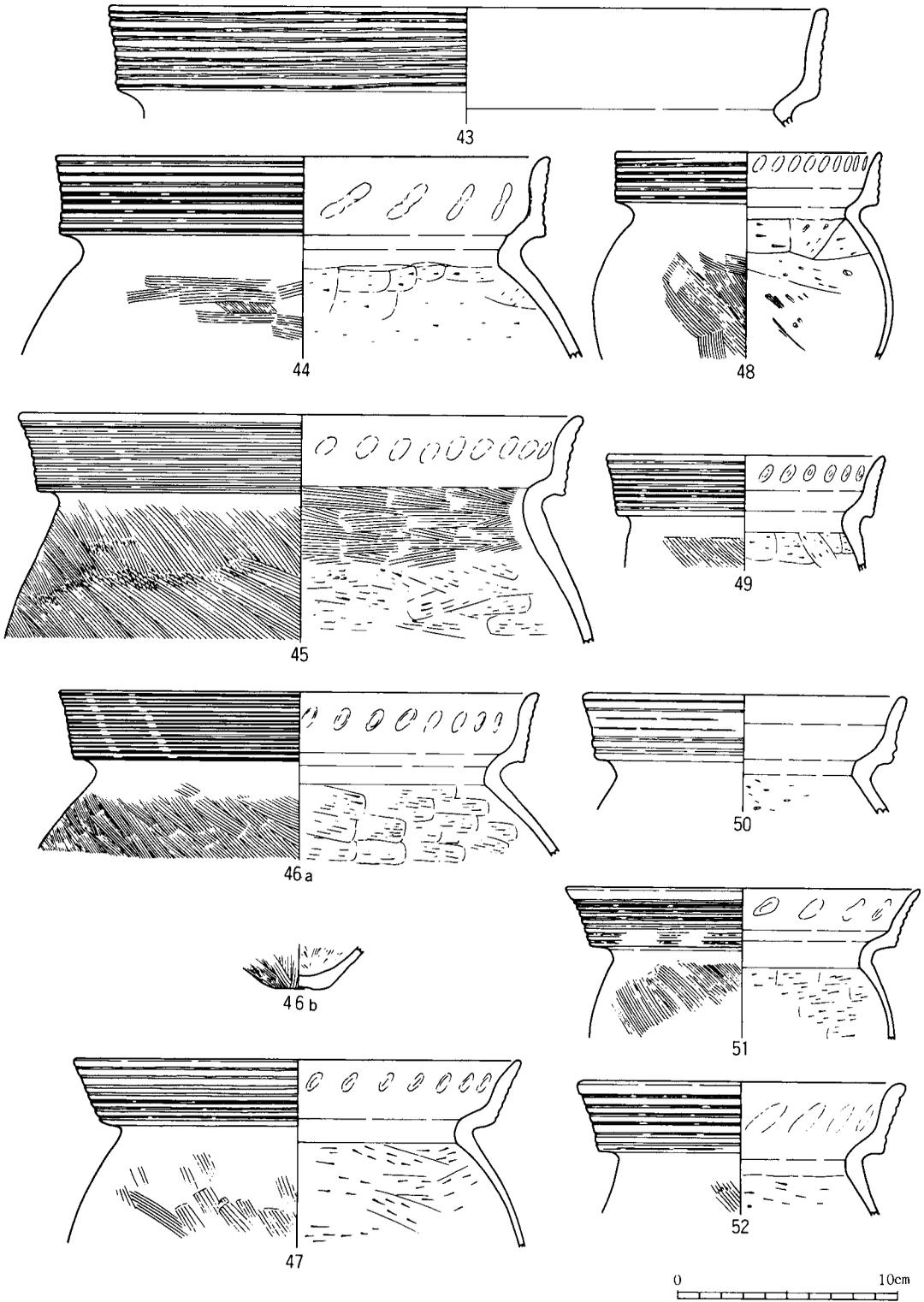
30



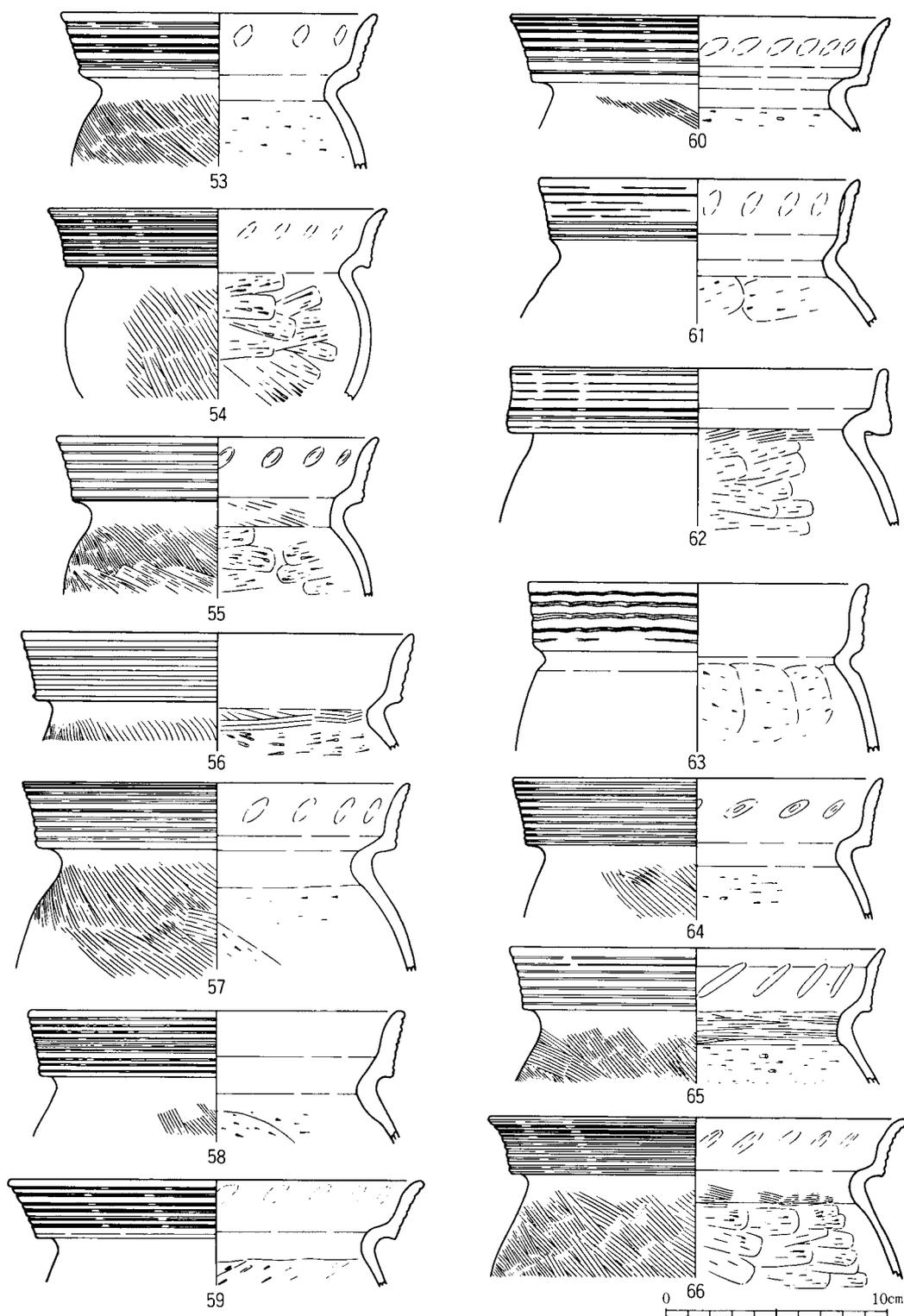
第3-1-11図 第1次調査14号溝出土土器3 (S = 1/3)



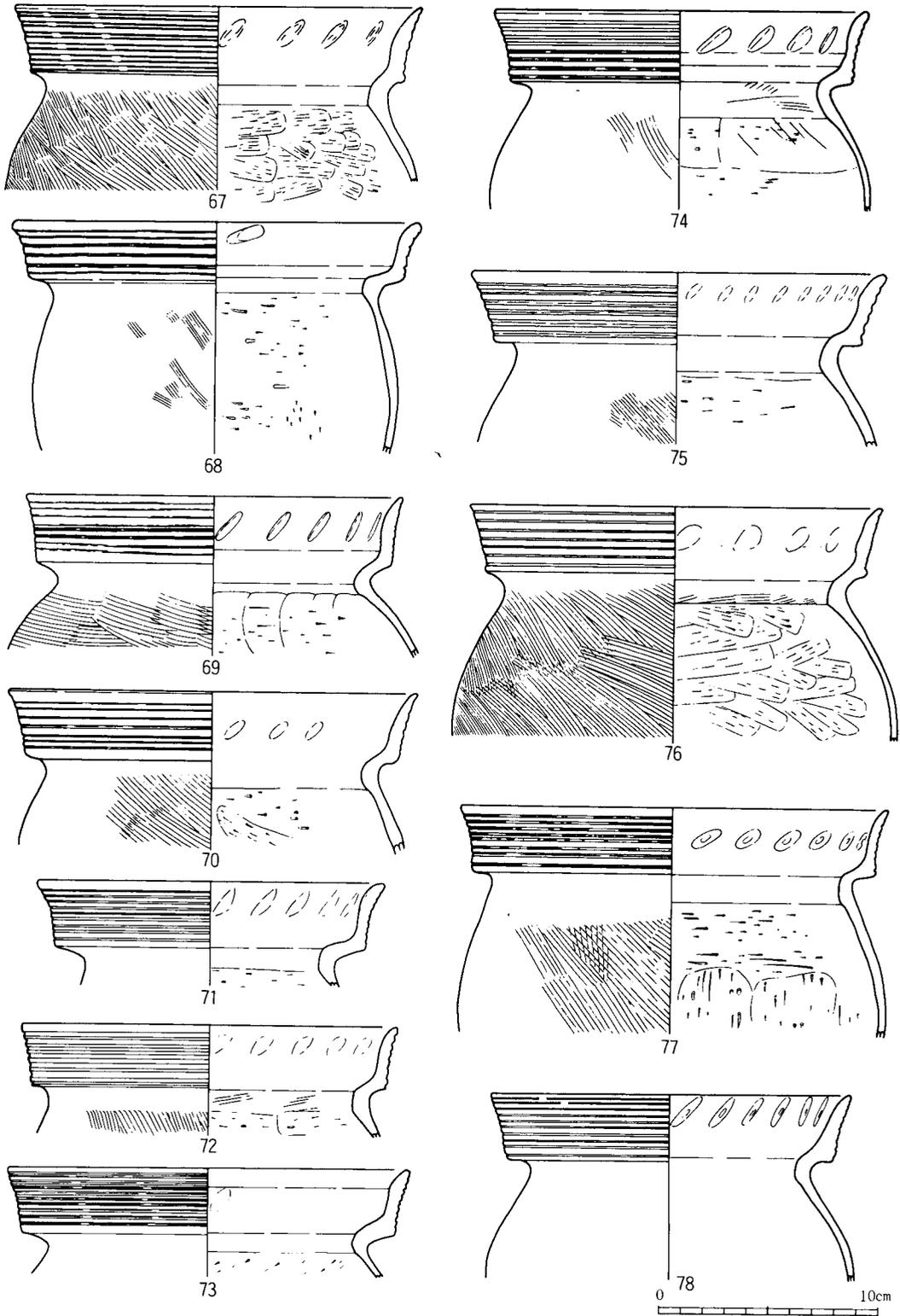
第3-1-12図 第1次調査14号溝出土土器4 (S = 1 / 3)



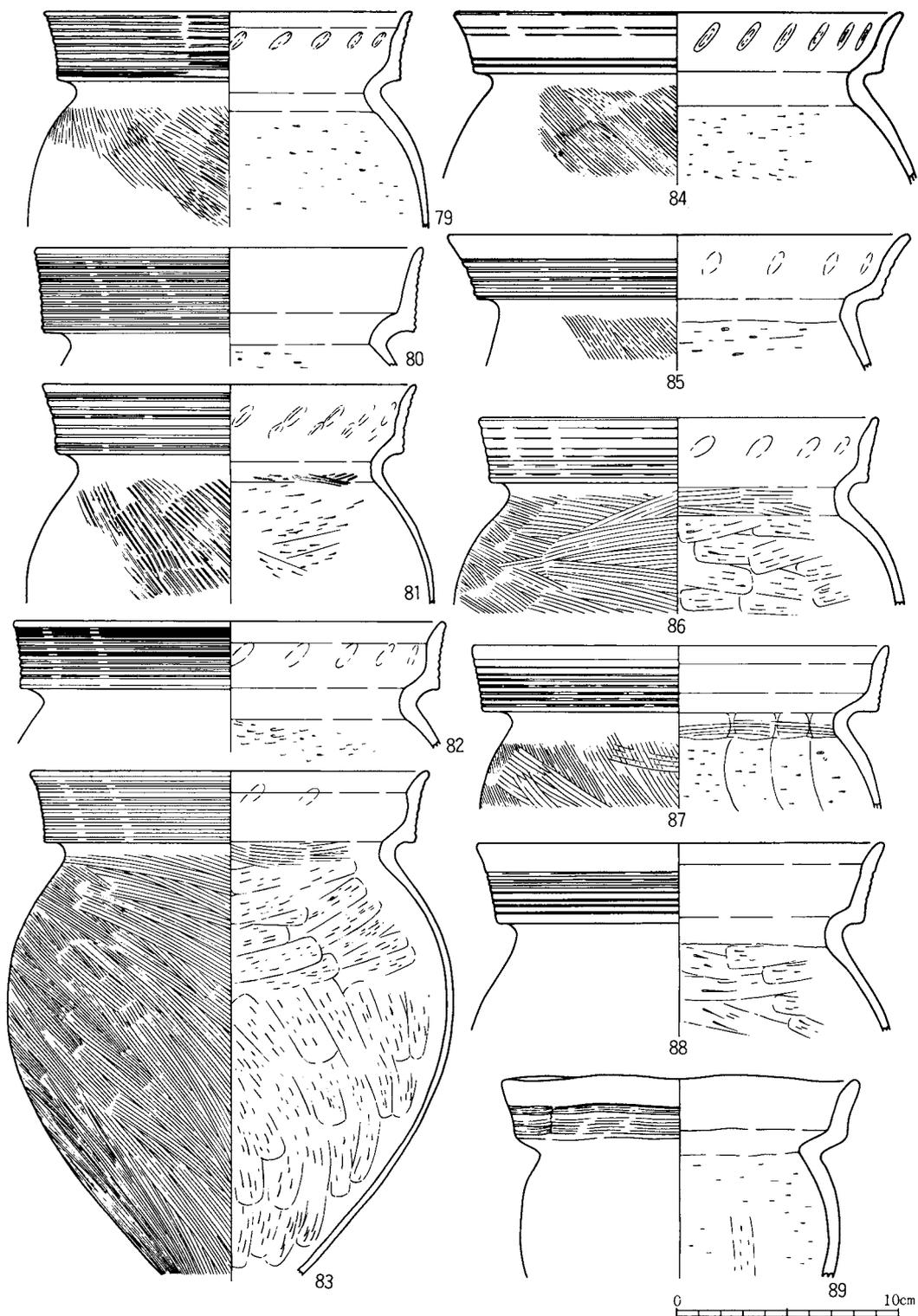
第3-1-13図 第1次調査14号溝出土土器5 (S = 1/3)



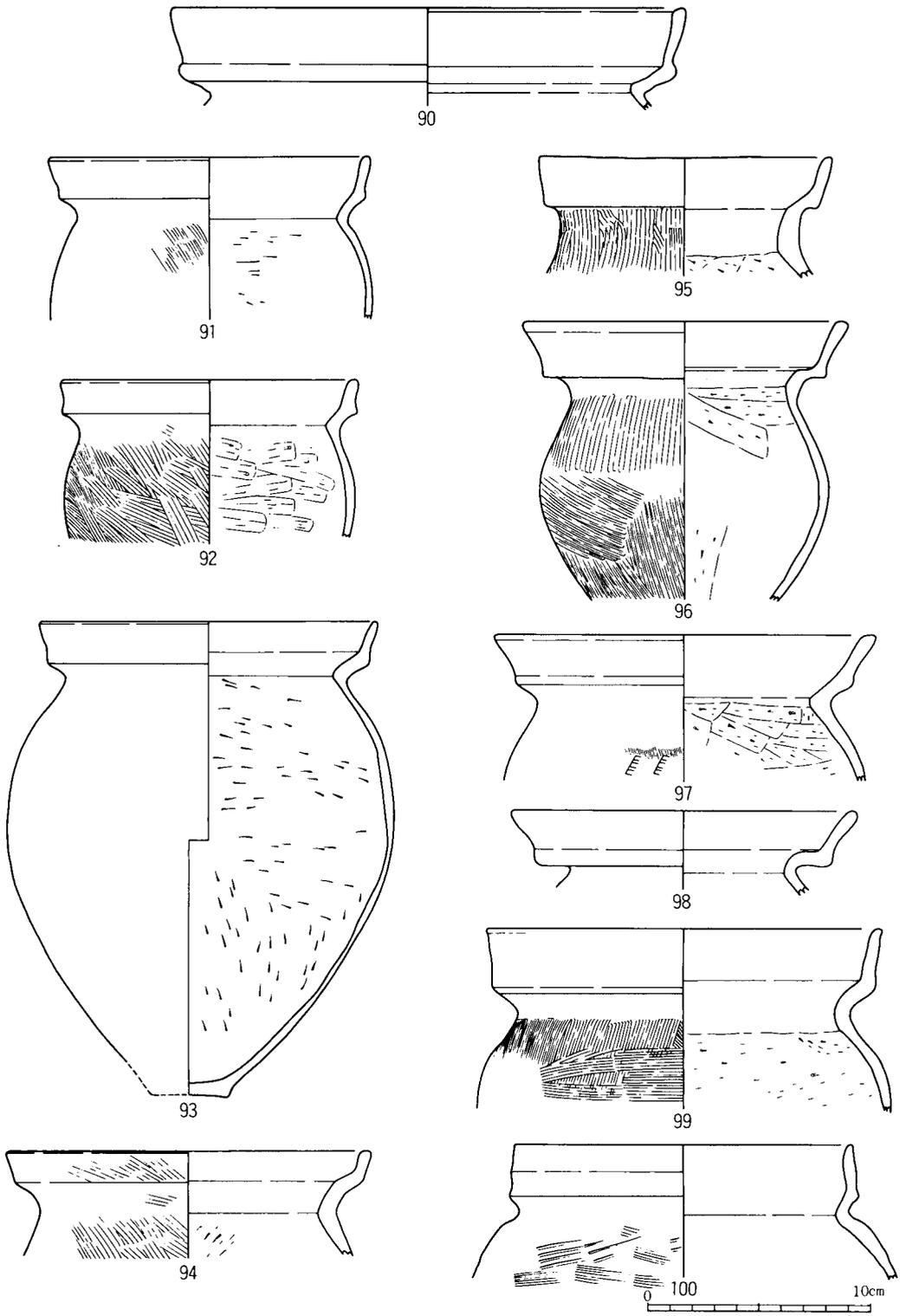
第3-1-14図 第1次調査14号溝出土土器6 (S = 1/3)



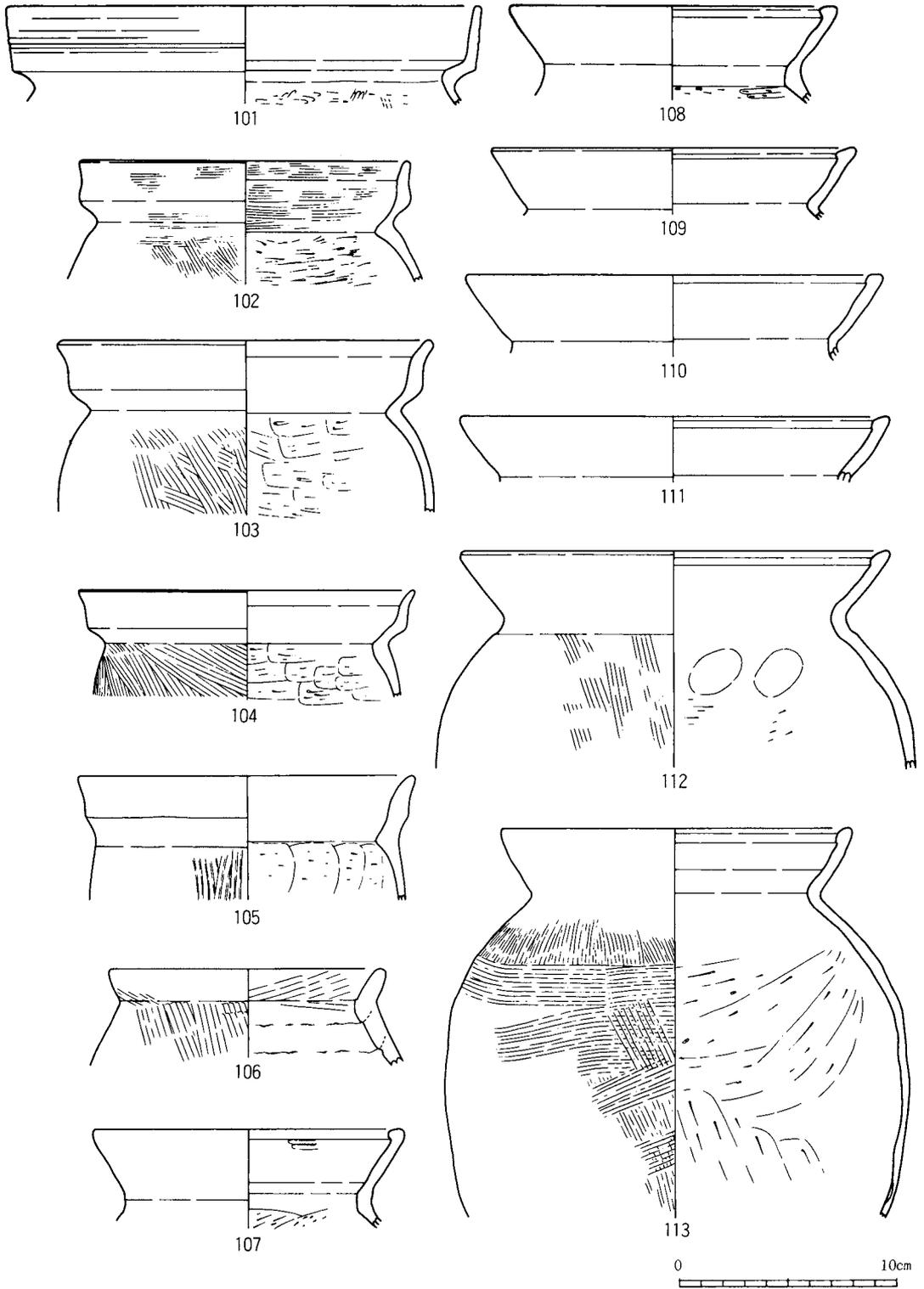
第3-1-15図 第1次調査14号溝出土土器7 (S = 1/3)



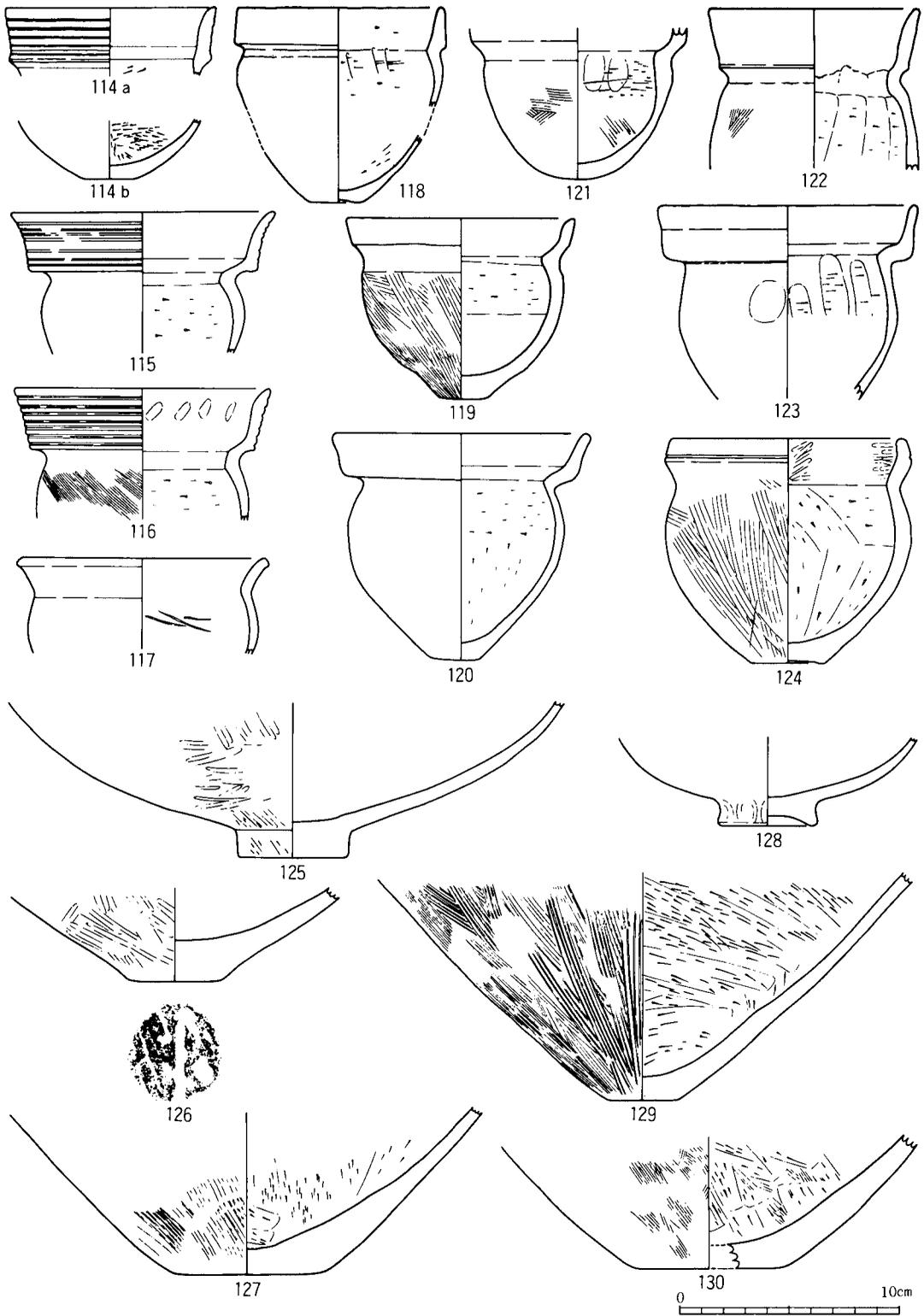
第3-1-16図 第1次調査14号溝出土土器8 (S = 1/3)



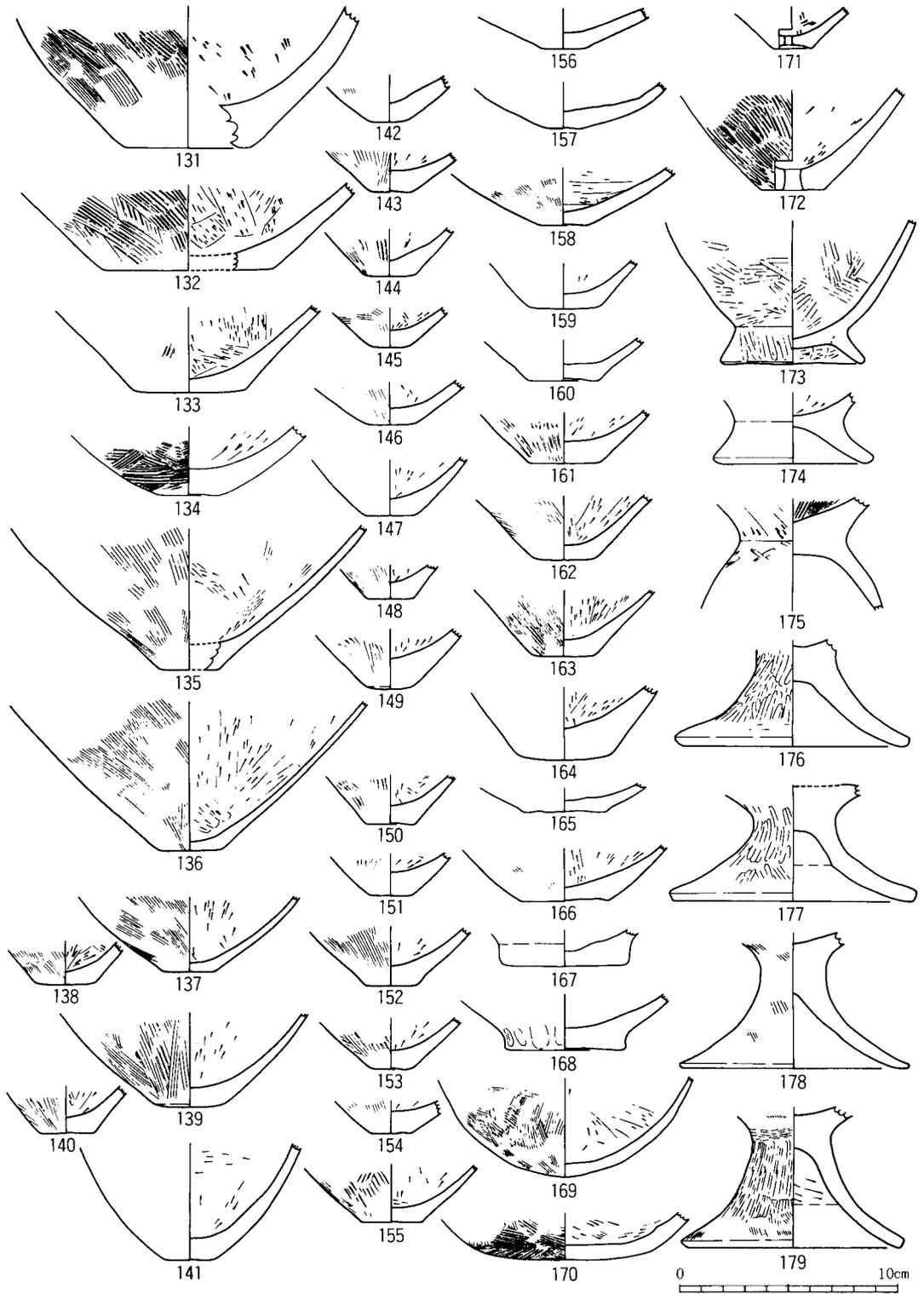
第3-1-17図 第1次調査14号溝出土土器9 (S = 1/3)



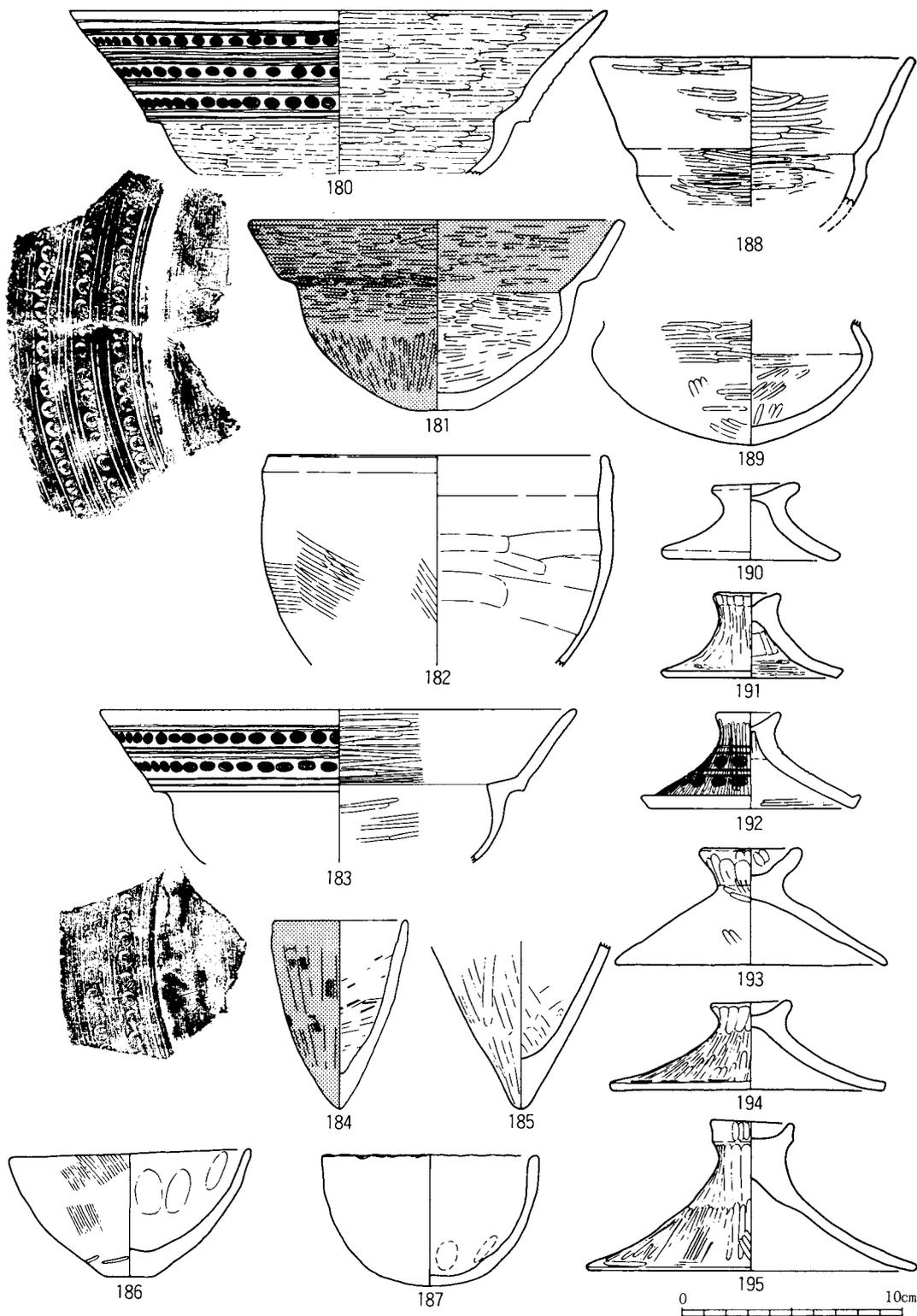
第3-1-18図 第1次調査14号溝出土土器10 (S = 1/3)



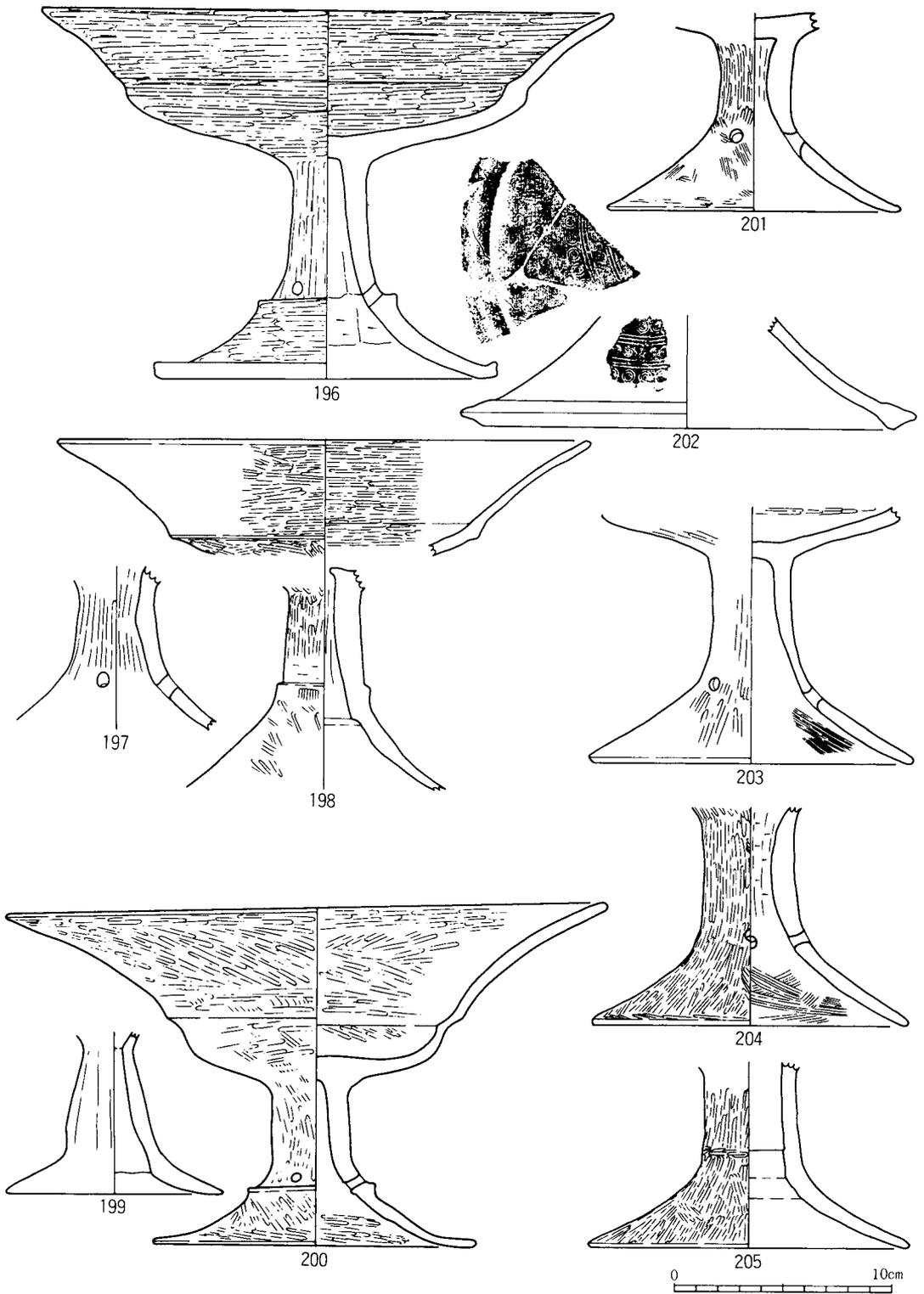
第3-1-19図 第1次調査14号溝出土土器11 (S = 1 / 3)



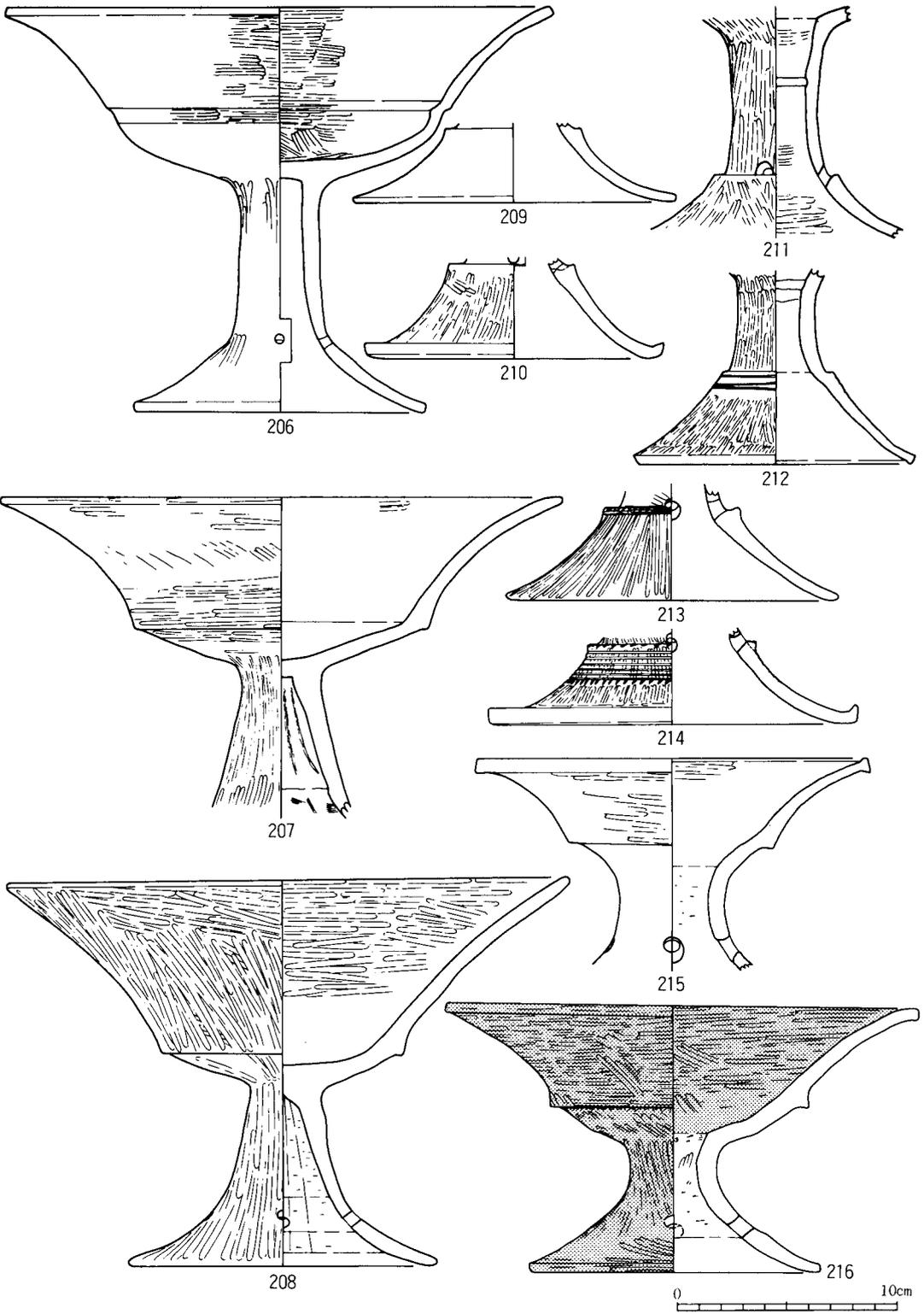
第3-1-20図 第1次調査14号溝出土土器12 (S = 1/3)



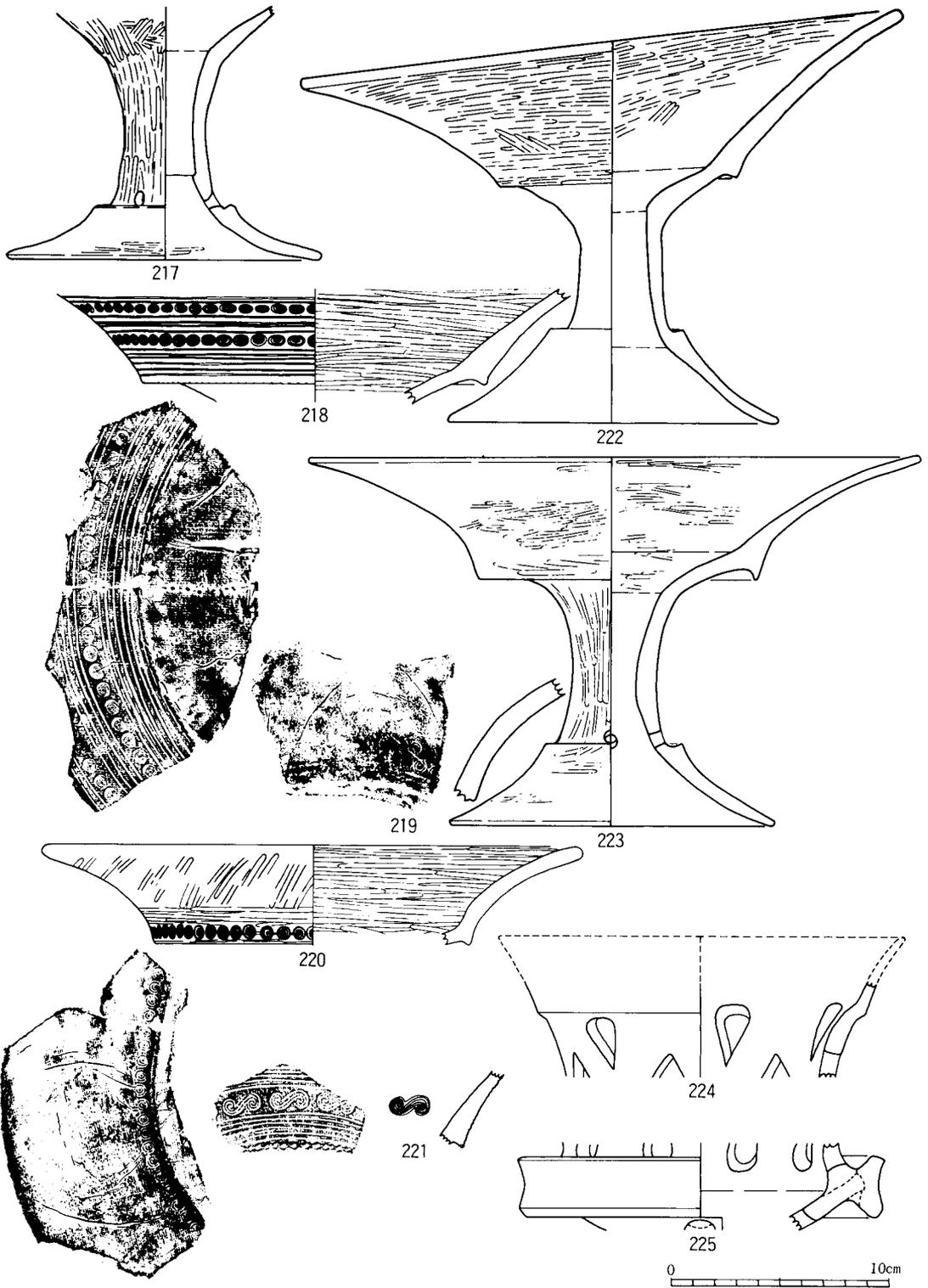
第3-1-21図 第1次調査14号溝出土土器13 (S = 1 / 3)



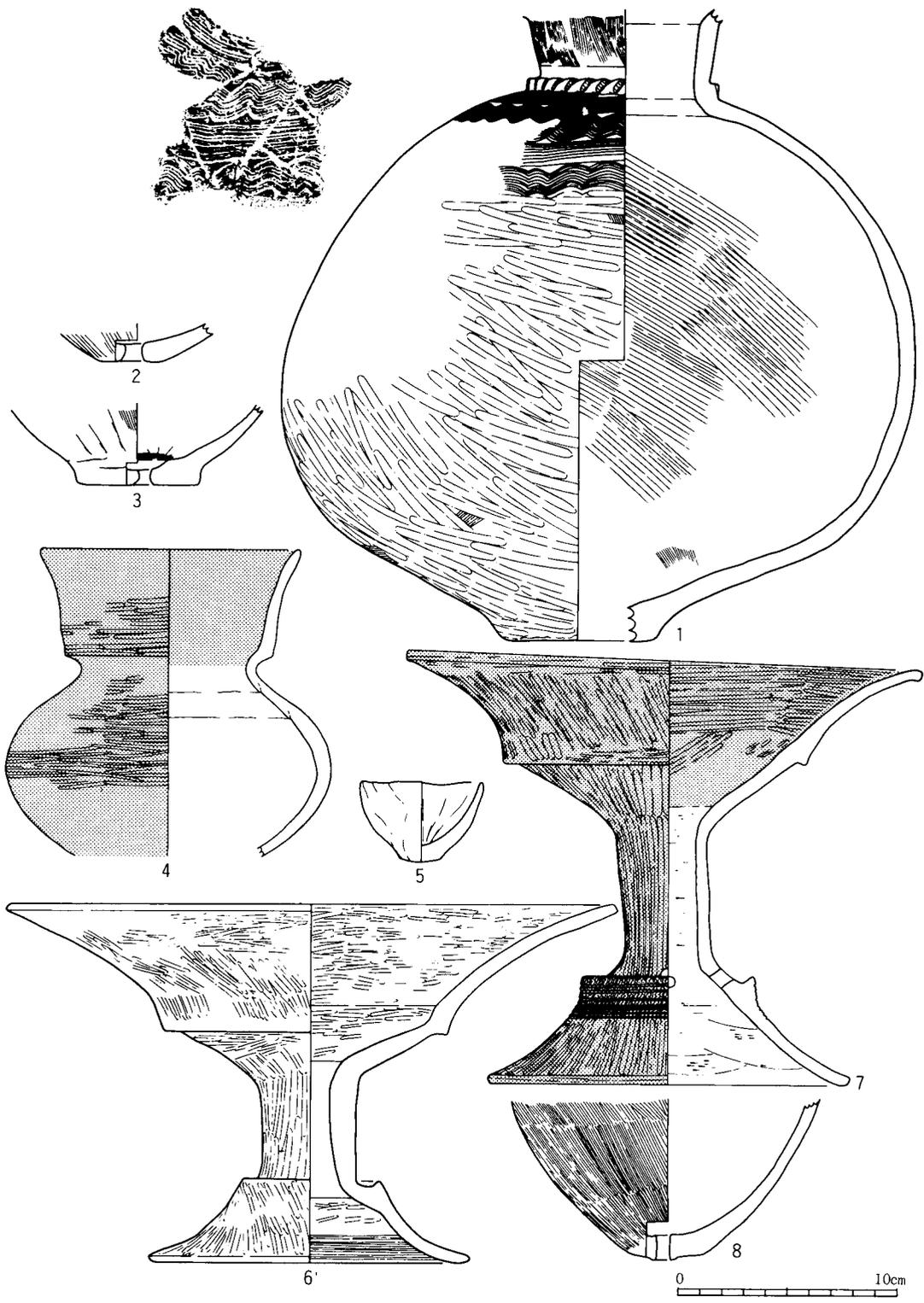
第3-1-22図 第1次調査14号溝出土土器14 (S = 1/3)



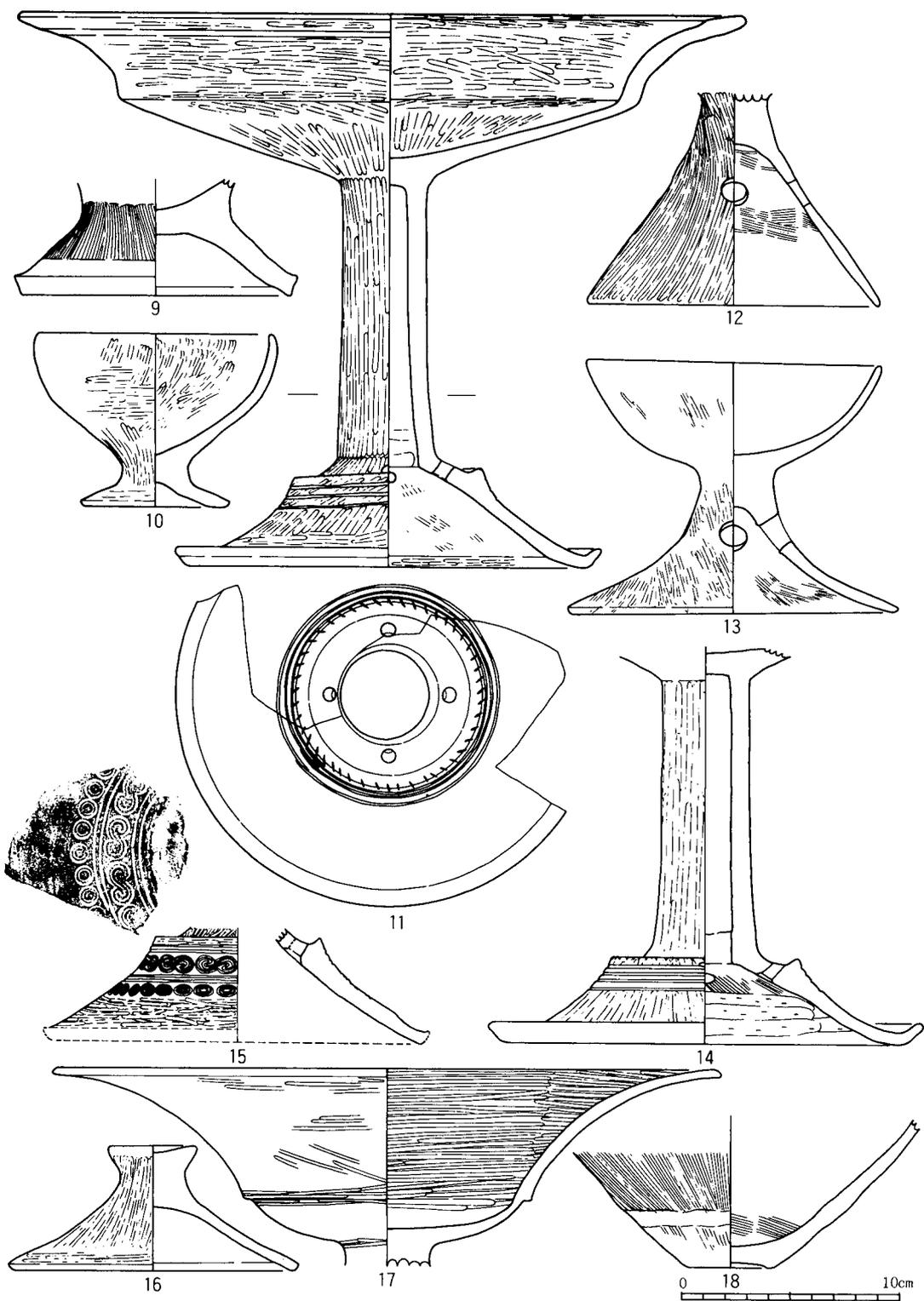
第3-1-23図 第1次調査14号溝出土土器15 (S = 1/3)



第3-1-24図 第1次調査14号溝出土土器16 (S = 1/3)



第3-1-25図 第3次調査2号溝出土土器1 (S = 1/3)



第3-1-26図 第3次調査2号溝出土土器2 (S = 1 / 3)

## 第2次調査20号溝・第3次調査40号溝（第3-1-27～39図、観察表7・8）

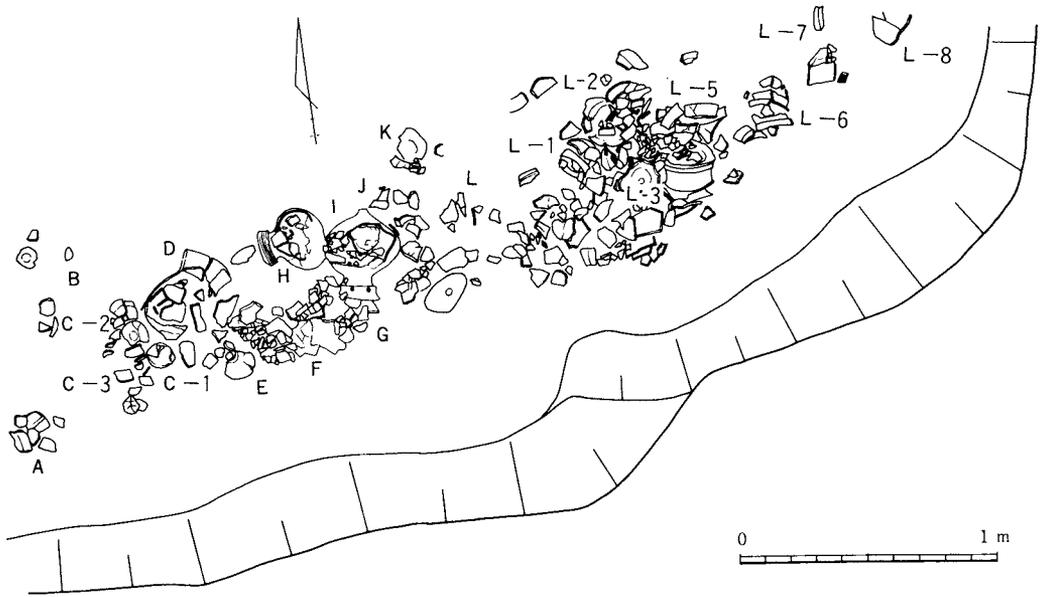
**位置と概要** 調査区中央G～L-20～23区に位置する。調査区を北東から南西へ横断する。中央部では旧用水・1号溝に切られている。旧用水・1号溝より東側を第2次調査で検出し20号溝、西側を第3次調査で検出し40号溝としている。第2次調査20号溝地点は、東側の大部分が攪乱を受けており、中央よりの地点で南側から中央部にかけて（北側は攪乱されている）約8mを検出したにとどまる。

**規模と形状** 幅1.4～2.6m、延長は34m以上を測る。検出面（5.4～5.7m）からの深さは40～70cmを測り、溝底は標高値では中央部がやや低く、南西部、北東部と若干高くなるが、その差は15cm程度である。

**覆土と遺物出土状況** 覆土は、上層部が黒褐色土、中層部が暗灰褐色粘質土、下層部が黒（褐）色粘質土を基調とする。遺物は、第2次調査20号溝地点では、大部分が溝底から20～40cm浮いた状態で、両側肩部から0.5～1.0m離れた中央部に、幅0.7～0.9、長さ約4mにわたって帯状に検出された。第3次調査40号溝地点でも、大部分が溝底から20～50cm浮いた状態で、幅0.5～1.0、長さ約18mにわたって帯状に検出された。それらの大部分は、上・中層部からの出土と考えられる。おそらくは、溝が機能を停止した下層部堆積後、多量の遺物の投棄（流入）があったのであろう。

**出土遺物と所属時期** 第2次調査20号溝地点では、土器37点を実測し得た（1～37）。1～7は大形有段口縁壺（1～4は特大形か）、1・3・4・7は外面肩部に突帯をもち、口縁部外面にも円形浮文+竹管文（1）、刻目（3）、擬凹線（4～7）を施す。8は有孔無頸壺、完形赤彩品である。9～11は器高10cm前後の小型（甕形）土器、いずれもほぼ完形品である。12～19は擬凹線文有段口縁甕、13・17・19は口縁部内面に指頭圧痕をもつ。12は、接合はできていないがほぼ完形品、19は大形品である。20・23～28は無文有段口縁甕、大形（20他）、中形（28他）、小形（25）品がある。20・25・28はほぼ完形品である。21・22は甕底部片。29は有段口縁鉢形高杯。30・31は有段受部有段脚器台、30は赤彩品、31は受端部を除きほぼ完形品である。32は結合器台（装飾器台）、細片となっているが図上復元をおこなった。33・34は高杯脚部。35は台付有段口縁鉢、36・37は碗形を呈する台付鉢。35・36はほぼ完形品である。

第3次調査40号地点では、土器47点を実測し得た（1～47）。1・2・4・5・7（6もか）は有段口縁壺。2・4は口縁部外面に擬凹線を施す。3も大形壺であろう。7（ほぼ完形）・30は有段口縁小形（やや大振りではあるが）壺。30は外面・内面口縁部を赤彩する。8は中形無頸壺（ないしはくの字口縁壺）13・14は壺・鉢などの脚部片。10～12・15～29は擬凹線文有段口縁甕。小形（20他）、中形（10他）、大形（15他）、特大形（26）がある。口縁端部を厚く丸縁にしあげるもの（17他）、薄く先細りにしあげるもの（27他）などがあり、口縁部外面に施文される擬凹線も、全面にわたるもの（12他）、一部をナゲ消すもの（16他）などがある。内面口縁部に指頭圧痕を残すもの（11他）、頸部にハケ調整痕を残すもの（27他）がある。外底面に記号文をもつ26bは26aと同一個体と考えられるもので、図では底部からの立ちあがりはずかであるが、胴部下半付近まで破片が接合することが確認できた。31～33は無文有段口縁甕。32・33は口縁部内面に



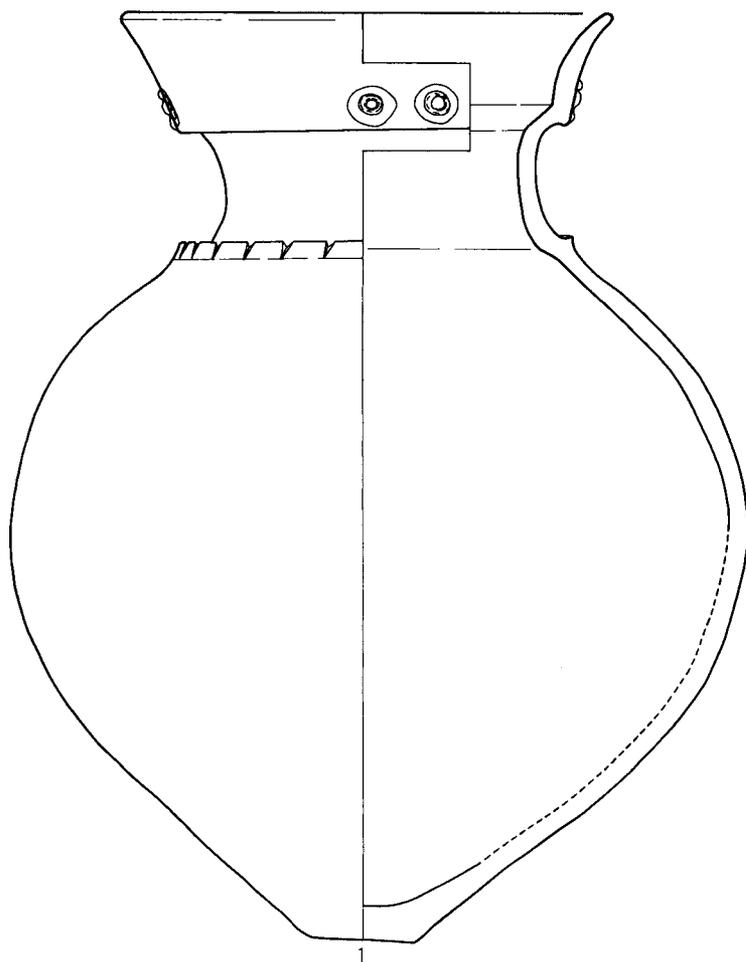
第3-1-27図 第2次調査20号溝遺物出土状況 (S = 1/30)

指頭圧痕を残す。34は甕胴部下半の破片、39・40も有孔の底部片である。35～38は小型土器（甕形）、いずれも完形ないしはほぼ完形品である。38は底部に孔を穿つ。41は有段受部器台、42は碗形を呈する台付鉢、43は蓋（完形）、外面赤彩品である。44（ほぼ完形）・45は有段口縁鉢、45が台付かどうかは不明。46はやや粗雑な造りではあるが台付の有段口縁鉢、ほぼ完形品である。47は表面をヘラ磨きした、口縁部がくの字に屈曲する鉢である。

以上、第2次調査20号溝・第3次調査40号溝（地点）出土土器は、大部分は弥生時代終末月影式期に属するものと考えられ、遺構の使用時期も同期におくことができる。もちろん一部の土器は、弥生時代後期後半法仏式期に遡る可能性があるが、該期の良好な資料に乏しい（南）加賀地域にあっては、それらを正確に抽出することは難しい。むしろ溝資料とはいえ、比較的狭い範囲内に高低差もあまりない状態で多くが完形品で出土した第2次調査20号溝地点出土土器は、当地にあっては当分の間該期の主たる資料とすることができよう。



第3-1-28図 第3次調査40号溝遺物出土状況 (S = 1/60)



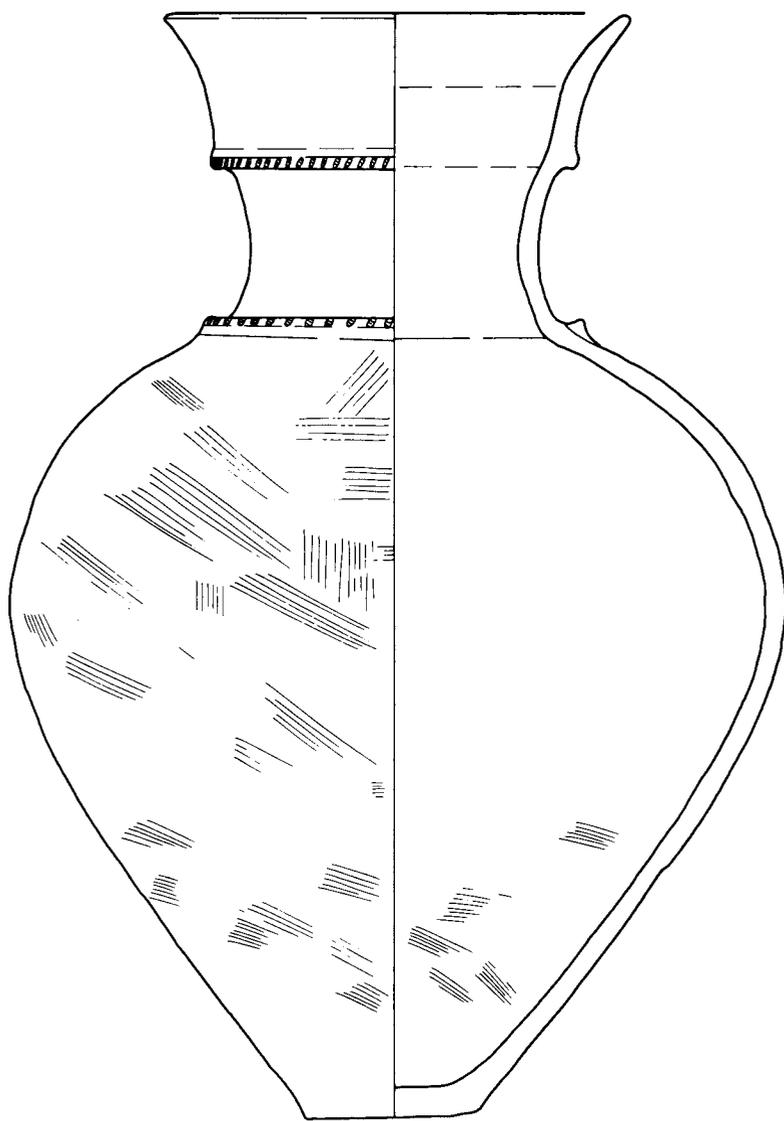
1



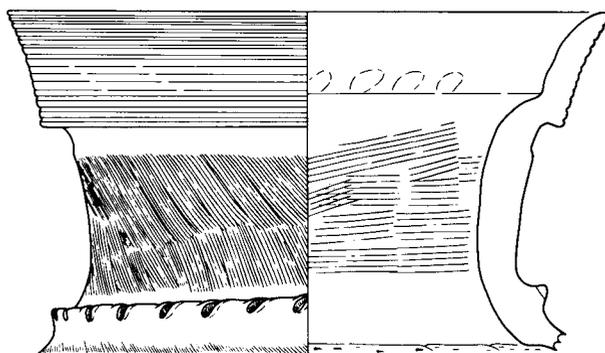
2



第3-1-29図 第2次調査20号溝出土土器1 (S = 1/3)



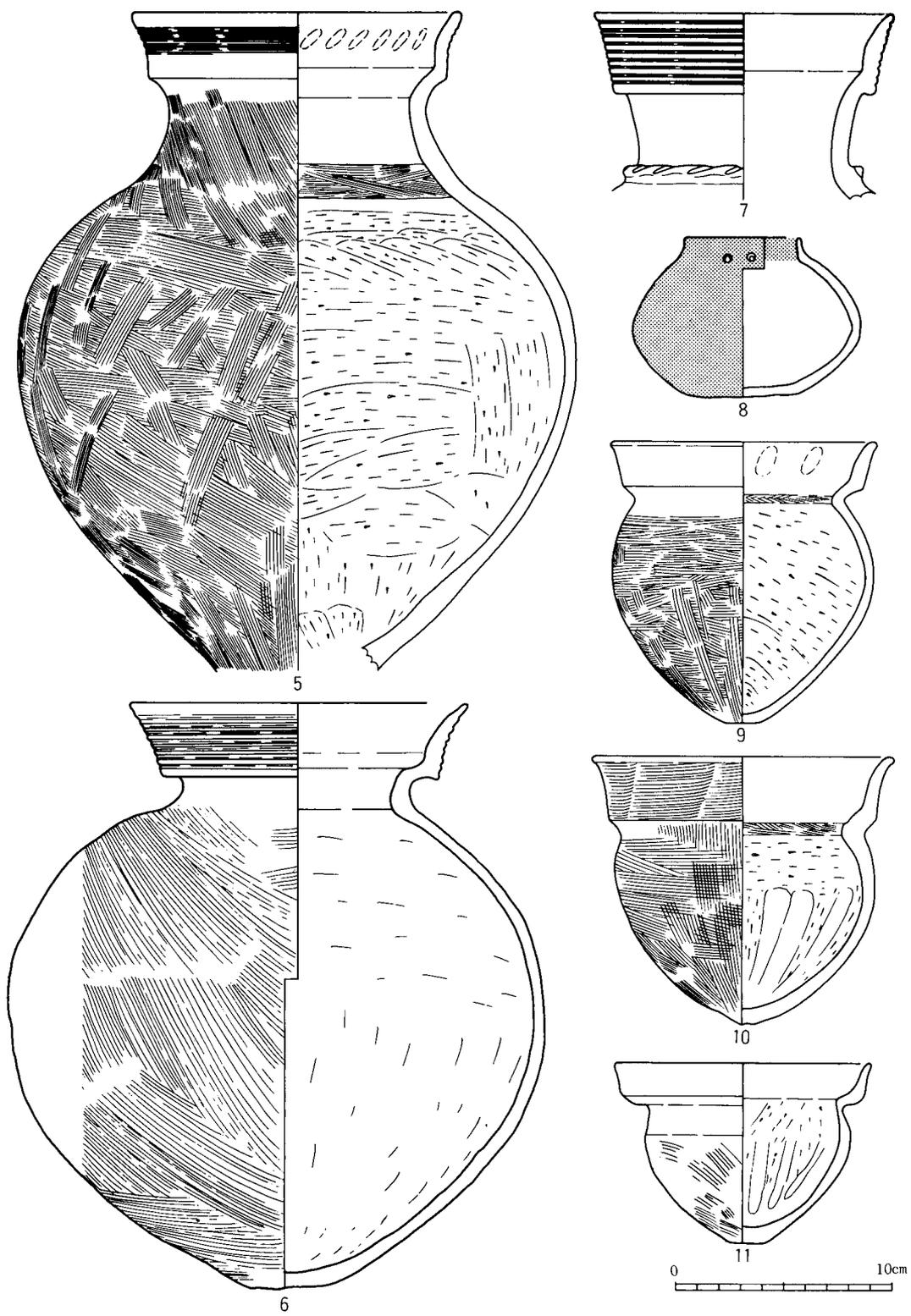
3



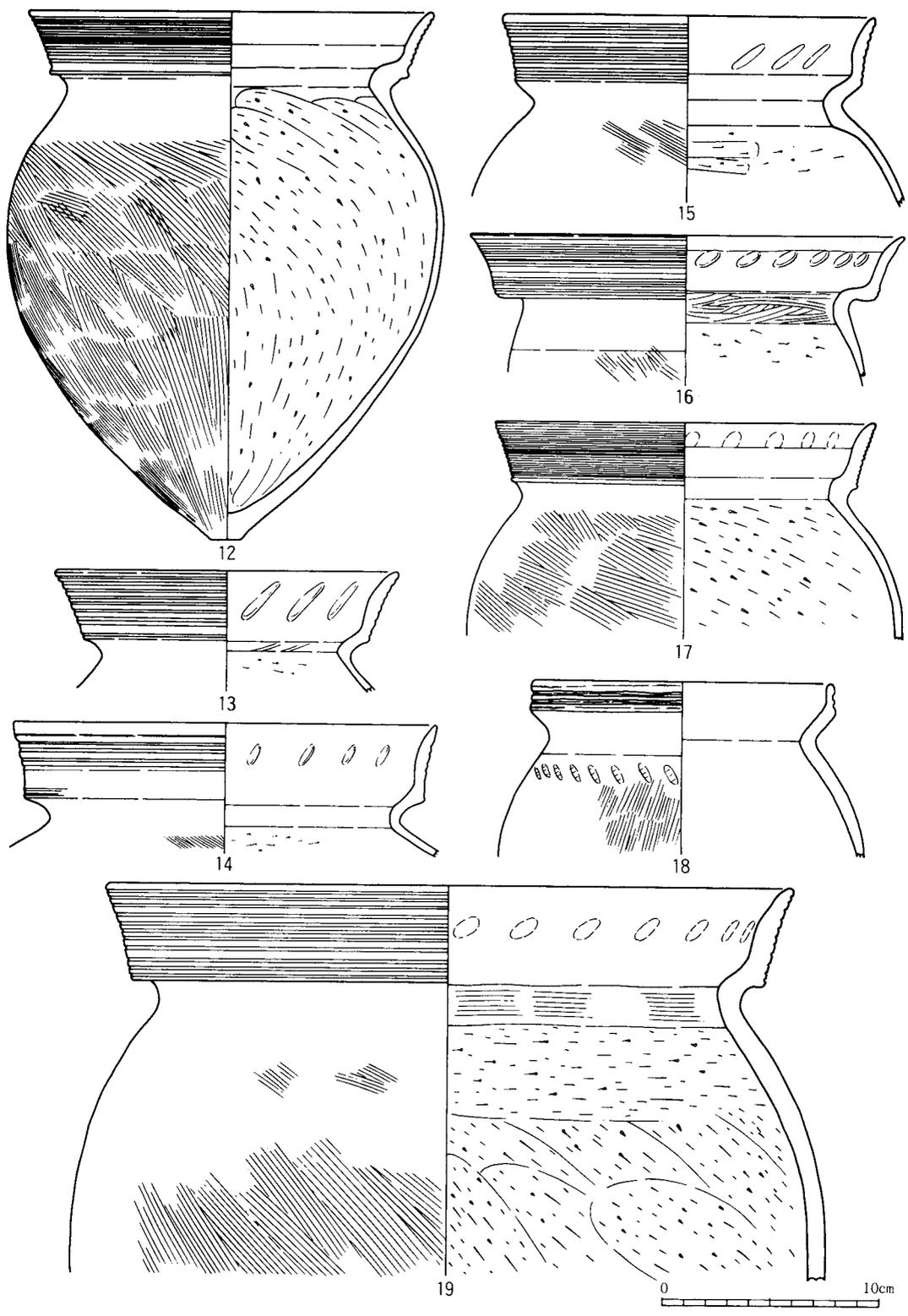
4

0 10cm

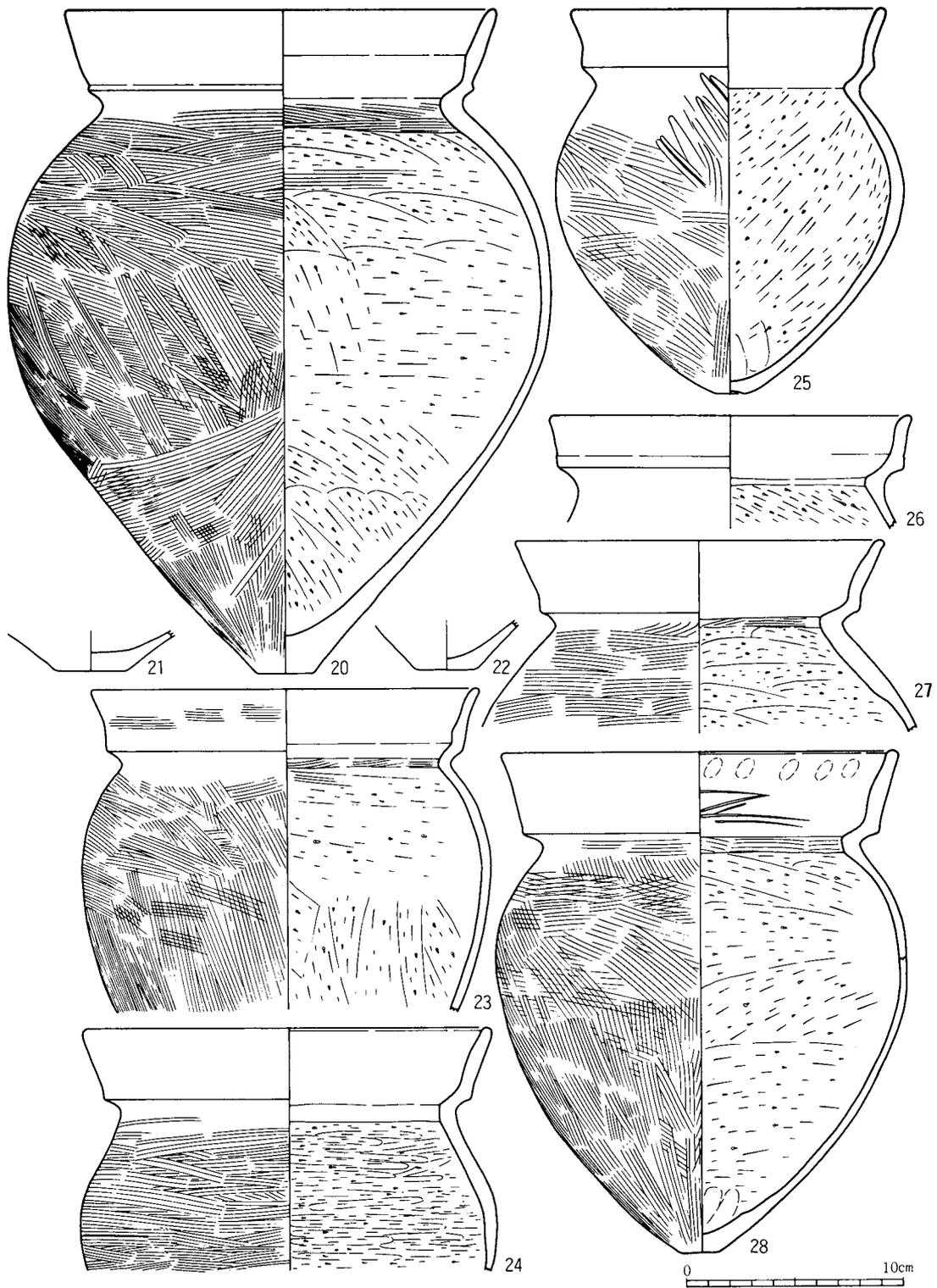
第3-1-30図 第2次調査20号溝出土土器2 (S = 1 / 3)



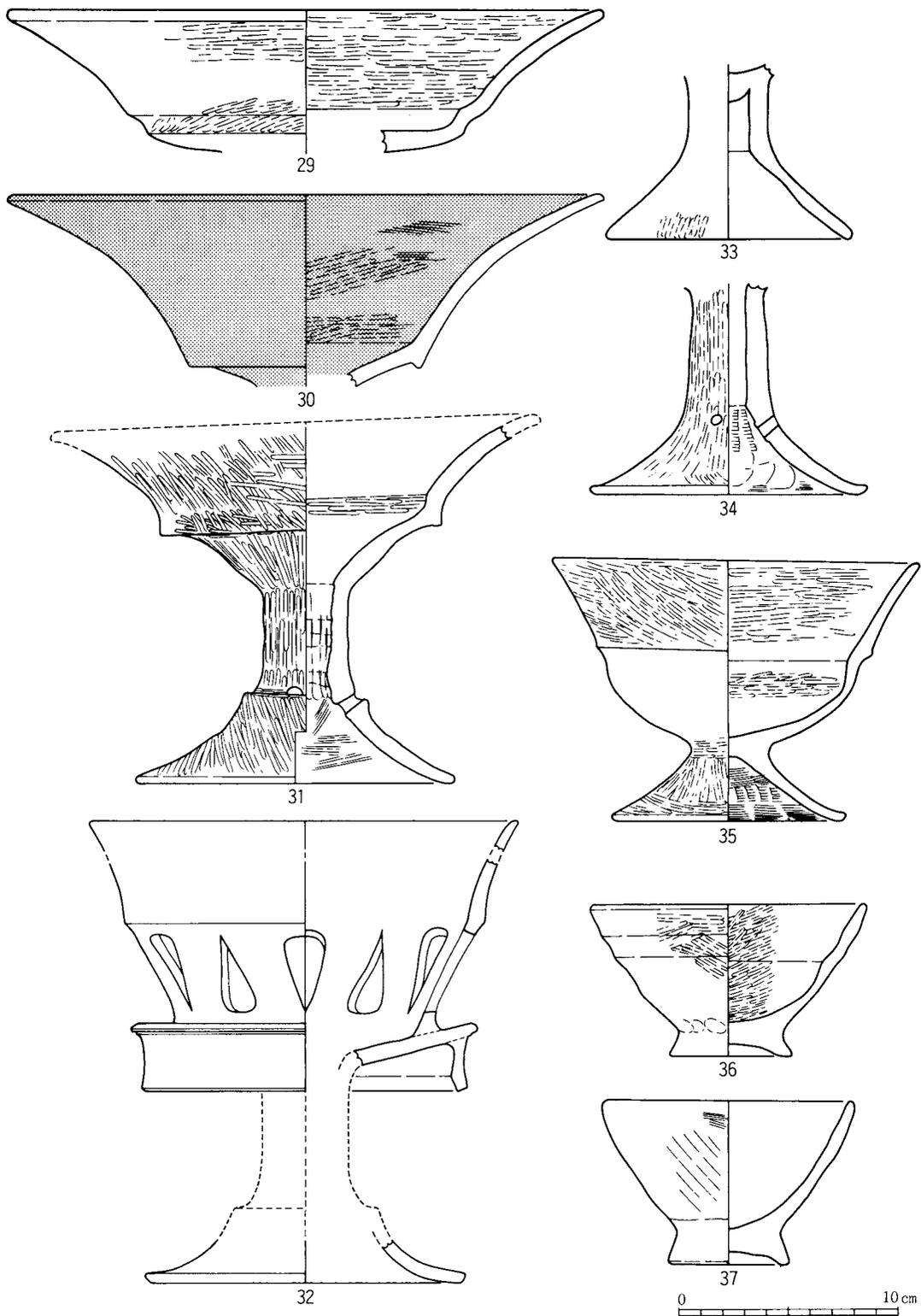
第3-1-31図 第2次調査20号溝出土土器3 (S = 1/3)



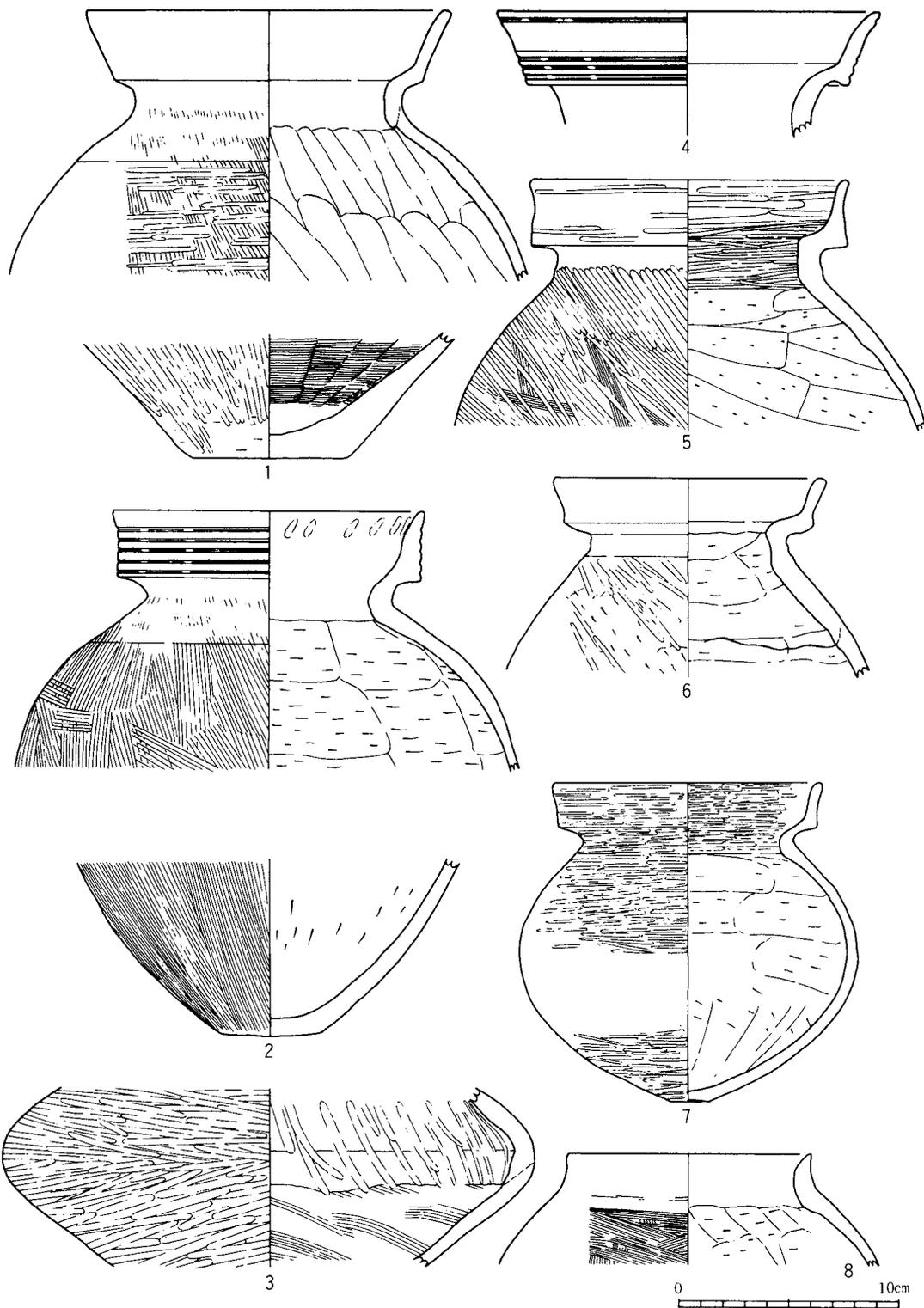
第3-1-32図 第2次調査20号溝出土土器4 (S = 1/3)



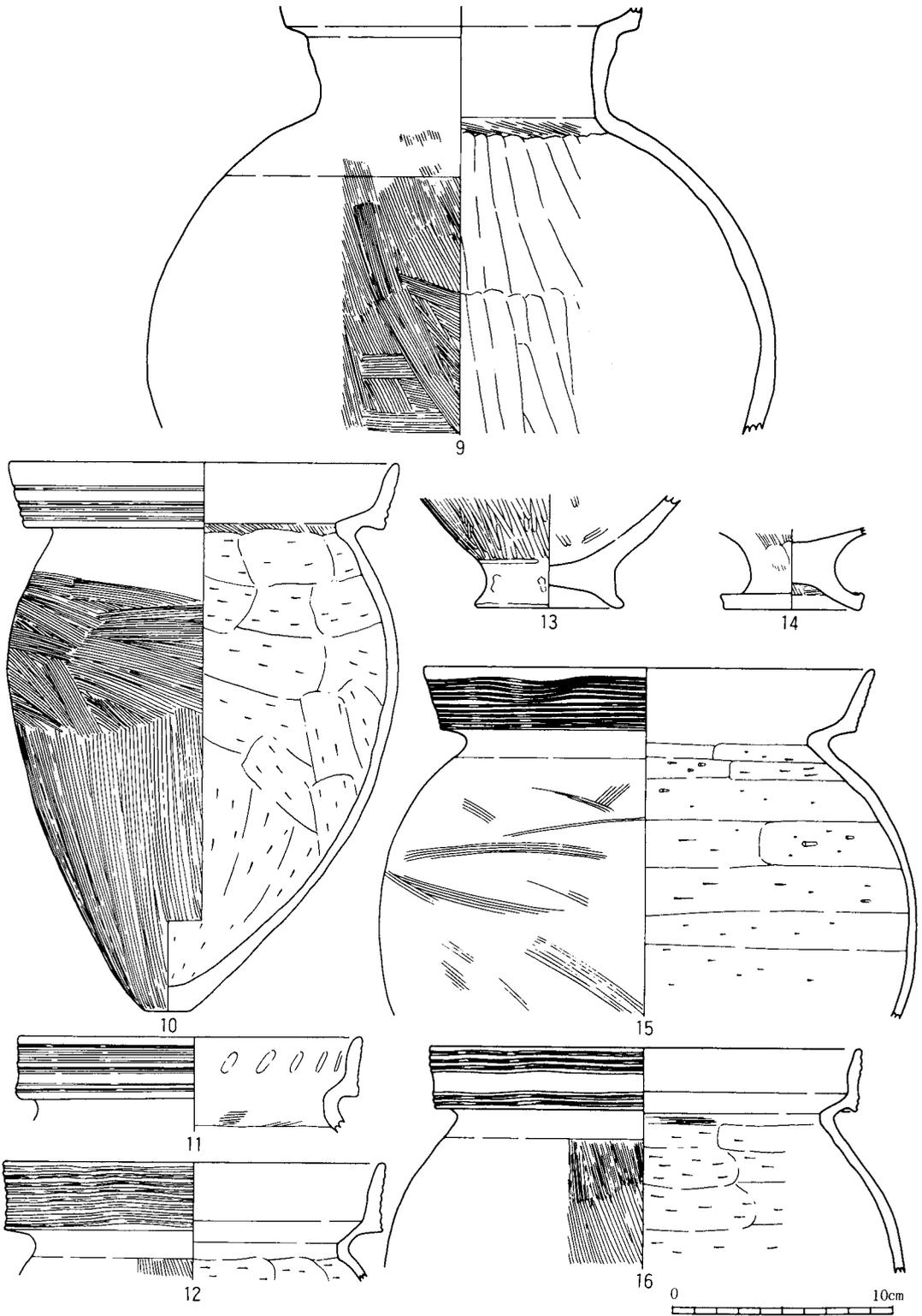
第3-1-33図 第2次調査20号溝出土土器5 (S = 1/3)



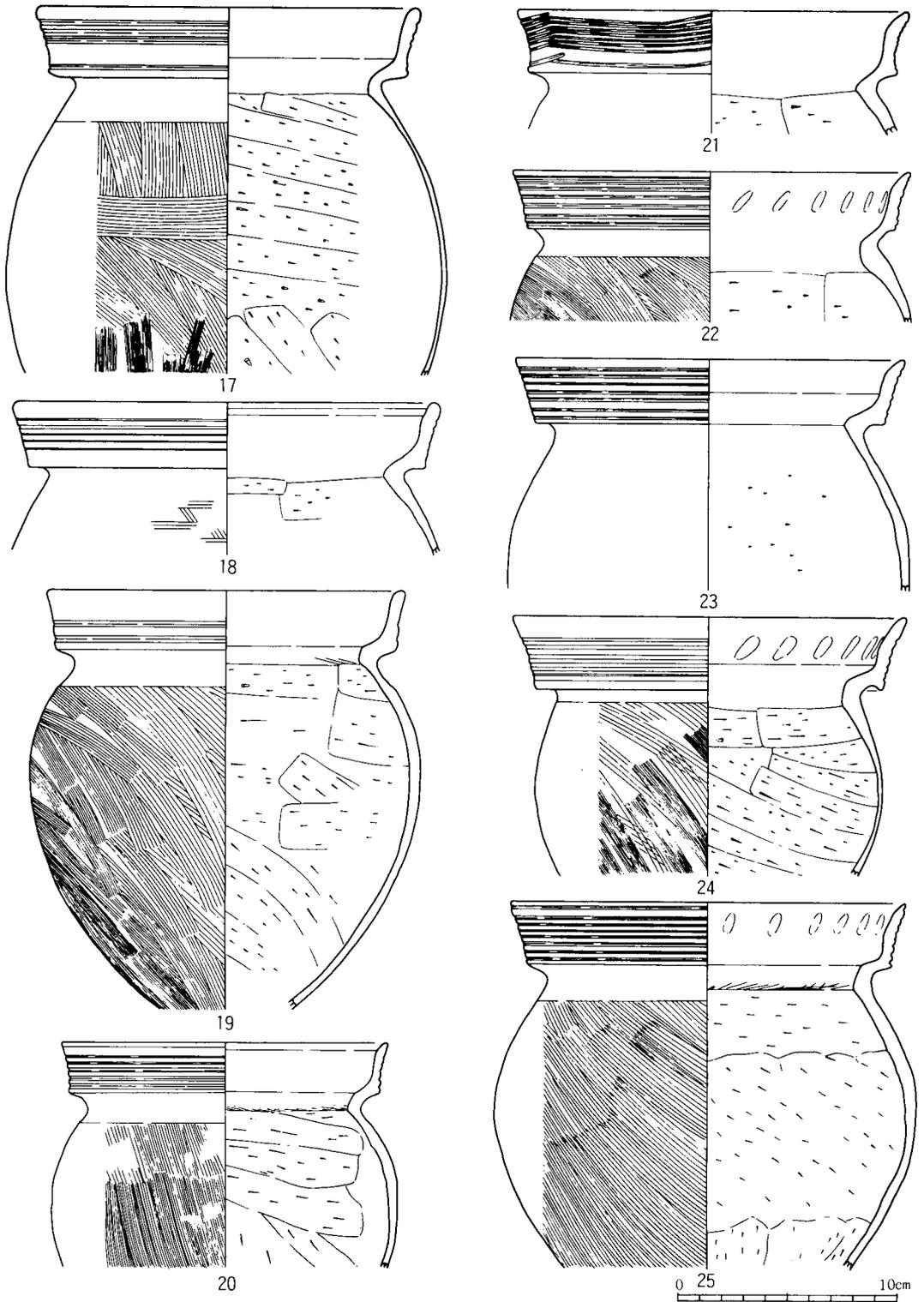
第3-1-34図 第2次調査20号溝出土土器6 (S = 1/3)



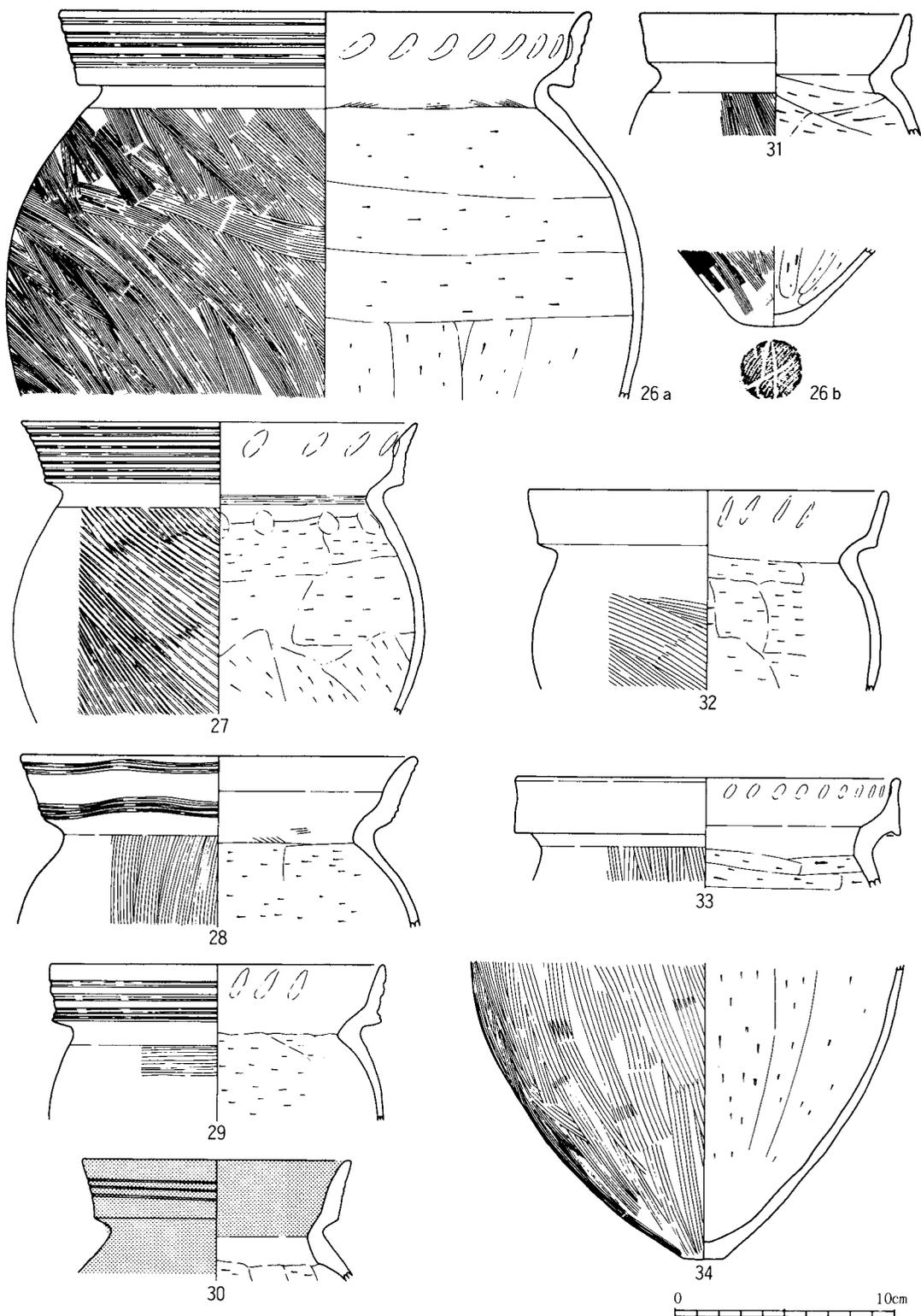
第3-1-35図 第3次調査40号溝出土土器1 (S = 1/3)



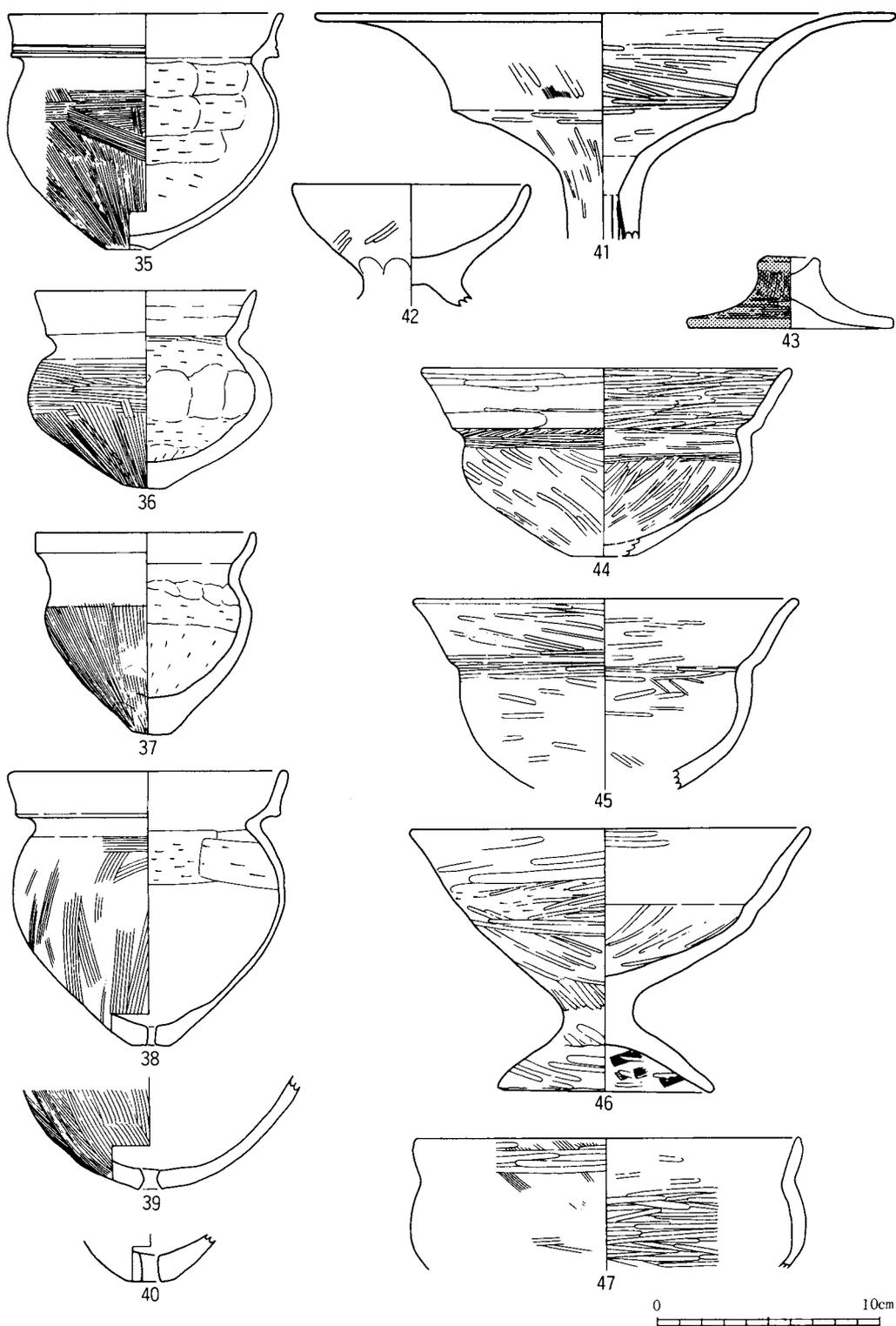
第3-1-36図 第3次調査40号溝出土土器2 (S = 1/3)



第3-1-37図 第3次調査40号溝出土土器3 (S = 1 / 3)



第3-1-38図 第3次調査40号溝出土土器4 (S = 1/3)



第3-1-39図 第3次調査40号溝出土土器5 (S = 1/3)

## 第2次調査14～16号溝・第3次調査41～43号溝（第3-1-40～45図、観察表9）

**位置と概要** 調査区の北側C～L-8～16区に位置する。調査区を北東から南西へ3条の溝が並行して横断する。調査区の東側・西側では、それぞれ東西・南北に走る旧用水・1号溝に切られている。第2次調査では北東側から14～16号溝とし、第3次調査ではそれらの延長部分をそれぞれ43～41号溝として検出している。14・15号溝地点は北東側から中央部にかけて（中央部では16号溝も）一部合流しており、16号溝地点は、中央部で第2次調査方形周溝状遺構から分岐した18号溝が合流する。

**規模と形状** 14～16・43～41号溝は延長約60mを検出し、幅は14・43号溝が2.0～5.0m、15・42号溝が0.6～1.4m。16～41号溝が0.7～1.5mを測る。検出面（5.6～5.8m）からの深さは、14・43号溝が約80cm、15・42号溝が40～50cm、16・41号溝が30～40cmを測り、検出面は北東側が高く溝底は南西側が低い。

**覆土と遺物出土状況** 覆土は、第2次調査14号溝（地点）では、上層部が暗茶褐色土・暗灰色粘質土、中層部が灰褐色砂質土、下層部が暗灰色砂質土を基調とする。第2次調査15号溝（地点）では、黒褐色粘質土（上層）、暗灰褐色粘質土（中層）、灰褐色砂質土（下層）を基調とする。第2次調査16号溝（地点）では、暗茶褐色粘質土（上～中層部）、暗灰褐色砂質土（下層部）を基調とする。遺物の出土状況は各溝とも概ね散発的で、大形破片も少ない。

**出土遺物と所属時期** 第2次調査14号溝（地点）では、土器17点を実測し得た（1～17）。1はくの字口縁直口壺、2・3は短頸壺（3は口縁部有段）、4は台付有段口縁壺。5・7・8は擬凹線文有段口縁甕、8は底部に孔を穿つ。6・9・10は無文有段口縁甕。5・6は小片である。11は甕胴下半部の破片、北東側に並走する第2次調査13号溝からも破片が出土している。12は（畿内・）東海系高杯。13は小型土器（甕形）、口縁端部を欠く。14は碗形を呈する小形の鉢である。15はくの字口縁小形直口壺、16は無文有段口縁甕。17はくの字口縁直口壺、口縁部外面に2個1組の竹管文を施す。15は第2次調査15号溝（地点）、16は第2次調査16号溝（地点）からも破片が出土している。17は第2次調査14～16号溝が合流する地点（G-13区）からまとまって出土しているが、どの溝にともなうものかは特定できない。第2次調査14号溝（地点）の延長部分である第3次調査43号溝（地点）では、土器10点を実測し得た（9～18）。9～12・14は擬凹線文有段口縁甕、15は無文有段口縁甕、16はくの字口縁甕、13・17・18は底部・脚（台）部片である。

第2次調査15号溝（地点）では、上述のくの字口縁小形直口壺（15）の破片が出土している。延長部分である第3次調査42号溝（地点）では、土器5点を実測し得た（4～8）。4・7は擬凹線文有段口縁甕、5はくの字口縁甕。6は小型の鉢、口縁端部を欠く。8は有段口縁壺、完形品で外面・内面口縁部を赤彩する。

第2次調査16号溝（地点）では、上述の無文有段口縁甕（16）のほかに土器5点を実測し得た（18～22）。18は体部外面に把手（1）をもつ無頸壺、台付がどうかは不明。19～21は無文有段口縁甕。22は器壁の厚い直口の有段口縁大形壺、ほぼ完形品で一箇所にまとまって出土した。延長部分である第3次調査41号溝（地点）では、土器3点を実測し得た（1～3）。1は擬凹線文有段口縁甕、2は無文有段口縁甕、3は口縁端部を上（下）に拡張したくの字口縁甕である。

第2次調査14号溝・第3次調査43号溝（地点）出土土器は、大半は弥生時代終末月影式期に属すると思われるが、古墳時代前期に属するもの（第2次調査14号溝12他）もあり、弥生時代後期後半法仏式期に遡る可能性のあるもの（第3次調査43号溝9他）もみられる。第2次調査15号溝・第3次調査42号溝（地点）出土土器、第2次調査41号溝（地点）出土土器も同様の傾向にあると考えられるが、出土遺物が少なく判然としない。

以上、第2次調査14～16号溝・第3次調査43～41溝は、遺構の配置状況から互いに関連性をもつものと考えられ、その使用時期は月影式期を中心とするものであろう。

### 3 土坑他出土土器

#### 第2次調査8号土坑出土土器（第3-1-47図2・3、観察表9）

2は擬凹線文有段口縁甕、小片である。3はおそらくは壺の胴部小片、外面にスタンプ文（S字状渦文）を施す。S字状渦文は、長さ17mm以上、幅12.0mm、Z字状を呈する。型ずれがみられ、渦文全体が遺存しているわけではないため確証を欠くが、沈線が単独で渦の中へ巻き込むもので、<sup>(1)</sup>吉竹遺跡の分類ではI類Bに属するものであろう。

#### 第2次調査12号土坑出土土器（第3-1-47図1、観察表9）

1は口径24.3cmを測る山陰系大型甕、内外面に煤・炭化物が付着する。

#### 第3次調査20号土坑出土土器（第3-1-47図4、観察表9）

4は有段口縁壺の口縁部小片である。外面に擬凹線文を施す。

#### 第3次調査25号土坑出土土器（第3-1-47図5・6、観察表9）

5は擬凹線文有段口縁甕、6は甕底部片である。

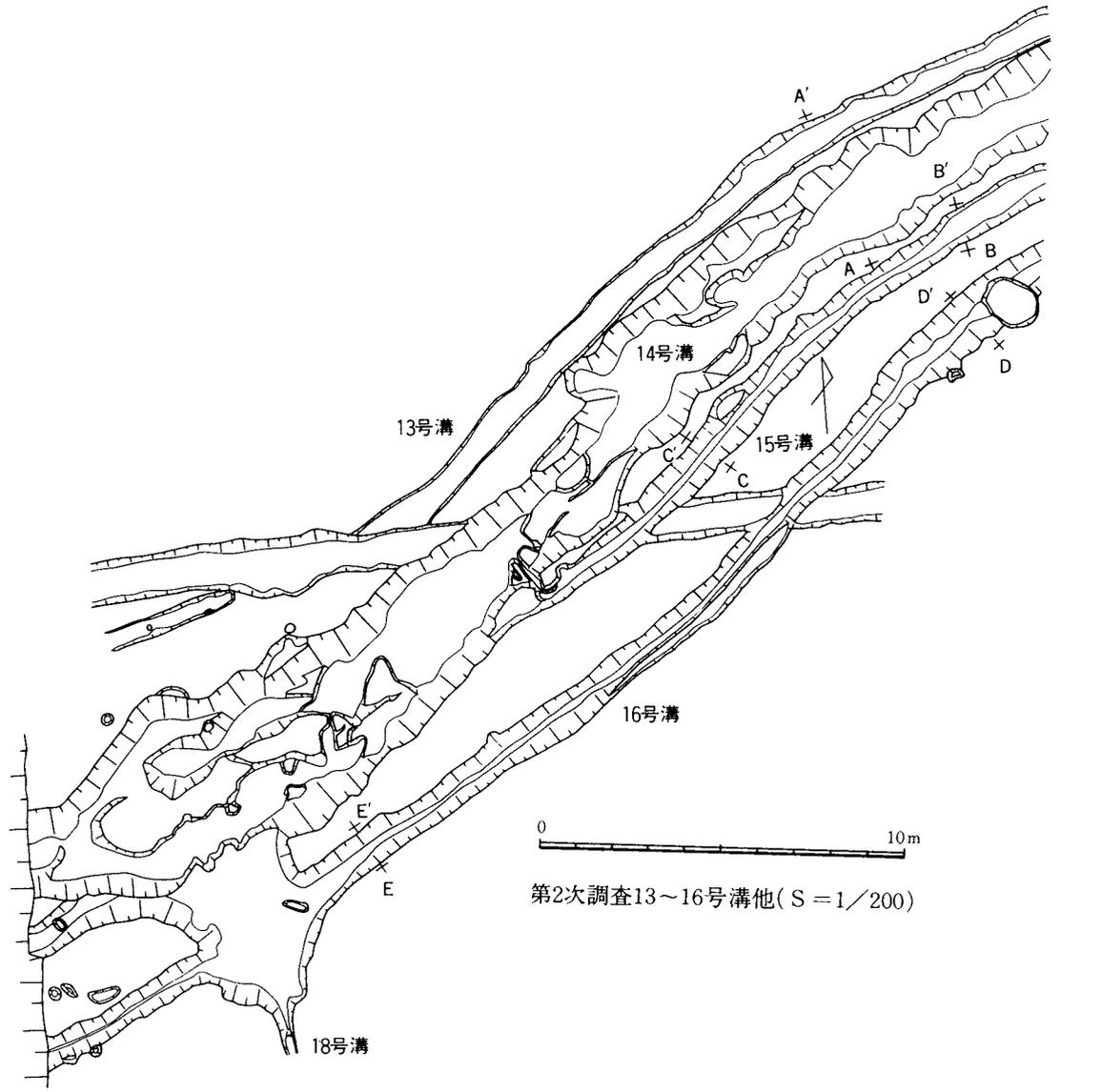
#### 第3次調査29号土坑出土土器（第3-1-47図7、観察表9）

7は擬凹線文有段口縁甕、口縁部の小片である。

#### 第3次調査1号溝上面出土土器（第3-1-47図8、観察表9）

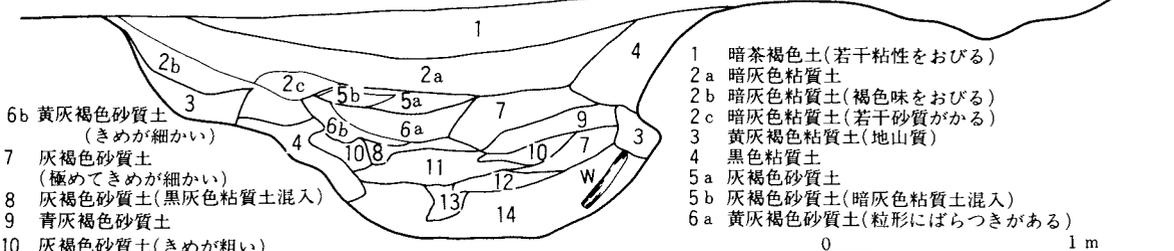
3は外面（赤彩）にスタンプ文（5重の同心円文）を施した破片である。

(1) 『吉竹遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987 金沢。



第2次調査13~16号溝他 (S = 1/200)

— A L. = 6.00m A' —

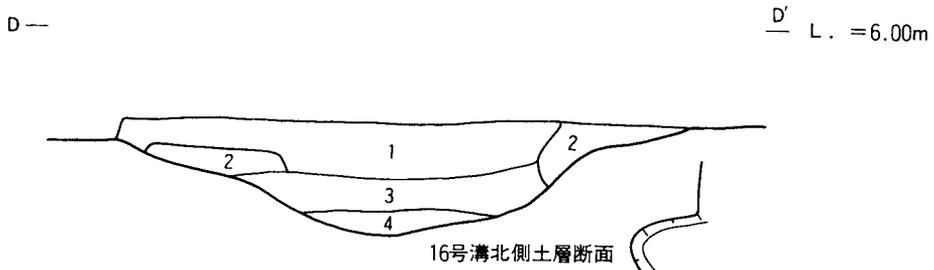
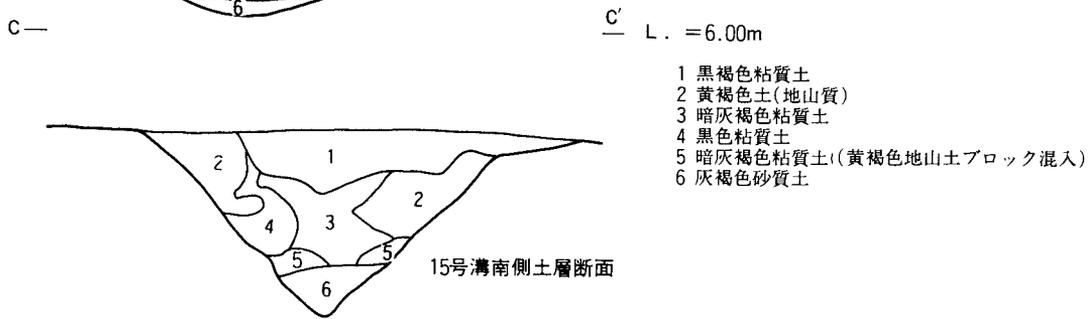
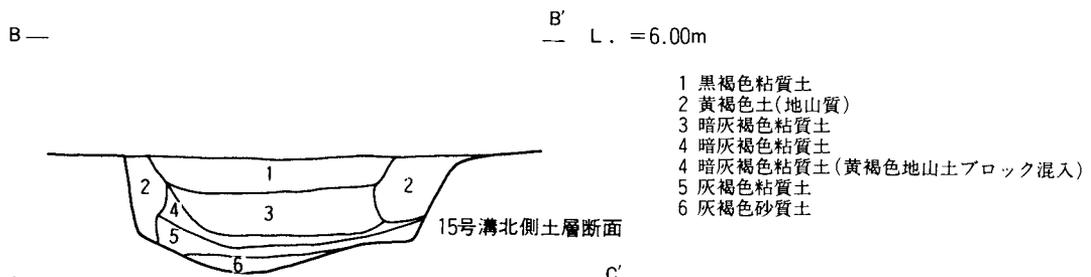


- 6b 黄灰褐色砂質土 (きめが細かい)
- 7 灰褐色砂質土 (極めてきめが細かい)
- 8 灰褐色砂質土(黒灰色粘質土混入)
- 9 青灰褐色砂質土
- 10 灰褐色砂質土(きめが粗い)
- 11 灰褐色砂質土(きめが細かい)
- 12 灰色砂質土
- 13 灰褐色砂質土(黒色・黄色粘質土ブロック少量混入)
- 14 暗灰色砂質土(暗灰色粘質土・灰褐色砂質土混入)

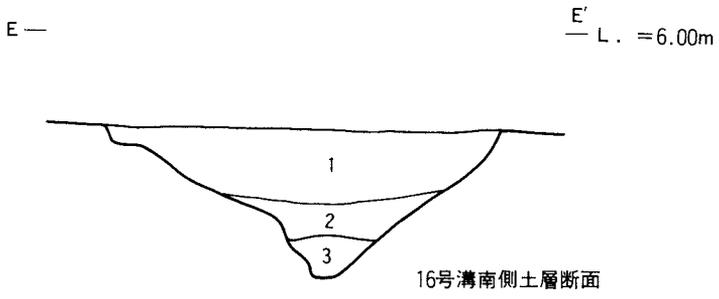
- 1 暗茶褐色土(若干粘性をおびる)
- 2a 暗灰色粘質土
- 2b 暗灰色粘質土(褐色味をおびる)
- 2c 暗灰色粘質土(若干砂質がかかる)
- 3 黄灰褐色粘質土(地山質)
- 4 黒色粘質土
- 5a 灰褐色砂質土
- 5b 灰褐色砂質土(暗灰色粘質土混入)
- 6a 黄灰褐色砂質土(粒形にばらつきがある)

第2次調査13・14号溝土層断面 (S = 1/30)

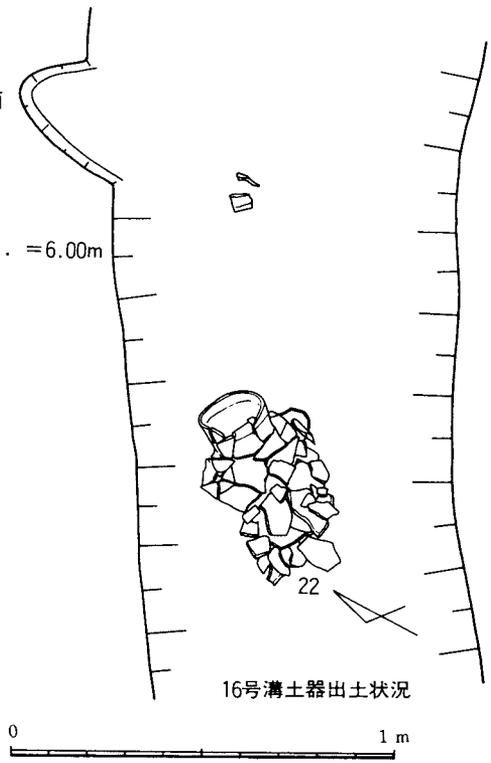
第3-1-40図 第2次調査13~16号溝他 (S = 1/200・S = 1/30)



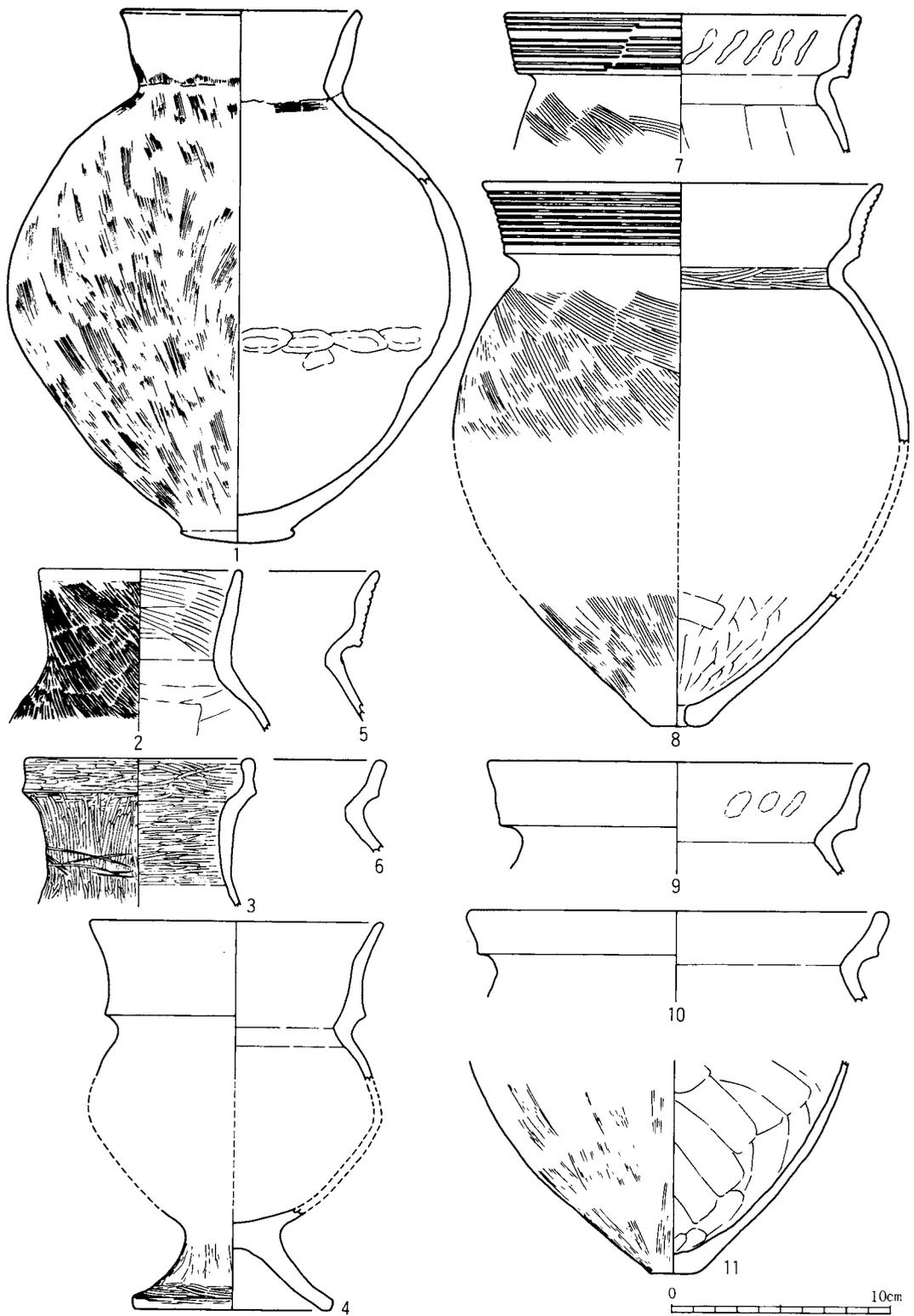
- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 黄褐色土(地山質)
- 3 暗茶褐色粘質土(やや粘性が強く黒っぽい)
- 4 暗灰褐色砂質土



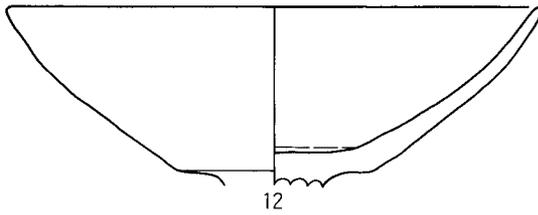
- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土(やや粘性が強く黒っぽい)
- 3 暗灰褐色砂質土



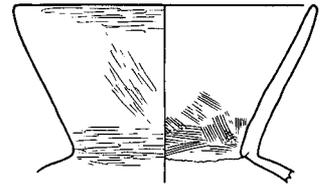
第3-1-41図 第2次調査15・16号溝 (S = 1/20)



第3-1-42図 第2次調査14号溝出土土器 (S = 1/3)

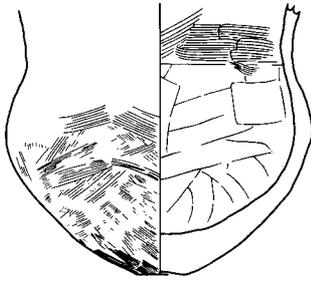


12

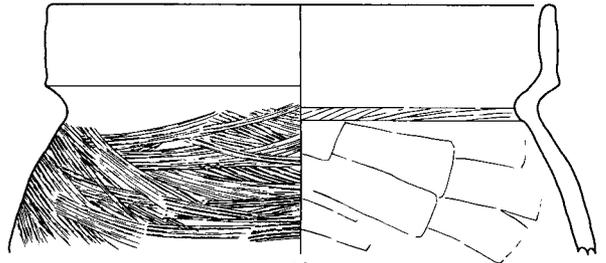


15

14・15号溝

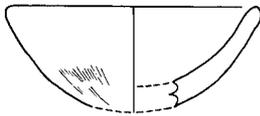


13



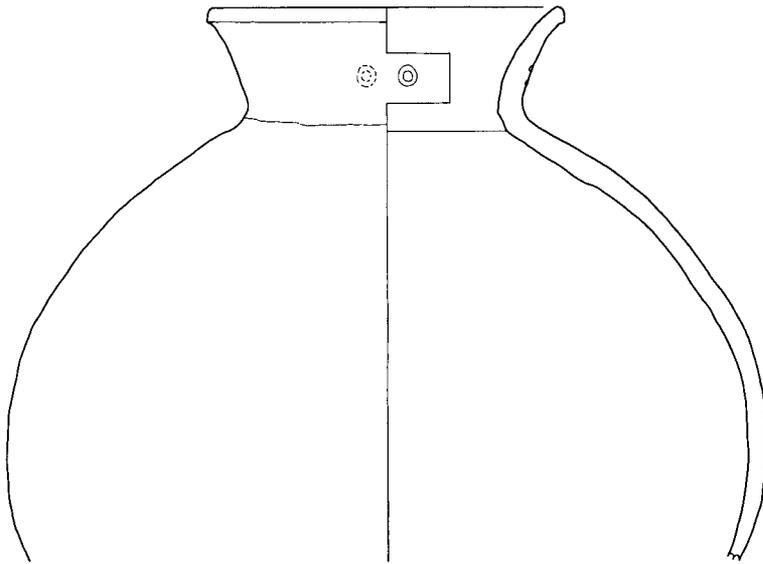
16

14・16号溝



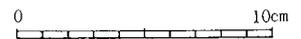
14

14号溝

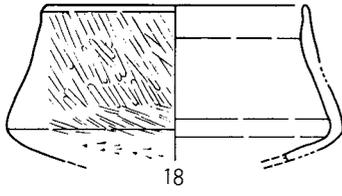


17

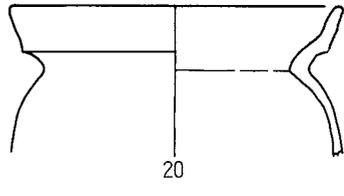
14~16号溝



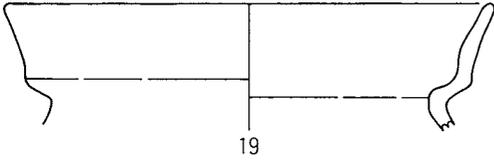
第3-1-43図 第2次調査14~16号溝出土土器 (S = 1/3)



18



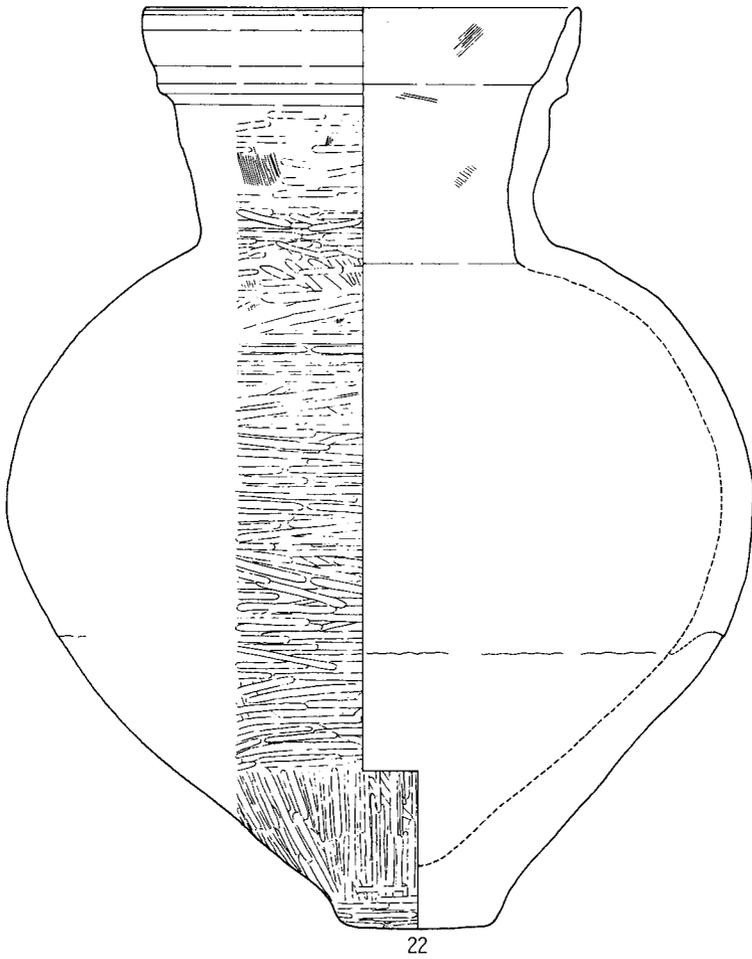
20



19



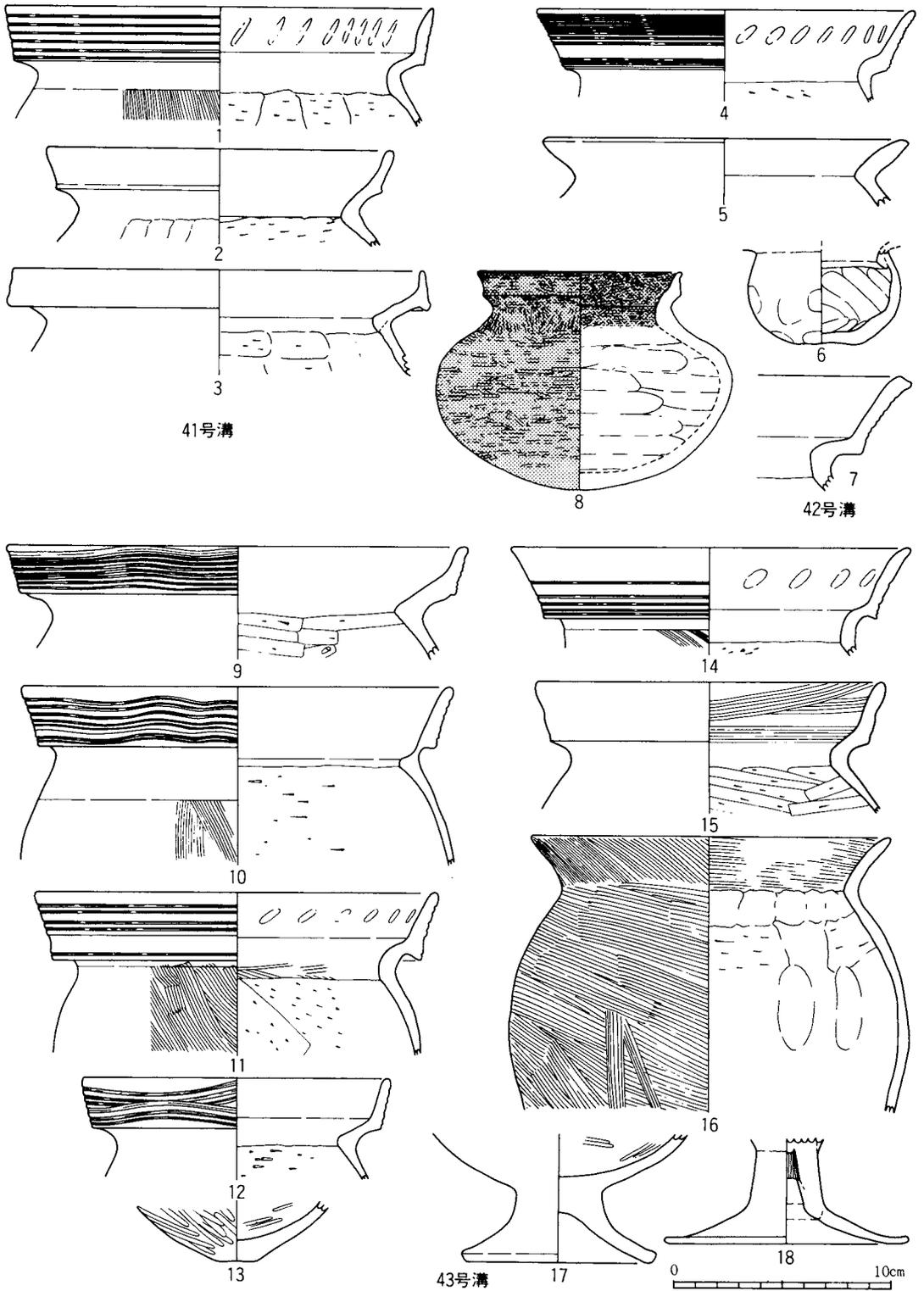
21



22



第3-1-44図 第2次調査16号溝出土土器 (S = 1 / 3)

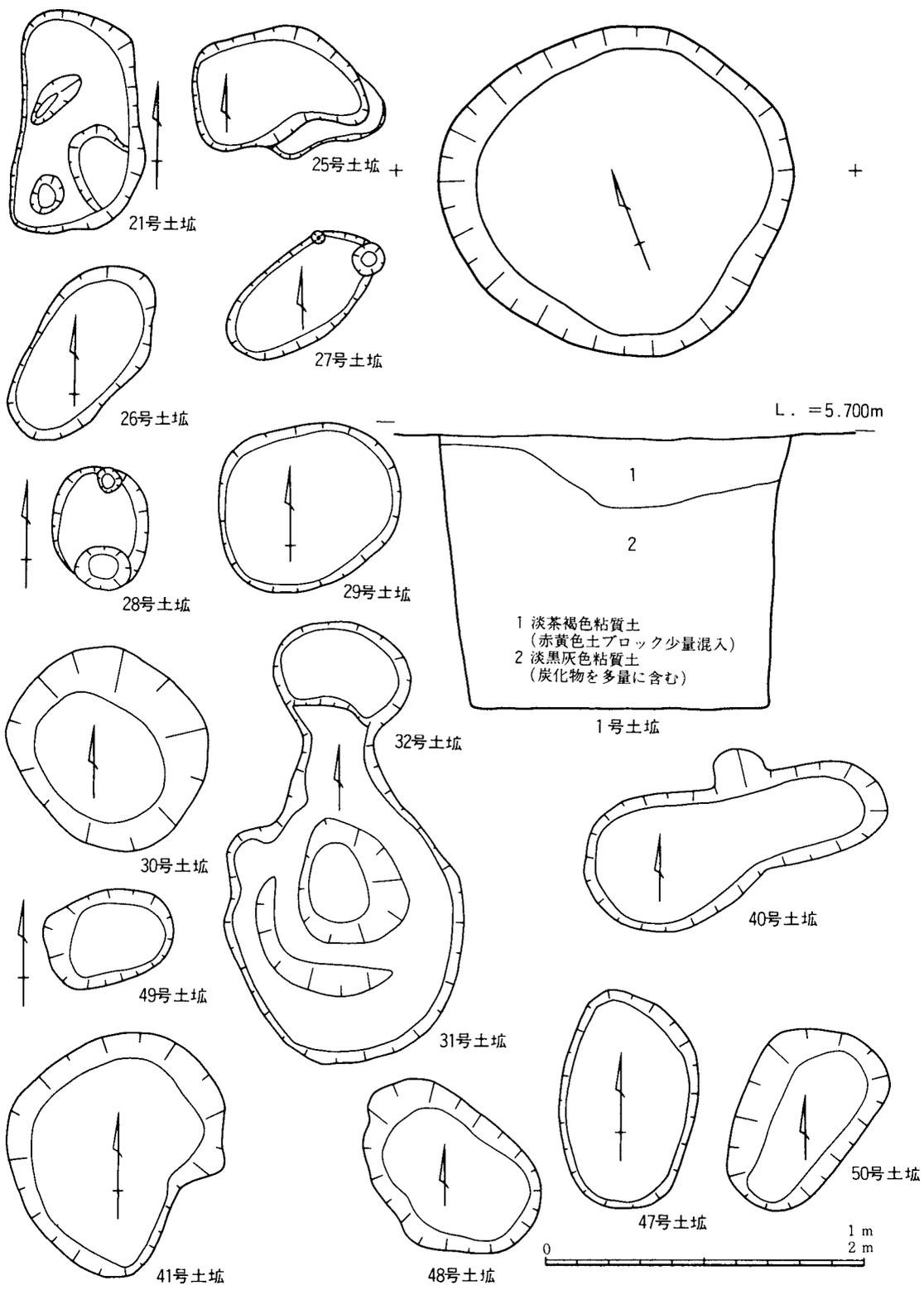


41号溝

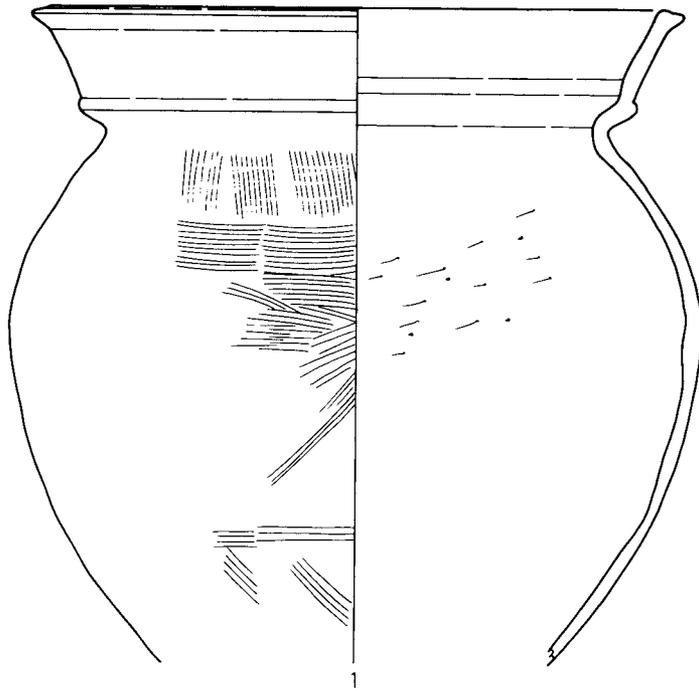
42号溝

43号溝

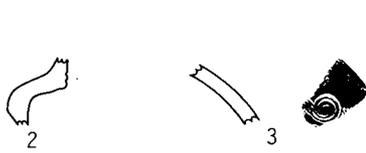
第3-1-45図 第3次調査41(1~3)・42(4~7)・43(8~18)号溝出土土器 (S = 1/3)



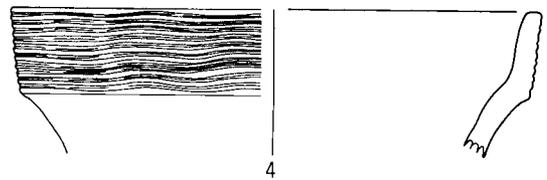
第3-1-46図 第1次調査1号土坑 (S = 1/20)、第3次調査  
21・25~32・40・41・47~50号土坑 (S = 1/40)



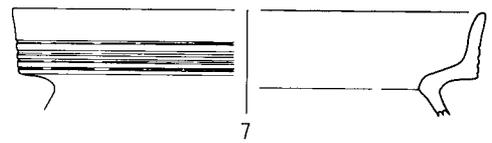
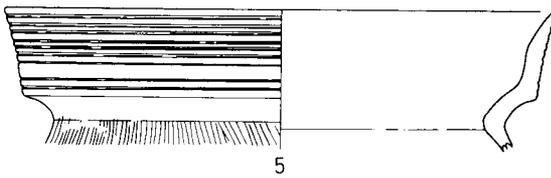
第2次調査12号土埴



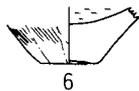
第2次調査8号土埴



第3次調査20号土埴



第3次調査29号土埴



第3次調査25号土埴



第3次調査  
1号溝上面



第3-1-47図 第2次8・12号土埴、第3次20・25・29号土埴・1号溝上面出土土器 (S = 1/3)

## 4 ま と め

本項では、本節で報告した出土土器の主体をしめる第2次調査20号溝出土土器(第3-1-29~34 図1~37)の編年の位置づけ等を中心に若干のまとめをおこなう。

現在、加賀地域における弥生時代後期(前半・後半)・同終末期・古墳時代初頭の土器様式(型式)の編年の序列は、概ね猫橋式→法仏式→月影式→白江式といった変遷を辿るが、その具体的な内容は必ずしも明瞭とはいえない。弥生時代後期~終末期を例にとれば、すでに橋本澄夫・吉岡康暢・谷内尾晋司の三氏による猫橋Ⅰ・Ⅱ式、塚崎Ⅰ~Ⅲ式、法仏Ⅰ・Ⅱ式→月影Ⅰ・Ⅱ式<sup>(3)</sup>といった土器編年などがあり、それら相互の関係が資料の増加にともなう名称の呼び替えや同一枠組みのなかでの細別ではないことは、猫橋Ⅰ・Ⅱ式→月影式、猫橋Ⅰ式→(猫橋Ⅱ式=塚崎Ⅰ式)→塚崎Ⅱ式→(月影式=塚崎Ⅲ式)<sup>(2)</sup>、猫橋Ⅰ式→(猫橋Ⅱ式=塚崎Ⅰ・Ⅱ式古相=法仏Ⅰ・Ⅱ式)→(塚崎Ⅱ式新相=月影Ⅰ式)→(月影式=塚崎Ⅲ式=月影Ⅱ式)<sup>(3)</sup>といった各様式(型式)序列間の齟齬をみれば明らかなのであるが、それぞれの編年における各様式(型式)に付与された概念やその基準資料を詳細に検討し、基準資料間の並行関係を明らかにし、上記の齟齬などを整合的に理解するといった作業はほとんどなされていない。本項においてもそうした全体的かつ詳細な検討には力がおよばなかったため、第2次調査20号溝出土土器の編年の位置づけに限定して、以下月影式についてのみ若干ふれることとする。

「月影式」土器は、1962年(昭和37年)、濱岡賢太郎・吉岡康暢両氏によって金沢市(旧河北郡森本町)月影遺跡土壙出土資料(1959年(昭和34年)調査)を標式として設定された型式<sup>(4)</sup>で、吉岡氏によって1967年(昭和42年)、北陸の土師器第1様式に包括されたものである。1975年(昭和50年)には橋本澄夫氏によって土器組成の充実化がはかられ<sup>(6)</sup>、1976年(昭和51年)に金沢市塚崎遺跡出土資料をもとに吉岡氏が発表した塚崎編年<sup>(2)</sup>では、塚崎Ⅲ式がこれに比定されている。これにたいして谷内尾晋司氏は、1983年(昭和58年)、北加賀における古墳出現期の土器編年<sup>(3)</sup>で、月影遺跡土壙出土資料・塚崎Ⅲ式を包摂しつつ、その外延を拡張し月影Ⅱ式を設定するとともに、その前段階として能美郡辰口町高座遺跡東調査区出土資料を標式として月影Ⅰ式を設定し、塚崎Ⅱ式新相をこれに対比させている。その後田嶋明人氏は、1986年(昭和61年)、小松市漆町遺跡出土資料をもとに発表した漆町編年<sup>(8)</sup>で、月影Ⅱ式の後半段階を白江式古相(漆・5群土器)とし、月影式(漆・3・4群土器)から分離している。

以上が月影式に限定した研究史の概要である。現在、月影遺跡土壙出土資料や塚崎Ⅲ式の標式とされた塚崎遺跡第6号堅穴(床面)出土資料が、白江式の評価を別とすれば、月影式新段階を代表するものという点では異論はないであろう。他に同期のものとしては、北加賀地域では石川郡野々市町御経塚ツカダ遺跡住居跡(80-5-81-1-83-1号住居跡を除く)出土資料<sup>(9)</sup>、金沢市下安原海岸遺跡C-7・C-8土器溜り出土資料<sup>(10)</sup>、南加賀地域では小松市第一小学校々地内漆町遺跡方形周溝状遺構出土資料などがあげられ、本遺跡第2次調査20号溝出土土器もほぼ同期の資料として大過ないと考えられる。御経塚ツカダ遺跡出土資料と第一小学校々地内漆町遺跡出土資料については、遺構の切り合い関係等から一定の時期幅をもっている可能性があり、その上限(場合によっては

下限も)が月影式新段階のなかにとどまるものかどうか検討の必要があるが、それはおくとして、月影遺跡土壇出土資料段階は、月影式=塚崎Ⅲ式=月影Ⅱ式(古相)=漆・4群土器という関係において、弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年にあっては数少ない定点のひとつとなっている。

これにたいして、月影式古段階の様相はいまひとつ不明瞭である。谷内尾氏によって月影Ⅱ式に先行するとされた高座遺跡東調査区出土資料は遺構出土資料ではなく、面として検出されたものを中心としたいわば包含層資料である。調査区画からみると、それらは東西最大幅4m、南北最大長56mの比較的広い範囲(C6-12、C7-11・12・15、C8-11・12・14・15)から出土していることになり、同資料の同時性については出土状況をみる限り過大な評価はできない。かりに時期幅が狭いとしても、比較検討が可能な器種・形式が甕・高杯・器台の一部などに限られていることや、主体となる甕に地域差が存在する可能性(谷内尾晋司氏の編年は北加賀地域を対象としたものであるが、同資料のみが南加賀地域のものである)があることなどから、同資料が月影式新段階に確実に先行するものか、かりに古相を呈するとしても同期の幅のなかで捉えられないものかどうかといった疑問が生じる。

月影式古段階の土器組成の検討は、法仏式の細別や下限をめぐる問題と密接不可分の関係にある。法仏式については、かつてその概念、器種・形式組成やその型式変遷について言及したことがあり、概念についてはともかく、略述した器種・形式の変遷についてはその後修正すべき点も少なくないが、何をもちて法仏式とし月影式とするのかといった問題をふくめ、良好な資料の乏しい現状では具体的な検討は今後の課題といわなければならない。現在月影Ⅰ式に比定される良好な資料は法仏Ⅱ式や月影Ⅱ式に比べ依然少ないように見え、今後増加する可能性を留保するとしても、月影式古段階としての高座遺跡東調査区出土資料の型的普遍性については、法仏Ⅰ式(・法仏Ⅱ式)の標式とされた法仏A群土器(・法仏B群土器)<sup>③</sup>同様、あらためて問題となるように思われる。

法仏式～月影式古段階の検討は、現在も塚崎遺跡第7・21号堅穴出土資料<sup>②</sup>を中心とする塚崎Ⅱ式(古相)が資料的に最も充実しており、またその評価が最大の課題のひとつでもあるが、それを考えるとき、近年の加賀地域における弥生時代後期～終末期の土器編年研究が、資料の圧倒的な増加に支えられながらも、逆に詳細で緻密な体系をもつ塚崎編年等研究史を十分に評価しきれないまま推移している感を自戒をこめて強くしている。

このほか、第2次調査20号溝出土土器については、胎土中の砂礫構成についても検討したが、一定の結論を得るにはいたらなかった。砂礫類型には地域差・小地域差・遺跡差(・地点差)などが存在する可能性がある。それらの類型の主たる規定要因は、地質構造や水系等地質学的なものかもしれないが、具体的なあらわれ方には、それらに規定されながらもお人々の主体性が関与しているものと考えられる。ある資料群における類型構成は、遺跡・地区・遺構によって異なる可能性があり、それらはその時期的な変遷をふくめ、当該時期の社会動態に関連するものであろう。他方では器種・形式・細別形式による差異が当然のことながら存在する可能性があり、実際の資料群の類型構成には実に多くの組合せが存在するものと考えられる。今回はただ第2次調

査20号溝出土土器についてのみの観察であったため、想定され得る多様性にたいして一定の方向性を見出すことができなかった。この種の観察は、土器の徹底的な分類と同時性の強い資料群の抽出、いいかえれば土器の細分編年作業と並行しておこなわれる必要を強く感じている。

- (1) 橋本澄夫 「弥生文化の発展と地域性－北陸－」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房 1966 東京。
- (2) 吉岡康暢 「土器編年と遺構の年代」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 塚崎遺跡 石川県教育委員会 1976 金沢。
- (3) 谷内尾晋司 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会会誌』第26号）石川考古学研究会 1983 金沢。
- (4) 濱岡賢太郎・吉岡康暢 「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』32 1962。
- (5) 吉岡康暢 「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』№6 1967。
- (6) 橋本澄夫 「弥生土器－中部・北陸1～4－」『考古学ジャーナル』№106・107・109・111 1975。
- (7) 『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会 1978 金沢。
- (8) 田嶋明人 「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢。
- (9) 『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書』Ⅰ 野々市町教育委員会 1984 石川県野々市町。
- (10) 『下安原海岸遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1988 金沢。
- (11) 『第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書』小松市教育委員会 1987 小松。
- (12) 栃木英道 「考察」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987 金沢。

## 5 観察表

### 凡例

- 番号欄 各挿図中の遺物番号に一致する。
- 出土地点欄 出土グリット、出土遺構、出土位置、出土層位、取り上げ番号等を記した。
- 器種欄 壺、甕、高杯、器台、結合器台（裝飾器台）、鉢、蓋、小型土器（壺形、甕形、鉢形など）、皮袋形土器のほか、（底部）、（脚台）、（脚）の別を記した。
- 分量欄 a 壺、甕、高杯、結合器台、鉢、小型土器、皮袋形土器については口径を記した。  
器台については受部径を記した。  
蓋についてはつまみ部径を記した。  
b 壺、甕、鉢、小型土器、皮袋形土器、（底部）については胴部最大径を記した。  
高杯、器台、結合器台、台付鉢など、（脚台）、（脚）については脚部最小径を記した。  
結合器台については受部径を記した。  
蓋についてはつまみ部下最小径を記した。  
c 壺、甕、鉢、小型土器、（底部）については底径を記した。  
高杯、器台、結合器台、台付鉢など、（脚台）、（脚）については脚端部径を記した。  
蓋については口径を記した。  
d 器高を記した。  
なお、（ ）つきは推定値、－は計測不能を示す。
- 色調欄 外面、内面の順に記した。／のないものは内外面同様、～は部位による相違を示す。
- 煤欄 ○ 煤・炭化物の付着を示す。
- 赤彩欄 △ 赤彩有。
- 黒斑欄 □ 黒斑有、○×○cmは範囲（垂直方向×水平方向）を示す。
- 特記事項欄 擬凹線文の条数、孔・透穴の数・径、施文模様の特徴、その他の欄の補足説明を記した。
- 遺存度欄 図化範囲の水平方向の遺存度を示す。

第2次調査1号建物周溝出土土器（第3-1-5図）

観察表1

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	C-23 3・7号土坑	壺	17.8	—	—	—	暗灰褐色～ 淡黄灰色			3/4以上
2	C-23 3号土坑	甕	15.0	—	—	—	黄橙褐色	○内外面	擬凹線 4	小片
3	C-23 3号地土坑	器台	—	3.7	15.1	—	淡黄褐色		孔4:6～12mm、脚端部2/3	ほぼ完
4	D-23 4土坑No5	甕	16.8	19.0	3.5	22.6	にぶい黄橙	○内外面	口縁部3/4遺存	ほぼ完
5	D-23 4土坑No8	甕	19.1	—	—	—	橙色		擬凹線 6	1/3
6	D-23 4土坑No18	甕	19.4	—	—	—	浅黄橙色		擬凹線 7	
7	D-23 4土坑No10	（底部）	—	—	3.0	—	浅黄褐色	□外面 4×4cm		ほぼ完
8	D-23 4土坑No1	高杯	27.3	—	—	—	にぶい黄橙			1/4
9	D-23 4号土坑No3	器台	—	3.8	14.1	—	浅黄橙色	○外面・内面端部		完
10	D-23 5号土坑	壺	14.0	—	—	—	浅黄褐色			1/4
11	D-23 5号土坑	甕	—	—	—	—	淡褐色	○内外面	擬凹線 6～	小片
12	D-23 5号土坑	甕	—	—	—	—	黄橙色	○外面	擬凹線 7	小片

第1次調査2号溝出土土器（第3-1-8図）

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	G-28	甕	12.7	14.9	9.4	18.4	浅黄褐色		擬凹線 5	ほぼ完
2	G-34黒色土一括	壺	10.4	13.4	9.2	18.6	にぶい黄褐		口縁1/4	ほぼ完
3	G-35高杯	壺	11.5	16.1	9.7	13.4	にぶい黄橙		孔3:5～6mm、口縁3/4遺存	ほぼ完
4	J-34肩部	鉢	10.2	2.3	9.0	6.7	浅黄褐色	△内外（一部不明）	口縁～体部2/3遺存	ほぼ完
5	K-34黒色土	小型土器	10.0	8.4	1.3	7.3	暗褐色		擬凹線 7、甕形	ほぼ完
6	G-36	（脚台）	—	2.8	—	—	にぶい橙色			ほぼ完
7		高杯	—	3.3	—	—	浅黄褐色		孔4:5～7mm	ほぼ完
8		甕	13.8	12.1	2.7	11.2	にぶい黄橙			
9	G-36黒色土	鉢	16.9	—	—	—	にぶい橙色			
10		高杯	—	3.5	13.8	—	浅黄褐色		孔3:9～16mm、脚端1/4	ほぼ完
11	K-34黒色土		—	—	—	—	淡茶褐色		同心円文 2重6.0mm、器種・上下不明	小片
12	H-38	小型土器	—	6.1	4.7	—	明褐色	○外面肩部以下	鉢形	
13	F-38黒色土一括	器台	26.0	3.7	14.8	17.1	灰白色		孔4:6～7mm、受部1/2遺存	ほぼ完
14	H-38	小型土器	7.1	8.0	3.9	6.4	浅黄褐色		鉢形	

## 第1次調査14号溝出土土器(第3-1-9~24区)

## 観察表 2

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	C-35黒色粘質土	壺	12.4	-	-	-	にぶい黄橙			ほぼ完
2	D-35黒色粘質土	壺	11.0	-	-	-	浅黄橙色			1/3
3	F-35黒色土	壺	8.8	-	-	-	にぶい黄橙	○外面		1/4
4	D-35黒色粘質土	壺	11.8	-	-	-	にぶい橙色	○外面		1/2
5	B-33黒色粘質土	壺	9.2	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
6	D-34土器群3	壺	-	11.8	-	-	浅黄橙/褐	△外面	棒状浮文(3本1組) 4	1/2
7	G-38土器群7	壺	7.0	12.1	8.3	18.0	浅黄橙色		把手1	ほぼ完
8	C-33黒色粘質土	壺	-	10.4	-	-	にぶい黄橙	○外面	把手1	1/4
9	C-34黒色粘質土	壺	8.2	9.6	-	-	にぶい黄橙			1/2
10	B-33黒色粘質土	壺	18.4	-	-	-	淡黄褐色	□外面1/4	擬凹線7、孔一对:7mm	ほぼ完
11	C-33黒色粘質土	壺	-	-	12.2	-	にぶい橙色		擬凹線9、	1/4
12	C-33黒色粘質土	壺	18.0	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線7	3/4
13	D-34、D-35	壺	18.0	18.8	-	-	灰褐色	○外面	擬凹線9、胴1/2遺存	ほぼ完
14	D-35黒色粘質土	壺	18.4	15.7	-	-	にぶい橙色		擬凹線9	
15	E-35No.1ホ	壺	22.6	-	-	-	淡黄褐色		擬凹線10	1/2
16	B-33黒色粘質土 C-33No.5へ	壺	-	-	-	-	灰褐色			1/3
17	B・C-33黒色粘質土	壺	14.0	-	-	-	淡茶褐色		擬凹線14	3/4
18	C-33	壺	14.8	29.6	-	-	淡黄褐色		口頸部ほぼ完	1/3
19	D-35黒色粘質土	壺	10.4	15.7	1.6	14.7	黄褐色	□外底~8×10cm		ほぼ完
20	C-33土器群5	壺	-	14.1	-	-	橙/淡橙色	△外面		1/4
21	C-34、35黒色粘質土	壺	14.2	16.1	-	-	にぶい橙色	○外面		3/4
22	黒色粘質土	壺	14.2	-	-	-	明褐灰色			ほぼ完
23	B-33黒色粘質土	壺	15.4	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
24	C-34黒色粘質土	壺	16.2	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
25	C-34土器群4	壺	13.0	-	-	-	にぶい黄橙			1/2弱
26	黒色粘質土	壺	12.6	-	-	-	黄橙褐色			2/3
27	C-33No.5、C-34 D-35黒色粘質土	壺	-	16.1	-	-	淡黄褐色/ 黒灰褐色			2/3
28	D-35黒色粘質土	蓋	-	-	7.6	(2.6)	黒灰色	△外面痕跡	孔1以上:3~4mm	1/4
29	D-34、35黒粘	壺	-	12.2	-	-	黄褐色	△外面		3/4
30		皮袋形 土器	4.7	13.6	-	7.2	浅黄橙褐色		孔一对:6mm	完
31	D-34黒色粘質土	甕	17.8	-	-	-	灰褐色/に ぶい黄橙色	○外面	擬凹線14	1/3
32	C-34黒色粘質土	甕	16.1	-	-	-	浅黄橙色		擬凹線17	ほぼ完
33	C-33黒色粘質土	甕	21.0	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線20	2/3
34	D-34	甕	16.2	-	-	-	明褐灰色	○外面	擬凹線9	1/4
35	F-35黒色土	甕	18.4	-	-	-	黒褐/灰褐	○外面	擬凹線6	1/4
36	C-33黒色粘質土	甕	17.8	19.7	-	-	茶褐色	○外面	擬凹線6	ほぼ完
37	C-33黒色粘質土	甕	15.6	(18.6)	-	-	にぶい橙色		擬凹線3、胴1/4遺存	3/4
38	C-34土器群4	甕	15.8	13.6	-	-	灰褐色		擬凹線4、胴1/8遺存	1/4
39	C-33D-34黒色粘質土	甕	16.0	13.6	-	-	にぶい黄橙		擬凹線8	1/4
40	C-34土器群4口	甕	18.0	-	-	-	灰褐色	○外面	擬凹線8	1/2
41	D-35黒色粘質土	甕	15.8	-	-	-	淡橙褐色		擬凹線4	1/3
42	D-35	甕	16.8	-	-	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線7	小片
43		甕	32.8	-	-	-	にぶい橙色		擬凹線9	
44	C-34黒色粘質土	甕	22.4	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線8	1/4弱
45	E-35	甕	25.8	-	-	-	浅黄橙色	□外口縁4×10cm	擬凹線8	1/2
46	C-34、35 黒色粘質土	甕	21.9	-	2.6	-	明褐灰色		擬凹線9	ほぼ完
47	D-35黒色粘質土	甕	20.4	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線7	1/2
48	D-34黒色粘質土	甕	12.0	13.6	-	-	にぶい橙色	○外面	擬凹線6	ほぼ完
49	C-33黒色粘質土	甕	12.4	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線9	1/4
50	C-34黒色土	甕	14.7	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線6	1/4

観察表 3

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
51	D-35黒色粘質土	甕	16.0	-	-	-	黄褐色/に ぶい黄橙色	○外面	擬凹線 7	1/2
52		甕	15.0	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線 7	小片
53	C-36黒色粘質土	甕	14.2	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線 7	
54	D-35黒色粘質土	甕	15.3	13.9	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線 8	1/4
55	C-34黒色粘質土	甕	14.5	-	-	-	赤橙色/明 褐灰色		擬凹線 7	ほぼ完
56	D-33	甕	17.7	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線 6	
57	D-34黒色粘質土	甕	17.4	-	-	-	浅黄橙色		擬凹線 8	1/4
58		甕	16.8	-	-	-	灰褐色	○外面	擬凹線 9	1/4
59	D-35	甕	19.0	-	-	-	明褐灰色/ にぶい黄橙		擬凹線 7	1/4以下
60	D-35黒色粘質土	甕	17.2	-	-	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線 7	1/4
61	D-35黒色粘質土	甕	14.4	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線 8	1/3
62	D-35黒色粘質土	甕	16.9	-	-	-	淡灰褐色	○外面	擬凹線 7	1/4
63	C-34黒色粘質土	甕	15.2	-	-	-	灰褐色	○外面	擬凹線 5	3/4
64	E-34No2イ	甕	16.6	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線10	ほぼ完
65		甕	16.8	-	-	-	赤褐色		擬凹線 7	ほぼ完
66	D-35黒色粘質土	甕	18.7	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線 9	1/2
67	D-34・35黒色粘質土	甕	18.7	-	-	-	明褐灰色		擬凹線 7	2/3
68	D-34黒色粘質土	甕	18.6	16.8	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線 6	小片
69		甕	17.3	-	-	-	明褐灰色	○外面	擬凹線 7	1/4
70	黒色粘質土	甕	18.7	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線 7	小片
71		甕	16.1	-	-	-	浅黄橙色/ にぶい橙色	○外面	擬凹線 9	1/3
72	D-34黒色粘質土	甕	17.4	-	-	-	浅黄橙色/ にぶい黄橙	○外面	擬凹線 7	小片
73	D-35黒色粘質土	甕	18.6	-	-	-	にぶい黄橙 /浅黄橙色	○外面	擬凹線 9	1/4以下
74	土器群No 2 口	甕	16.8 (17.4)	-	-	-	にぶい橙色	○外面	擬凹線 8	1/2
75	D-34黒色粘質土	甕	18.7	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線 6	小片
76	D-34・35黒色粘質土	甕	18.7 (20.4)	-	-	-	明褐灰色	○外面	擬凹線 7	2/3
77	E-34土器群No2	甕	19.4	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線 8、胴1/3遺存	ほぼ完
78	D-35黒色粘質土	甕	16.4	-	-	-	淡黄褐色		擬凹線10	1/2
79	D-34黒色粘質土	甕	16.6	-	-	-	淡茶褐色/ 淡黄褐色	○外面	擬凹線10	1/2
80	D-35黒色粘質土	甕	17.4	-	-	-	淡黄橙色/ 淡黄色		擬凹線12	
81		甕	16.8	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線 7	1/4
82		甕	19.5	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線 9	2/3
83	D-34黒色粘質土	甕	17.8	20.2	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線10	1/4
84	D-35黒色粘質土	甕	19.9	-	-	-	黄褐色	○外面	擬凹線 4	1/4
85		甕	20.5	-	-	-	にぶい黄橙		擬凹線 5	小片
86	D-34	甕	17.8	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線 6	ほぼ完
87	C-34土器群4口	甕	18.6	-	-	-	明褐灰色	○外面	擬凹線 8	ほぼ完
88	C-34明灰褐色粘質土	甕	18.2	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線 7	2/3
89	C-33黒色粘質土	甕	15.8	14.4	-	-	淡黄色		外面口縁部ナシ	1/3
90	C-34黒色粘質土	甕	23.2	-	-	-	にぶい黄橙			小片
91	D-36黒色土	甕	14.4	14.6	-	-	にぶい黄橙			3/4
92	D-34黒色粘質土	甕	13.3	13.2	-	-	暗灰褐色	○外面		1/4
93	D-35黒色粘質土	甕	15.2	17.6	3.5	21.8	黄橙色	○外面		
94		甕	16.4	-	-	-	にぶい黄橙	○外面		1/2
95	C-34	甕	12.1	-	-	-	黄橙色			ほぼ完
96	C-35	甕	14.2	13.0	-	-	明褐灰色	○外面		1/4
97	C-34黒色粘質土	甕	17.0	-	-	-	にぶい黄橙	○外面		1/4

観察表 4

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
98	C-34	甕	15.4	-	-	-	にぶい黄橙			1/3
99	C-33土器群5	甕	17.6	-	-	-	明褐灰色	○外面		1/2
100	D-35黒色粘質土	甕	15.1	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
101	C-34黒色粘質土	甕	22.0	-	-	-	にぶい黄橙	○外面		1/3
102		甕	15.0	-	-	-	淡黄褐色			1/4
103	D-35黒色粘質土	甕	17.0	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
104	D-35黒色粘質土	甕	15.4	-	-	-	にぶい黄橙 /赤橙色			1/4
105	C-34	甕	15.4	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
106	B-36・37黒色土	甕	12.4	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
107	D-35黒色粘質土	甕	14.8	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	108と同一個体(接合)	1/4
108	D-34黒色粘質土	甕	14.8	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	107と同一個体(接合)	1/4
109	D-35黒色粘質土	甕	16.6	-	-	-	にぶい黄橙			1/4
110		甕	19.0	-	-	-	にぶい黄橙			小片
111		甕	19.5	-	-	-	灰褐色	○外面		小片
112		甕	19.5	-	-	-	明褐灰色	○外面		小片
113	C-33土器群5	甕	15.9	21.4	-	-	灰褐~浅黄橙 /明褐灰色	○外面		1/2
114	D-35黒色粘質土 a, b	小型土器	9.6	-	2.4	-	浅黄橙色		擬凹線 6、甕形	ほぼ完
115	D-34黒色粘質土	小型土器	12.0	9.4	-	-	明褐灰色/ にぶい橙色	○外面	擬凹線 7、甕形	1/4以下
116	D-35	小型土器	11.6	9.8	-	-	明褐灰色/ 浅黄褐色	○外面	擬凹線 7、甕形	1/4以下
117		小型土器	11.1	10.6	-	-	淡黄色		甕形	1/2弱
118	B-36黒色粘質土	小型土器	9.3	9.5	2.3	-	浅黄橙色		甕形	ほぼ完
119		小型土器	10.4	9.3	2.4	8.3	橙色		甕形	1/4
120	D-35黒色粘質土	小型土器	11.6	10.1	2.2	10.5	橙褐色	○外面	甕形、胴1/2遺存	3/4
121	D-34黒色粘質土	小型土器	-	8.7	-	-	褐灰色/黒褐色	□外面口縁3/4、 胴1/2	甕形	1/2
122	C-33黒色粘質土	小型土器	9.4	9.5	-	-	にぶい黄橙 /淡橙褐色		甕形	
123	D-35黒色粘質土	小型土器	11.4	9.9	-	-	明褐灰色	○外面	甕形	1/2弱
124	C-33土器群3	小型土器	10.6	11.2	3.4	10.3	黄褐色	○外面	壺形	1/3
125	D-34土器群4	(底部)	-	-	5.0	-	にぶい黄橙			完
126	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	4.3	-	灰褐/黒灰	○外面		3/4
127	C-33土器群5	(底部)	-	-	7.0	-	浅黄橙色			1/2弱
128		(底部)	-	-	4.2	-	にぶい黄橙 /明褐灰色			1/2弱
129		(底部)	-	-	3.2	-	にぶい黄橙	○外面		1/2
130	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	7.8	-	浅黄橙色			1/4
131	B-36・B-37黒色土	(底部)	-	-	5.8	-	黒灰色/ にぶい黄褐色			1/4
132	C-34黒色粘質土	(底部)	-	-	7.8	-	にぶい橙色			1/4弱
133	F-34黒色土	(底部)	-	-	5.1	-	浅黄橙色			2/3
134	C-34黒色粘質土	(底部)	-	-	2.7	-	にぶい黄褐 /明褐灰色			ほぼ完
135	E-35土器群1-α	(底部)	-	-	2.5	-	暗褐灰色/ 黒褐色	○内外面		1/3
136		(底部)	-	-	3.0	-	暗褐灰色			1/3強
137		(底部)	-	-	2.4	-	黒褐/黄褐	○外面		ほぼ完
138	B-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.8	-	にぶい黄褐			ほぼ完
139	F-35黒色土	(底部)	-	-	3.2	-	黒褐色			ほぼ完
140	D-35黒色粘質土	(底部)	-	-	2.5	-	褐灰色	○外面		ほぼ完

観察表 5

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
141	B-36.37黒色土	(底部)	-	-	2.3	-	浅黄橙色/ 淡褐色			1/3
142		(底部)	-	-	1.8	-	にぶい黄橙			ほぼ完
143	C-35黒色粘質土	(底部)	-	-	2.0	-	にぶい黄橙			ほぼ完
144		(底部)	-	-	2.5	-	にぶい黄橙			ほぼ完
145	B-33黒色粘質土	(底部)	-	-	1.9	-	浅黄橙色			ほぼ完
146	D-34黒色粘質土	(底部)	-	-	2.3	-	黄橙色			ほぼ完
147	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.4	-	浅黄橙色			ほぼ完
148	B-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.3	-	暗褐色	○外面		ほぼ完
149	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.2	-	浅黄橙色			ほぼ完
150	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.3	-	暗黄橙褐色			ほぼ完
151	黒色粘質土	(底部)	-	-	2.0	-	黄橙褐色			ほぼ完
152	D-35黒色粘質土	(底部)	-	-	2.4	-	灰褐色	○外面		ほぼ完
153	C-33土器群5	(底部)	-	-	2.1	-	暗褐色			ほぼ完
154	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.0	-	明褐色			ほぼ完
155	D-34黒色粘質土	(底部)	-	-	2.8	-	暗褐色	○外面		2/3
156	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	1.9	-	灰褐色			ほぼ完
157	C-34黒色粘質土	(底部)	-	-	1.3	-	にぶい黄橙			完
158	D-35黒色粘質土	(底部)	-	-	2.2	-	にぶい黄橙			ほぼ完
159	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	3.4	-	淡褐色			ほぼ完
160	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	3.3	-	黒褐色	○外面		ほぼ完
161	C-34黒色粘質土	(底部)	-	-	3.3	-	褐色	○内外面		2/3
162	B-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.7	-	浅黄橙色			2/3
163	C-33黒色粘質土	(底部)	-	-	2.8	-	暗褐色			3/4
164	D-35黒色粘質土	(底部)	-	-	4.3	-	浅黄橙色			ほぼ完
165	C-34黒色粘質土	(底部)	-	-	-	-	にぶい黄橙	○外面		ほぼ完
166		(底部)	3.9	-	-	4.0	にぶい黄橙			2/3
167	C-36黒色土	(底部)	-	-	5.8	-	暗黄灰褐色			ほぼ完
168	G-36	(底部)	-	-	5.6	-	黒灰褐色			完
169	D-35黒色土	(底部)	-	-	-	-	明褐色	○外面		ほぼ完
170	B-36.37黒色土	(底部)	-	-	-	-	黄褐色			1/2弱
171	C-33	(底部)	-	-	1.8	-	褐灰/黒褐		孔:0.4cm	2/3
172	C-34土器群4	(底部)	-	-	2.9	-	にぶい黄灰	○外面	孔:0.8~1.0cm	ほぼ完
173	G-36黒色土	(脚台)	-	-	6.3	-	にぶい黄橙			完
174	C-34黒色粘質土	(脚台)	-	-	6.6	-	浅黄橙色			完
175		(脚台)	-	-	-	-	浅黄橙色	○外面		ほぼ完
176	C-35黒色粘質土	(脚)	-	-	10.8	-	灰褐色	○外面		ほぼ完
177		(脚)	-	-	11.3	-	浅黄橙色			ほぼ完
178	C-33土器群5	(脚)	-	-	10.5	-	浅黄橙色			2/3
179	C-33土器群5	(脚)	-	-	10.2	-	浅黄橙色			ほぼ完
180	C-35黒色粘質土	鉢	25.0	-	-	-	淡黄褐色	□外面広範囲	同心円文4重7.5mm	1/2
181	D-34№3=	鉢	16.9	-	2.8	8.7	淡茶色	△外面・内面口縁		2/3
182	E-34土器群2イ	鉢	15.6	16.2	-	-	にぶい黄橙			1/4
183	C-35黒色粘質土	鉢	21.9	-	-	-	淡茶褐色	□外面広範囲	同心円文4重7.5mm	1/3
184	土器群№5へ	鉢	6.0	-	-	8.6	黄橙色	△外面		2/3
185	C-34黒色粘質土	鉢	-	-	-	-	淡黄橙色			ほぼ完
186	D-35黒色粘質土	鉢	11.0	-	2.1	6.0	明褐色			1/2
187	土器群4	鉢	7.8	-	-	6.1	にぶい黄橙	○外面上位		1/2
188	D-34№3口	鉢	14.4	-	-	-	淡黄色	□内面5×8cm		1/3
189	D-34黒色粘質土	鉢	-	-	-	-	にぶい黄橙	□外面7×7cm~		1/2
190	D-34黒色粘質土	蓋	3.7	2.8	7.4	3.5	浅黄橙色			完
191	C-34黒色粘質土	蓋	2.6	2.6	8.2	4.0	浅黄橙色			
192	D-33土器群口	蓋	2.7	2.5	9.3	4.4	淡黄色		円心円文3重8mm	ほぼ完
193	D-34黒色粘質土	蓋	3.4	3.0	12.4	5.4	にぶい黄橙		つまみ部完	1/4
194	D-34土器群3	蓋	3.4	3.0	12.3	4.2	灰褐色	○外面・内面一部	つまみ部完	1/3

観察表 6

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
195	D-34黒色粘質土	蓋	3.6	3.1	14.7	7.0	にぶい黄橙	○内面端部	つまみ部完	1/2
196	D-34・E-35	高杯	27.5	3.5	14.8	16.3	淡茶褐色		孔3:4~5mm、両端:3/4	ほぼ完
197	C-33黒色粘質土	(脚)	-	3.4	-	-	浅黄橙色		孔3:8~9mm、	ほぼ完
198	D-37黒色土	高杯	25.6	3.3	-	-	淡黄色		口縁~体部1/4以下遺存	ほぼ完
199	F-35黒色土	(脚)	-	2.3	9.9	-	明褐灰色		脚端部2/3遺存	ほぼ完
200	D-34土器群3	高杯	26.6	3.4	15.9	17.0	淡黄色		孔3:6~7mm、体部1/3	ほぼ完
201	D-34土器群3	(脚)	-	3.2	13.1	-	にぶい黄橙		孔3:7~15mm、脚端部3/4	ほぼ完
202	C-32黒色粘質土 J-33 2号溝黒粘	(脚)	-	-	18.9	-	淡褐色		S字状渦文スタンプ、同心円 文3重6.5mm(2段)	1/8
203	D-35、E-34土器群2 の下	(脚)	-	3.6	14.5	-	にぶい黄橙		孔3:7~10mm、体部1/4、脚端 部3/4遺存	ほぼ完
204	C-33黒色土	器台	-	4.1	14.4	-	にぶい黄橙		孔4:6mm	完
205	C-33土器群5	(脚)	-	4.2	14.4	-	にぶい黄橙		孔4:6mm	完
206	C-33土器群5 C-34黒粘、D-35	高杯	24.9	3.6	13.2	18.5	淡黄橙色		孔4:4~6mm、口縁部1/4体部 2/3、脚端部1/4遺存	ほぼ完
207	黒色土	高杯	25.8	3.7	-	-	にぶい黄橙		口縁1/3、体部3/4遺存	ほぼ完
208	D-34土器群3	高杯	25.4	3.3	12.2	17.9	にぶい褐色		孔4:6mm、口縁3/4遺存	ほぼ完
209	C-33土器群5	(脚)	-	-	14.7	-	淡黄色			ほぼ完
210	D-35	(脚)	-	-	12.5	-	にぶい黄橙		孔1以上	ほぼ完
211	B-33黒色粘質土	器台	-	3.8	-	-	にぶい黄橙		孔3~:6~7mm、脚端1/2	ほぼ完
212	C-34土器群4へ	(脚)	-	3.5	12.4	-	にぶい黄橙		脚端部1/4遺存	ほぼ完
213	D-33	(脚)	-	-	15.2	-	淡黄褐色		孔4:6~9mm	
214	C-33土器群5	(脚)	-	-	16.0	-	にぶい黄橙	□外脚端2×6cm	孔4:4~7mm	ほぼ完
215		器台	17.7	4.7	-	-	橙色	□外脚4×6cm~	孔4:9~12mm	3/4
216	D-34土器3	器台	21.5	3.9	13.3	12.5	にぶい褐色	△外面・内面受部 □外受部6×7cm	孔4:9~10mm、脚1/4遺存	ほぼ完
217	D-34黒色粘質土	器台	-	3.7	14.1	-	明褐灰色		孔3:4~8mm、脚端1/4	ほぼ完
218	黒色粘質土	器台	-	-	-	-	淡茶褐色	□外面広範囲	同心円文4重7.5mm	1/2
219	D-35黒色土	(器台)	-	-	-	-	褐灰色		同心円文3重6.5mm	小片
220	C-34No.4へ	(器台)	24.2	-	-	-	淡茶褐色	□外面3×3cm	同心円文3重6.5mm	1/4弱
221	C-34黒色粘質土	(器台)	-	-	-	-	淡褐色		S字状渦文スタンプ	小片
222	C-33土器群5	器台	27.5	3.7	15.1	17.6	浅黄橙色			
223	D-34土器群3	器台	28.0	3.9	14.7	17.2	にぶい黄橙		孔4:6~7mm、脚端2/3	ほぼ完
224	C-33黒色粘質土	結合器台	-	-	-	-	淡黄褐色		雨滴形透穴7(~8組)	
225	D-34黒色粘質土	結合器台	-	-	-	-	黄褐色		雨滴形透穴10組(または 10個)、受部孔1~:14mm	

第3次調査2号溝出土土器(第3-1-25・26区)

観察表7

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	南部、上層斜部 底部斜面、肩部	壺	-	29.2	7.0	-	淡橙褐色/ 暗灰褐色	□外面胴部下位7 ×13cm	底部穿孔?	1/4以下
2		(底部)	-	-	3.0	-	淡黄褐色		孔1:0.8~1.1cm	ほぼ完
3	肩部	(底部)	-	-	5.6	-	淡黄褐色	○外面	孔1:0.5~1.0cm	ほぼ完
4		壺	11.8	15.0	-	-	黄褐色	△外面・内面口縁		3/4
5	G-39	小型土器	5.8	-	1.9	3.7	淡黄褐色	□外面下位1×cm	鉢形	ほぼ完
6		器台	27.8	4.3	14.0	16.8	黄褐色			ほぼ完
7		器台	23.4	3.9	16.3	20.2	淡黄褐色	△外面・内面受部	孔4:8mm,脚1/2遺存	ほぼ完
8	肩部斜面	(底部)	-	-	3.4	-	淡黄褐色	□外下7×8cm~	孔1:0.7cm	ほぼ完
9	肩部	(脚部)	-	-	12.4	-	茶褐色	○内外面		1/2
10		鉢	10.6	3.0	6.8	8.1	にぶい橙色		体部1/4遺存	ほぼ完
11	肩部	高杯	33.3	3.9	18.5	25.8	浅黄橙色		孔4:7~8mm,脚端部1/2	3/4
12	斜部	高杯	-	3.0	13.2	-	茶褐色		孔4:13mm	3/4
13	肩部斜面、両端斜部	高杯	13.4	3.3	14.7	11.9	黄橙褐色		孔4:15mm	ほぼ完
14	肩部	高杯	-	4.0	20.0	-	淡褐色		孔4:5~9mm	3/4
15		(脚部)	-	-	(17.0)	-	淡茶褐色		S字状渦文スタンプ、同 心円文3重9.5mm,孔1~	1/4
16	最下層、砂層	蓋	4.0	2.9	13.2	4.9	淡茶褐色	○内外面		1/2
17		高杯	30.6	3.9	-	-	淡茶褐色	□内面上位2箇所 1~2×5cm		1/2
18	肩部	(底部)	-	-	4.2	-	暗褐色			ほぼ完

第2次調査20号溝出土土器(第3-1-29~34区)

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	土器溜I	壺	19.0	29.0	4.1	36.7	淡黄灰色	□外面19×19cm	円形浮文+竹管文2個1組4	1/2強
2		壺	(27.1)	-	-	-	にぶい黄橙	○外面		1/4
3	土器溜D	壺	17.7	30.5	6.7	43.2	暗灰~灰褐	□外面頸部~底部	黒斑幅7cm未満、口1/3	1/2強
4	土器溜L-4	壺	23.4	-	-	-	橙色		擬凹線13	3/4強
5		壺	15.0	26.0	-	-	にぶい黄橙	□外頸~23×18~	擬凹線4、口縁部1/4	ほぼ完
6	土器溜II	壺	15.4	24.4	3.4	27.5	淡黄褐色	○外面	擬凹線9、口縁部ほぼ完	2/3
7		壺	13.8	-	-	-	淡黄橙色		擬凹線9	1/4
8	土器溜C-1	壺	5.2	10.5	4.3	7.5	淡褐色	△外面・内面口縁	2孔1対:4mm,上位2/3	完
9		小型土器	12.0	12.0	1.4	13.2	明褐灰色	○外面	甕形、口縁部2/3遺存	ほぼ完
10	土器溜L-1	小型土器	13.6	11.8	1.0	12.6	にぶい黄橙	○内外面	甕形	ほぼ完
11		小型土器	11.5	9.3	1.6	8.5	淡褐色		甕形	ほぼ完
12		甕	18.6	20.4	1.2	24.5	にぶい黄橙	○内外面	擬凹線9	ほぼ完
13		甕	15.9	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線9	1/2
14		甕	19.7	-	-	-	にぶい黄橙	○外面	擬凹線5~	1/4
15		甕	17.2	-	-	-	浅黄橙色		擬凹線8	1/2
16	土器溜L-4	甕	22.1	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線10	1/4
17		甕	17.4	-	-	-	浅黄褐色	○外面	擬凹線13、口縁部ほぼ完	1/4
18	土器溜L-7	甕	13.6	-	-	-	淡赤褐色	○概面	擬凹線4、口縁部小片	1/4
19	土器溜L-5	甕	31.6	-	-	-	浅黄橙色		擬凹線11	1/3
20	土器溜F,DEF下	甕	19.8	25.3	2.5	33.0	にぶい黄橙	○外面	胴部2/3以上遺存	ほぼ完
21		(底部)	-	-	3.1	-	にぶい黄橙	○外面		ほぼ完
22	土器溜A	(底部)	-	-	2.8	-	にぶい黄橙	○内外面		ほぼ完
23	土器溜J	甕	17.8	19.0	-	-	にぶい黄橙	○外面		2/3
24		甕	18.0	19.4	-	-	にぶい橙色	○外面		1/3
25		甕	14.0	16.0	1.2	18.0	浅黄橙色	○外面		ほぼ完
26		甕	16.4	-	-	-	茶褐色	○外面		1/4
27		甕	16.6	-	-	-	浅黄褐色		口縁部小片	1/3
28	土器溜I	甕	17.9	(19.0)	1.5	-	浅黄褐色	○内外面		ほぼ完
29		高杯	27.1	-	-	-	にぶい橙色			1/3

観察表 8

30		器台	27.2	-	-	-	浅黄褐色	△内外面		1/2弱
31	土器溜K	器台	-	3.8	14.5	-	淡灰褐色			ほぼ完
32	土器溜C-2	結合器台	19.5	15.4	14.3	-	浅黄褐色			1/3
33	土器溜L-4	(脚)	-	3.6	10.8	-	暗灰色		脚端部1/4遺存	完
34		(脚)	-	3.2	11.7	-	にぶい黄橙		脚端部1/4遺存	完
35	土器溜C-2	鉢	16.5	3.6	10.5	12.0	暗灰褐色		口縁部3/4遺存	ほぼ完
36	土器溜E	鉢	12.4	-	5.6	7.0	にぶい黄橙	○内面口縁端部		ほぼ完
37	土器溜F	鉢	11.1	-	5.3	7.6	にぶい黄橙		体部1/4遺存	1/2

第3次調査40号溝出土土器(第3-1-25・26図)

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	J-21 E-4	壺	16.6	-	7.2	-	淡黄褐色		底部完	2/3
2	J-21 C-4	壺	9.3	-	4.6	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線 5	ほぼ完
3	K-21 I-5	壺	-	24.4	-	-	淡茶褐色	○外面		1/3
4	J-21 G-4	壺	17.3	-	-	-	灰褐色		擬凹線 4 ~	1/4弱
5	J-21 E-5	壺	14.0	-	-	-	灰褐色	○外面・内面口縁		1/4
6	J-21 A-5下	壺	12.0	-	-	-	淡黄褐色		体部1/3	ほぼ完
7	J-21 H-3	壺	12.2	15.4	1.8	14.7	淡橙褐色	○外面	体部2/3	ほぼ完
8		壺	11.0	-	-	-	淡褐色			1/4
9	I-21 A,A2,A3下	壺	-	28.8	-	-	淡黄褐色	□外面11×10cm	口縁～頸部1/4以下遺存	ほぼ完
10	J-21 H-1	甕	17.8	18.0	2.2	25.2	茶褐色	○外面・内面底部	擬凹線 4 ~、胴部1/2	3/4
11	E-21 D-4	甕	15.6	-	-	-	茶褐色	○外面	擬凹線 5 ~	完
12	J-21 F-5	甕	17.6	-	-	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線 8	1/3
13	J-21 G-2	(脚台)	-	-	6.6	-	黄褐/灰褐			1/2弱
14	L-22 L-2	(脚台)	-	-	6.2	-	淡褐色			完
15	J-21 F-2	甕	20.4	24.6	-	-	茶褐～灰褐	○外面	擬凹線10	ほぼ完
16	I-21 A-1	甕	19.8	-	-	-	淡茶褐色	○外面	擬凹線 5 ~	1/4
17	K-22 K-11	甕	17.0	20.2	-	-	暗褐/茶褐	○外面	擬凹線 4 ~、体部1/3	ほぼ完
18	L-22 L-6	甕	19.0	-	-	-	淡褐色	○内外面	擬凹線 5 ~	1/4
19	J-21 C-1	甕	16.2	17.8	-	-	茶褐色	○外面・内面底部	擬凹線 2 ~	1/4
20	K-21 K-5	甕	14.8	15.8	-	-	淡褐色	○外面	擬凹線 5 ~	1/4
21	L-22 L-3	甕	17.6	-	-	-	淡褐/灰褐	○内外面	擬凹線 8	1/4
22		甕	17.9	-	-	-	明褐～灰褐		擬凹線 7	1/3
23	K-22 K-13	甕	17.6 (18.3)	-	-	-	黄褐色		擬凹線 7	1/3
24	I-21 B-3	甕	17.9	15.8	-	-	橙褐～明褐		擬凹線 6	1/4
25	I-21 C-1	甕	18.0	19.3	-	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線 8	3/4
26	K-22 K-13	甕	24.3	29.4	2.5	-	淡茶褐色	○外面・内面底部	擬凹線 5	1/2
27	J-21 E-8	甕	18.2	18.9	-	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線 8	ほぼ完
28	J-21 F-1	甕	18.0	-	-	-	暗茶褐色	○外面	擬凹線 5 ~	1/3
29	L-22 L-3	甕	15.4	-	-	-	淡茶褐色	○外面	擬凹線 4	1/3
30		壺	12.3	-	-	-	淡黄褐色	△外面・内面口縁	擬凹線 3	1/4
31	J-21 D-1	甕	12.3	-	-	-	淡褐色	○外面		1/4
32	K-21 J-3	甕	16.4	16.0	-	-	淡褐色	○外面		1/4
33		甕	17.3	-	-	-	橙褐色			1/4
34	K-21 I-1	(底部)	-	-	1.8	-	暗茶褐色	○内外面	底部完	1/2
35	L-22 L-5	小型土器	12.4	12.2	2.0	10.7	淡褐色	○外面	甕形、擬凹線 2 ~、口縁完	1/4
36	I-21 B-6	小型土器	9.9	11.0	1.9	9.0	淡黄褐色	○外面	甕形	完
37	K-22 K-2	小型土器	9.8	9.3	1.8	9.2	淡黄褐色	□外面 3 × 3 cm	甕形、	ほぼ完
38	J-21 C-3下	小型土器	12.2	12.2	1.7	12.5	茶褐色	○外面	甕形、孔1:5mm、上1/4	ほぼ完
39	I-21 B-5	(底部)	-	-	-	-	淡褐/黒灰		孔1:0.6~1.1cm	ほぼ完
40		(底部)	-	-	2.2	-	淡黄褐色		孔1:0.9cm	ほぼ完
41	K-21 J-5	器台	26.0	3.2	-	-	黄褐色	△外面脚部痕跡		1/4
42	J-21 E-7	鉢	10.6	4.5	-	-	淡黄褐色			ほぼ完
43	J-21 E-3	蓋	2.1	2.2	9.0	3.3	淡黄褐色	△外、内面は痕跡	□外面 5 × 7 cm	完
44	J-21 F-5	鉢	16.5	13.1	2.9	8.6	茶褐色	○外面		ほぼ完
45	L-22 L-1	鉢	17.0	13.2	-	-	淡茶褐色			3/4
46	K-21 J-2	鉢	17.7	3.1	9.7	12.0	淡茶褐色			ほぼ完
47	I-21 B-4	鉢	17.2	17.8	-	-	明褐色			1/4

第2次調査14~16号溝出土土器(第3-1-42~44図)

観察表9

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	G-13 14号溝底砂層	壺	10.8	21.4	5.2	(24.5)	浅黄橙色	○外面	口縁部ほぼ完	1/4
2	14号溝覆土上面	壺	15.2	-	-	-	浅黄橙色			1/4
3	14号溝	壺	10.4	-	-	-	明褐色			1/4弱
4	14号溝覆土床面	壺	13.4	-	9.0	-	淡赤橙色	○外面口縁	口縁部1/4弱遺存	脚部完
5	14号溝砂層上面	甃	-	-	-	-	明褐色	○外面	擬凹線 8	小片
6	14号溝	甃	-	-	-	-	明褐色			小片
7	14号溝底部砂層	甃	16.0	-	-	-	明褐色	○外面	擬凹線 8	1/4弱
8	14号溝砂層上面	甃	18.4	(21.0)	2.2	(25.0)	明褐色	○内外面底部	擬凹線 9、孔1:0.6~1.0cm	1/4
9	14号溝底部砂層	甃	17.2	-	-	-	明褐色	○外面		1/4
10	14号溝灰褐色砂上面	甃	19.0	-	-	-	明褐色	○外面		小片
11	G-12-13 14号溝	(底部)	-	-	2.2	-	浅黄橙色	○内外面		ほぼ完
12	E-11 14号溝砂層	高杯	20.8	-	-	-	浅黄橙色	○外面		3/4
13	G-13 14号溝底部砂層一括	小型土器	-	-	1.8	-	明褐色	○外面、□外面底部 7×6cm	甃形	1/2
14	G-9 14号溝淡青色砂層	(鉢)	9.8	-	-	-	にぶい橙色 / 浅黄色	○外面		
15	E-11 14号溝砂層	壺	11.6	-	-	-	明褐色			2/3
16	F-13 15号溝底部									
16	E-11 14号溝	甃	19.6	-	-	-	明褐色			3/4
16	F-12 16号溝									
17	G-13 Na19	壺	13.8	29.8	-	-	明褐色	□外面 6×10cm	竹管文 2個 1組 (~) 把手(1)	2/3
18	F-13 16号溝Na17	壺	10.2	13.2	-	-	浅黄橙色			
19	F-13 16号溝Na18	甃	19.1	-	-	-	橙色			
20	F-12 16号溝	甃	12.8	-	-	-	浅黄橙色			1/4
21	16号溝	甃	-	-	-	-	橙色	○外面		
22	F-13 16号溝	壺	17.0	29.4	5.8	36.2	淡灰褐色			ほぼ完

第3次調査41~43号溝出土土器(第3-1-45図)

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	41号溝	甃	19.8	-	-	-	暗褐色	○外面	擬凹線 6	1/2
2	41号溝	甃	16.0	-	-	-	淡茶褐色	○外面		1/4
3	41号溝	甃	19.0	-	-	-	淡褐色			1/4
4	J-15 42号溝	甃	17.2	-	-	-	淡茶褐色		擬凹線11	3/4
5	J-15 42号溝	甃	11.8	-	-	-	淡黄褐色			1/2強
6	J-15 42号溝肩部	鉢	-	7.0	3.0	-	淡茶褐色			3/4
7	J-15 42号溝	甃	-	-	-	-	明茶褐色		擬凹線 9	小片
8	I-14 43溝最下層	壺	9.2	13.7	-	10.2	褐灰色	△外面・内面口縁		完
9	43号溝	甃	21.1	-	-	-	淡茶褐色	○外面	擬凹線 8	1/8
10	43号溝	甃	19.7	-	-	-	暗褐色	○内外面	擬凹線 8	1/2弱
11	43号溝	甃	18.3	-	-	-	明赤橙色		擬凹線 9	1/2
12	43号溝	甃	14.0	-	-	-	淡赤褐色	○外面	擬凹線 6	1/4
13	43号溝	(底部)	-	-	1.6	-	明茶褐色			ほぼ完
14	43号溝	甃	18.2	-	-	-	黄褐色		擬凹線 8	小片
15	43号溝	甃	15.8	-	-	-	淡茶褐色	○外面		1/4
16	43号溝	甃	16.3	18.4	-	-	淡褐/暗褐	○外面		1/2
17	43号溝	(脚台)	-	4.0	8.6	-	明褐色			ほぼ完
18	43号溝	(脚台)	-	2.8	10.6	-	灰褐色	○外面		ほぼ完

第2次調査8・12号土坑、第3次調査20・25・29号土坑他出土土器(第3-1-47図)

番号	出土地点	器種	a	b	c	d	色調外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	遺存度
1	F-G-25 12号土坑	甃	24.3	27.4	-	-	にぶい黄橙	○内外面	暗茶褐色土層出土	1/8
2	F-24 8号土坑	甃	-	-	-	-	淡橙色		擬凹線 2~	小片
3	F-24 8号土坑	(甃)	-	-	-	-	にぶい黄橙		S字状渦文スタンプ	小片
4	第3次20号土坑	(甃)	(20.7)	-	-	-	淡黄褐色		擬凹線10	小片
5	第3次25号土坑	甃	21.7	-	-	-	淡黄褐色	○外面	擬凹線 9	1/4弱
6	第3次25号土坑	(底部)	-	-	2.1	-	褐色	○外面		ほぼ完
7	第3次29号土坑	甃	-	-	-	-	淡褐色		擬凹線 4	小片
8	第3次1号溝上面						淡黄橙色	△外面	同心円文 5重8.5mm	小片

## 第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物群

高堂遺跡では第Ⅲ次調査において、いわゆる布掘りの柱穴をもつ5棟の掘立柱建物群が発掘された。本節ではこれらをまとめて扱うこととした。さきに刊行された調査概要報告書<sup>(1)</sup>において調査担当である戸澗幹夫が古墳時代前期の掘立柱建物として報告した建物群がこれである。建物の時期については戸澗が古墳時代前期でも初頭に属するとして報告したが、ここでは時期に幅をもたせ、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構としてみておく。布掘りの掘立柱建物は、南建物群で4棟と調査区の南東部で1棟が調査されている。

南建物群は弥生時代後期から古墳時代前期に機能していた蛇行する大溝（Ⅰ次調査区では2号溝とし、Ⅲ次調査区では14号溝としたもの）で南を画し、弥生時代後期に並走して機能していた4・11・15・16号溝（Ⅱ次調査区では43・42・41号溝としたもの）で北側を画した南北約100mの区域に分布する。遺跡の東西への広がり幅は幅約50mのバイパスの用地外であるため不明であるが、遺跡は、当然路線外に広がって存在しているものと推定される。この区域には第3章第1節-1で報告のある第Ⅱ次調査1号建物や住居跡の周溝の可能性のある溝2カ所等が発掘されている。1号建物は平地式住居として扱われる形態をとる。これと布掘りをもつ掘立柱建物群との併存関係は、個別掘立柱建物からの出土土器が少ないため、細かい点で不明といわざるを得ないが、1号建物が弥生時代終末期（月影式期）に属することから、竪穴住居や平地式住居と掘立柱建物のどれかが共存していた可能性は高いものと思われる。

南掘立柱建物群での建物の在り方をみると、北西-南東方向に主軸をとる1・4号掘立柱建物とはほぼ東西に主軸を置く2・3号掘立柱建物に分けられ、また位置的に近接する2・3号建物が同時併存しないとすれば、少なくとも三期。4棟の掘立柱建物が個別に時期を違えて存在したとすれば最大で四期の掘立柱建物が存在することになる。1号建物を中心にみた場合、1号掘立柱建物は南へ約32m、2・3号掘立柱建物は南西へ約40m、4号掘立柱建物は北西へ32mの位置にある。南西部の第5号掘立柱建物は主軸をやや北に振った北西-南東にとって1・4号掘立柱建物と似た方位をとる。

### 1号掘立柱建物

南掘立柱建物群の東に位置し、主軸をN-25°-Wに置く建物である。幅50cm、長さ4.5mの溝を3.2mの間を置いて二本平行させ、溝内に4個ずつの柱穴を穿ったもので、溝に挟まれた空間は約14.5㎡となる。一間×三間の柱間をもち、南西側柱列は西から100cm、140cm、150cm、北東側柱列は西から140cm、120cm、140cmを測る。溝の深さは15～30cmと一定しないが柱間の底は比較的平らである。柱穴は径が45cm前後の円形をなし、深さも検出面から約1mを測るが、穴によっては主軸方向にやや長くなったり、径の小さい穴もある。溝には黒色砂質粘土が充満しており、検出時点では柱穴の存在を確認出来なかった。覆土中からは土器の小片が出土したが時期を特定できる資料ではない。

## 2号掘立柱建物

1号掘立柱建物の西、約4.5mに位置する。本建物の西にある3号掘立柱建物とはわずか1.2mしか離れていない。2号掘立柱建物は主軸を東西方向のN-95°-Wに置き、建物方位では3号掘立柱建物と似た主軸をとる。幅45～60cm、長さ5.9mの溝を2.5mの間を置いて二本平行し、溝に挟まれた空間は約14.8㎡となる。溝内には溝底から10～20cmの浅い柱穴が三個ずつ検出されたが、いずれの柱列も柱穴が浅いため一個ずつを確認できなかったものと思われる。したがって、本来は1号掘立柱建物と同様一間×三間の柱間を持ったものとみられる。南側柱列は西から3.6m、1.3m、北側柱列は1.9m、3.3mを測る。溝の深さは30～40cmと浅く、柱穴も小さくて直径は30cm前後を測る。覆土中からは土器の小片が出土したが時期を特定できる資料はない。

## 3号掘立柱建物

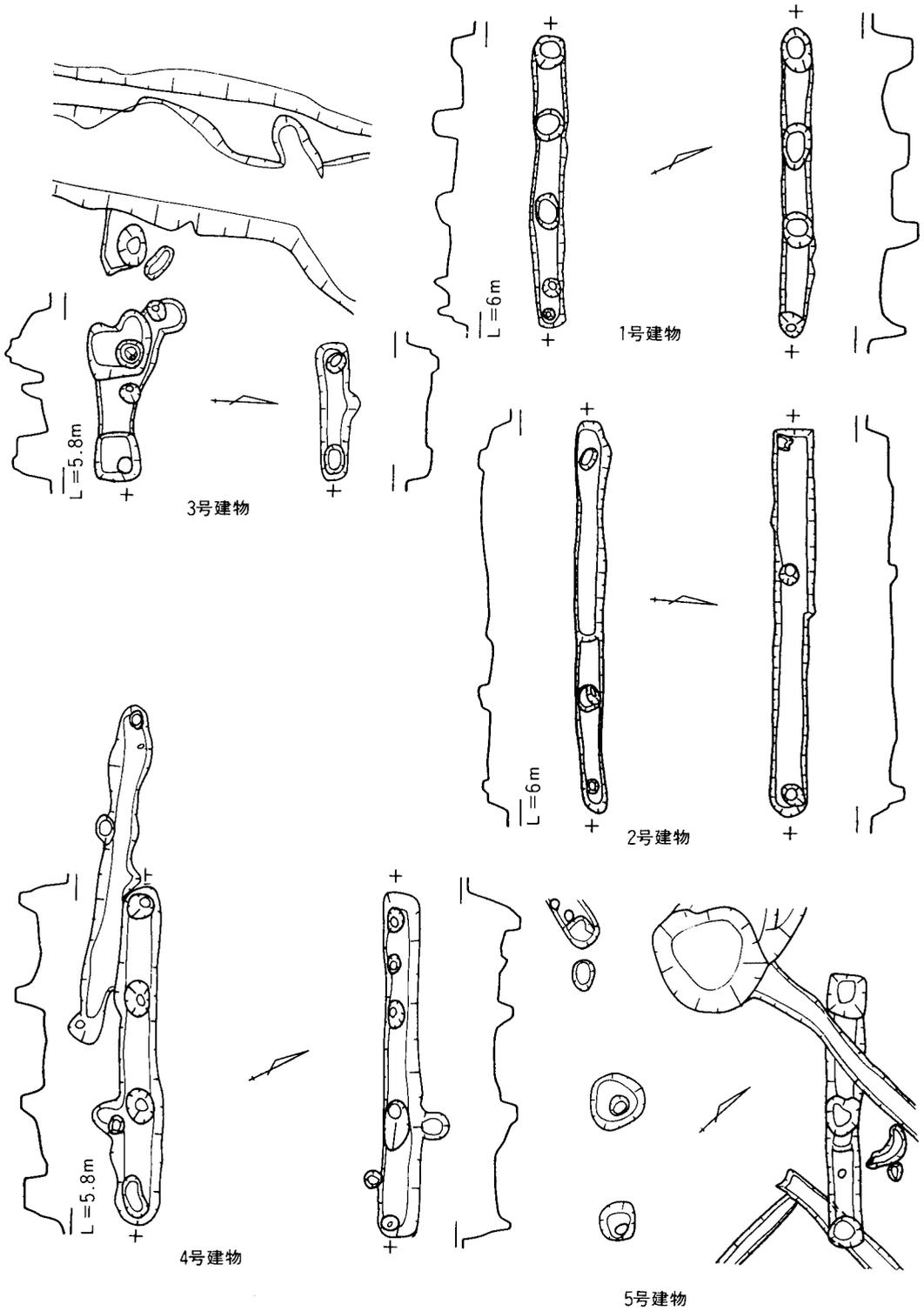
2号掘立柱建物に近接して位置する。2号掘立柱建物とは1.2mしか離れていない。主軸をN-92°-Wに置く。建物の西側は平安時代の1号溝によって切られており、もとの構造を知ることができない。戸潤は概要報告書においてこの掘立柱建物を一間×一間の構造とみて類型を設定しているが、湯尻は南側の柱列をもう一間は西に伸ばして少なくとも二間×一間の掘立柱建物であったとみておきたい。南側柱列の溝の掘り方が極めて浅いことを考慮すると西に伸ばした柱間の溝が確認出来なかったことも理解されるのである。以上の理由からここでは3号掘立柱建物を二間（他の例と比較して三間となる可能性が高い）×一間の建物であるとして扱いたい。幅約45cmの溝を2.7mの間を置いて平行させ、溝内に柱穴を穿ったものである。南側柱列は長さ約4mを測り、3本の柱間は1.7m等間となる。柱穴の掘り方は大きく南側では径60cmを測る。北側柱列は1.5mの柱間を測る。北側は溝は南側より深く、検出面から30cmを測って柱穴の直径は約30cmとなっている。

## 4号掘立柱建物

南掘立柱建物群の西側に位置し、主軸をN-27°-Wに置く。幅40～60cm、長さ5.1mの溝を3.4mの間を置いて二本平行させ、溝内に4個ずつの柱穴を穿ったもので、溝に挟まれた空間は約17.5㎡となる。一間×三間の構造は1号掘立柱建物に最も類似する。南西側柱列は西から150cm等間、北東側柱列140cm、150cm、170cmを測る。溝の深さは南西側が平均30cm、北東側で平均40cmを測り、柱穴の深さはいずれも70～80cmとなっている。柱穴の直径は30～60cmとやや不揃いである。1号掘立柱建物と同じように検出面での観察では柱穴の存在を確認できず、覆土中からは土器の小片が出土している。南西側柱列に近接して長さ約5m、幅50cm浅い溝があるが、並列する溝が確認されないことと、柱穴が存在しないことから同じ掘立柱建物に関係した遺構として扱うことはできない。

## 5号掘立柱建物

第Ⅲ次調査区の南西部で1棟単独で発掘された掘立柱建物である。蛇行した大溝（2・14号溝）の湾曲部から約8m離れている。南西側で柱穴1カ所が確認できなかったが、主軸方位をN-35°-Eに置いた、一間×二間の掘立柱建物であると判断した。北東側柱列は幅50cm、長さ4.1mの溝の西から180cm等間の柱穴を穿っている。約2.7m離れて検出された2個の柱穴では、溝が確



第3-2-1図 高堂遺跡の布掘り掘立柱建物 (S = 1/100)

認められず削平等によって失われたものと思われる。溝と柱穴に挟まれた空間は約11㎡と小さい。この掘立柱建物が他の建物のように弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物であるとしたのは、柱列の一方が布掘りであったことによるが、時期的には他の掘立柱建物と同時期に扱えるかは——古墳時代前期でも新しい段階のものではないか——類例の増加を待って検討する必要があるろう。

## 小 結

高堂遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期に所属する布掘りをもつ掘立柱建物は建物について記述したが、県内の調査例と比較してまとめておきたい。県内で最初にこのような掘立柱建物が発見されたのは、金沢市塚崎遺跡においてである<sup>(2)</sup>。報告者の小嶋芳孝は26棟の堅穴住居跡を4つの小期に分け、集落の時期的な変遷を探る中で3棟の掘立柱建物がそれぞれの段階に1棟ずつ存在したことを明らかにした。堅穴住居跡が塚崎台地の端に展開するのに対し、布掘りをもつ掘立柱建物は台地の中央に近くいずれの時期も大きく場所を変えていない。小嶋はこの掘立柱建物を集落の共有する高床倉庫と位置づけ塚崎遺跡の「各時期では数軒の堅穴と一棟の高床倉庫が集落を構成し、これらが単一の生産単位＝世帯共同体であったと考えられる。」と結論付けている。また、掘立柱建物の構造については、他県の例を援用しながら「これらの掘立柱建物を、他の掘立柱建物と異ならせているのは、前述のように二本の溝を平行に掘って、その中に柱穴を掘っている点である。他には余り例を見ない溝状遺構の機能については、高床倉庫の床下も共同体所有の道具や物品の保管に用いられたと仮定すれば、冬期の降雪を考慮して溝上に板を立てて板壁とした可能性も考えられる。この種の溝状遺構が、日本海沿岸にのみ管見に入ったのも、その傍証となると思われる」と記している。

塚崎遺跡の調査から以降、県内での発掘調査例が増えてきているが、塚崎遺跡のような台地上に立地する集落遺跡ばかりでなく、最近では金沢市下安原遺跡<sup>(3)</sup>、金沢市上荒屋遺跡<sup>(4)</sup>、野々市御経塚シンデン遺跡<sup>(5)</sup>など金沢市近郊の平地に立地する遺跡での調査例が増えてきている。高堂遺跡例も遺跡の立地からいえば平地に所在する遺跡例である。最近、金沢市下安原遺跡の調査報告書<sup>(3)</sup>が刊行されたが、報告者の増山 仁は報告書の中で、下安原遺跡の古墳時代前期の建物が、掘立柱建物、布掘りの掘立柱建物、周溝をもつ平地式建物、堅穴住居跡の4種類の建物で構成されると言い、上荒屋遺跡調査例と比較しながら、「布掘りの掘立柱建物は上荒屋遺跡で12棟、下安原遺跡で3棟確認されている。上荒屋遺跡で2間×1間・4間×1間が各1棟ずつ確認された以外は3間×1間である。溝は柱穴の深さが判らないくらいに深いものから非常に小さいのもまであり、平面形態では、溝の両側に柱穴がはみ出すもの、溝の内側に柱穴がはみ出すもの、柱穴が溝の中に収まるものの3種がある。規模にも大小がみられる。これらの諸要素は布掘りの掘立柱建物の時期と関係が深いと考えられる。全体の傾向としては、溝は深いものから浅いものへ、形態は柱穴が溝に収まるものからはみ出すものへ、規模は小さなものから大きなものへと変遷しているようである。建物の主軸方向はほぼ90°振れた2方向があり、大きな目でみれば掘立柱建物の方向と一致している。」とまとめられている。

やや長い文献をほぼ全面的に引用したのは、小嶋、増山両氏の報告の中に布掘りをもつ掘立柱建物の性格や構造がどのようにとらえているか、が良くまとめられているからである。石川県内の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡の発掘調査例が、増えるにしたがって日々新しい知見が累積されている。しかし、小嶋氏の指摘した布掘り掘立柱建物が倉庫としての機能を持ったとする見方を超える見解は未だ知らない。また、増山氏の指摘する掘立柱建物の存在はすでに漆町遺跡群の調査で指摘されていたことであるし、下安原遺跡の報告でますますそれが確実になってきたと言える。増山氏も報告されているように、掘立柱建物、布掘りの掘立柱建物、堅穴住居跡、周溝を平地式の住居跡といったように建物構造の異なる建物が、特に古墳時代前期において展開していたことになれば、構造の違いからくる機能や目的の違いについても今後、検討していく必要がある。

高堂遺跡の調査例を見た場合、1～4号の布掘りを持った掘立柱建物は、第3章第1節-1で栃木英道が報告する平地式住居である1号建物との関係を重視せざるを得ない。さらに増山氏の報告から高堂遺跡の例は古墳時代でも古い段階の構造を示しており、栃木氏の報告では1号建物が弥生時代終末期（月影式期）とのことであるから、布掘り掘立柱建物のいくつかの存在を古くみて、1号建物と共存していたとする可能性は充分にあるといえる。その場合、掘立柱建物は1号建物とあるいは調査区域外にあり得る住居跡を含めて考慮して、これらに付属した倉庫であると扱うことができる。布掘りの掘立柱建物の構造については、増山氏の報告にある「全体の傾向としては、溝は深いものから浅いものへ、形態は柱穴が溝に収まるものからはみ出すものへ、規模は小さなものから大きなものへと変遷しているようである。」とする指摘が重要である。特に溝が浅くなって、溝から柱穴がはみ出すように変遷するということは、小嶋氏の言うような高床の下に板塀を置くとする見方とは別な、おそらく建物構造そのものにかかわるような目的で布掘りが掘られたと考えられる。たとえば、建物の建築にあたって柱の根固めの目的で柱間を通す貫のようなものを通したり、個々の柱を繋いで固定する板材を入れるための溝ではなかったかと推定したい。下安原遺跡例では柱穴に礎板が残存しており、高堂遺跡例では柱穴に遺存する柱根が直径で30cmにも達する太い材であったから、小嶋氏の言うように高床倉庫であった可能性は高いといえる。倉庫という重量のかかる建物であれば、当然その基礎はしっかりしたものとなるであろう。溝や柱穴が浅くなる傾向があるということは、次第に布掘りの目的が失われて行ったことを示している。これは建築・土木技術の革新がはかられて、倉庫の布掘りを持たない掘立柱建物へと移行していく過程を窺わせているとみておきたい。

#### 註

- (1) 戸淵幹夫『高堂遺跡第Ⅲ次発掘調査概報』1982 石川県立埋蔵文化財センター
- (2) 小嶋芳孝ほか「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』1976石川県教育委員会・北陸自動車道関係埋蔵文化財調査団
- (3) 増山 仁『金沢市下安原遺跡』1990 金沢市・金沢市教育委員会
- (4) 調査担当者である出越茂和氏(金沢市教育委員会)の教示による。
- (5) 調査担当者である吉田 淳・横山貴広(野々市町教育委員会)の教示による。
- (6) 田嶋明人ほか『漆町遺跡』1979 石川県埋蔵文化財センター

### 第3節 古墳時代後期の土壇

3号土壇（第3-3-1～3-3-4 図 図版15～17）

遺 構 径約3.4m、深さ1.1mを測る円形の大型土壇。時期は6世紀前半～中頃。土壇底は青灰色砂層を60cm余りも切って掘りこまれ、湧水が激しい。土壇内の堆積土は5層に分けられ、検出面より約50cm下の灰褐色粘質土層より多くの遺物が出土した。遺物には多量の土師器、須恵器のほか、鋤、鉢形木器の未製品、杓子、用途不明の木器、植物遺体がある。土壇の性格については、保水性をもった木製品の貯蔵施設との理解（戸淵 1981）がある。

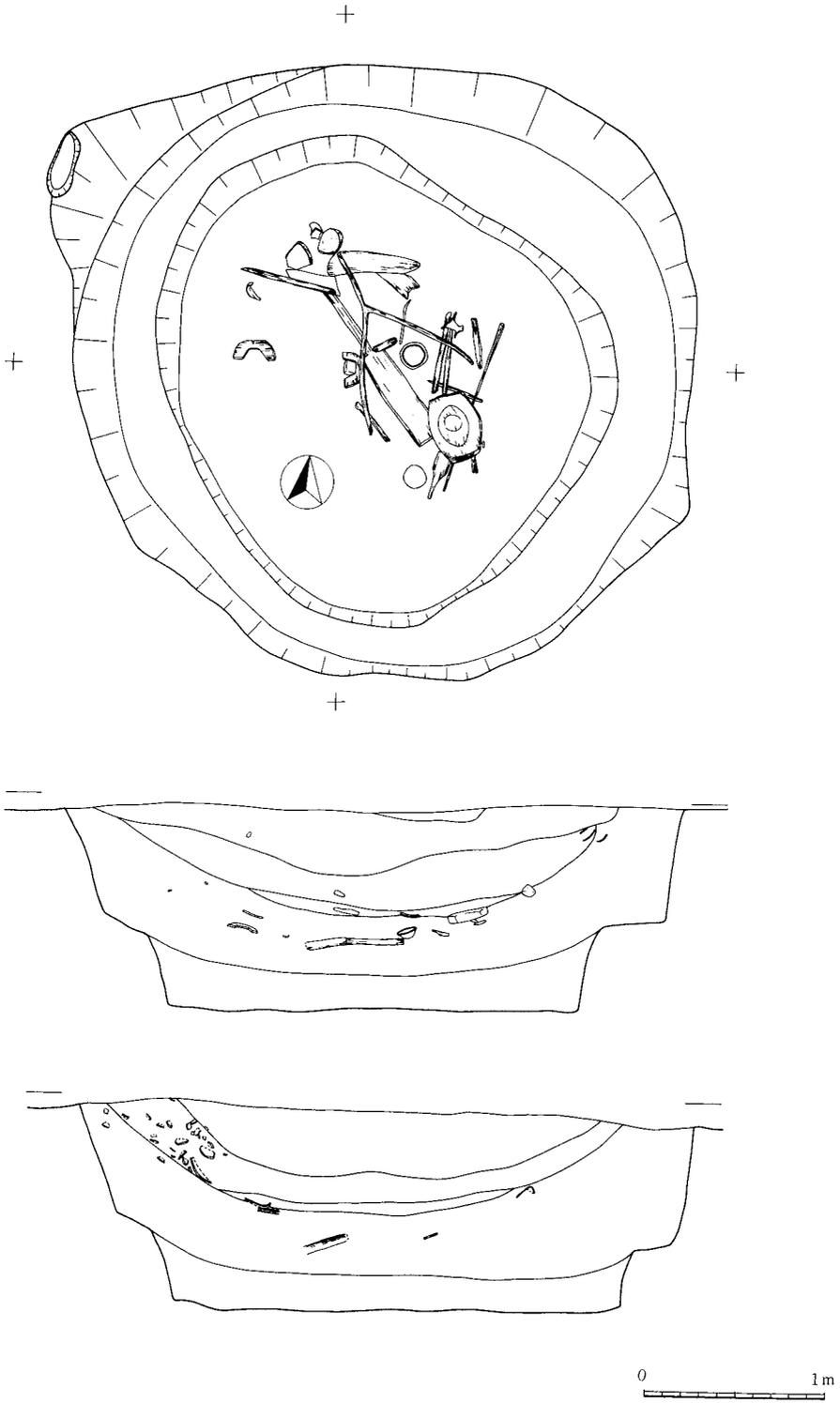
遺 物 木製品については別項で触れるので、ここでは土師器、須恵器について報告する。なお、当該土壇は、掘り直しの可能性をもつとされているが（戸淵 1981）、遺物を層序と対応させ整理できないので、ここでは一括して扱う。

出土土器には月影期、土師器3様式頃のを定量含んでいるが、主体はTK10型式併行期のもので、前二者との区別は比較的容易である。第3-3-1表は、前二者を除いて、個体識別により計量したものである。

煮炊具は、甕、甌がみられ、合計33個体、出土土器総量に占める煮炊具の割合は、36.3%である。すべての土師器よりなる。甕は27個体分以上ある。この推定量は、大きく変わることはない想定しているが、個体識別の難しい小片が少なくなかったことと、古段階の「く」の字口縁甕を計量に含めている可能性をのこす。甕には「く」の字口縁部をもつもののほか、「布留」型の甕も出土しているが、後者は混入品である。「く」の字口縁甕は、口縁部をヨコナデにより引き延ばしたタイプのもので、法量では大別2つに分かれる。甌は6個体分を確認した。数量は把手を個体識別して求めた。その点で、当該期には出現していると推定される鍋（把手付甕）が含まれている可能性もある。体部の形態を明らかにできる資料はないが、底に1孔の蒸気孔もつもの2個体分を確認している。

第3-3-1表 3号土壇出土土器一覧

器 種	細 別	数 量	数 量	須恵器比	器種比率	機能比率	備 考
甕	土師器	27	33	0.000	0.297	0.363	27点以上？
甌	土師器	6			0.066		把手で算出
壺(貯蔵)	須恵器	9	9	1.000	0.099	0.099	
	土師器	0					
小型壺	須恵器	1	5	0.250	0.055	0.055	
	土師器	3					
	土師器	1					短頸壺の蓋
杯・碗	須恵器	26	31	0.839	0.341	0.484	杯蓋19、杯身26、3点程度増？
	土師器	5					内黒1、
高 杯	土師器	10	13	0.231	0.143	0.484	内黒1、±2点程度？
	須恵器	3					
合 計	——	91	91	——	1.000	1.000	



第3-3-1图 第3号土坛实测图

中・大型壺(甕)は9個体、出土土器総量に占める割合は、9.9%である。すべて須恵器で、土師器は確認できていない。時期は幅をもち、図示していないがTK208型式併行期頃と推定される個体3点と、MT15型式～TK10型式頃と推定される個体6点とがある。前者については、混入品としてではなく、後者とともに廃棄されたものと推定したい。胎土は、古相の3点が5類、35.36.37と図示しなかった1点、計4点が2類。他に、瓦質焼成で胎土を比較できなかったもの2点(34と、同じく図示しなかった1点)がある。

小型壺には直口壺3、短頸壺1、短頸壺蓋1を包括し、先の中・大型壺と区別した。5個体あり、総量の5.5%。土師器4、須恵器1からなり、土師器は須恵器の型式を模倣したものである。土師器からなるものは、胎土は精良で、ヘラミガキ調整を多用した精製品である。化粧土により黄燈色の発色をもつ。須恵器直口壺31は、短頸壺となる可能性をのこす。胎土は2類。

供膳器には碗(5個体)、杯(杯身で26個体)、高杯(13個体)、総計44個体がある。総数に占める供膳器の割合は48.4%。碗・杯と高杯の割合は、碗・杯が高杯の約3倍となっている。碗・杯では、碗が土師器、杯が須恵器よりなり、須恵器がその83.9%を占める。碗は、黄燈色の発色をもち、丁寧にヘラミガキ調整を施した精製品(20.21)と、同じく黄燈色の発色をもつが、調整がやや粗く、ヘラミガキ調整を施すことなく、ヨコナデ調整で仕上げたもの(19)、内面黒色処理を施したもの(18)がある。なお、18は高杯の杯部の可能性が高い。須恵器杯には、杯身26個体と杯蓋19個体がある。計量には、量の多い杯身の数量を用いたが、杯蓋が、杯身とセットとしてではなく、便宜的ではあれ、個別の器種としての用途を持っていたとするならば、供膳器の頻度はさらに大きくなるといえる。時期はTK10型式併行期のものが主体を占めるが、TK47併行期まで遡上する可能性をもつもの7点(8.9.10他)がある。胎土は、判断の難しいものを含むが、TK47型式併行期と推定した8と他1点の2点が4類、同じくTK47型式併行期のものに5類が2点あるほかは、すべて1・2類よりなる。2類としたものには10.12.13.14.15が該当する。

第3-3-2表 3号土坑出土須恵器の胎土分類

	TK47型式併行期		MT15～TK10型式併行期	
	数	割合	数	割合
1 類	1	14.2	5	13.1
2 類	2	28.5	32	84.2
3 類	0	0	1	2.6
4 類	2	28.5	0	0
5 類	2	28.5	0	0
合計	7	-	38	-

1・2類 加南窯産  
 3類 加南窯産の可能性  
 の高いもの  
 4類 産地不詳  
 5類 陶邑産 ?

なお、筆者は先に、11.13等の口径の小さい一群を、TK47併行期まで遡る可能性をもつものに含め報告したことがある(田嶋 1987)。その後、加南窯 ニツ梨東山4号窯出土品(MT15～TK10型式)に酷似した資料があることを実見した。ここに訂正しておく。ただ、報告の主旨は、土器胎土の分類から、TK47併行期の須恵器の供給状況を概観したものであり、以上の結果から、若干、在地産須恵器の頻度が高くなるとはいえ、在地産須恵器の出現と、在地産を含めた寄せ集めのな

供給状況であるとした論旨は、変更の必要はないと考えている。

高杯には、土師器10個体と須恵器3個体がある。土師器高杯には、「布留」型の系譜を引くもの22.23.24と、黒色処理を施した椀形の杯部に、中実の脚部を伴うものがある(25)。後者は1点で、他は前者よりなるが、前者として計量したものには、古段階の混入品を含めている可能性がある。土師器高杯は総じて調整が粗く、椀に見たような精製品は見られない。須恵器高杯との比率では土師器高杯が76.9%を占め高い。当該期には、貯蔵器、供膳器の土師器から須恵器への置換が急速に進むが、その中において、土師器高杯は定量的に生産されつづけた形式といえる。そのことは、土師器高杯が、8世紀前半代まで定量的に存在する事からも旨肯できる。

その他、当該期の資料と想定されるものに、手づくね土器2点がある。

#### 引用・参考文献

- 田嶋明人(1987)「在地窯の成立と土師器」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古文化研究会 群馬県考古学研究会 千曲川水系古文化研究所  
戸淵幹夫(1981)『高堂遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

#### 観察表について(次頁第3-3-3表の説明)

- 1 観察表の作成は、奈良・平安時代の観察表の作成方法に準じた。
- 2 須恵器、土師器の色調、胎土は以下の項目以外は、上記による。

#### 須恵器

胎土 本文中に例示

#### 土師器

#### 色調

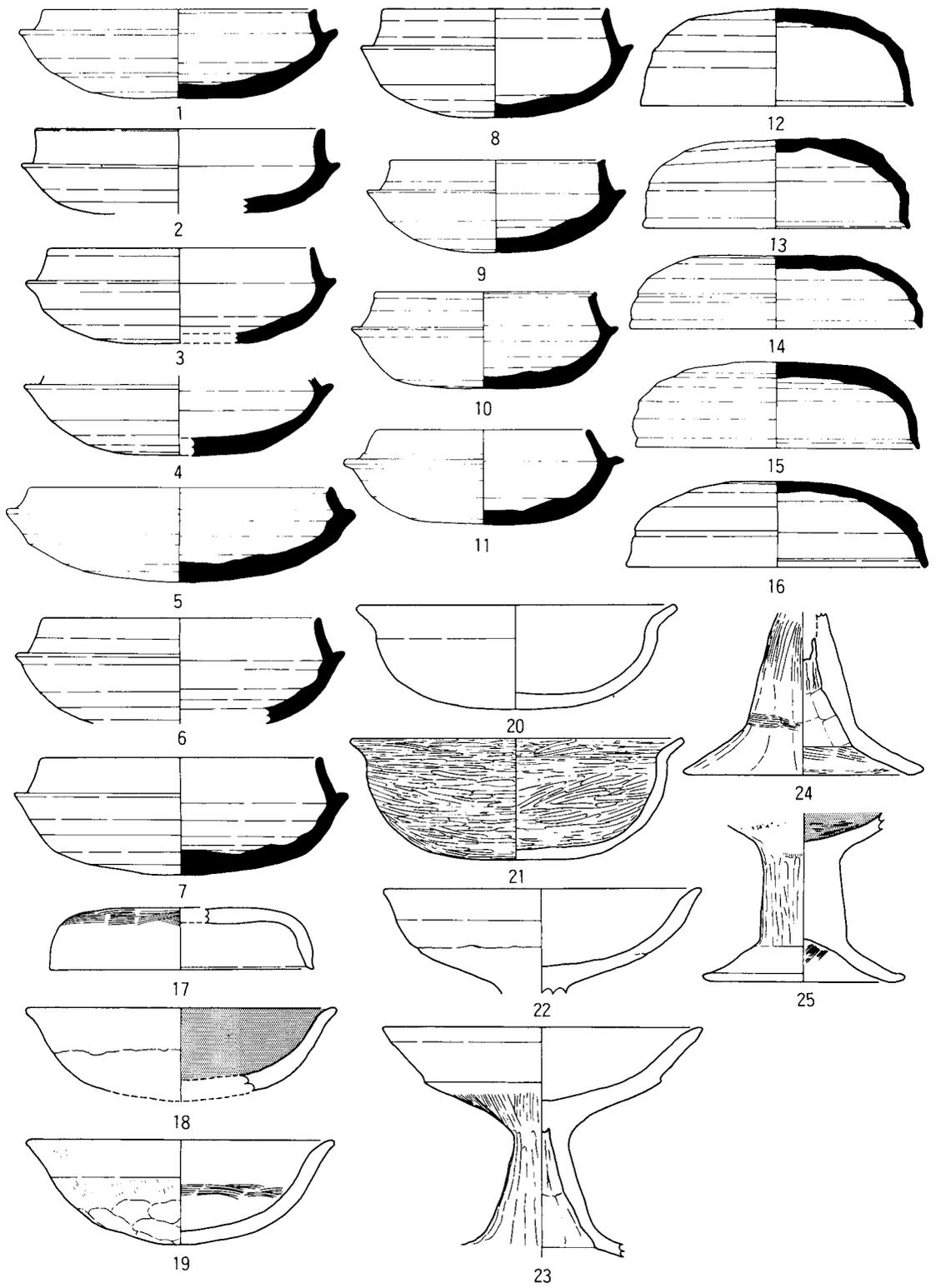
A 淡褐色、B 燈褐色、C くすんだ淡褐色、D 暗褐色、E 黄褐色

#### 胎土

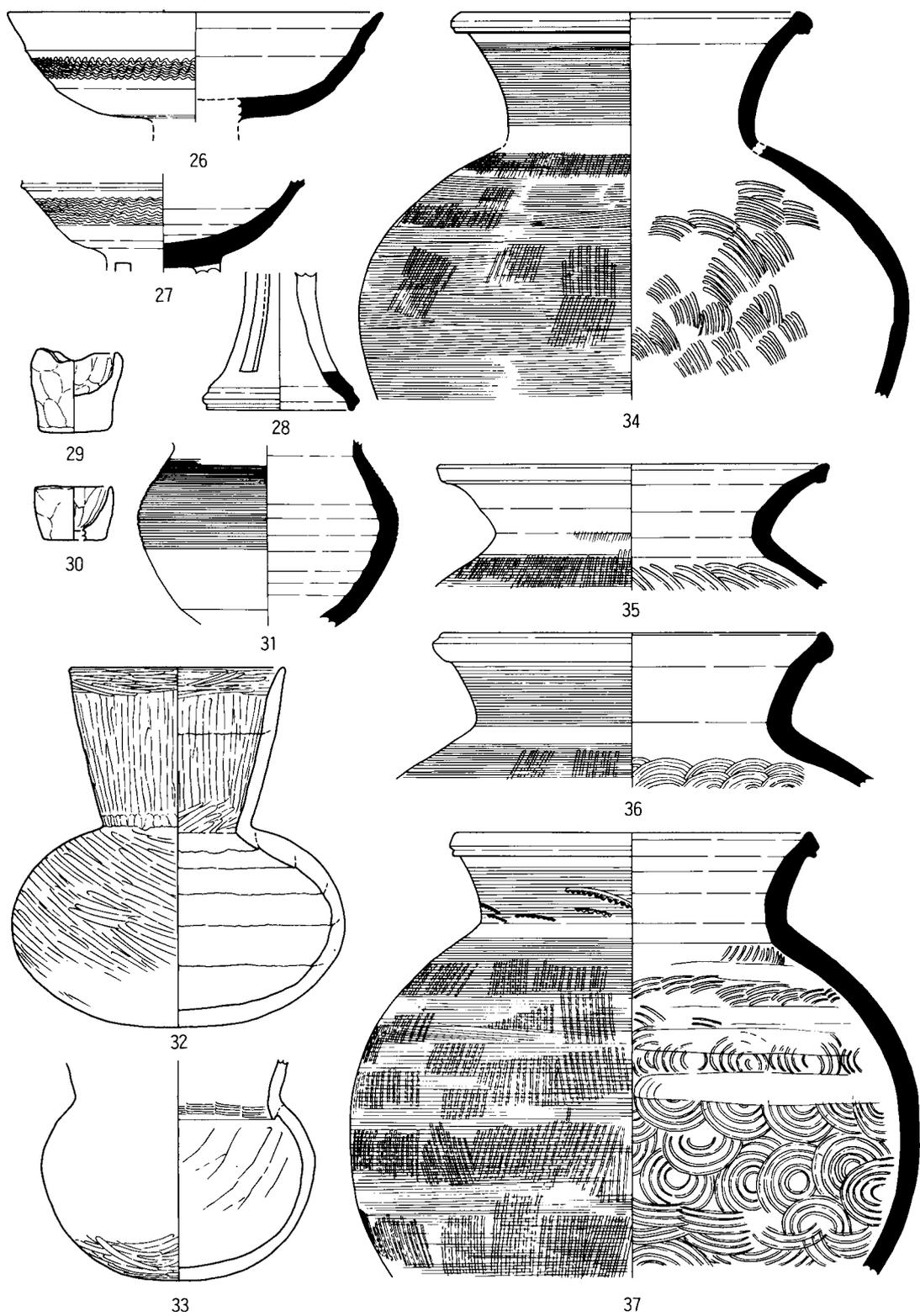
- A群 砂礫をほとんど混和しないもの。  
B群 比較的大きな砂礫を混和するもの。

第3-3-3表 3号土坑 出土土器観察表(第3-3-1~3-3-3区対応)

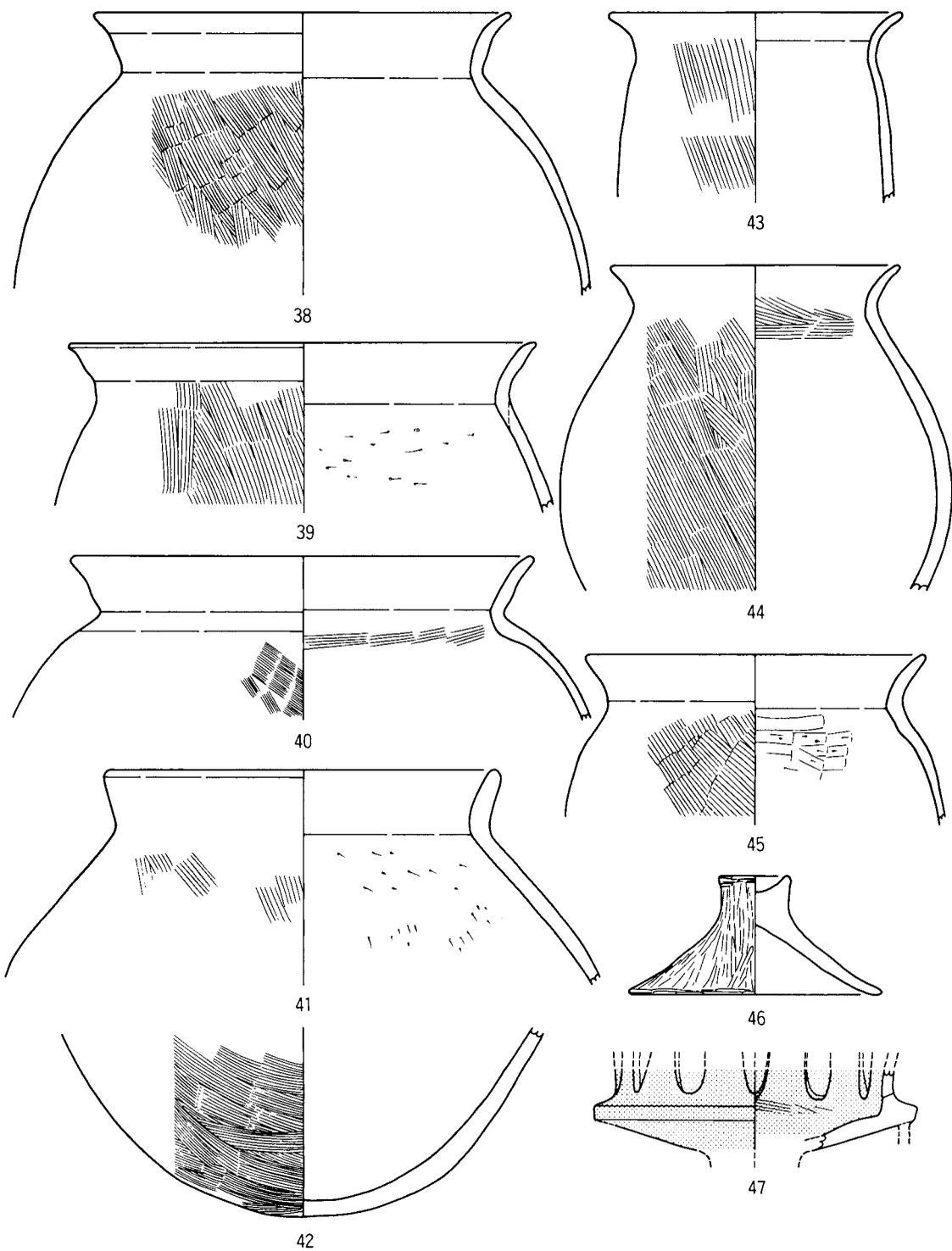
番号	出土地点	器種	法量			胎土	色調	遺存率	備考
			口径	器高	底径				
1	3号土坑 E33	杯H	12.8	4.2		1	C	1.00	
2	3号土坑 A区	杯H	13.4			1	F	0.25	
3	3号土坑 A区	杯H	12.4	4.5		1	B	0.25	
4	3号土坑 A区	杯H				1	C	0.66	
5	3号土坑 A区	杯H	14.1	4.5		1	B	0.75	
6	3号土坑	杯H	13.0			1	C	0.25	
7	3号土坑 E33	杯H	13.0	5.6		1	D	0.66	
8	3号土坑	杯H	10.0	5.2		4	D	0.66	
9	3号土坑	杯H	10.1	4.4		1	C	0.33	
10	3号土坑 H35	杯H	10.4	4.6		2	F	1.00	
11	3号土坑	杯H	10.0	4.5		1	D, F	0.25	
12	3号土坑 C区	杯H	12.6	4.6		2	D	0.66	
13	3号土坑	杯H	12.3	4.3		2	D	1.00	
14	3号土坑	杯H	13.5	3.5		2	F	0.33	
15	3号土坑 A区	杯H	13.1	4.1		2	F	0.75	
16	3号土坑	杯H	13.9	4.1		1	C, D	0.33	
17	3号土坑	蓋	12.3	2.9		A	A 1	0.25	
18	3号土坑 セクション	高杯?	14.5			B	C	0.12	内黒
19	3号土坑 E33	椀	14.2	5.1		A	B	1.00	
20	3号土坑	椀	14.9	5.0		A	A 2	0.50	
21	3号土坑 C, E33	椀	15.6	5.8		A	A 2	0.50	
22	3号土坑 4層	高杯	14.9			A	A 1	0.66	
23	3号土坑	高杯	15.0	9.8		B	B	0.66	
24	3号土坑	高杯				B	B	1.00	
25	3号土坑 C区	高杯			8.0	B	D	1.00	内黒
26	3号土坑 セクション	高杯	17.4			1	E	0.12	
27	3号土坑 A区	高杯				1	C	0.66	
28	3号土坑 C区	高杯			6.7	2	F	0.50	
29	3号土坑 4層	手捏	3.7	4.0		B	C	1.00	
30	3号土坑 4層	手捏	3.5	2.6		B	C	1.00	
31	3号土坑 A区	壺				1	C	0.33	
32	3号土坑	壺	9.9	17.0		A	A 2	0.66	
33	3号土坑 A区	壺				A	A 2	0.33	
34	3号土坑	甕	15.6				F	0.33	
35	3号土坑	甕	18.0			1	D	0.25	
36	3号土坑	甕	17.6			1	E	0.33	
37	3号土坑 4層	甕	16.4			1	D	0.66	
38	3号土坑 A区	甕	19.2			B	B	0.25	
39	3号土坑 セクション	甕	21.6			B	D	0.25	
40	3号土坑	甕	21.2			B	C	0.25	
41	3号土坑 E33	甕	18.0			B	C	0.25	
42	3号土坑	甕				B	D	0.50	
43	3号土坑 A区	甕	13.3			B	C	0.25	
44	3号土坑 セクション	甕	13.0			B	E	0.25	
45	3号土坑	甕	15.4			B	C	0.25	
46	3号土坑 4層	蓋	11.3	5.5		B	D	0.50	
47	3号土坑 C区	器台				A	A 1	0.33	内・外赤



第3-3-2图 3号土坑出土遗物实测图



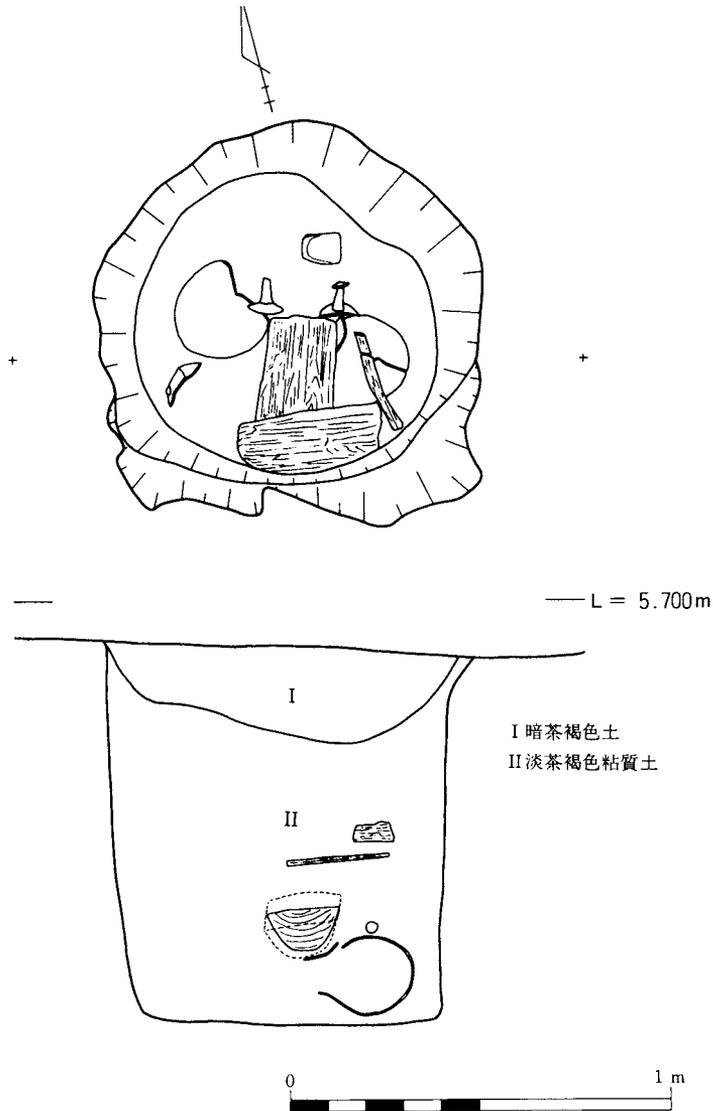
第3-3-3图 3号土坑出土遗物实测图



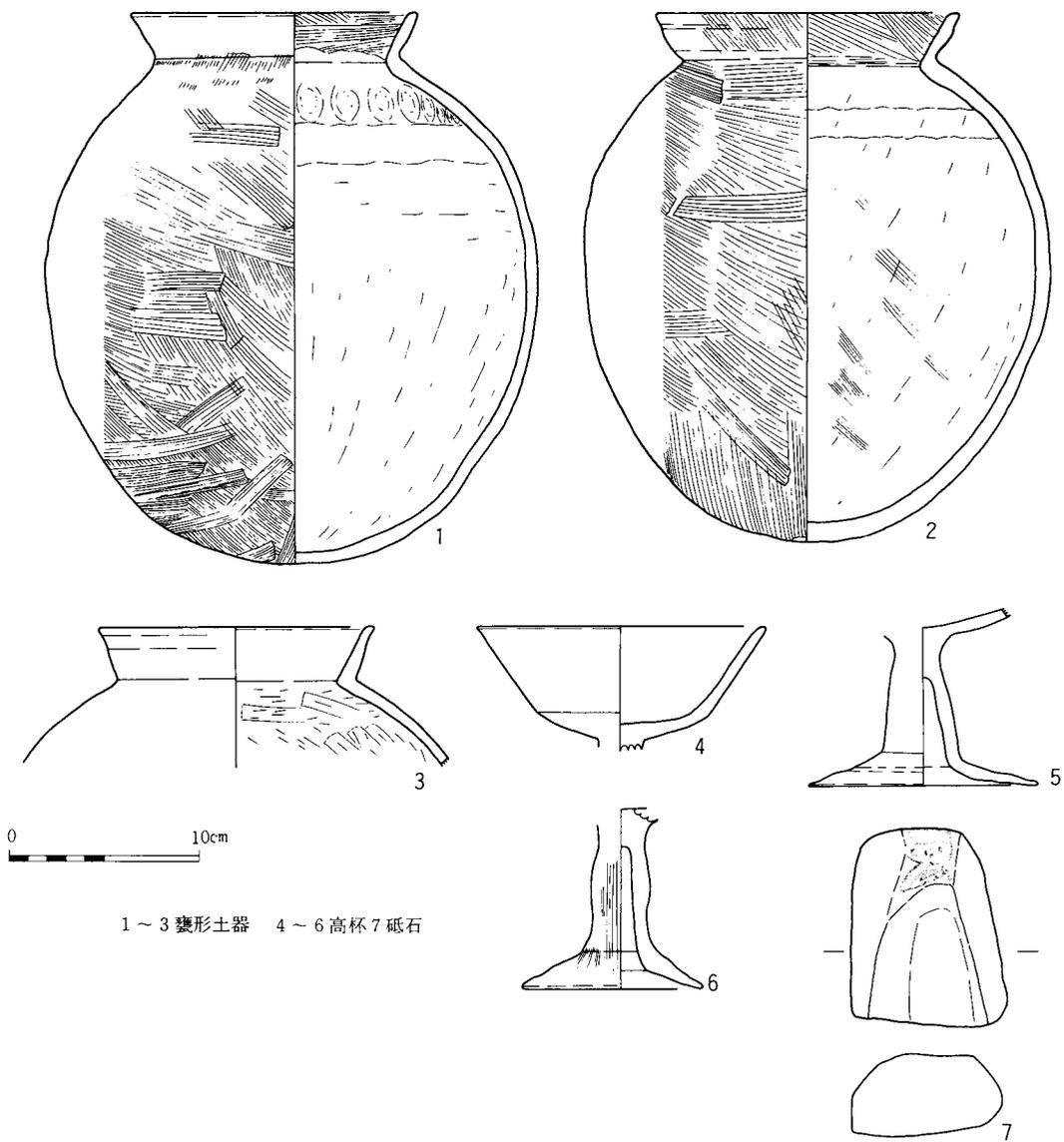
第3-3-4图 3号土坛出土遗物实测图

2号土坑（第3-3-5、3-3-6図）

I 35区に検出された上端径約1 m、深さ約1 mを計る円筒形土坑である。坑底は青灰色砂層上面まで達しており、湧水が絶えない。坑内の堆積土は暗茶褐色土を上層とし、淡茶褐色粘質土を下層とする二層が観られるのみであり、比較的短期間に埋ったものと想われる。下層中より、土師器片とともに鉄などの木製品や“ナワ”のほか、クリなどの自然遺物も出土している。坑底近くには、甕3個体、高坏3個体、砥石1点のほかに、半截された丸太材1対などが集中して出土しており、意識的に投入されたかのようなのである。この遺構の性格については、湧水を貯水する井戸と考えられ、地表下に穴を掘っただけの「地山井筒」といわれる稚拙なものである。坑底面の遺物は、井戸の廃棄行為にとまなうものであろう。年代は、五世紀前半から中頃に比定できよう。



第3-3-5図 I 35区 2号土坑実測図



第3-3-6图 2号土坛出土遗物实测图



## 第4章 奈良・平安時代の遺構・遺物

### 第1節 北調査区掘立柱建物群

南北に走る1号溝で西側面、1号溝から分岐して東西に走る17号溝で南側面を区画し、その中に配置された掘立柱建物群。区画の全体は確認できなかったが、建物として復元できなかった柱列も含め、12棟分の掘立柱建物を検出した。建物構造では、特段の大型掘立柱建物は見られなかったが、3間×3間の、平面方形に近い建物が2棟(1・2号掘立柱建物)みられ、通常の集落遺跡でみられる構造のものとは趣を異にする。建物群間の配置は、十分に検討できていない。時期は、1号溝北地区の一括資料(第4-2-13図～4-2-23図)、17号溝出土品、及び1号掘立柱建物柱穴出土品等が、V期の新しい段階からVI<sub>1</sub>期(田嶋 1988)に主体をもつことから、9世紀後半でも新しい段階より、10世紀初頭頃と推定される。

#### 1号掘立柱建物(第4-1-1図)

3間(605cm)×3間(530cm)の、方形に近い平面形をもつ掘立柱建物。床面積は32.65㎡。主軸方位はN-3-W。柱筋、柱間寸法は良く揃っている。柱穴掘方は、80cm～60cm前後の略円形で、当該掘立柱建物群の中では大きい。深さ30cm前後。

#### 2号掘立柱建物(第4-1-1図)

3間(610cm)×3間(510cm)の、方形に近い平面形をもつ掘立柱建物で、規模、構造とも1号掘立柱建物に酷似する。床面積は31.10㎡。主軸方位はN-5-Wを測る。柱筋、柱間寸法とも良く揃っている。柱穴掘方は、70cm～60cm前後の略円形で、当該掘立柱建物群の中では大きい。深さは、10cmから40cm前後のものまでみられ、不揃い。

#### 3号掘立柱建物(第4-1-1図)

3間(685cm)×3間(不詳)の掘立柱建物と推定されるが、近世・近代溝で、梁行柱列、西桁行柱列が攪乱を受けており明らかでない。また、4号掘立柱建物の東桁行柱列と一体とらえ、桁行7間の掘立柱建物に復元する方法もあろうが、柱列に若干の歪みが見られることと、東桁行柱列南第4と第5の柱間が、やや長くなること、及び、柱穴の深さのちがいより、別の掘立柱建物として分離した。主軸方位はN-2-W。柱筋、柱間寸法は良く揃っている。柱穴掘方は、85cm～60cm前後の略方形で、当該掘立柱建物群の中ではもっとも大きい。深さは40cmをこえ深い。

#### 4号掘立柱建物(第4-1-1図)

3間(530cm以上)×3間(不詳)の掘立柱建物と推定されるが、3号掘立柱建物同様、近世・近代溝により、梁行柱列、西桁行柱列が攪乱を受けており明らかでない。主軸方位はN-1-Wを測り、3号掘立柱建物とは1度東に振れる。柱筋、柱間寸法は良く揃っている。柱穴掘方も、3号掘立柱建物に類似し、85cm～60cm前後の略円形をなし、当該掘立柱建物群の中ではもっとも大きい。深さは20cmから30cmで、3号掘立柱建物と比較して浅い。

#### 5号掘立柱建物(第4-1-1図)

2間(500cm)×1間(435cm)の、小型の掘立柱建物。床面積は10.87㎡。主軸方位はN-6-W。柱筋、柱間寸法は比較的良く揃っている。柱穴掘方は、50cm前後の円形で小さい。深さは10cmから30cmと不揃い。当該地区で主体となる掘立柱建物群とは、時期が異なる可能性が高い。

#### 6号掘立柱建物(第4-1-1図)

4間以上(785cm以上)×2間以上(350cm以上)の大型掘立柱建物。北梁行柱列と、西桁行柱列が明らかでないが、4間×3間、床面積にして42㎡程度の建物に復元できよう。主軸方位はN-1-W。柱筋、柱間寸法は良く揃っている。柱穴掘方は、50cm～60cm前後の略円形をなす。深さは10cm～20cmと浅い。

#### 7号掘立柱建物(第4-1-1図)

3間以上(660cm以上)×3間(530cm)の掘立柱建物で、北梁行柱列が確認できていない。床面積34.98㎡以上。主軸方位はN-5-W。柱筋、柱間寸法は比較的良く揃っている。柱穴掘方は、40cm前後の略円形と小さいが、掘方を十分に確認できなかった可能性もある。深さは20cm～30cm。

#### 8号掘立柱建物(第4-1-1図)

3間(730cm以上)×3間(530cm)の掘立柱建物と推定されるが、北梁行柱列が確認できていない。床面積38.69㎡以上。主軸方位はN-4-W。柱筋、柱間寸法は比較的良く揃っている。柱穴掘方は70cm～80cm前後の略円形をなし大きい。深さは30cm前後～50前後とやや不揃いであるが総じて深い。

#### 9号掘立柱建物(第4-1-1図)

8号掘立柱建物に桁行の柱筋を合わせ、重複してある。3間(不明)×3間(515cm)の掘立柱建物と推定されるが、東西桁行柱列、北梁行柱列は確認できていない。主軸方位はN-4-W。柱筋、柱穴掘方は、40cm前後の略円形と小さいが、掘方を十分に確認できなかった可能性もある。深さは20cmを越えるものはなく浅い。

#### 10号掘立柱建物(柱列)

3間以上(570cm以上)の、桁行柱列の可能性をもつものとして抽出したが、詳細は明かでない。柱列方位はS-87.5-W(N-2.5-W)。3間と復元した場合、東第2柱穴が未確認。柱穴掘方は40cm前後の略円形と小さい。深さは20cm前後。

#### 11号掘立柱建物(柱列)

柱列方位をN-7-Wにとり、220cm前後の柱間でならぶ柱列。掘立柱建物の可能性をもつものとして抽出したが、詳細は明らかでない。柱穴掘方は40cm前後の略円形と小さい。深さは10cm程度。

#### 12号掘立柱建物(柱列)

柱列方位をN-9-Wにとり、220cm前後の柱間でならぶ柱列。当該柱列の東側に、類似の方位を持つ柱列がみられるが、同一掘立柱建物の柱列とみなすことは難しい。柱穴掘方は30cm前後の略円形と小さい。深さは20cm未満。



第4-1-1图 北调查区掘立柱建物復元图

## 第2節 南調査区掘立柱建物群

北掘立柱建物から約100m離れて確認された掘立柱建物群であるが、1号溝の東側に展開する五棟の平安時代の建物群と、西側で3棟から成る古墳時代後期の倉庫様建物群にわけられる。また、この南掘立柱建物群は第3章第2節に取り上げた古墳時代前期の布堀り掘立柱建物群と一部重複している。1号溝から2点の木簡が出土しているが、第1号木簡は4号掘立柱建物の南方約10mの溝内から発見されている。

### 1号掘立柱建物（第4-1-3図）

桁行2間（420cm）×梁行3間（370cm）の掘立柱建物。床面積は15.5㎡。桁行は210cm等間であるが、梁行は東側が120+120+130cm、西側が120+150+100cmとなる。主軸方位はN-81-E。柱穴の掘方は一辺約60cmの略方形をする。

### 2号掘立柱建物（第4-1-3図）

桁行3間（580cm）×梁行1間（330cm）の掘立柱建物。床面積は19.0㎡。主軸方位はN-115-E。柱穴の掘方は経約50～60cmの円形をする。北側桁柱のうち1つは東西に走る溝に切られている。

### 3号掘立柱建物（第4-1-3図）

桁行2間（380cm）×梁行1間（290cm）の掘立柱建物。床面積は11.0㎡。主軸方位はN-124-E。柱穴の掘方は経50cm程度の円形をしている。

### 4号掘立柱建物（第4-1-3図）

桁行2間（640cm）×梁行1間（420cm）の掘立柱建物。床面積は26.8㎡。北側の桁行は660cmと南側に比べて若干長い。主軸方位はN-122-E。柱穴の掘方は経約60×80～100の楕円形をする。

### 5号掘立柱建物（第4-1-3図）

桁行2間（380cm）×梁行1間（290cm）の掘立柱建物。3号掘立柱建物と同じ構造で建物規模もほぼ同じである。4号掘立柱建物の北に並列して存在し、柱穴の掘方も4号建物よりひと回り小さい40×60cm楕円形をする。床面積は11.0㎡。主軸方位はN-118-Eを測る。

### 6号掘立柱建物（第4-1-2図）

桁行2間（340cm）×梁行2間（340cm）の掘立柱建物。1号溝の東に位置する束柱を持つ倉庫様の建物で、古墳時代後期の建物。床面積は11.5㎡。主軸方位はN-115-E。柱穴の掘方は経30cm前後の円形をする。

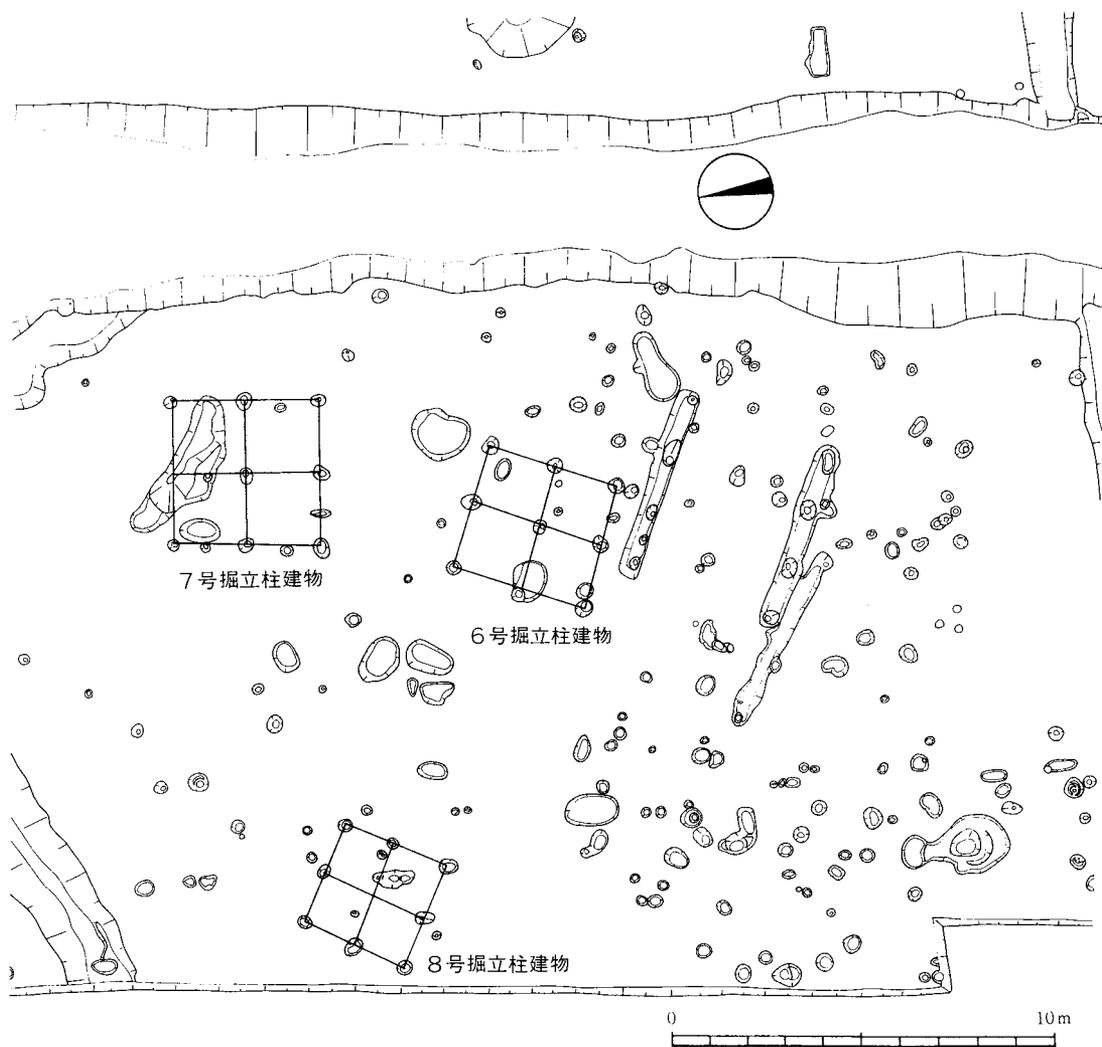
### 7号掘立柱建物（第4-1-2図）

桁行2間（380cm）×梁行2間（380cm）の掘立柱建物。6号掘立柱建物の北に4m離れて位置する束柱を持つ倉庫様の建物。床面積は14.4㎡。主軸方位はN-97-E。柱穴の掘方は30cm前後の円形をする。

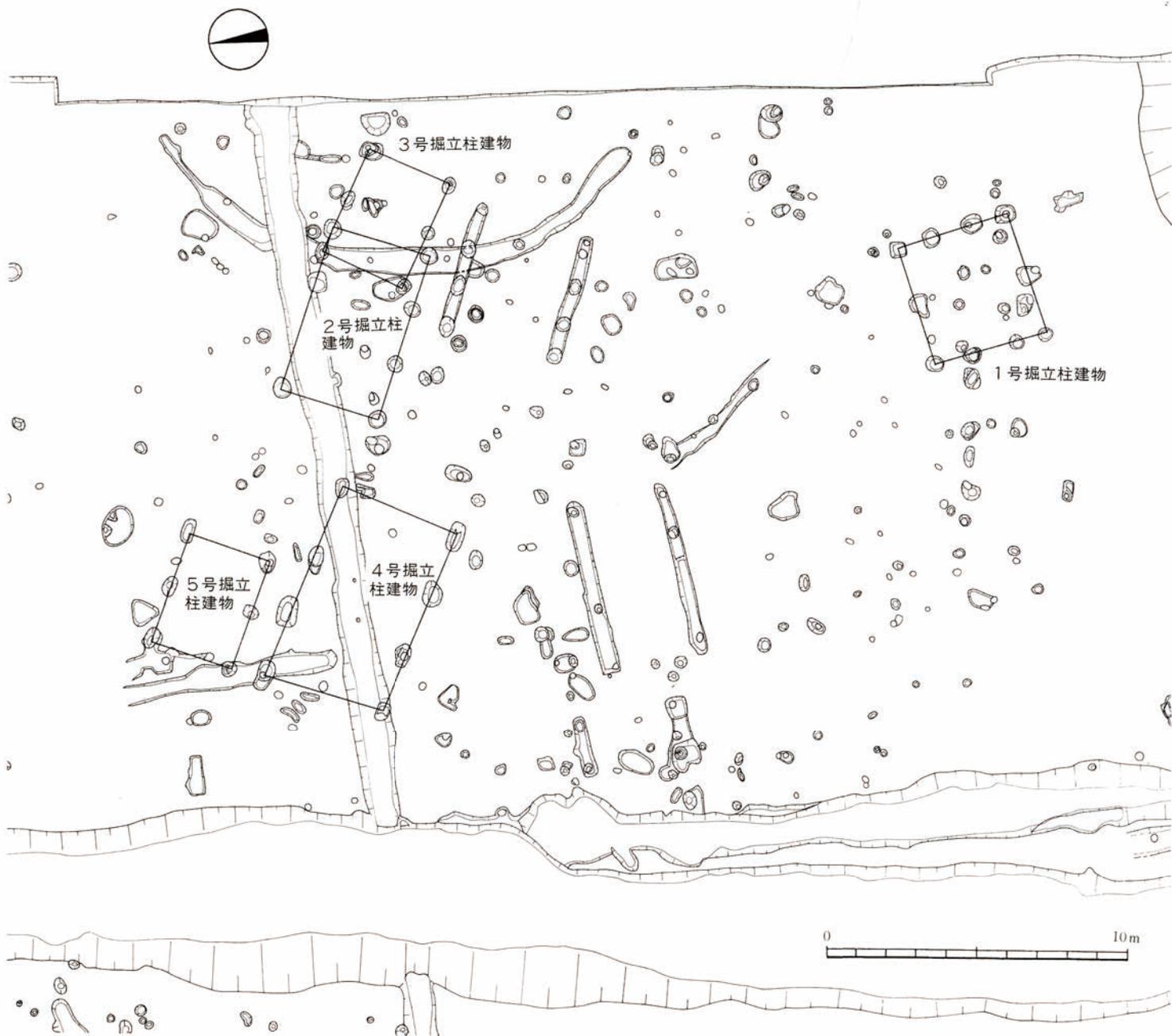
### 8号掘立柱建物（第4-1-2図）

桁行2間（280cm）×梁行2間（280cm）の掘立柱建物。7号掘立柱建物の東に7.5m離れて位置する倉庫様の建物。床面積は7.8㎡。主軸方位はN-120-E。柱穴の掘方は30cm前後の円形をする。調査担当者の戸淵はこの3棟の建物について「これらは、建物跡群の西側に偏在し、同一の規格

性をもち、重複がないことから、同時期に併設されていたものと想われる。」と述べている。(高堂遺跡第Ⅲ次調査概報 7頁の説明より)



第4-1-2図 南調査区西側掘立柱建物復元図



第4-1-3図 南調査区東側掘立柱建物復元図

### 第3節 1号溝（第4-2-1～4-2-23図）

#### 遺構

調査区のほぼ中央を、南北に走る中型溝。延長にして140m余を確認した。流路は蛇行することなく、直線的に伸びる。幅も一定で約2.5m前後、深さは50cm前後を測る。1号溝は当該地区の遺構群の配置を決定する重要な遺構と推測されるが、北調査区掘立柱建物群と、同じく北調査地区で直交して交わる17号溝以外の関連は明らかになっていない。主たる存続期間は、4地点に集中箇所をもって出土した土器群より、9世紀後半から10世紀初頭頃と推定される。なお、当該溝からは、小量ながら、定量の奈良時代（Ⅲ・Ⅳ期）の遺物が出土しているが、当該溝に伴うかどうかは明らかでない。

#### 遺物

**概要** 出土遺物には須恵器（墨書土器）、土師器（墨書土器）、木器、木筒等がある。木器、木筒は別項で紹介することとし、ここでは、土師器、須恵器と墨書土器について報告する。

出土土器類は、先に触れたとおり4地点に集中箇所をもって出土しているが、地点別の整理ができていないので、一括して報告することとし、とりあえず、各集中箇所の概要を紹介しておく。遺物群の時期は南ほど古く、北に至るに従い新しくなる。

南地区（第1図～9図 幹番号のみ記載 以下同様）F43区周辺より出土した土器群。須恵器の頻度が高く、土師器はほとんどみられない。時期は、古いものを少量混在しているが、主体はⅤ期に納まる。

中央地区（第10図～12図）M10区周辺より出土した土器群。Ⅴ期を主体に一部Ⅳ期の遺物を含む。

北-1区地区（2次11溝 第13図～18図）E6区周辺より出土した土器群。Ⅳ期主体。古相の遺物は細片が多い。

北-2区地区（第19図～23図）K5区周辺より出土した土器群。Ⅳ期主体。

**組成** 須恵器食器は口縁部計測、底部計測、他は個体識別により求めたもので、総固体数にして405点（第4-2-1表）確認できた。

ただ、計量結果は盤Aと杯Bの図化数と大きく異なった。ちなみに数量を列記するならば、盤Aでは図化数57、破片数154、計量個体数46。杯Bは、同様に53、84、42である。そして、盤Aの墨書率は93%を越える結果となった。計量では、8分ノ1以下の小片は、器種認定が難しいこともあって、十分に抽出できていないが、口縁部計量と、底部計量の二つのデーターを採り、量の多い方を採用した。一方、図化数は厳格な個体識別を経たものではないが、実数に近いとの印象をもっている。口縁部計量、底部計量等の計量方法は、器種間の相対的な量比判断に有効であることはいうまでもないが、今回の様に、墨書土器量から実数を想定できる条件にある場合は、工夫する必要があったと痛感している。その点で、墨書土器の比率の実態は、第4-2-1表のデーターよりやや低く想定する必要があるだろうし、個体識別によった食器以外の器種と土師器食器の比率も、計量による須恵器食器との比較データーより低く理解する必要があるだろう。以上の

ように、問題を残したデータであるが、同表に基づき、当該遺構の組成を概観しておく。

用途別の比率では、通常の集落遺跡資料と比較して、貯蔵器が少なく、狭義の食器の比率がやや高い。また、土師器煮炊具（甕・鍋）も、計量に若干の保留部分を残すが、やや低いようである。食器の中では須恵器杯Aの頻度がきわめて高く（48%）、杯Bとの比較では81.7%、4.5：1を占める。V期～VI期にかけては杯Bの頻度が低下する時期ではあるが、一般化は保留しておきたい。椀、皿等の瓷器系形態の食器頻度（12%）も低い。食器の中に占める土師器の頻度は、相対的に土師器頻度の低いV期の遺物を含めての計量であるが、12.3%と低い。須恵器偏重の南加賀地域のあり方と一致する。

胎土 須恵器胎土は4群に分類したが十分に検討できていない。加南窯産を主体とし、B・C・D群としたものに定量の辰口窯産が含まれると推定している。後日の検討をまちたい。土師器の胎土は、供膳器で5群に分類し、その結果を煮炊具に援用した。ここでは、発色の違いを、粘土素地の差と仮定し分類してみた、結果的には、A・C・E群に大別でき、中間的なものとしてB・D群を抽出した。量はA群が主体で、C群が少量、E群が定量見られた。混和剤ではE群が他と異なるほかは、区別できなかった。当該期での土師器の生産と供給については、郡を単位に1箇所程度の生産地から一元的に供給されたとする中域供給との理解（北野・池野1989）と、郡に数箇所の生産地をもつ狭域供給を基礎に、中域的供給圏をもつ生産地が複合的にあるあり方とする理解（田嶋・小嶋1989）とがある。両者の理解は大きく異なっているが、事実関係の整理を進めるとともに、両者の論点を整理することが、当面の課題と考えている。

墨書土器 総数にして170点ある。第4-2-2、4-2-3表は当該溝出土品のほか、掘立柱建物柱穴、包含層出土品13点を加えて集計したものである。なお、墨痕であるのか、焼成時のシミであるのか判別できないものも若干見られたが、それらについては集計に加えていない。

墨書の内容は第4-2-3表のとうり、その他としたものには「+」、「厶」、「ㄣ」、「工」があり、記号とも数字ともとれるものを包括した。また、不明には、判読できないためやむをえず包括したものも少なくない。その中には「□佐」、「沙弥」と判読できる可能性をもつものをふくむ。墨書内容は「隆」が41点ともっとも多く、ついで「改吉」、「在」、「来」と続く。

時期は（第4-2-4表）Ⅲ期～Ⅵ期までのものを含む。V期以前としたものは、V期の可能性を残すが、Ⅳ期以前に帰属する可能性の高いもの。全体量の中では3%以内と少ない。墨書土器の主体はV期とⅥ期で、Ⅵ期のものはⅥ期がめだつ。このあり方は、当該溝出土の他の土器群の年代観と符合する。V・Ⅵ期としたものはいずれの時期とも判断できなかったものである。墨書内容と時期との関連では、「改吉」、「良」、「三」、「来」、「平」、「等」がV期に、「得」、「隆」がⅥ期に、「在」、「六」がV～Ⅵ期にそれぞれ主体をもち、明瞭な対応関係を示す。時期別の推移では多様な内容の墨書から隆に単一化していくともいえる。

第4-2-2表は墨書土器と器種との対応関係を示したものである。墨書土器は食器に限られるとともに、須恵器系の型式に集中する傾向をみせている。

引用・参考文献

北野博司・池野正男（1989）「1 北陸における須恵器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会  
 田嶋明人（1988）「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学  
 研究会 北陸古代土器研究会  
 田嶋明人・小嶋芳孝（1989）「2 加賀・能登における古代手工業生産の様相」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工  
 業生産史研究会

第4-2-1表 高堂遺跡1号溝出土遺物 器種・墨書計量一覧（総括）

機能	器種	数量	比率	用途別数量	用途別比率	墨書数量	墨書比率	用途別数量	用途別比率				
供 膳 具	須恵器 杯 A	188	0.483	324	0.833	95	0.505	164	0.506				
	須恵器 杯 B	42	0.108			19	0.452						
	須恵器 碗 A	1	0.003			1	1.000						
	須恵器 碗 X	1	0.003			1	1.000						
	須恵器 盤 A	46	0.118			43	0.935						
	須恵器 盤 B	5	0.013			1	0.200						
	土師器 杯 B	1	0.003			0	0.000						
	土師器 杯 A	14	0.036			1	0.071						
	土師器 碗 B	10	0.026			0	0.000						
	土師器 碗 X	2	0.005			1	0.500						
	土師器 皿 B	14	0.036			2	0.143						
	須恵器 鉢	5	0.013			8	0.021			0	0.000	0	0
	土師器 鉢	3	0.008							0	0.000		
須恵器 杯蓋	16	—	6	0.375	6			0.375					
貯 蔵	須恵器 壺・瓶	13	0.033	15	0.039	0	0.000	0	0				
	須恵器 甕	2	0.005			0	0.000						
煮 炊 具	土師器 甕	36	0.093	42	0.108	0	0.000	0	0				
	土師器 鍋	4	0.010			0	0.000						
	土師器 支脚	2	0.005			0	0.000						
合 計		405	1.000	389	1.000	170	—	170	0.437				

第4-2-2表 高堂遺跡1号溝出土墨書土器と器種

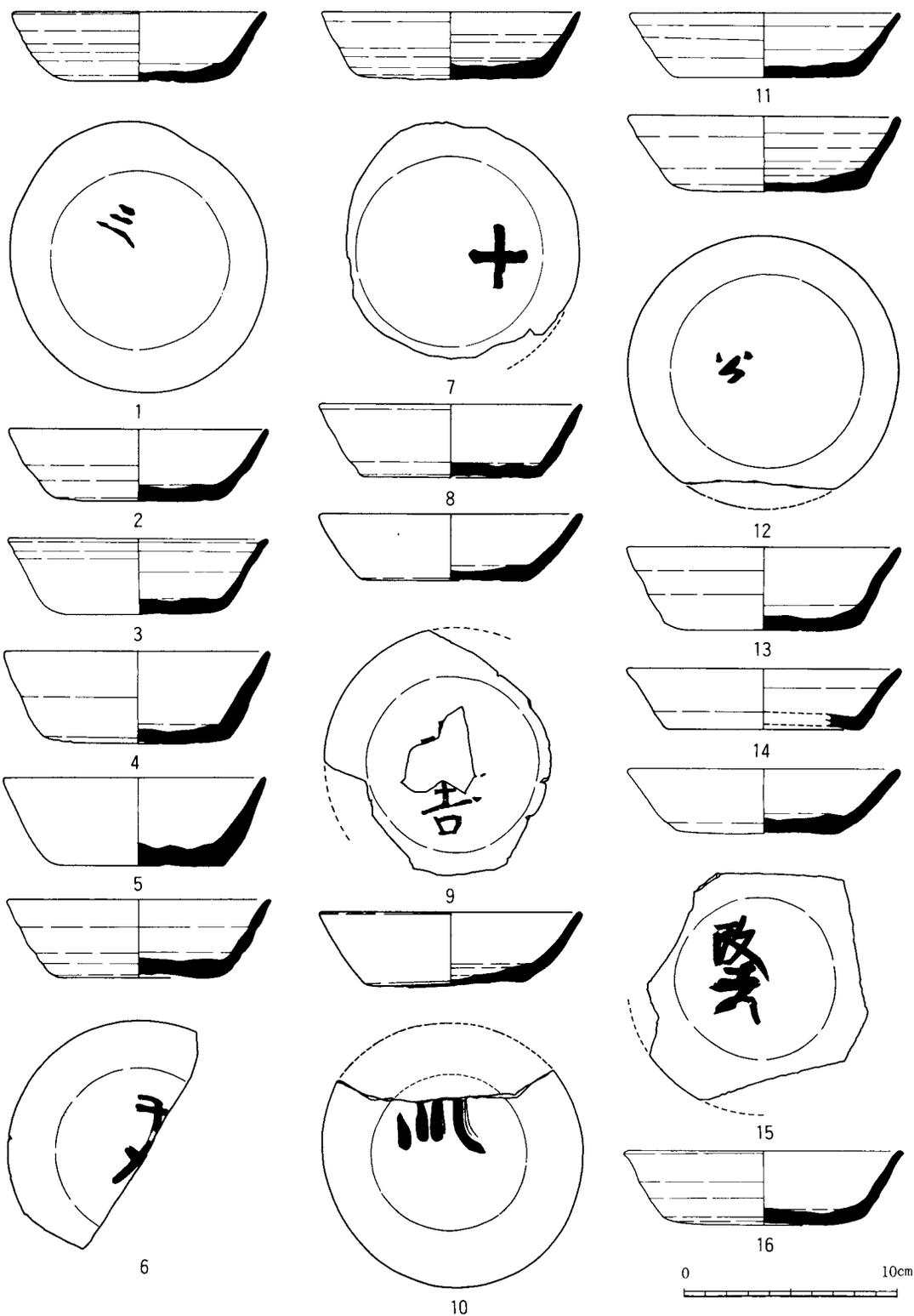
器種	改吉	秋	飽益山	良	三	来	在	平	六	七	得	隆	その他	合計
須恵器 杯 A	5			3	1	2	1	3	1	1	1	25	3	46
須恵器 杯 B	1		1		1	1	1	1			1	2	1	10
須恵器 碗 A														0
須恵器 碗 X														0
須恵器 盤 A	2	1			2	1	2		2			9	1	20
須恵器 盤 B														0
土師器 杯 B														0
土師器 碗 A														0
土師器 碗 B														0
土師器 碗 X														0
土師器 皿 B										1				1
須恵器 杯蓋	1											2		3
	9	1	1	3	4	4	4	4	3	1	3	38	5	80

第4-2-3表 高堂遺跡出土墨書土器と器種

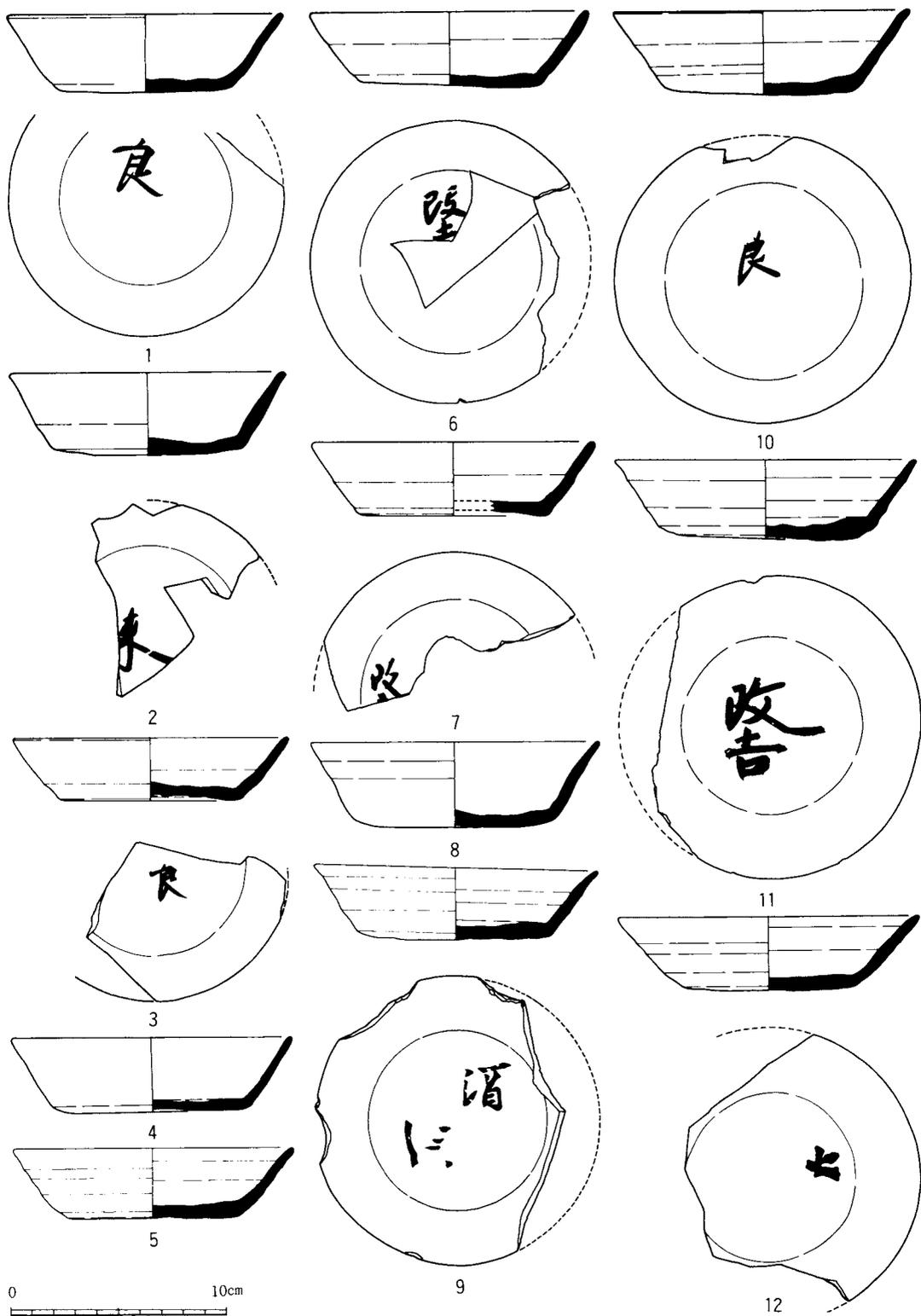
区分	器種	点数	比率	主たる墨書位置
須 恵 器	杯 A	98	0.544	外底
	杯 B	19	0.106	外底
	盤 A	52	0.289	外底
	盤 B	1	0.006	外底
	蓋	7	0.039	天井
	碗 A	1	0.006	外底
	碗 X	1	0.006	外底
	不明	1	0.006	
	小計	180	1.000	
土 師 器	碗 X	1	0.333	外底
	皿 B	2	0.667	外側
	小計	3	1.000	
	合計	183	—	

第4-2-4表 高堂遺跡出土墨書土器の内容と時期

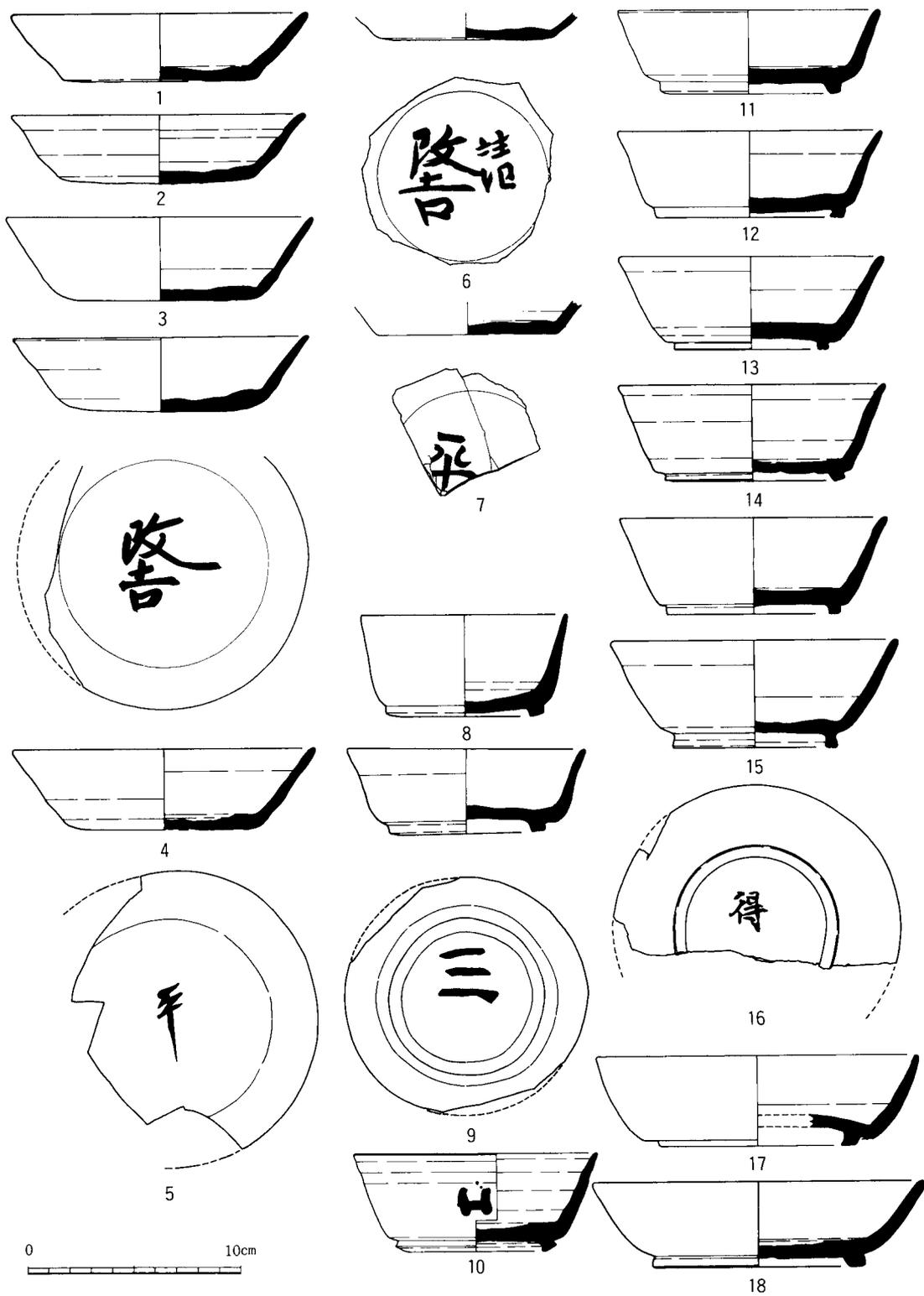
墨書内容	点 数 率		V期以前	V期	V・M期	M期	不明	備 考
	点 数	比 率						
改吉	点 数	9	0	5	4	0	0	「改吉請」含む
	比 率	0.105	0.000	0.556	0.444	0.000	0.000	
秋	点 数	1	1	0	0	0	0	
	比 率	0.012	1.000	0.000	0.000	0.000	0.000	
飽益山	点 数	1	0	0	1	0	0	
	比 率	0.012	0.000	0.000	1.000	0.000	0.000	
良	点 数	3	0	3	0	0	0	
	比 率	0.035	0.000	1.000	0.000	0.000	0.000	
三	点 数	4	0	2	1	0	1	
	比 率	0.047	0.000	0.500	0.250	0.000	0.250	
来	点 数	5	0	5	0	0	0	
	比 率	0.058	0.000	1.000	0.000	0.000	0.000	
在	点 数	5	0	2	1	2	0	
	比 率	0.058	0.000	0.400	0.200	0.400	0.000	
平	点 数	4	0	4	0	0	0	
	比 率	0.047	0.000	1.000	0.000	0.000	0.000	
六	点 数	4	0	2	1	1	0	
	比 率	0.047	0.000	0.500	0.250	0.250	0.000	
七	点 数	1	0	1	0	0	0	
	比 率	0.012	0.000	1.000	0.000	0.000	0.000	
得	点 数	3	0	0	1	2	0	
	比 率	0.035	0.000	0.000	0.333	0.667	0.000	
隆	点 数	41	0	2	6	33	0	
	比 率	0.477	0.000	0.049	0.146	0.805	0.000	
その他	点 数	5	1	3	0	1	0	
	比 率	0.058	0.200	0.600	0.000	0.200	0.000	
不明	点 数	97	7	36	18	29	7	
	比 率	—	0.072	0.371	0.186	0.299	0.072	
合 計	点 数	183	9	65	33	68	8	
	比 率	—	0.049	0.355	0.180	0.372	0.044	



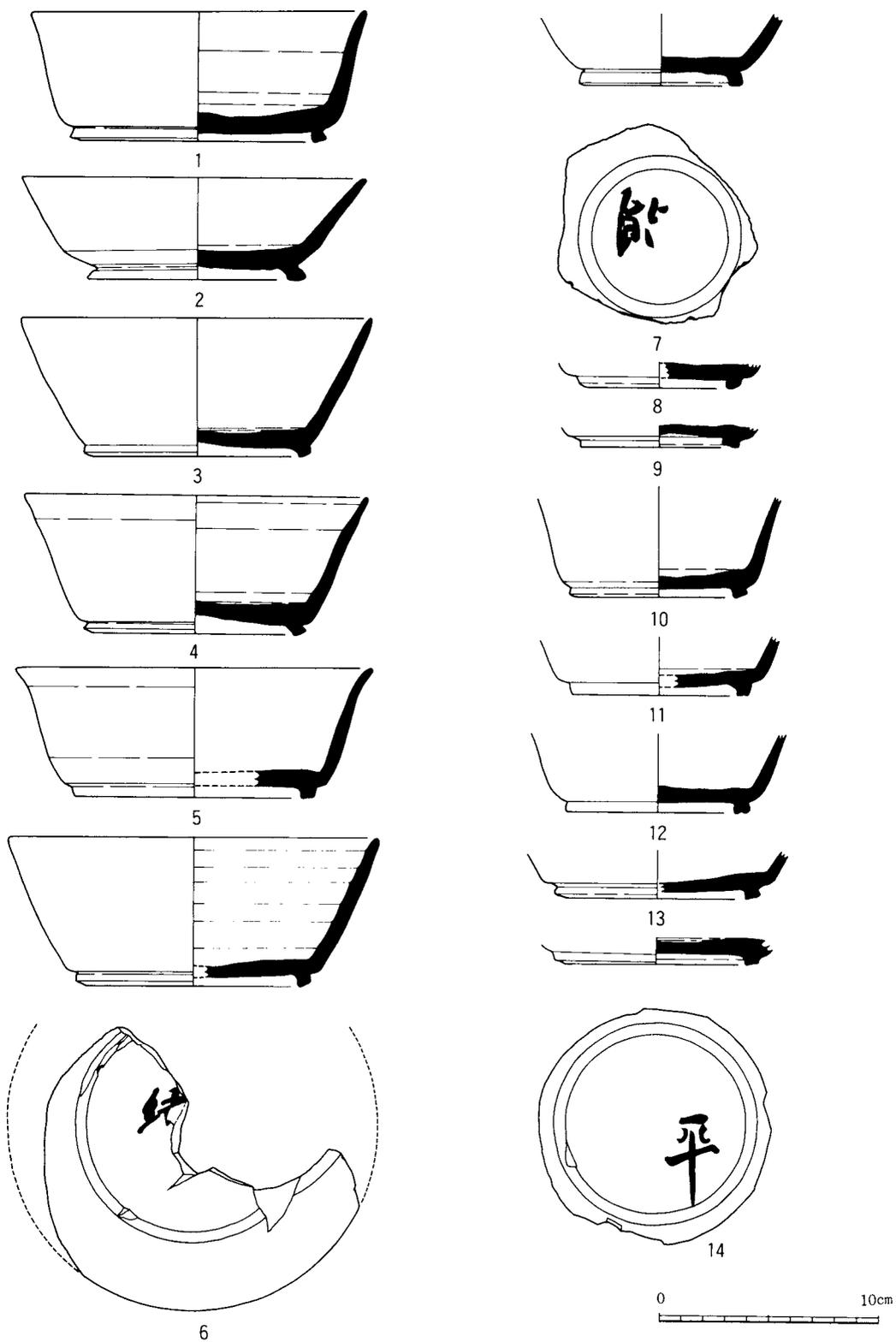
第4-2-1图 1号沟出土遗物实测图(南地区)



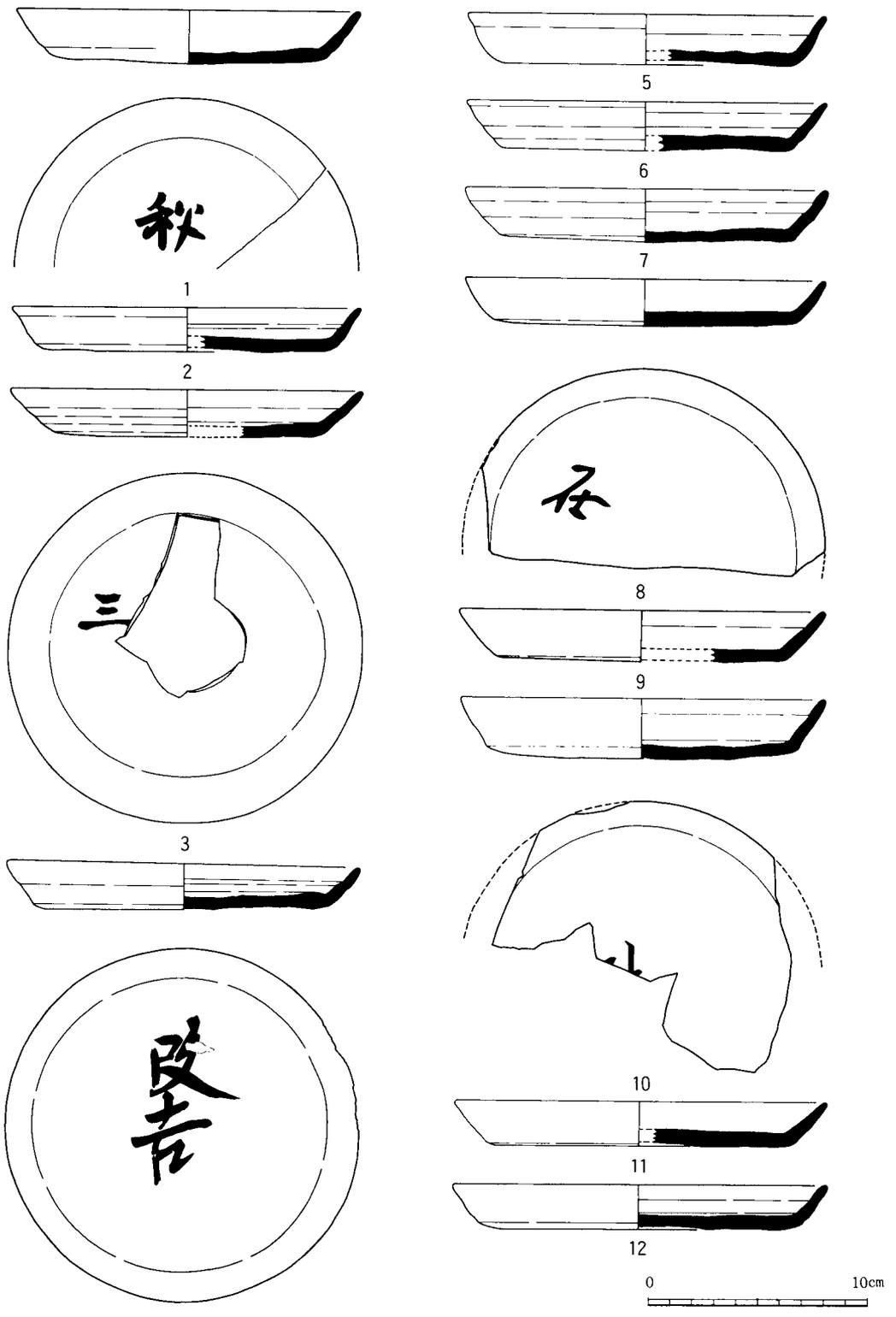
第4-2-2図 1号溝出土遺物実測図（南地区）



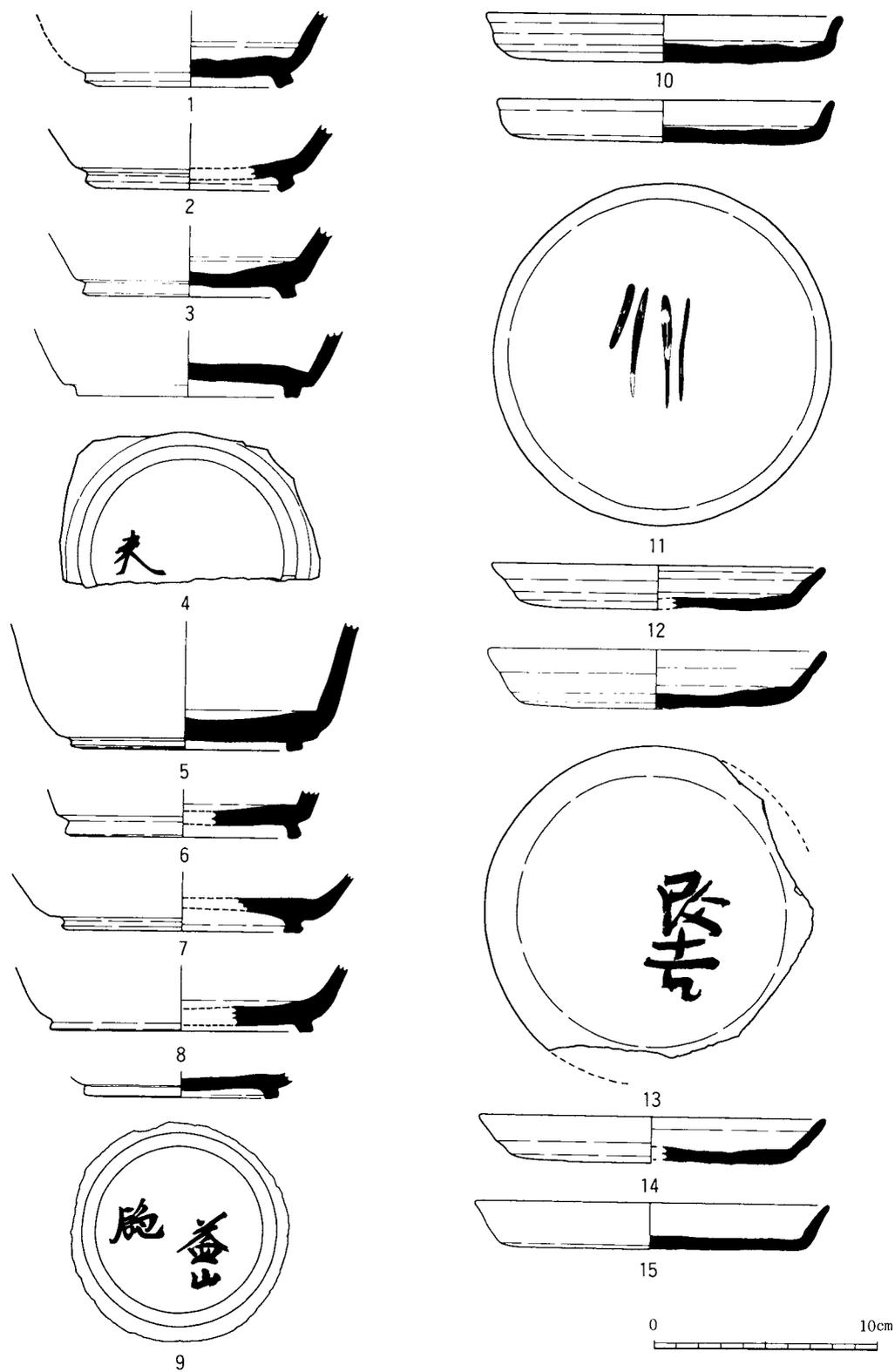
第4-2-3图 1号溝出土遺物実測図（南地区）



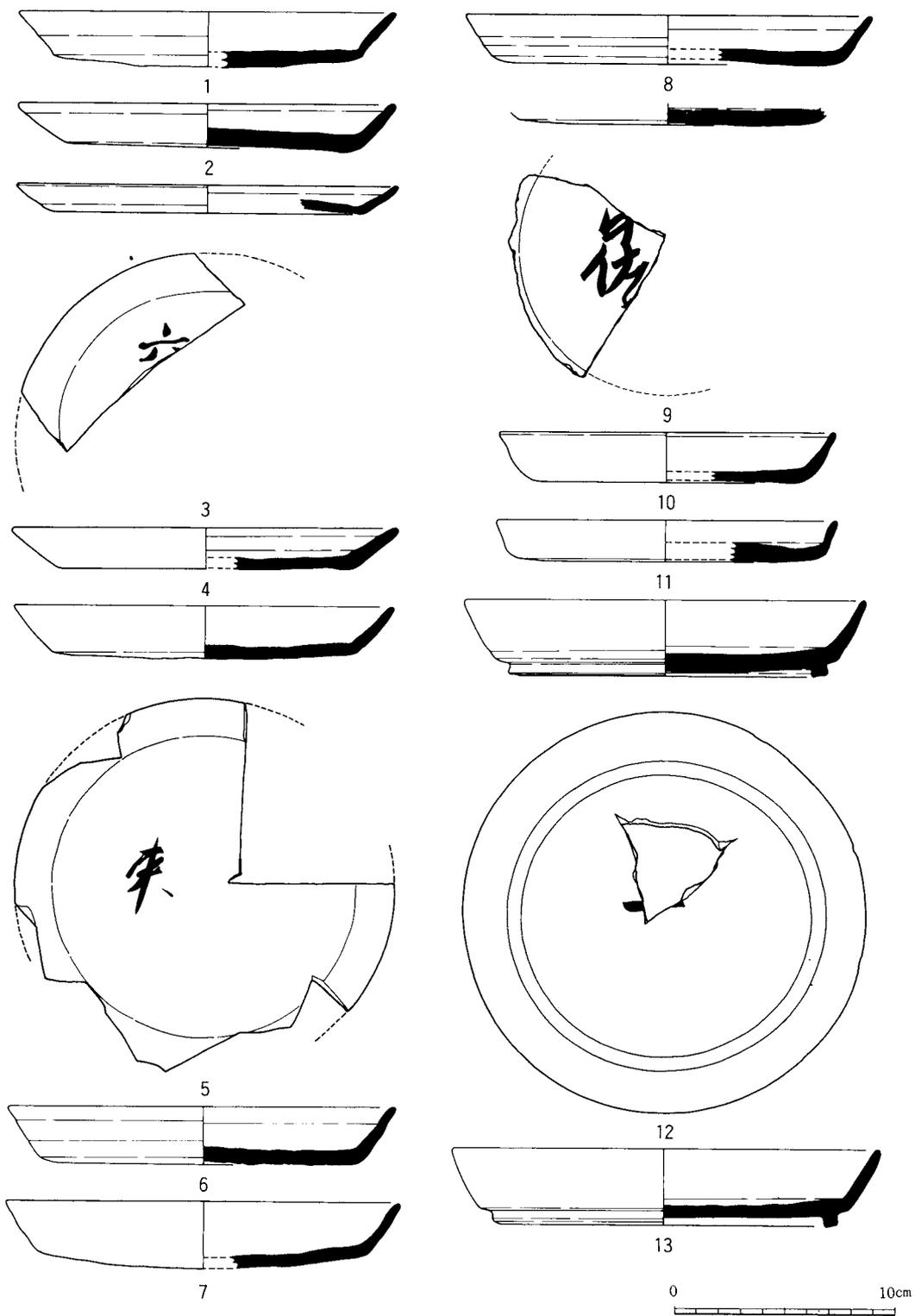
第4-2-4图 1号沟出土遗物实测图(南地区)



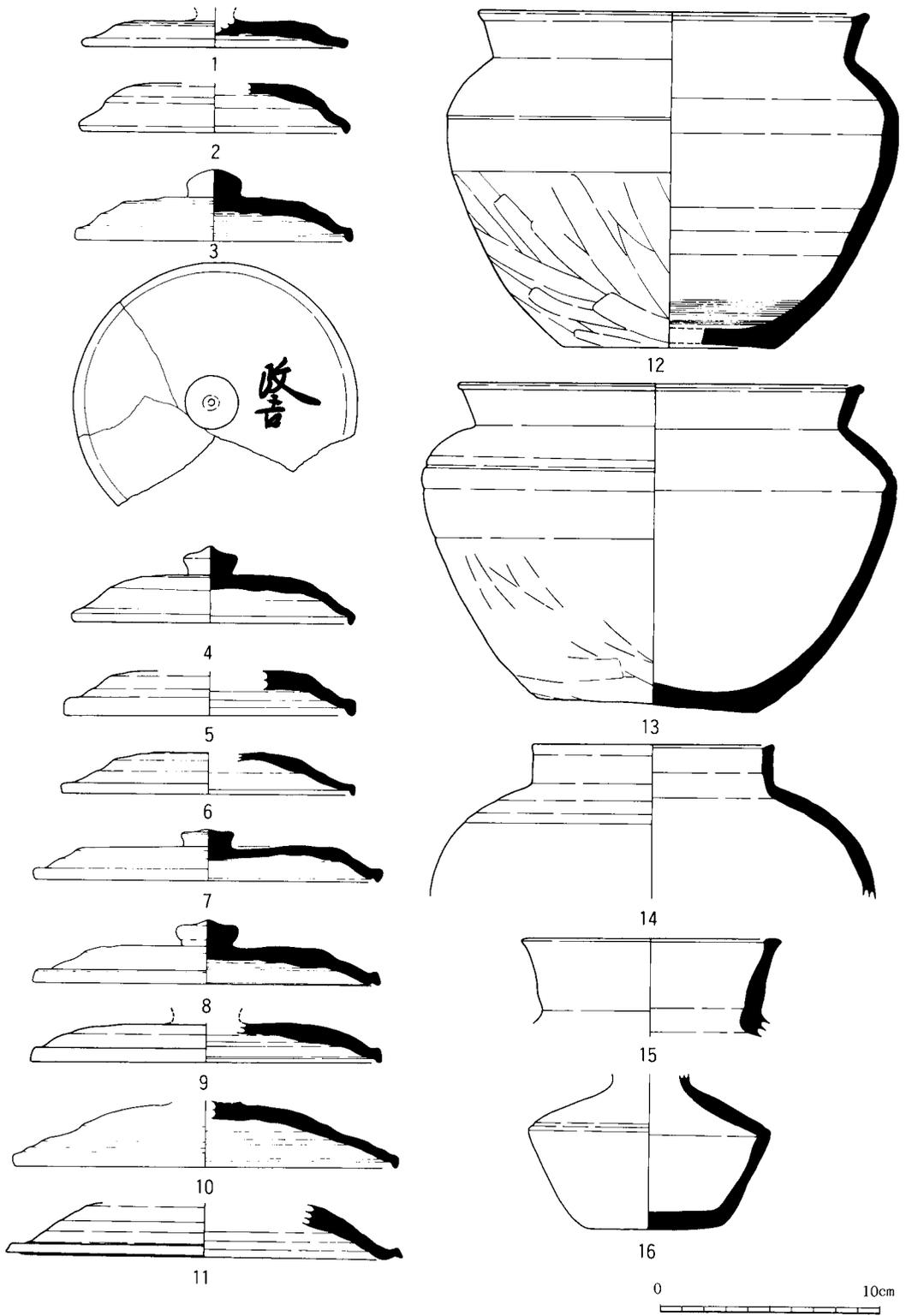
4 第4-2-5图 1号溝出土遺物実測図(南地区)



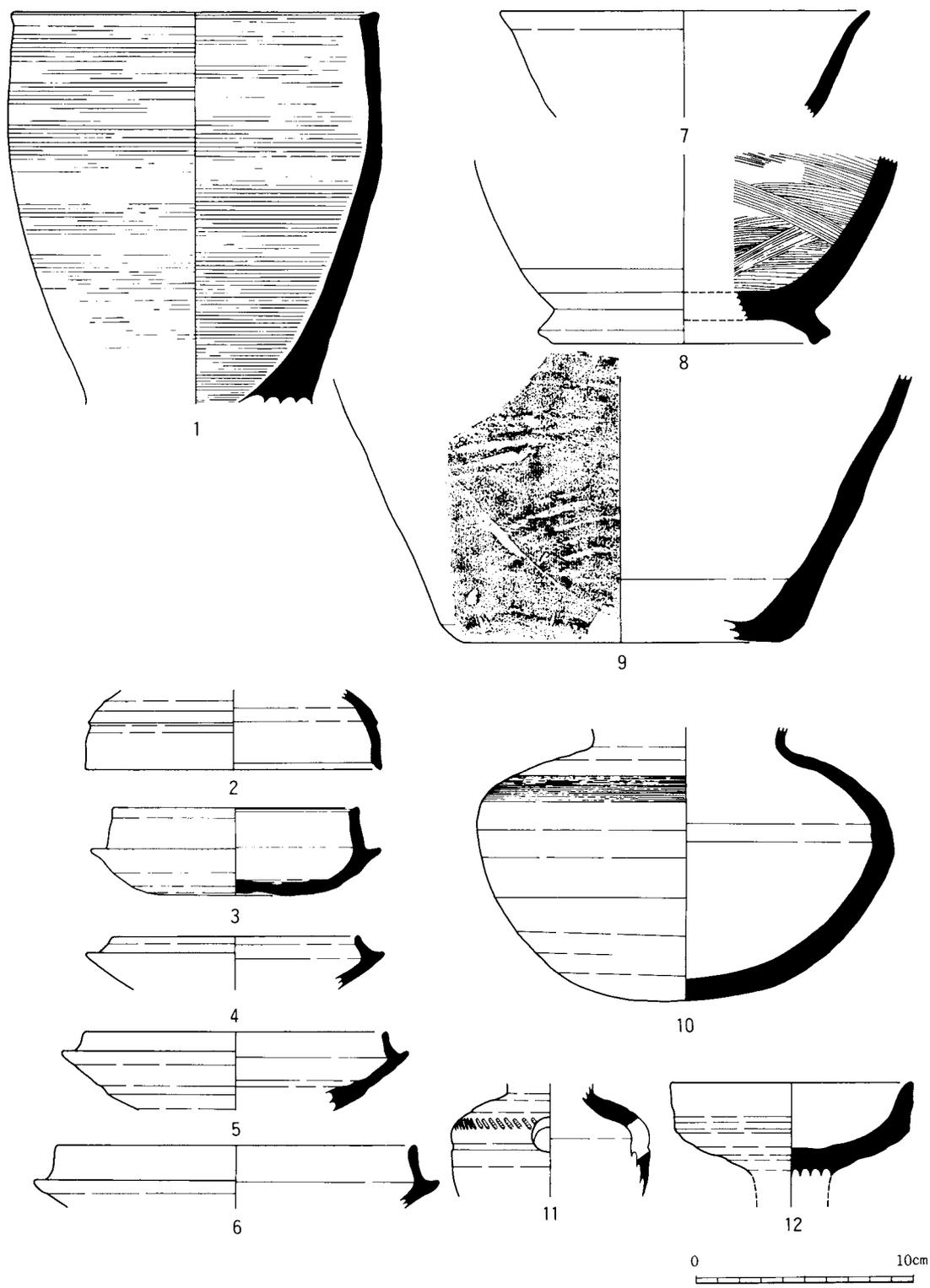
第4-2-6图 1号沟出土遗物实测图（南地区）



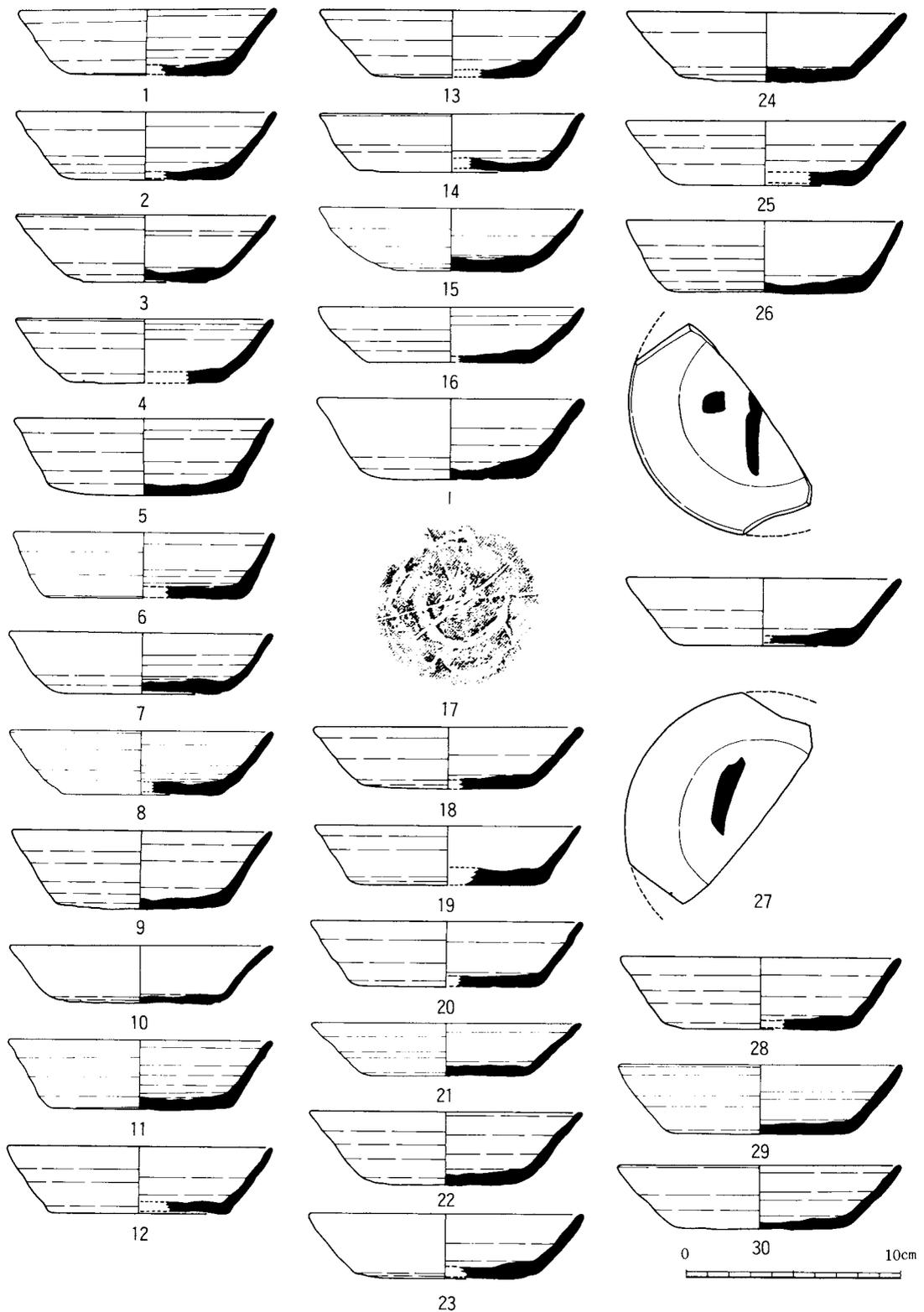
第4-2-7图 1号沟出土遗物实测图(南地区)



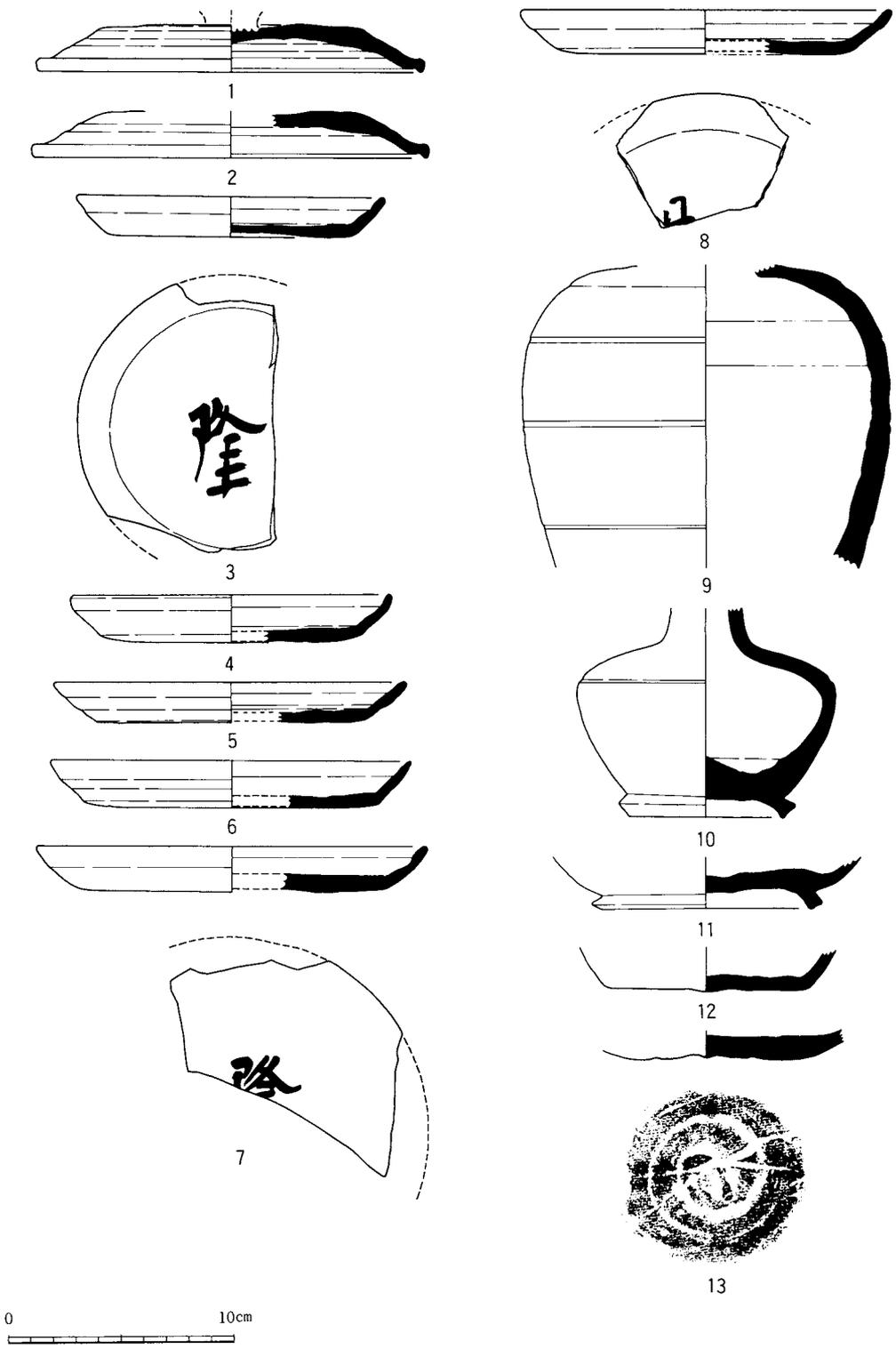
第4-2-8图 1号沟出土遗物实测图(南地区)



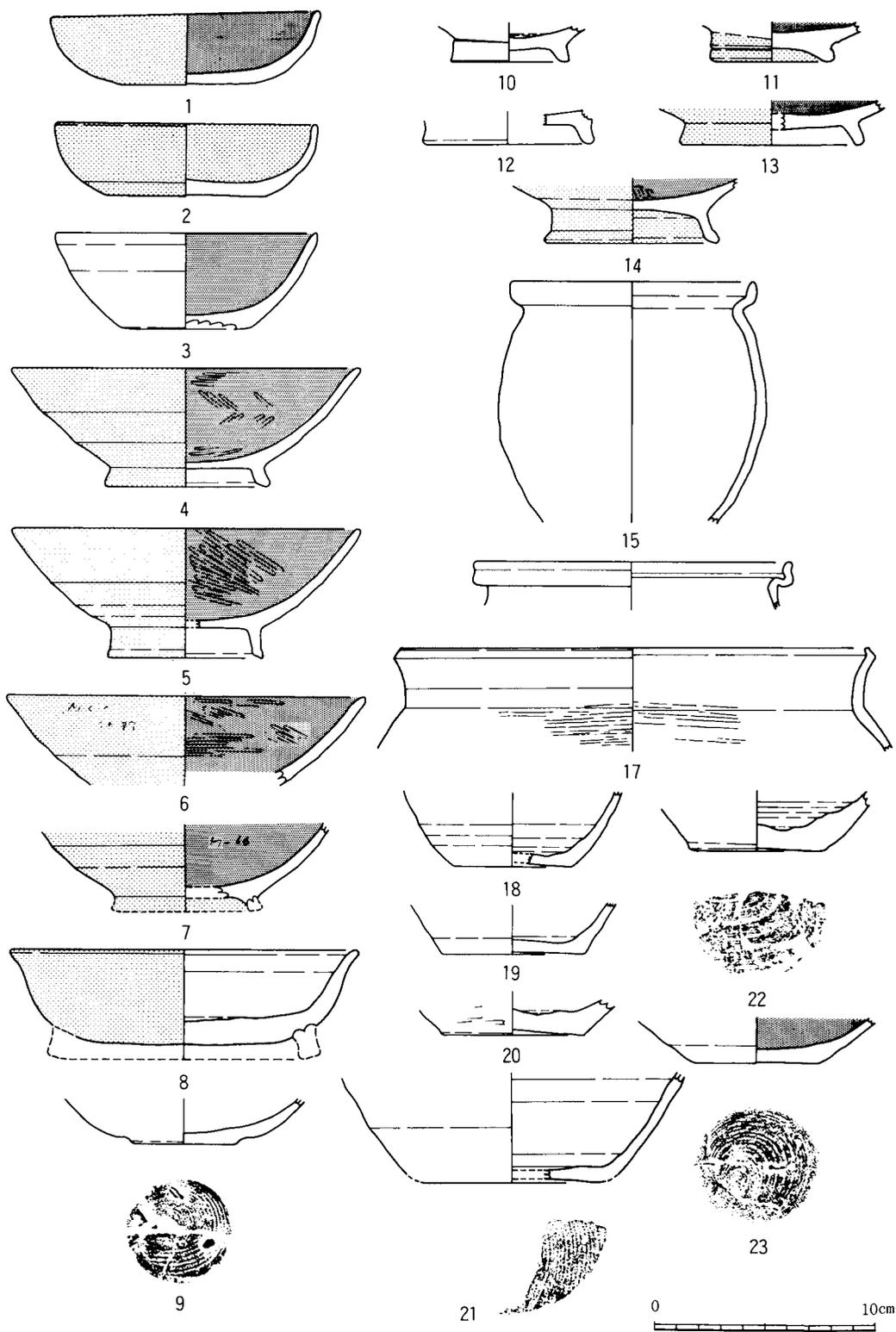
第4-2-9图 1号沟出土遗物实测图（南地区）



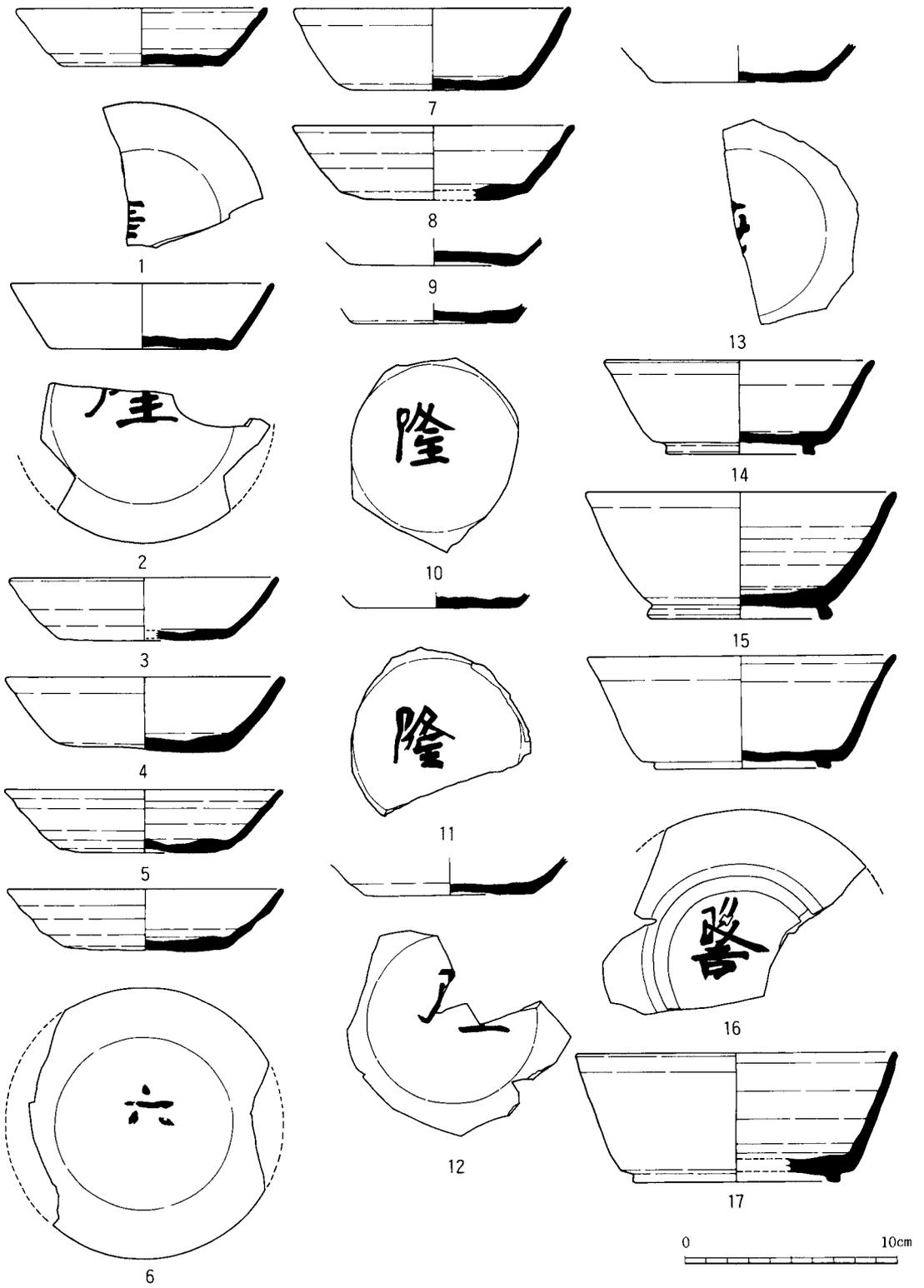
第4-2-10图 1号沟出土遗物实测图(中央区)



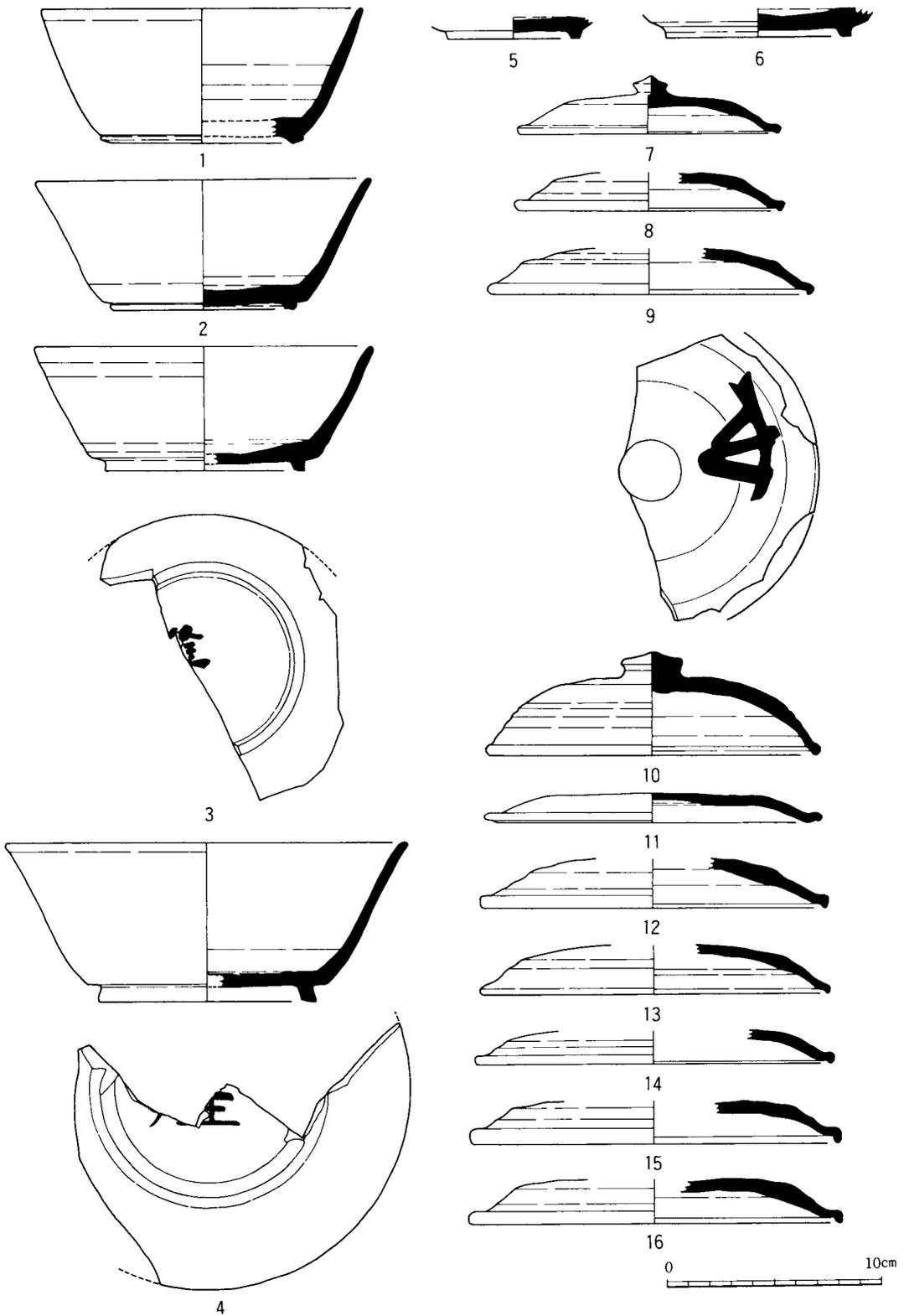
第4-2-11图 1号沟出土遗物实测图(中央区)



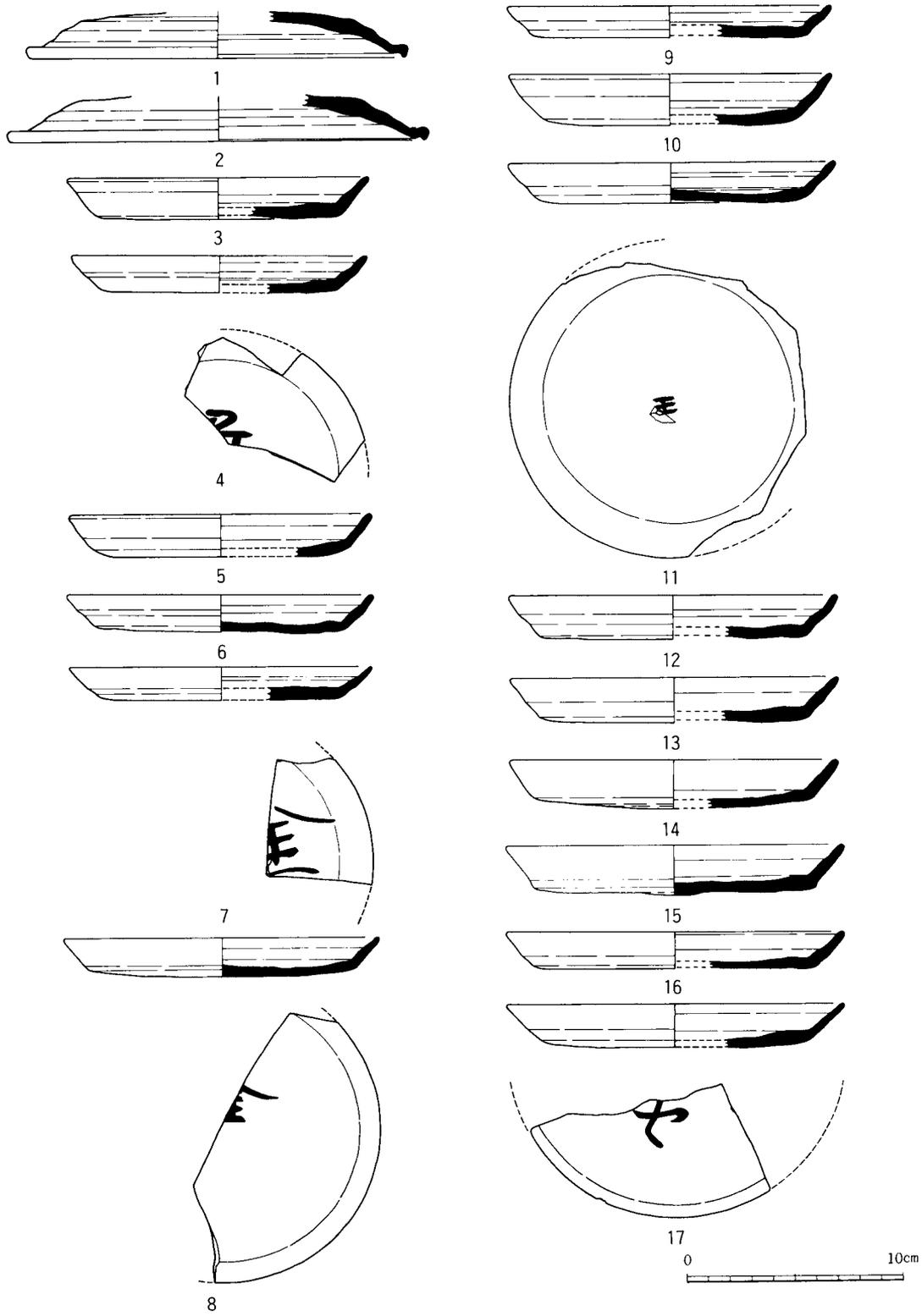
第4-2-12图 1号沟出土遗物实测图(中央区)



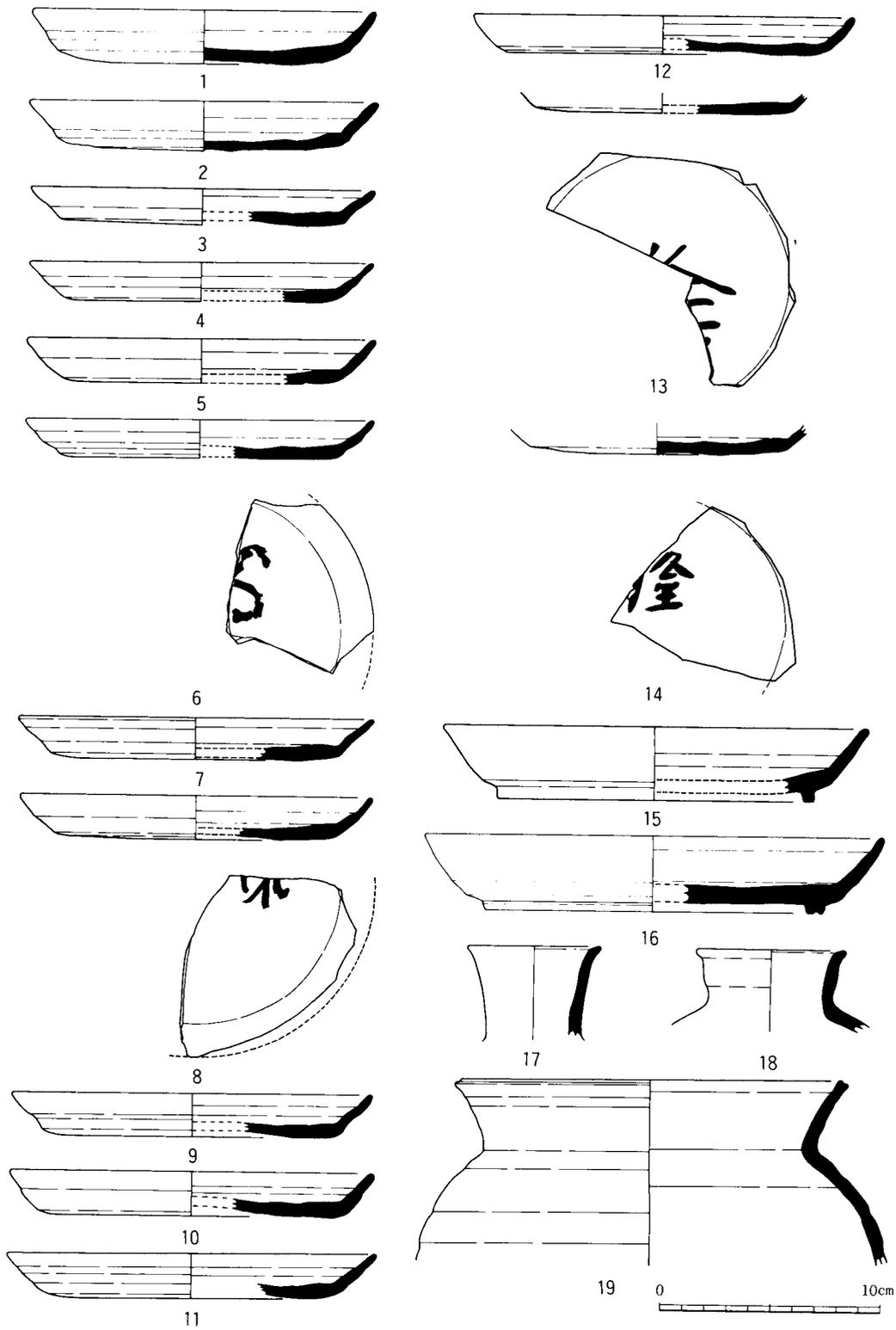
第4-2-13图 1号溝出土遺物実測図(北-2区)



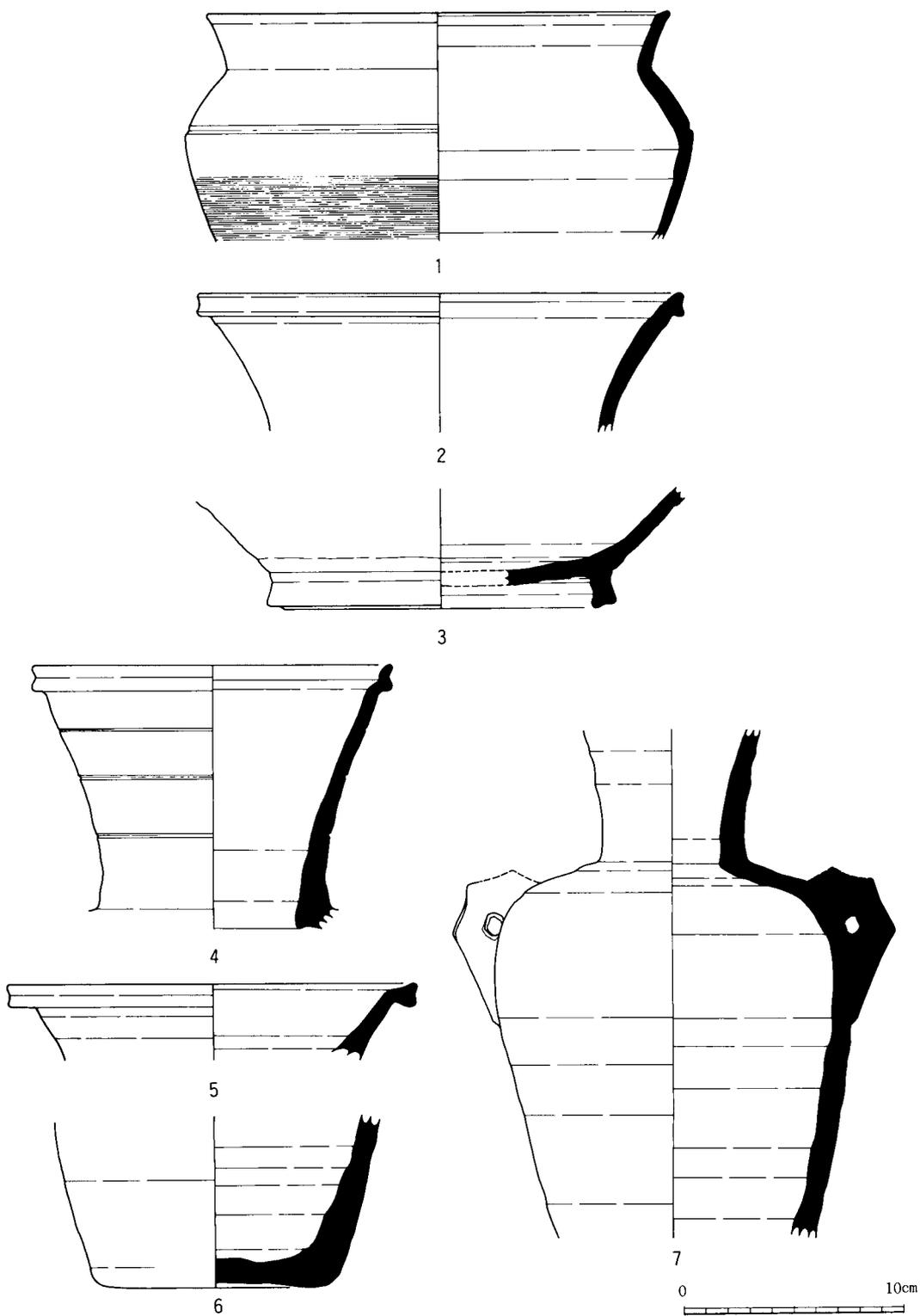
第4-2-14图 1号沟出土遗物实测图(北-2区)



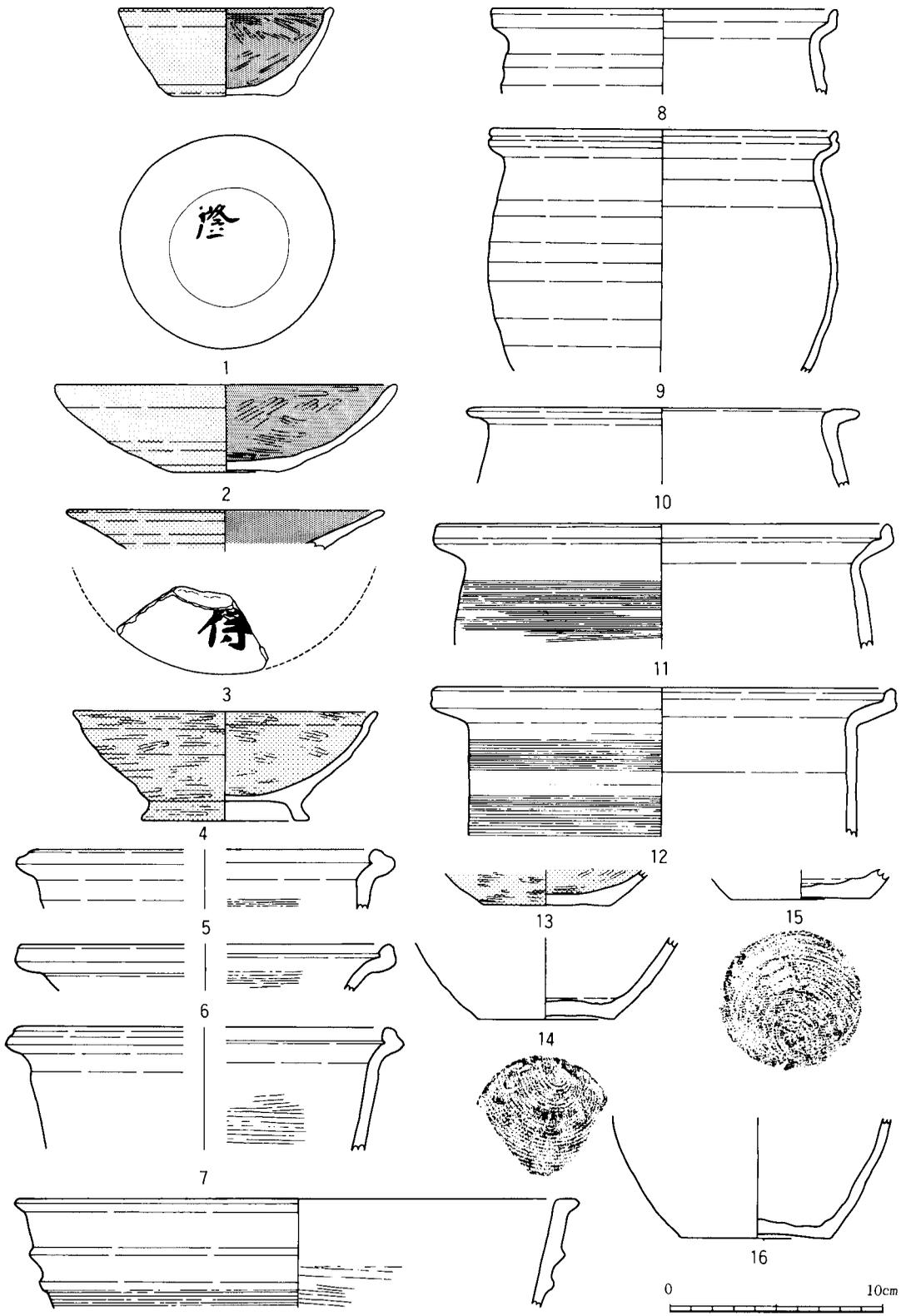
第4-2-15图 1号沟出土遗物实测图(北-2区)



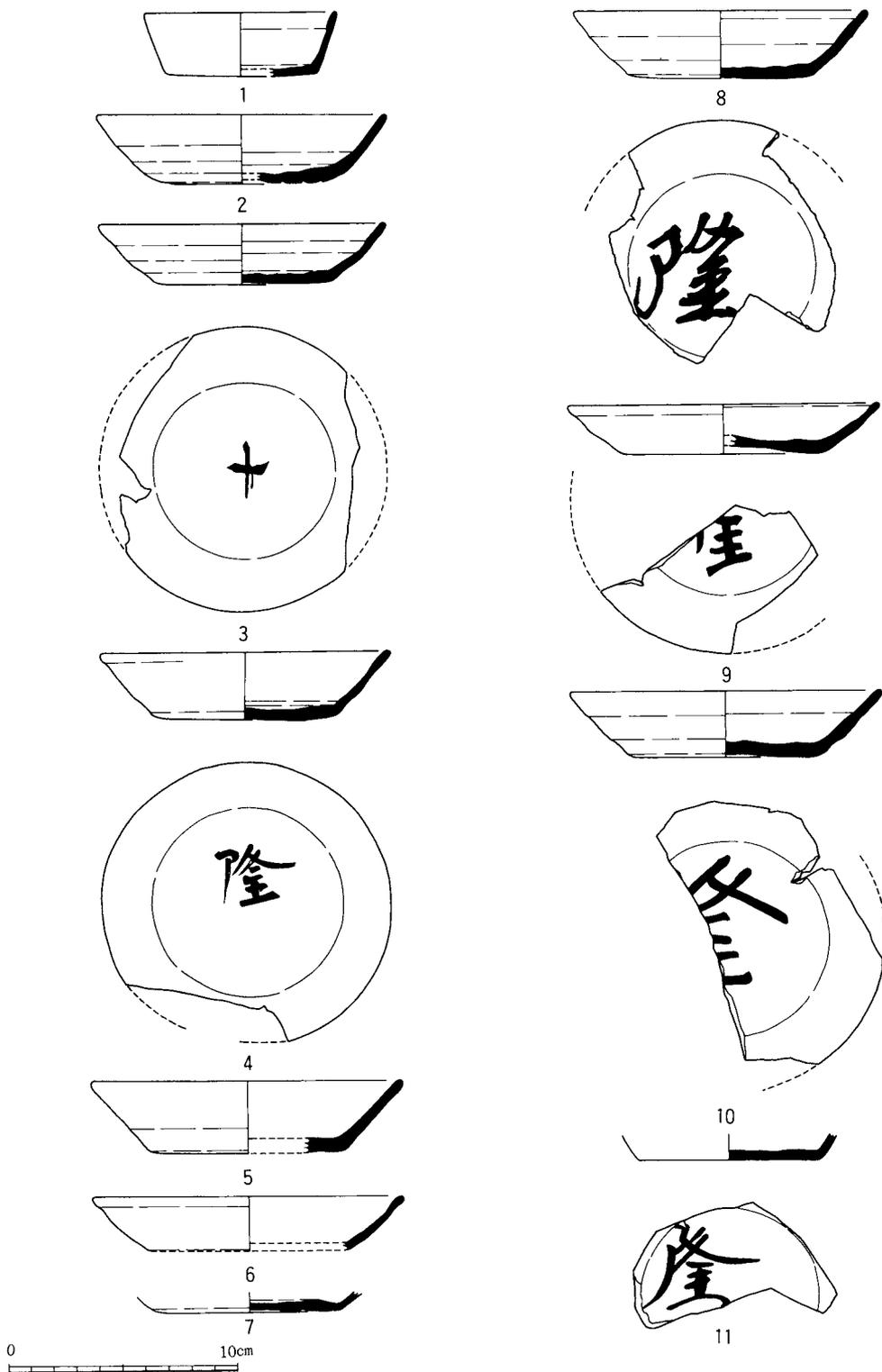
第4-2-16图 1号沟出土遗物实测图(北-2区)



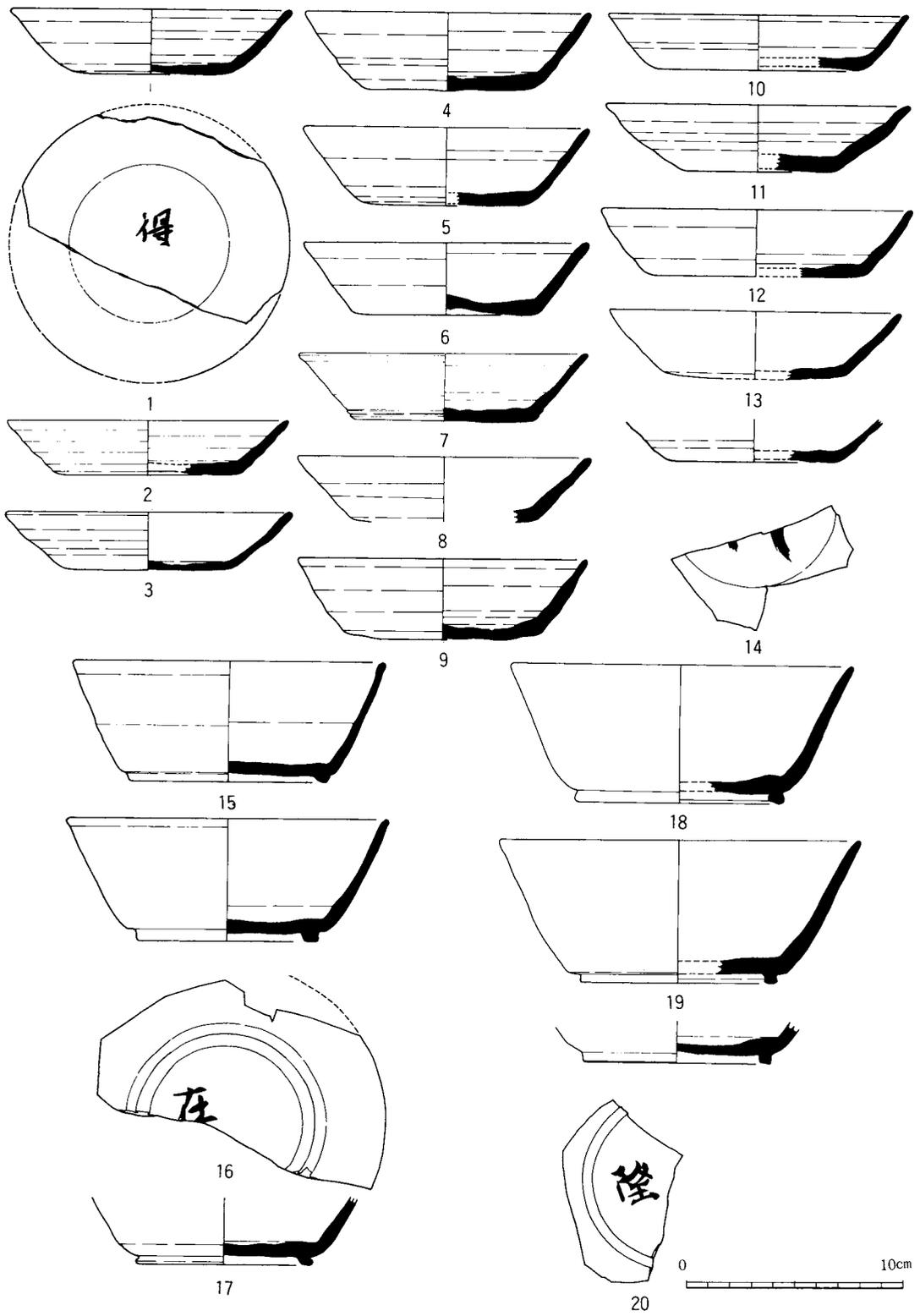
第4-2-17图 1号沟出土遗物实测图(北-2区)



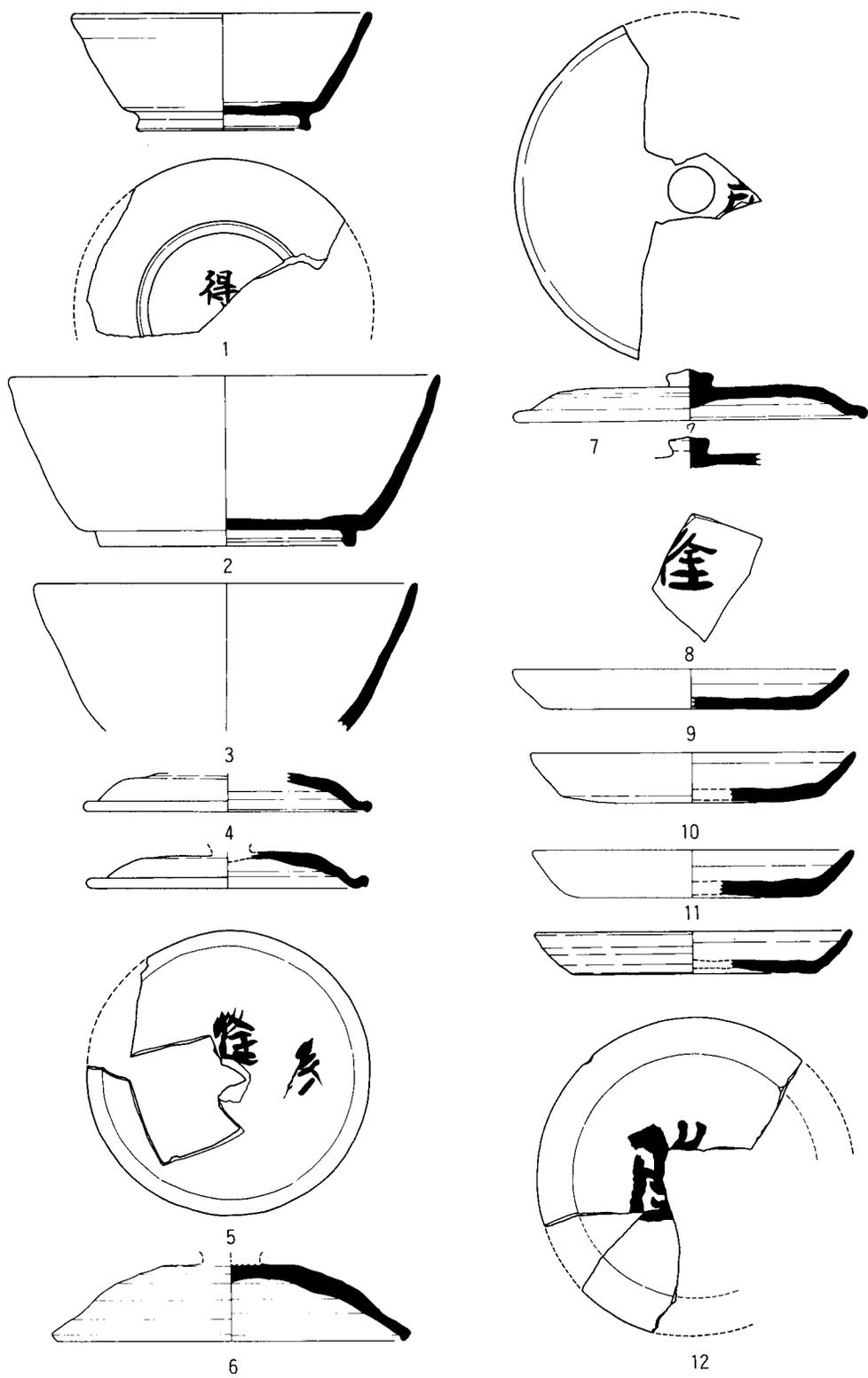
第4-2-18图 1号沟出土遗物实测图(北-2区)



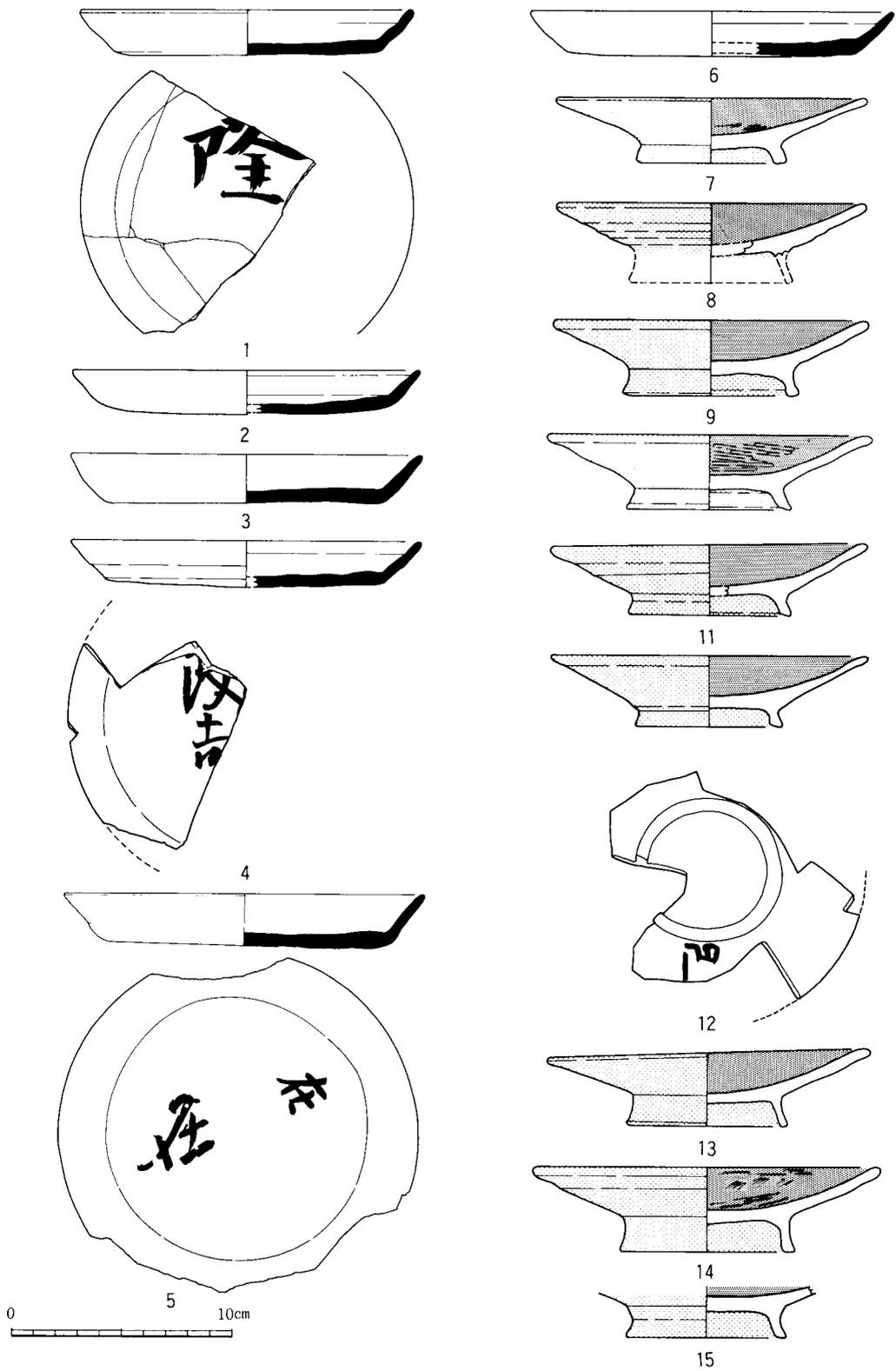
第4-2-19 图 1号溝出土遺物実測図(北-1区)



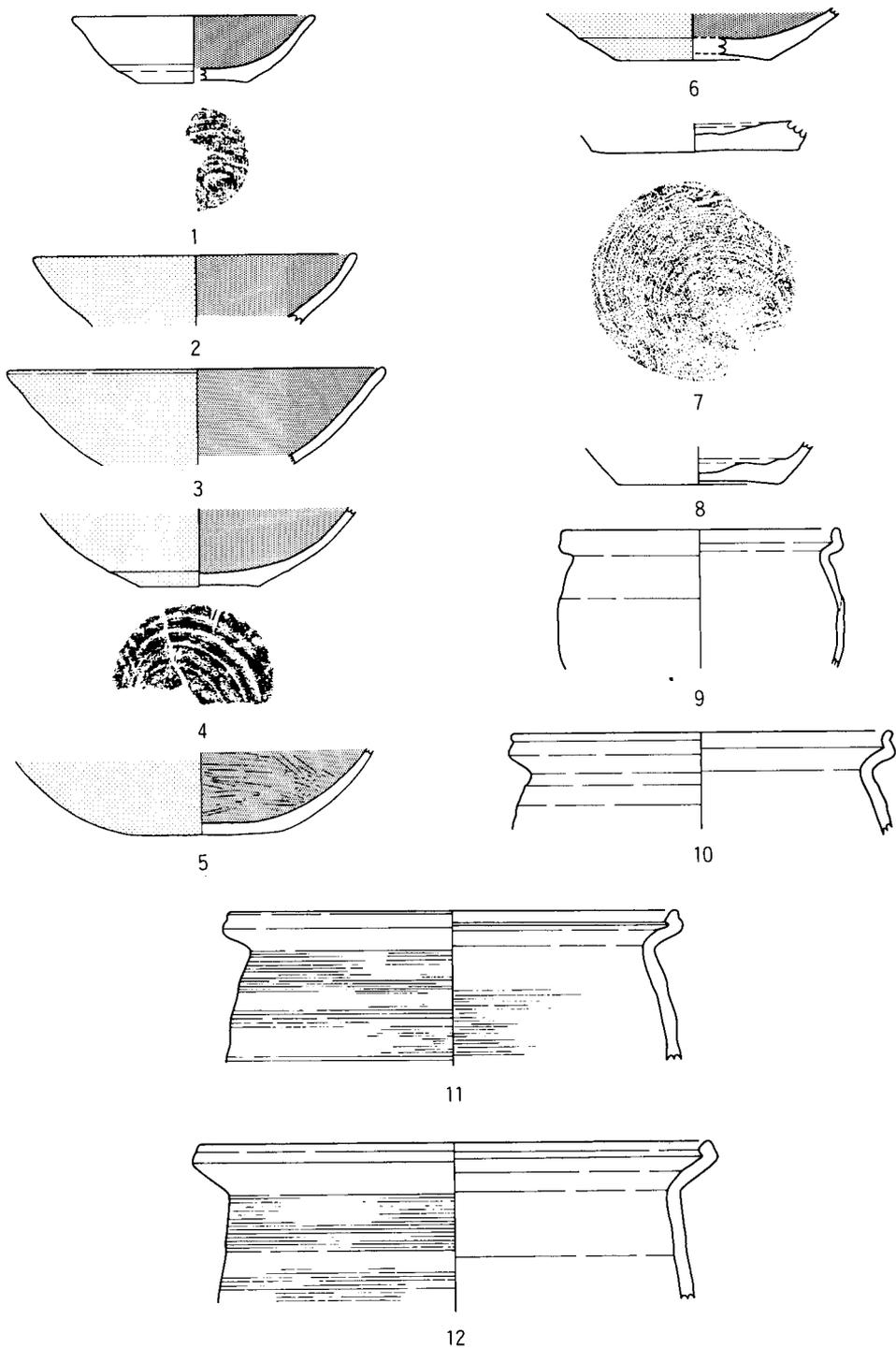
第4-2-20图 1号溝出土遺物実測図(北-1区)



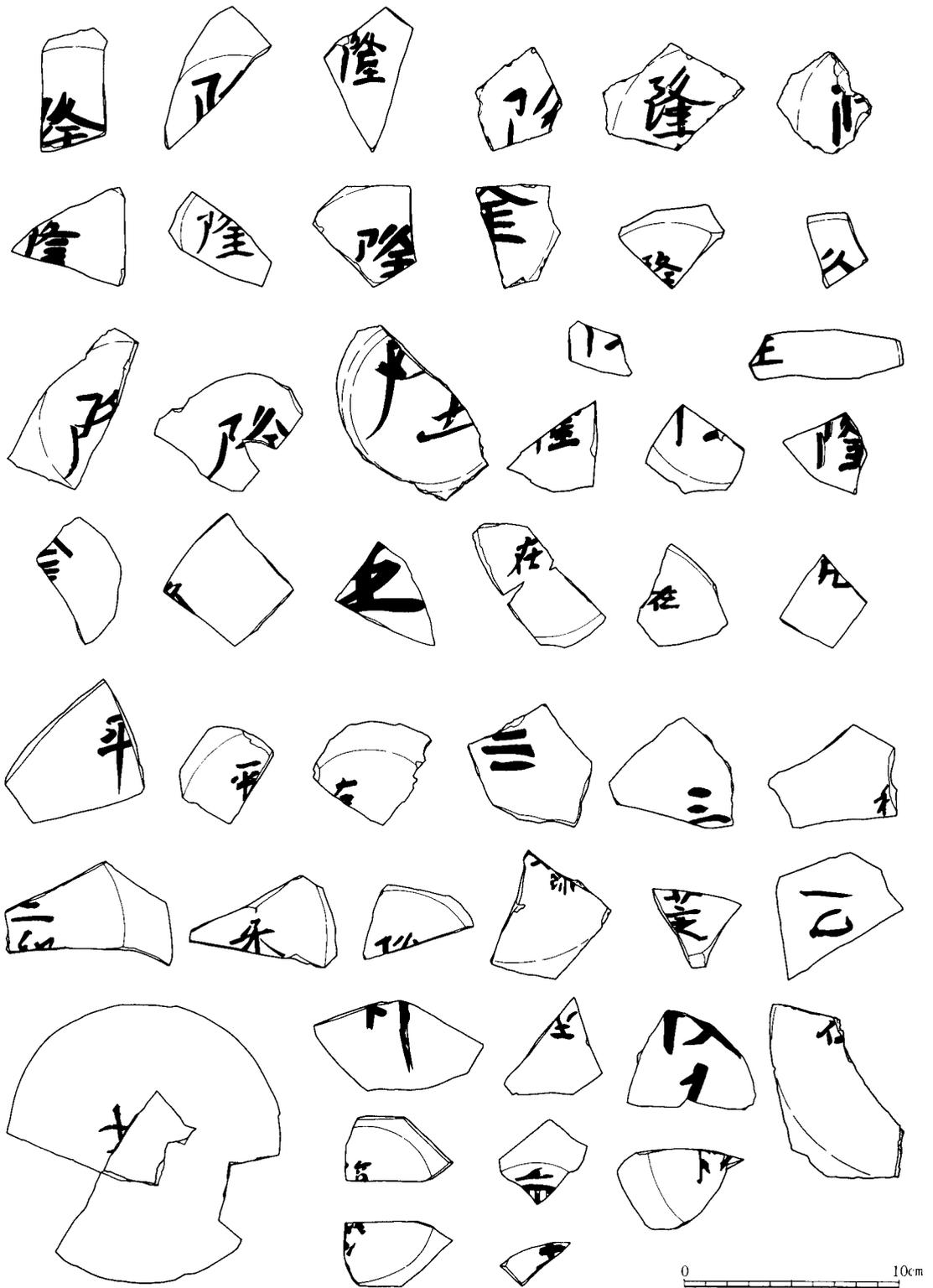
第4-2-21图 1号溝出土遺物実測図(北-1区)



第4-2-22図 1号溝出土遺物実測図（北-1区）



第4-2-23图 1号溝出土遺物実測図(北-1区)



第4-2-24 高堂遺跡出土墨書土器

## 観察表（奈良・平安期の遺物）

- 1 観察表は、田島が各項目ごとに、サンプルを抽出し、サンプルとの同定、表作成を山岸康子、本田美紀が行った。
- 2 依存率は、実測図で図化した範囲に対する依存率で示した。
- 3 須恵器、土師器の色調・胎土は以下の区分に従った。

### 須恵器

色調 A 酸化焼成部分をもつ褐灰色、B 灰白色、C 灰色、D くすんだ灰色、E 灰紫に近い暗灰色、F 暗灰色

#### 胎土

- A群 定量のL砂を含む多量の砂礫を含有する。素地は粗く粉っぽい。
- B群 砂礫は比較的少なく、L砂は含まない。素地はA群に共通するものと、やや緻密で粉っぽいものとみられ、2分できる。
- C群 素地が粘土ばい点で他の群と大きく異なる。砂礫はほとんど目だたない。
- D群 B・C群と共通の素地、混和剤をもつと推定される一群。やや灰紫色に近い発色をもち、赤色酸化粒の斑点が吹き出すものが多い。B・C群とは、焼成ぐわいの違いと思われる。

### 土師器 供膳器

色調 A 淡褐色、B 黄褐色、C くすんだ黄褐色

#### 胎土

- A群 淡褐色の発色をもち、砂礫を比較的多く混和したものが多い。生地は粉っぽい。一部に海绵骨片をごく少量含むものがみられる。当該遺跡ではもっとも頻度が高い。
- B群 A同様淡褐色の発色を基調に部分的に、黄褐色に発色。他の群と比較して器壁の依存度良好。やや大きな砂礫を含み、胎土は粘性が強い。
- C群 高堂遺跡に特徴的な黄褐色の発色をもつ。胎土はやや粉っぽい。
- D群 黄褐色を基調とする点では、C群に近いが、A群、次のE群との中間的な発色をもつ。砂礫の混和は総体的に多く、粒径はA群に比較してやや大きい。造作のあらいものがめだつ。
- E群 他の群とは一見して識別可能な、くすんだ黄褐色を呈す。砂礫は多く、大粒のものが目だつ。

### 土師器煮炊具等

色調 A 淡褐色、B 燈褐色、C 黄褐色、D 暗褐色

#### 胎土

- A群 通常、淡褐色ないし燈褐色の発色をもち、細砂礫を比較的多く混和したもの。生地は粉っぽい。供膳器のA群に対応する可能性が高い。
- B群 暗褐色に発色するものが多い。比較的大きな砂粒をふくむ。素地は粘性が強い。
- C群 供膳器C群の、高堂遺跡に特徴的な黄褐色の発色をもつものに近い。砂礫は比較的目だたない。胎土はやや粉っぽい。

第4-2-5表 1号溝出土土器観察表（第4-2-1図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 南	杯A	11.6	3.2		C	C	1.00	外底墨書
2	3次1溝 南	杯A	11.9	3.3		A	B	0.50	
3	3次1溝 南	杯A	12.0	3.5		A	C	1.00	
4	3次1溝 南	杯A	12.2	4.3		C	C.E	1.00	
5	3次1溝 南	杯A	12.2	4.1		B	B	1.00	
6	3次1溝 南	杯A	12.2	3.6		C	C	0.50	外底墨書
7	3次1溝 南	杯A	12.2	3.1		B	B	0.75	外底墨書
8	3次1溝 南	杯A	12.2	3.4		C	B	1.00	
9	3次1溝 南	杯A	12.2	3.1		B	A	0.66	外底墨書
10	3次1溝 南	杯A	12.2	3.4		B	C	0.75	外底墨書
11	3次1溝 南	杯A	12.4	3.0		B	C	1.00	
12	3次1溝 南	杯A	12.5	3.5		B	B.C	1.00	外底墨書
13	3次1溝 南	杯A	12.6	3.9		B	C	0.75	
14	3次1溝 南	杯A	12.6	2.8		B	C	0.12	
15	3次1溝 南	杯A	12.6	3.0		B	C	0.66	外底墨書
16	3次1溝 南	杯A	12.6	3.5		B	C	0.25	

第4-2-6表 1号溝出土土器觀察表 (第4-2-2図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	盤A	15.6	2.5		B	E	1.00	外底墨書
2	3次1溝南	盤A	15.8	2.0		C	B	0.33	
3	3次1溝南	盤A	16.5	2.2		C	C	0.75	外底墨書
4	3次1溝南	盤A	16.0	2.1		B	C	1.00	外底墨書
5	3次1溝南	盤A	16.2	2.3		C	F	0.25	
6	3次1溝南	盤A	16.3	2.3		B	C	0.33	
7	3次1溝南	盤A	16.4	2.5		C	C	0.75	
8	3次1溝南	盤A	16.3	2.2		B	C	0.50	外底墨書
9	3次1溝南	盤A	16.6	2.4		C	C	0.12	
10	3次1溝南	盤A	16.5	2.8		C	B.C	0.50	外底墨書
11	3次1溝南	盤A	16.9	2.1		C	C	0.25	
12	3次1溝南	盤A	17.0	2.1		B	B.C	0.66	

第4-2-7表 1号溝出土土器觀察表 (第4-2-3図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	杯A	13.6	3.2		B	B	0.25	
2	3次1溝南	杯A	13.5	3.2		C	B	1.00	
3	3次1溝南	杯A	14.2	3.9		B	B	0.66	
4	3次1溝南	杯A	13.6	3.5					外底墨書
5	3次1溝南	杯A	14.0	3.8		B	B	0.66	外底墨書
6	3次1溝南	杯A				B	C	1.00	外底墨書
7	3次1溝南	杯A				C	B	0.25	外底墨書
8	3次1溝南	杯B	9.6	4.8	6.1				
9	3次1溝南	杯B	11.2	4.0	6.2	A	D	1.00	外底墨書
10	3次1溝南	杯B	11.4	4.4	6.4	D	E	0.25	外底墨書
11	3次1溝南	杯B	12.0	4.0	7.5	A.B	F	0.75	
12	3次1溝南	杯B	12.1	4.1	8.1	C	C.D	0.50	
13	3次1溝南	杯B	12.0	4.4	7.0				
14	3次1溝南	杯B	12.3	4.5	7.4	C	C	0.75	
15	3次1溝南	杯B	12.2	4.5	7.3	D	E	0.50	
16	3次1溝南	杯B	13.1	5.1	7.5	A	C.D	0.50	外底墨書
17	3次1溝南	杯B	14.8	4.3	8.5	B.C	C	0.33	
18	3次1溝南	杯B	15.2	4.1	9.4	A	D	0.33	

第4-2-8表 1号溝出土土器観察表（第4-2-4図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	杯B	15.3	5.9	10.8	A	D	1.00	
2	3次1溝南	杯B	15.7	4.7	9.5	D	E	0.75	
3	3次1溝南	杯B	16.0	6.3	9.5	B.C	A.B	0.50	
4	3次1溝南	杯B	15.7	6.3	9.2	B	F	0.50	外底墨書
5	3次1溝南	杯B	15.9	5.9	10.4	C.D	C.E	0.75	
6	3次1溝南	杯B	16.8	6.8	9.8	B	C	0.50	外底墨書
7	3次1溝南	杯B			6.9	B	C	0.66	外底墨書
8	3次1溝南	杯B			6.5	B.C	C.D	0.33	外底墨書
9	3次1溝南	杯B			7.1	D	E	0.75	
10	3次1溝南	杯B			7.1	A	D	0.33	
11	3次1溝南	杯B			7.9	B.C	C	0.25	
12	3次1溝南	杯B			8.2	D	E	0.50	
13	3次1溝南	杯B			8.2	C	C	0.33	
14	3次1溝南	杯B			8.2	C	C.D	1.00	外底墨書

第4-2-9表 1号溝出土土器観察表（第4-2-5図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	杯B			8.0	B	C	0.75	
2	3次1溝南	杯B			8.2	D	E	0.05	
3	3次1溝南	杯B			8.4	B.D	C	0.12	
4	3次1溝南	杯B			9.8	C	C	0.50	外底墨書
5	3次1溝南	杯B			9.4	A	B	0.75	
6	3次1溝南	杯B			9.6	B	C	0.33	
7	3次1溝南	杯B			10.5	B	C	0.05	
8	3次1溝南	杯B			10.7	B	C.D	0.05	
9	3次1溝南	杯B			7.8				外底墨書
10	3次1溝南	盤A	15.8	2.1		B	C	0.12	
11	3次1溝南	盤A	14.8	1.9		B	C	1.00	外底墨書
12	3次1溝南	盤A	14.8	2.0		A	C	0.25	
13	3次1溝南	盤A	15.0	2.7					外底墨書
14	3次1溝南	盤A	15.4	2.1		B	C	0.33	
15	3次1溝南	盤A	15.8	2.1					

第4-2-10表 1号溝出土土器観察表（第4-2-6図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	杯A	12.5	3.6		B	C	0.75	外底墨書
2	3次1溝南	杯A	12.4	3.8		C	B.C	0.33	外底墨書
3	3次1溝南	杯A	12.6	2.9		C	C	0.25	外底墨書
4	3次1溝南	杯A	12.8	3.4		A	B	0.75	
5	3次1溝南	杯A	12.8	3.2		C	C	0.66	
6	3次1溝南	杯A	12.8	3.4		C	A	0.75	外底墨書
7	3次1溝南	杯A	12.9	3.4		B	B.C	0.75	外底墨書
8	3次1溝南	杯A	13.3	3.9		B	C	0.33	
9	3次1溝南	杯A	13.1	3.3		C	B	0.75	外底墨書
10	3次1溝南	杯A	13.4	3.8					外底墨書
11	3次1溝南	杯A	13.6	3.6		B	B	1.00	外底墨書
12	3次1溝南	杯A	13.6	3.4		B	B	0.66	外底墨書

第4-2-11表 1号溝出土土器観察表（第4-2-7図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	盤A	17.0	2.5		B	C	0.33	
2	3次1溝南	盤A	17.0	2.0		C	C	0.75	
3	3次1溝南	盤A	17.2	1.3		B	C	0.12	外底墨書
4	3次1溝南	盤A	17.4	1.9		C	C	0.12	
5	3次1溝南	盤A	17.1	2.4		B	C	0.75	外底墨書
6	3次1溝南	盤A	17.5	2.7		B	B	0.66	
7	3次1溝南	盤A	17.8	3.1		B	C	0.25	
8	3次1溝南	盤A	18.3	2.2					
9	3次1溝南	盤A				B	C	0.12	外底墨書
10	3次1溝南	盤A	15.1	2.3		B	C	0.12	
11	3次1溝南	盤A	15.2	1.9		A	E	0.12	
12	3次1溝南	盤B	18.0	3.5		B	E	0.75	外底墨書
13	3次1溝南	盤B	19.2	3.5					

第4-2-12表 1号溝出土土器観察表（第4-2-8図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	蓋	11.8			C	E	0.50	
2	3次1溝南	蓋	12.0			C	B.C	0.25	
3	3次1溝南	蓋	12.6	3.3		C	C	0.25	
4	3次1溝南	蓋	12.7	3.5					天井墨書
5	3次1溝南	蓋	13.1			B	C	0.33	
6	3次1溝南	蓋	13.4						
7	3次1溝南	蓋	15.6	2.4					
8	3次1溝南	蓋	15.8	2.9		C	C	0.66	
9	3次1溝南	蓋	15.9			B	C	0.12	
10	3次1溝南	蓋	17.6			A	E	0.12	
11	3次1溝南	蓋	16.6			B	B.C	0.25	
12	3次1溝南	鉢	17.6	15.4		B.C	C	0.33	
13	3次1溝南	鉢	18.6	14.7					
14	3次1溝南	壺	10.8			B	B.C	0.33	
15	3次1溝南	壺	11.0			C	C.F	0.25	
16	3次1溝南	瓶				B.C	C.F	1.00	

第4-2-13表 1号溝出土土器観察表（第4-2-9図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝南	鉢	16.8						
2	3次1溝南	杯H	13.6			B	C	0.12	
3	3次1溝南	杯H	11.3	4.1		D	C	0.25	
4	3次1溝南	杯H	11.3			D	E	0.25	
5	3次1溝南	杯H	13.9			B	C	0.25	
6	3次1溝南	杯H	16.6			B	E	0.25	
7	3次1溝南	杯	17.0						
8	3次1溝南	瓶			12	B.C	B	0.25	
9	3次1溝南	瓶				B	C.F	0.25	
10	3次1溝南	壺							
11	3次1溝南	甗				B	C.F	0.25	
12	3次1溝南	高杯	11.0			B	E	0.75	

第4-2-14表 1号溝出土土器観察表(第4-2-10図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 中央	杯A	12.0	3.0		B	D	0.75	
2	3次1溝 中央	杯A	12.0	3.2		A	C	0.25	
3	3次1溝 中央	杯A	12.1	3.2		A	C.D	0.33	
4	3次1溝 中央	杯A	11.9	3.0		B	C	0.25	
5	3次1溝 中央	杯A	12.0	3.6		B	B.C	0.75	
6	3次1溝 中央	杯A	12.1	3.1		B	D.F	0.33	
7	3次1溝 中央	杯A	12.2	2.9		C	C	1.00	
8	3次1溝 中央	杯A	12.2	3.0		B.C	C.D	0.50	
9	3次1溝 中央	杯A	12.2	3.7		B	C.D	1.00	
10	3次1溝 中央	杯A	12.2	2.7		B	D	0.33	
11	3次1溝 中央	杯A	12.2	3.3		B	B.C	1.00	
12	3次1溝 中央	杯A	12.4	3.2		B.C	C	0.12	
13	3次1溝 中央	杯A	12.4	3.1		C	C	0.25	
14	3次1溝 中央	杯A	12.4	2.7		B.C	C	0.25	外底墨痕
15	3次1溝 中央	杯A	12.4	3.0		C	C	0.75	
16	3次1溝 中央	杯A	12.5	2.6		A	E	0.66	
17	3次1溝 中央	杯A	12.4	3.8		B	C	1.00	
18	3次1溝 中央	杯A	12.5	2.9		A	C	0.33	外底墨書
19	3次1溝 中央	杯A	12.5	2.8					
20	3次1溝 中央	杯A	12.7	3.1		C	C	0.12	
21	3次1溝 中央	杯A	12.7	2.5		A	D	0.25	
22	3次1溝 中央	杯A	12.8	3.5		A	B	0.50	
23	3次1溝 中央	杯A	12.8	3.1		A	B	0.25	
24	3次1溝 中央	杯A	12.9	3.2		B	B	0.33	
25	3次1溝 中央	杯A	12.9	3.0		B.C	C	0.12	
26	3次1溝 中央	杯A	12.8	3.4					
27	3次1溝 中央	杯A	12.7	3.2		C	C	0.50	内底・外底墨書
28	3次1溝 中央	杯A	12.9	3.4		B	B	0.12	
29	3次1溝 中央	杯A	13.0	3.3		A	C	0.75	
30	3次1溝 中央	杯A	13.0	3.1		A	B	0.66	

第4-2-15表 1号溝出土土器観察表(第4-2-11図対応)

番号	出土地点	器種	法量			胎土	色調	遺存率	備考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 中央	蓋	16.8			B	B.C	0.25	内面墨痕?
2	3次1溝 中央	蓋	17.3			C	B.C	0.25	
3	3次1溝 中央	盤A	13.5	1.8		B	C	0.66	外底墨書
4	3次1溝 中央	盤A	14.0	2.1		B	C	0.25	
5	3次1溝 中央	盤A	15.4	1.8		C	C	0.25	
6	3次1溝 中央	盤A	15.8	2.1		B	B.C	0.12	
7	3次1溝 中央	盤A	17.1	2.0		B	A.B	0.25	外底墨書
8	3次1溝 中央	盤A	16.2	1.9		A	C.E	0.12	外底墨書
9	3次1溝 中央	瓶				C.D	C.E	0.33	
10	3次1溝 中央	瓶			6.8	C.D	C.E	0.33	
11	3次1溝 中央	杯B			9.2	D	E	1.00	
12	3次1溝 中央	杯A							
13	3次1溝 中央	杯A				A	B.C	1.00	

第4-2-16表 1号溝出土土器観察表(第4-2-12図対応)

番号	出土地点	器種	法量			胎土	色調	遺存率	備考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 中央	碗A	12.0	3.2		C	C	0.66	内黒外赤
2	3次1溝 中央	碗A	11.8	3.3		A	A	1.00	内・外赤
3	3次1溝 中央	碗A	11.9	4.3		C	B	0.33	内黒
4	3次1溝 中央	碗B	15.8	5.4	7.2	D	B	0.33	内黒外赤
5	3次1溝 中央	碗B	15.6	5.9	7.0	D	B	0.33	内黒
6	3次1溝 中央	碗	16.2			D	B	0.05	内黒外赤
7	3次1溝 中央	碗B			6.1	D	B	0.33	内黒外赤
8	3次1溝 中央	杯B	15.7	5.0	11.2	C	B	0.05	内・外赤
9	3次1溝 中央	碗A				A	A	0.50	
10	3次1溝 中央	碗B			5.3	D	B	1.00	
11	3次1溝 中央	碗B			5.1	A	A	1.00	
12	3次1溝 中央	碗B			7.5	C	B	0.05	
13	3次1溝 中央	皿B?			7.8				内黒外赤
14	3次1溝 中央	碗B			7.7	E	C	0.75	内黒外赤
15	3次1溝 中央	甕	10.9		6.9	C	C	0.75	
16	3次1溝 中央	甕	14.2			B	B	0.50	
17	3次1溝 中央	甕	21.3			B	D	0.12	
18	3次1溝 中央	甕			5.3	A	B	0.50	
19	3次1溝 中央	甕			6.5	A	A	0.50	
20	3次1溝 中央	甕			6.4	B	D	0.75	
21	3次1溝 中央	甕			8.0	B	B	0.25	
22	3次1溝 中央	甕			5.6	C	D	0.50	
23	3次1溝 中央	碗A			5.5	C	C	0.75	内黒

第4-2-17表 1号溝出土土器観察表(第4-2-13図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	2次11溝 北-2	杯A	11.6	2.8		B	C、D	0.25	外底墨書
2	2次11溝 北-2	杯A	12.3	3.1		B	C、D	0.50	外底墨書
3	2次11溝 北-2	杯A	12.5	3.0		B	C	0.25	
4	2次11溝 北-2	杯A	12.8	3.6		B	A	1.00	
5	2次11溝 北-2	杯A	12.9	3.0		B	C	0.33	
6	2次11溝 北-2	杯A	12.8	2.9		B	B、C	0.75	外底墨書
7	2次11溝 北-2	杯A	13.0	3.9		A	F	0.12	
8	2次11溝 北-2	杯A	13.2	3.5		B	B	0.25	
9	2次11溝 北-2	杯A				B	C	0.75	
10	2次11溝 北-2	杯A							外底墨書
11	2次11溝 北-2	杯A				B	C	0.75	外底墨書
12	2次11溝 北-2	杯A				B	C	0.75	外底墨書
13	2次11溝 北-2	杯A				B	C	0.50	外底墨書
14	2次11溝 北-2	杯B	12.4	4.5	6.8				
15	2次11溝 北-2	杯B	14.4	6.1	8.3				
16	2次11溝 北-2	杯B	14.3	5.4	8.1				外底墨書
17	2次11溝 北-2	杯B	14.8	6.2	9.5	B	C	0.05	

第4-2-18表 1号溝出土土器観察表(第4-2-14図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	2次11溝 北-2	杯B	15.0	6.2	8.5				
2	2次11溝 北-2	杯B	15.6	6.0	8.5				
3	2次11溝 北-2	杯B	15.7	5.8	9.4	C	C	0.50	外底墨書
4	2次11溝 北-2	杯B	18.8	7.4	10.2	B	C、D	0.33	外底墨書
5	2次11溝 北-2	杯B			6.2	B	C	0.50	
6	2次11溝 北-2	杯B			8.6	C	C	0.12	
7	2次11溝 北-2	蓋	12.0	2.7		B	C	0.25	
8	2次11溝 北-2	蓋	12.2			B	B、C	0.12	
9	2次11溝 北-2	蓋	14.8			B	C	0.25	
10	2次11溝 北-2	蓋	15.2	4.8		B	E	0.33	天井墨書
11	2次11溝 北-2	蓋	14.4	1.4		A	D	0.75	
12	2次11溝 北-2	蓋	15.9			B	C	0.50	
13	2次11溝 北-2	蓋	16.0			A	C	0.05	
14	2次11溝 北-2	蓋	16.5			B	B、C	0.25	
15	2次11溝 北-2	蓋	17.0			B	C	0.12	
16	2次11溝 北-2	蓋	17.1			C	B、C	0.12	

第4-2-19表 1号溝出土土器観察表(第4-2-15図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	2次11溝 北-2	蓋	17.3			A	C	0.12	
2	2次11溝 北-2	蓋	19.6			B	C	0.12	
3	2次11溝 北-2	盤A	13.7	1.9		A	C.D	0.05	
4	2次11溝 北-2	盤A	13.6	1.8		B	C	0.12	外底墨書
5	2次11溝 北-2	盤A	13.8	2.0		B	C	0.25	
6	2次11溝 北-2	盤A	14.0	1.8					
7	2次11溝 北-2	盤A	13.9	1.6		B	C.D	0.12	外底墨書
8	2次11溝 北-2	盤A	14.5	1.8		B	C	0.33	外底墨書
9	2次11溝 北-2	盤A	14.8	1.5		A	C.F	0.25	
10	2次11溝 北-2	盤A	14.7	2.4		C	C	0.25	
11	2次11溝 北-2	盤A	14.9	1.9		A	C	0.75	外底墨書
12	2次11溝 北-2	盤A	14.9	2.1		B	F	0.25	
13	2次11溝 北-2	盤A	15.0	2.1		B	C	0.12	
14	2次11溝 北-2	盤A	14.9	2.3		A	C	0.25	
15	2次11溝 北-2	盤A	15.3	2.3		B	C	0.50	
16	2次11溝 北-2	盤A	15.4	1.2		B	C	0.25	
17	2次11溝 北-2	盤A	15.4	2.0		B	C	0.25	外底墨書

第4-2-20表 1号溝出土土器観察表(第4-2-16図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	2次11溝 北-2	盤A	15.6	2.4		B	C	0.25	
2	2次11溝 北-2	盤A	15.8	2.3		B	C	0.50	
3	2次11溝 北-2	盤A	15.7	1.7		D	E	0.12	
4	2次11溝 北-2	盤A	15.6	1.8		B	B.C	0.05	
5	2次11溝 北-2	盤A	15.8	2.0		A	C	0.12	
6	2次11溝 北-2	盤A	15.8	1.8		A	C	0.12	外底墨書
7	2次11溝 北-2	盤A	16.2	1.9		B	C	0.25	
8	2次11溝 北-2	盤A	16.0	2.0		B	C	0.12	外底墨書
9	2次11溝 北-2	盤A	16.4	2.0		B	C	0.12	
10	2次11溝 北-2	盤A	16.5	2.1		B	C	0.12	
11	2次11溝 北-2	盤A	16.8	2.1		C	C	0.05	
12	2次11溝 北-2	盤A	17.2	1.8		C	C	0.12	外底墨書
13	2次11溝 北-2	盤A				B	C	0.50	外底墨書
14	2次11溝 北-2	盤A				B	C	0.25	外底墨書
15	2次11溝 北-2	盤B	19.2	3.4	14.4	A	C	0.05	
16	2次11溝 北-2	盤B	20.8	3.5	15.3	B	B.C	0.12	
17	2次11溝 北-2	瓶	6.0			B	F	1.00	
18	2次11溝 北-2	瓶	6.8			B	E	0.25	
19	2次11溝 北-2	鉢	17.3			B	F	0.12	

第4-2-21表 1号溝出土土器観察表（第4-2-17図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	2次11溝 北-2	鉢	21.0			C	C.E	0.50	
2	2次11溝 北-2	瓶	22.0			B	E	0.12	
3	2次11溝 北-2	瓶			14.3	B	D	0.05	
4	2次11溝 北-2	瓶	16.2			B	B.E	0.25	
5	2次11溝 北-2	瓶	18.5			D	E	0.75	
6	2次11溝 北-2	瓶							
7	2次11溝 北-2	瓶							

第4-2-22表 1号溝出土土器観察表（第4-2-18図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	底径				
1	2次11溝 北-2	碗X	9.9	4.2		A	A	0.75	外底墨書 内黒外赤
2	2次11溝 北-2	碗A	16.0	4.2		A	B	0.50	内黒外赤
3	2次11溝 北-2	皿B	14.9			A	A	0.05	外側墨書 内黒外赤
4	2次11溝 北-2	碗B	14.2	5.2		D	B	0.66	内黒外赤
5	2次11溝 北-2	鍋						0.05	
6	2次11溝 北-2	鍋				A	A		
7	2次11溝 北-2	鍋				B	B	0.05	
8	2次11溝 北-2	甕	16.0			A	D	0.05	
9	2次11溝 北-2	甕	16.1			A	D	0.25	
10	2次11溝 北-2	甕	17.6					0.12	
11	2次11溝 北-2	甕	21.0			B	B	0.12	
12	2次11溝 北-2	甕	21.3					0.12	
13	2次11溝 北-2	碗A			6.0	A	B	0.25	内黒外赤
14	2次11溝 北-2	甕			6.4			0.66	
15	2次11溝 北-2	甕			6.5	B	B	1.00	
16	2次11溝 北-2	甕			6.9	C	A	0.66	
17	2次11溝 北-2	鉢	26.4			A.C	A	0.05	

第4-2-23表 1号溝出土土器觀察表 (第4-2-19図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 北-1	杯A	8.2	2.8		A	C	0.25	
2	3次1溝 北-1	杯A	12.4	3.1		B	C	0.66	
3	3次1溝 北-1	杯A	12.4	2.7					外底墨書
4	3次1溝 北-1	杯A	12.4	3.0		A	C	1.00	外底墨書
5	3次1溝 北-1	杯A	13.2	3.2		B	B	0.25	
6	3次1溝 北-1	杯A	13.4						
7	3次1溝 北-1	杯A				B	C.D	0.75	
8	3次1溝 北-1	杯A	12.4	3.0		A	D	0.50	外底墨書
9	3次1溝 北-1	杯A	13.2	2.2		B	C.F	0.75	外底墨書
10	3次1溝 北-1	杯A	13.3	2.9		A	D	0.33	外底墨書
11	3次1溝 北-1	杯A				B.C	C.F	0.50	外底墨書

第4-2-24表 1号溝出土土器觀察表 (第4-2-20図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 北-1	杯A	12.8	3.1		A	C.D	0.50	外底墨書
2	3次1溝 北-1	杯A	12.8	2.5		A	C	0.25	外底墨書
3	3次1溝 北-1	杯A	13.0	2.7		A	C	0.50	
4	3次1溝 北-1	杯A	13.0	3.7		C	C.E	0.50	
5	3次1溝 北-1	杯A	13.2	3.7		B	B	0.50	
6	3次1溝 北-1	杯A	13.2	3.4					
7	3次1溝 北-1	杯A	13.2	3.1					
8	3次1溝 北-1	杯A	13.4			B	C	0.33	
9	3次1溝 北-1	杯A	13.4	3.7		C	B	0.50	
10	3次1溝 北-1	杯A	13.6	2.6		C	C	0.25	
11	3次1溝 北-1	杯A	13.8	3.1		B	B	0.25	
12	3次1溝 北-1	杯A	14.2	3.1		B	B	0.50	
13	3次1溝 北-1	杯A	13.2	3.2		A	B	0.33	外底墨書
14	3次1溝 北-1	杯B				B	C	0.33	
15	3次1溝 北-1	杯B	14.2	5.7	9.0	B	C.D	0.66	
16	3次1溝 北-1	杯B	14.5	5.7	8.4	B	F	0.50	
17	3次1溝 北-1	杯B			8.0				外底墨書
18	3次1溝 北-1	杯B	15.6	6.5	9.2	C	C	0.25	
19	3次1溝 北-1	杯B	16.6	6.7	8.5	B	C.D	0.12	
20	3次1溝 北-1	杯B			8.5	B	C.D	0.33	外底墨書

第4-2-25表 1号溝出土土器観察表(第4-2-21図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 北-1	杯B	13.2	5.2	7.6				外底墨書
2	3次1溝 北-1	杯B	19.2	7.6	11.2	B	C	0.12	
3	3次1溝 北-1	杯B	17.0			B	F	0.05	
4	3次1溝 北-1	蓋	12.6			B	C	0.25	
5	3次1溝 北-1	蓋	11.8			B	C	0.75	天井墨書
6	3次1溝 北-1	蓋	15.6			B	C	0.75	
7	3次1溝 北-1	蓋	15.4	2.3		B	C	0.33	天井墨書
8	3次1溝 北-1	蓋				B	C	0.05	内面墨書
9	3次1溝 北-1	盤A	14.9	1.8		B	C	0.12	
10	3次1溝 北-1	盤A	14.4	2.2		B	C	0.25	
11	3次1溝 北-1	盤A	14.2	2.1		C	B.C	0.05	
12	3次1溝 北-1	盤A	14.0	1.9					外底墨書

第4-2-26表 1号溝出土土器観察表(第4-2-22図対応)

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 北-1	盤A	14.9	2.0		B	C	0.25	外底墨書
2	3次1溝 北-1	盤A	15.6	2.0		A	C.F	0.25	
3	3次1溝 北-1	盤A	15.8	2.2	14.3	B	C	0.12	
4	3次1溝 北-1	盤A	15.8	2.1		C	C	0.25	外底墨書
5	3次1溝 北-1	盤A	16.3	2.3					外底墨書
6	3次1溝 北-1	盤A	16.1	2.0					
7	3次1溝 北-1	皿B	13.6	2.9	6.1	A	A	0.25	内黒外赤
8	3次1溝 北-1	皿B	13.6	3.6	7.0	E	C	0.33	内黒外赤
9	3次1溝 北-1	皿B	13.9	3.4	7.2	E	C	0.66	内黒外赤
10	3次1溝 北-1	皿B	14.2	3.4	7.2	A	A	0.33	内黒外赤
11	3次1溝 北-1	皿B	14.0	3.2	7.1	A	A	0.66	内黒外赤
12	3次1溝 北-1	皿B	14.0	3.2	6.5	A	A	0.50	内黒外赤 外側墨書
13	3次1溝 北-1	皿B	14.0	3.3	6.8	A	A	0.66	内黒外赤
14	3次1溝 北-1	皿B	15.2	3.8	7.6	B	A	0.33	内黒外赤
15	3次1溝 北-1	皿B			6.9	E	C	0.66	内黒外赤

第4-2-27表 1号溝出土土器観察表（第4-2-23図対応）

番号	出土地点	器種	法 量			胎土	色調	遺存率	備 考
			口径	器高	脚部径				
1	3次1溝 北-1	碗A	10.0	2.8				0.25	内黒
2	3次1溝 北-1	碗	13.3			A	A	0.05	内黒外赤
3	3次1溝 北-1	碗	15.6			D	B	0.05	内黒外赤
4	3次1溝 北-1	碗A				A	A	1.00	内黒外赤
5	3次1溝 北-1	碗A				E	C	0.66	内黒
6	3次1溝 北-1	碗A				D	B	0.05	内黒外赤
7	3次1溝 北-1	甕				B	B	0.25	
8	3次1溝 北-1	甕			6.6	B	B	0.12	
9	3次1溝 北-1	甕	11.2			B	B	0.25	
10	3次1溝 北-1	甕	15.6			A	B	0.12	
11	3次1溝 北-1	甕	18.6			A	B	0.25	
12	3次1溝 北-1	甕	21.4			A	B	0.25	

## 第4節 木簡と銅銭

高堂遺跡の調査は、国道バイパス建設に伴う事前調査であり、昭和54年（1979年）から3次にわたる発掘調査を実施してきた。すでに説明されてきたように弥生時代後半から中世の各期にわたる複合遺跡であるが、特に、平安時代前期に比定される遺構が際立っている。本章第1・2節で報告した掘立柱建物群や多数の墨書土器と本節で説明する第1号溝出土の木簡2点は、高堂遺跡の性格を考える上で重要な資料を提供している。

1号溝は調査区のほぼ中央を南北に直線的に走る溝で、幅は約2.5m前後、深さは50cmを測り、延長で140m余を確認した。1号溝とこれから分岐して東西に走る第17溝で区画された中に12棟分の掘立柱建物群が存在している。1号溝の主たる存続期間は、4地点に集中して出土した土器群より、9世紀後半から10世紀初頭頃と推定され、2点の木簡もこの時期に伴うものと思われる。

木簡1は残存部の長さ12.5m、幅1.4cm、厚さ0.5mを測る。上部および右半が欠損し、全体を読み取ることができない。上から第1字目は「禾」偏は明瞭であるが、文字全体は不明である。2字目は明らかに「造」と判読されるが、次の文字以下は明瞭ではない。下から二文字は「宿女」と読める可能性があり、人名を記したものと想定される。1号溝H29区の下層堆積土より上下二つに割れた状態で出土した。

积文 ×□造□□□

[宿女力]

木簡2は長さ51.5cm、幅2.8cm、厚さ0.5mを測る。長方形の材の上端を山形に尖らせたタイプで、上部右半の一部と下端部が欠失している。文字は明瞭で、鎮護国家の根本聖典となった経題を示すものとして特筆される。木簡1から北へ約40m離れた120区の溝内から上下二つに割れた状態で出土した。

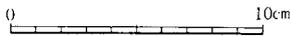
积文 「金光明最勝王四天王護国品」



第1号木簡



第2号木簡(原寸)



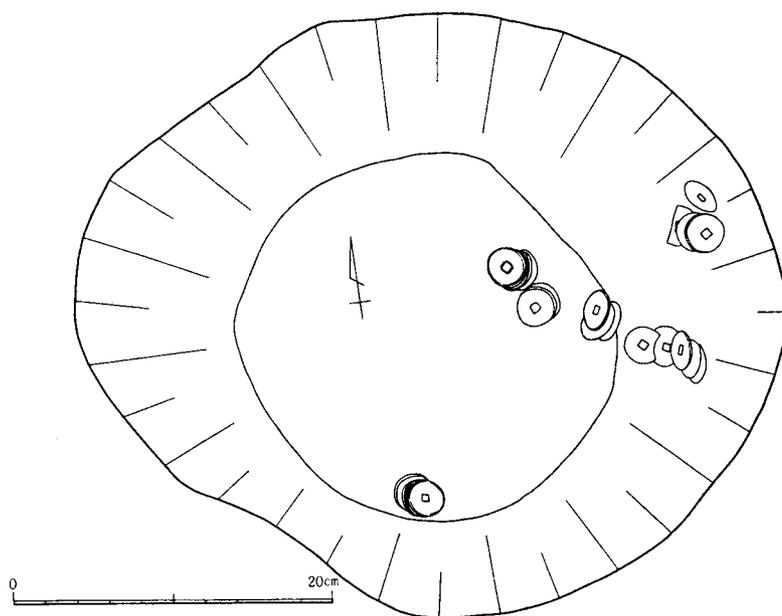
第4-3-1图 出土木簡实测图

銅銭は北調査区建物群の2か所の柱穴（117号ピットと161号ピット）から合計約60枚の銅銭が出土した。これらのピットは、北調査区建物群が構成する「コ」の字型配置の、空地部分に埋納されたもので、Ⅱ期の建替えに伴う地鎮供養とみられる。鏝落としを行った結果、別に1か所2枚のから銅銭が出土した60号ピットの銭貨を加えた総数は68枚となった。内訳は別表のように、和同開珎（708年初鑄）4枚、万年通宝（760初鑄）22枚、神功開宝（765年初鑄12枚、隆平永宝（796年初鑄）1枚、不明29枚である。

奈良・平安時代の集落遺跡において掘立柱建物の柱穴に銅銭を埋納する事例は、近年調査例の増加に伴い次第に増えてきており、律令期の地鎮行為の一つであると考えられている。第4-1図に芝田 悟氏が集成された皇朝十二銭の出土分布図を掲載したが、奈良・平安時代の集落遺跡でも、大型の建物群を含んだり、建物配置がある企画を持って計画的に配置されているような集落遺跡での出土例が多いことが明らかと言えよう。羽咋市寺家遺跡、金沢市千木ヤシキダ遺跡、加賀市敷地鉄橋遺跡などとの比較によっても、高堂遺跡での銅銭の出土数量が多いことがいえるのであり、本遺跡の性格を裏付ける資料として、木簡とともに貴重な手掛かりといえる。

第4-3-1表 出土皇朝十二銭の内訳

遺跡	種類	和銅開珎	万年通宝	神功開宝	隆平永宝	不明	合計
60号ピット			1	1			2
117号ピット		2	6	3		16	27
161号ピット		2	15	8	1	13	39
合計		4	22	12	1	29	68



第4-3-2図 161号ピット銅銭出土状況



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



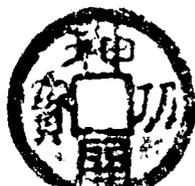
20



21



22



23



24



25



26



27



28

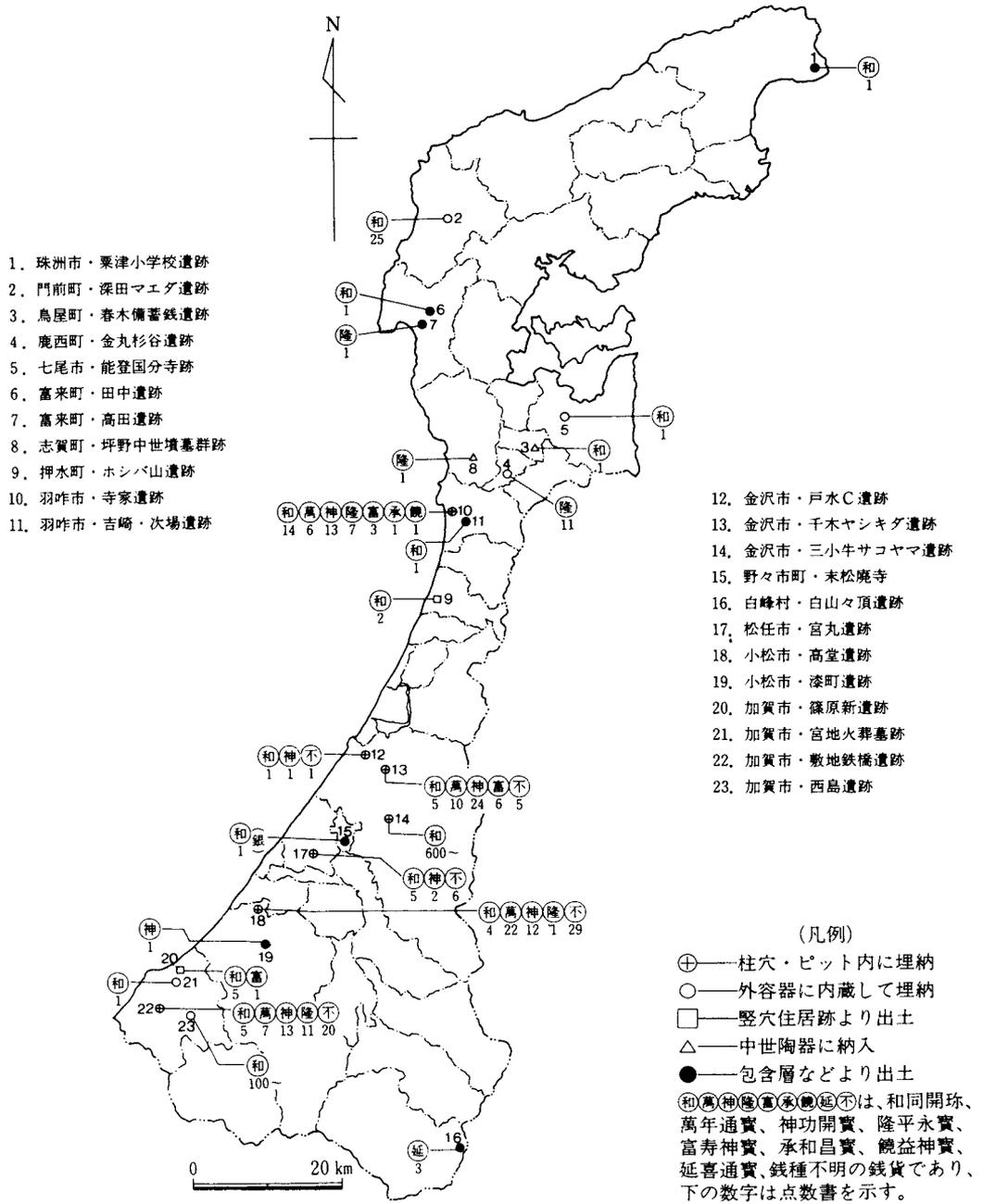


29



30

第4-3-3図 出土銅銭拓影(1~8はビット117、9~30はビット161)原寸



第4-3-4図 能登・加賀における皇朝十二銭の出土分布図(芝田悟作成)

## 第4節 今後の課題—まとめにかえて

前述してきたように、高堂遺跡は弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡であった。特に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構群と、平安時代前期の遺構の存在が著しかった。そのうち、平安期における性格については、今後も大きな検討課題を残したといえる。

平安期の主たる遺構は、掘立柱建物群と溝状遺構のほか、地鎮供養とみられる銅銭遺構などである。同期の建物群は、主に調査区の北側に偏在しており、三間×三間を主体とする掘立柱建物を南面する「コ」の字形に配置したとみられ、少なくとも二期の建て替えが確認できるものであった。その建物群に西には、南北に直進する溝があり、多数の墨書土器とともに注視される二点の木簡の出土があった。南北溝は、おそらく条理のきばく規範に添った施設の西を画す溝であったとみられる。地鎮供養とみられる銅銭埋納遺構は、「コ」の字形の空地に二ヶ所、その東にある掘立柱建物の柱穴からの市1ヶ所があった。なかでも、空地部分での銅銭埋納は、確認できるⅡ期の建て替えに伴うものとみられるものであった。これら平安期の遺構から出土する土器は、田嶋明人氏の編年<sup>40</sup>によるⅤ期からⅥ期を主体とするものであり、九世紀から十世紀初頭頃の年代幅が指定できるとみられる。

さて、平安期における本遺跡の性格を考えるうえで、遺構・遺物から窺える主な特徴を列記すると、ほぼ次のような点があげられる。

- 1、「コ」の字形に配置された建物群の規格性
- 2、地鎮供養とみられる皇朝十二銭の埋納
- 3、多量の墨書土器と転用硯の出土
- 4、土器組成は須恵器を主体とし、日常の供膳・煮沸用土師器が少ない
- 5、若干の赤彩土師器と緑釉陶器を具備する
- 6、護国経典を記す木簡の出土

皇朝十二銭の埋納は、創建にあたって律令的儀容が執行されたことを示し、多量の墨書土器は識字層の存在を裏付けるものであろう。墨書文字は、圧倒的に吉祥句とするものが多いが、Ⅴ期の段階では「改吉」あるいは「改吉請」といった二字以上で社会不安からの離脱を希求したとみられる文言が知られるのに対し、Ⅵ期には「隆」をはじめとした単字を表記したものが多い。また、墨書土器のなかに「□弥」と読める小片があることが注視され、経典を記す2号木簡との有機性から、仮に「沙弥」と読めば、仏道に精神する修行僧が居住していたことを憶測させる。しかしながら、煮沸用具をはじめとした日常土器の出土頻度が少なく、人々が起居する施設であったとみるには疑問が残る。赤彩土師器等の存在は、祭祀・仏事に関わる供膳具を具備していたことが知られるのであり、「金光明最勝王経四天王護国品」と読める2号木簡は、仏事を担う宗教施設であった可能性を示唆するものである。これらの点かた、本遺跡は一般班田農民の集落とは考え難く、「金光明最勝王経」を転読しうる寺院遺跡である可能性を強く感じさせるものである。

一般に古代の寺院跡は、高い基壇のうえに礎石をそえ、瓦葺の壮大な堂塔を配置した伽藍仏教のイメージが強いが、近年、関東地方をはじめとして、非瓦葺掘立柱建物からなる寺院跡の存在

が明らかとなっている<sup>92</sup>。しかしながら、それは集落と未分化な村落共同体の信仰拠点とみられるものであり、第2号木簡が窺せる官寺仏教的な本遺跡とは、やや性格を異にするとみられる。その他の非瓦葺掘立柱寺院跡で類例をさぐると、時代と立地条件を異にするが、本県金沢市の三小牛山で発見された奈良時代の山寺・三千寺があげられよう。三千寺は、非瓦葺の掘立柱建物を「コ」の字形に配置した簡素な寺院跡ではあるが、創建にあたっては五八〇校余の和同開珎を埋納し、奈良三彩をふくむ飲食器や銅板鋳出像を具備する豊かな内容をもつものであった。この三千寺で注視されるのは、多量の転用硯の存在から知られる学業研鑽の実態であり、種々の浄行に専念した修行僧の拠点であったとみられる点である<sup>93</sup>。事実、墨書土器の中には、「沙弥」と記すものがあった。その性格は、学解仏教ともいわれる奈良仏教の一端をのぞかせており、官寺仏教の一半を担う寺院であったとみられ、その造立は、北加賀の譜代郡司道君と中央政権との連携によるものとする見解が提起されている<sup>94</sup>。

本遺跡は、構造的には三千寺の系譜に連なるとみられ、また、官寺仏教的な特徴が窺えるという点でも共通性があるといえよう。では、高堂にあったとみられる寺院ないし堂の維持管理にあたった、いわゆる檀越は誰なのであろうか。

そこで注視されるのは、かつて浅香年木氏<sup>95</sup>が提起された能美郡家との関係が想起されることである。周知のように、加賀立国は弘仁14年(823)に設置された、わが国最後の一国建置であるが、それ以前の越前国江沼郡の北半を割いて設けられたのが能美郡である。浅香氏は、能美郡家の所在地について、建仁元年(1201)7月の「地頭介某讓状案<sup>96</sup>」にみえる重友保の四至記載に「東限秋恒、西限郡家長野、南限得橋郷、北限郡家東吉光保」とある資料などから、現在の寺井街西部から根上町東部に求め、根上町中ノ庄に郡家の中枢部を比定しようとするものであった。その地域は、本遺跡の北に近接するところであり、本遺跡の性格を考えるうえで能美郡家との関わりを視野に入れない訳にはいかない。

そうした郡領氏族との関わりにおいて、注視すべき出土品がある。「□□造□宿女」とみえる1号木簡である。この人名木簡については、見解は一様でなく、「八木造多宿女」<sup>97</sup>とも、「私造□宿女」あるいは、「□私造□宿女」<sup>98</sup>とも読まれている。前者のように読んだ場合、加賀における新たな氏姓資料として今後の検討をまたねばならないが、後二者の読みでは、天平3年(731)の「越前国加賀郡正税帳」にみえる加賀郡司・主政大私造一族が想起される。これまで、能美郡家に関わる郡領は、先の「越前国江沼郡正税帳」にみえる財臣一族が有力視されてきたが、もし「大私造」もしくは「私造」と読めるならば、譜代郡司道君に対峙する下層郡司大私造一族が深く関わっていたとも推測されるのである。

財臣であれ大私造であれ、そのいずれにしても本遺跡は郡領層との関わりなくしては理解できないのであり、本来、国衙・国分寺において継受されるべき「金光明最勝王経」を中軸とした法会ないし祈禱行為が、篤信の有力豪族の私寺ないし堂においても実施されていたとみられることこそ重要である。それは、地方の有力豪族に支えられた民間仏教のエネルギーを国家仏教が包摂し、郡領層が律令機構の一端として国家鎮護の公的儀礼を任っていたことを予測させるからである。いうまでもなく、「金光明最勝王経」は、鎮護国家の護国經典であり、国分寺がその弘通の拠

点であった。しかし、国分寺の造立は国々の事情によって、旧寺を転用することも少なくなく、加賀国の場合も、承和八年(841)に既設の勝興寺を転用したものであった。その所在地については、本遺跡の南約3kmの古府台地に占地する十九堂山遺跡(「古府廃寺」とする吉岡康暢氏の説<sup>99</sup>)が有力視されている。その他に、地名考証の立場から、本遺跡の所在する高堂町に求めようとする説<sup>100</sup>も提起されている。そのいずれにしる、本遺跡が物語る郡領層と国家儀容の関わりは、旧寺転用という加賀国分寺の成立の実情を探るうえで貴重な資料を提供したといえるのではなかろうか。

#### 註

- (1) 田嶋明人他『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター・1986年
- (2) 須田 勉 「平安初期における村落内寺院の存在形態」(『古代探叢Ⅱ』・1985年)
- (3) 南 久和 『金沢市三小牛ハバ遺跡調査概報』 金沢市教育委員会・1990年
- (4) 高堀勝喜 「金沢市三小牛町の「山寺」三千寺跡について」(『加能史料』会報第4号・1989年) および、吉岡康暢 「加賀・能登国分寺研究の課題」(同書)
- (5) 浅香年木 『古代地域史の研究』・1978年
- (6) 建仁元年地頭介某讓状案(『鎌倉遺文』1234号)
- (7) 東野治之 「1981年出土の木簡」(『木簡研究』第4号・1982年)
- (8) 高堀勝喜 「能美古墳群と湯谷古窯址」(『加能資料』会報第1号・1982年)
- (9) 吉岡康暢 「平安前期の地方政治と国分寺(上)」(『日本海地域研究所報告』第8号・1977年)
- (10) 吉田東伍 『大日本地名辞書』北国・東国第五巻・1902年



## 第5章 中世の遺構と遺物

当遺跡における中世遺構は、調査区北端の県道北側地区で、ある程度まとまって検出されている。遺構は溝と土坑を中心としており、建物跡を想定させるようなピット群は確認されていない。遺物はパンケースに3箱、その中の半数以上が土師器皿である。すべて非ロクロ成形品であるが、薄手で端正なもの（Ⅰ類）と、厚手でぼってりとしたもの（Ⅱ類）とに大別される。法量的には、口径9cm未満を小皿、9～11cm大を中皿、12cm以上を大皿として分類した。以下遺構と遺物の概要、遺物の組成、土師器皿の分類の順で説明を加えて行く。

### 第1節 遺構と遺物の概要

#### 4号溝（第5-1-2図1、3～10）

3号土坑、11号土坑に接する逆L字型の溝状遺構である。幅0.6～1.2m、深さ40～60cmを測る。覆土の色調は暗灰褐色系。東側で二手に分かれるが同一遺構かは不明。遺物量は多い。1、3、4はⅠ類の大皿である。いずれも平底になると思われる。1は口縁部を外反させ、3、4は外反した口縁の端部を内に肥厚させる。内底面にナデ、口縁部に時計回りの横ナデ調整が施され、内底周縁には横ナデによる僅かな凹みが認められる。また底部内外面全体に焼成時の黒斑を残している。5～8はⅡ類である。5～7は一段ナデの口縁部がやや内湾気味に立ち上がる中、小皿。口縁部内外面には灯明皿として使用した際に付着した油痕が認められる。8も同様の油痕が見られる。口縁は部分的にやや外反する。9は口縁帯がほぼ直角に折れ曲がる越前焼の甕。10は銅製品を写したと思われる瓦質花瓶の胴部である。胴部外面には回文およびハート型のスタンプが押捺されている。なお小松市の白江梯川遺跡からも同種の瓦質製品が出土している。<sup>(1)</sup>

#### 6号溝（第5-1-2図11～13）

東西に軸を持つ幅1.2m、深さ30cmの溝状遺構である。北側に接する7号溝を切る。覆土は灰褐色系の粘質土である。11は器壁全体が厚く、口縁部内面には布目圧痕が認められる。12は口縁部上方をややつまみ上げ気味に外反させる。13は丸底気味の底部と緩く外反する口縁部を持つ。三点共にⅡ類の小皿である。

#### 9号溝（第5-1-2図14）

南北に伸びる幅50cm、深さ10cm前後の浅い溝状遺構である。直交する8号溝を切る。覆土の色調は暗灰褐色系である。14は瓦質火鉢の底部である。平面形は方形で、外底面には脚部の剝離痕が見られる。実測はされていないが同一個体と思われる口縁部分も出土しており、口縁部外面には上下二条の凸線が巡っている。

#### 15号溝（第5-1-2図15）

調査区を東西に横断する溝状遺構である。幅60～80cm、深さ15前後を測る。須恵器が出土し、他の溝とも方角を若干異にするなど、古手の遺構になる可能性もある。15は外底面にヘラ切り痕を残す須恵器杯の底部である。

### 17号溝（第5-1-2図16、17）

調査区北端の溝状遺構。南北に軸を持ち、9号土坑を切る。幅80cm、深さ30cm前後を測る。出土遺物は土師器皿のみである。16、17共にⅡ類の中皿であり、器壁は厚く、口縁部は一段ナデ。調整痕は摩耗のためはっきりしない。

### 3号土坑（第5-1-3図1～6）

4号溝と接続する大型の土坑である。細長い楕円形を呈すと思われ、推定長軸約8m、最大幅4.2m、最深部80cm余りを測る。遺構東側の覆土は灰褐色系の単層であり、溜め池的な存在であったのかもしれない。遺物量が多い。1は端反りの白磁皿である。2、3はⅠ類の大皿。口縁部を外反させ、その端部を微かにつまんでいる。4～6はⅡ類の中皿。口縁形態はよく似るが、4は平底、5は丸底気味である。

### 4号土坑（第5-1-3図7）

6号溝の北脇に位置する円形の土坑である。径1.7m、深さ1m近くを測り井戸状を呈する。7は丸底を呈するヘルメット型の中皿であり3号土坑出土の5に似る。口縁部の横ナデにより体部下半には明瞭な稜を残す。また口縁部内外面には褐色の油痕がべったりと付着している。

### 7号土坑（第5-1-3図8）

15号溝に重なる円形の土坑であり、長径1.9m、短径1.5m、深さ60cmを測る。遺物量は割合多いが土師器皿は確認されていない。8は越前焼の甕である。口縁帯は短く外反する。口縁部内面にはテラス状に一条の沈線が巡り、肩部外面にはヘラ状具を用いた線刻文様の一部が認められる。

### 9号土坑（第5-1-3図9）

調査区内での最大幅5.8m、深さ40cm前後を測る大型の土坑である。方形を呈する室状遺構になる可能性もある。9は青磁皿の底部である。見込中央には印花文が押され、外底面は無釉に仕上げている。

### 11号土坑（第5-1-3図10）

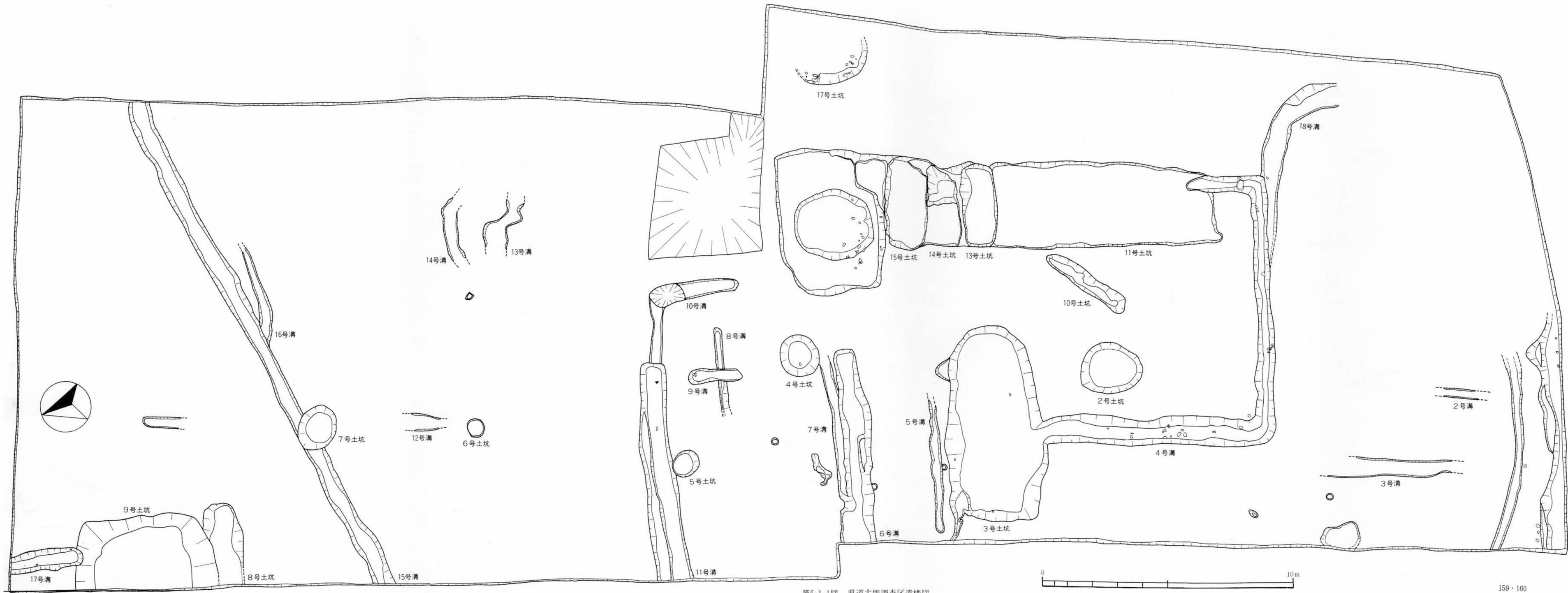
幅3.4m、深さ10～20cmの浅い窪み状の遺構である。同様の土坑が北側に伸びており、覆土は暗灰褐色系の単層である。遺物量は全体に少ない。10は外面に降灰釉の見られる須恵器の壺である。外面は横ナデとカキ目、内面は横ナデ調整が施されている。

### 16号土坑（第5-1-3図11～18）

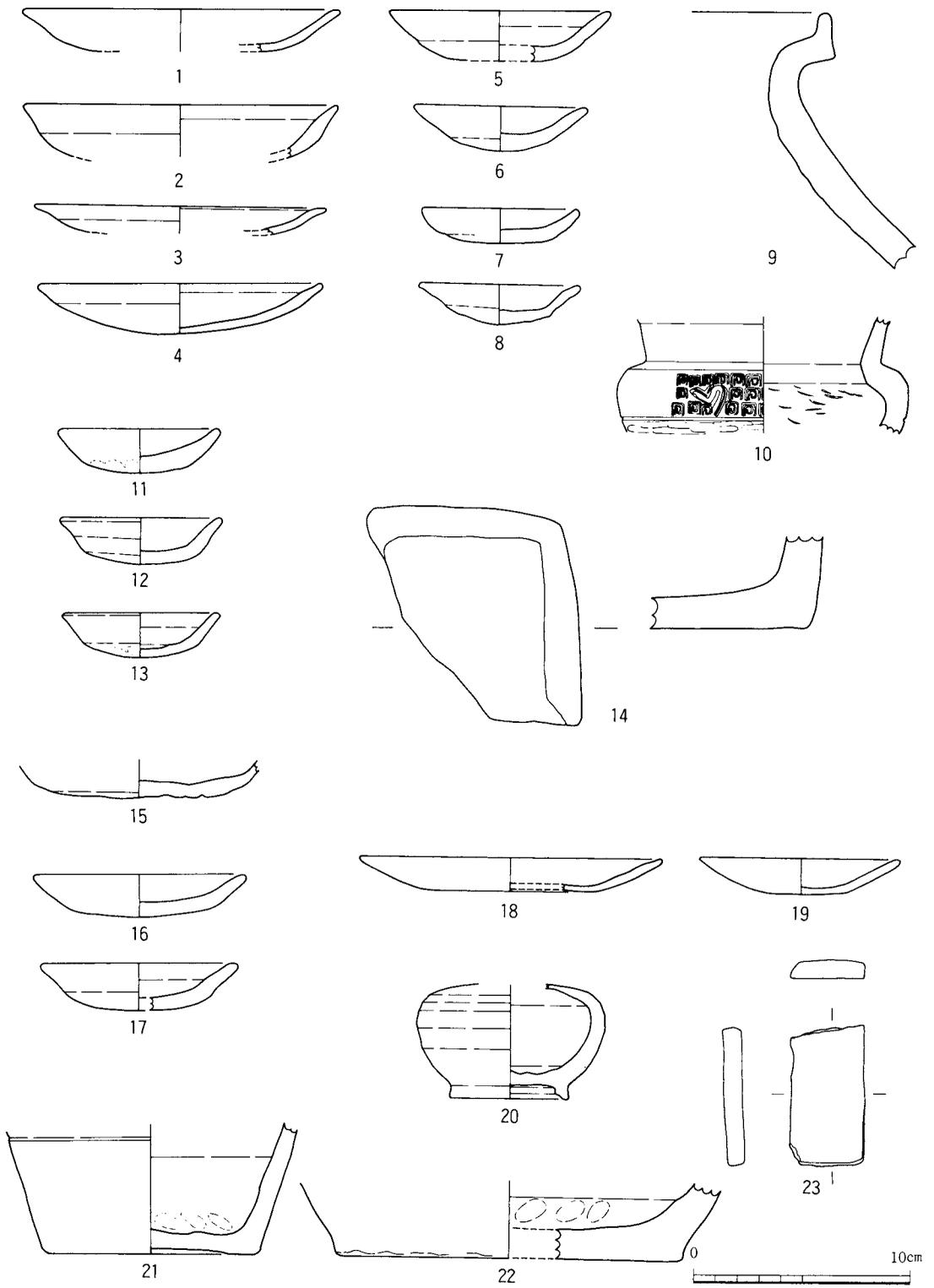
11号土坑の並びに位置する。円形を呈し、長径3.3m、短径2.8m、深さ40cmを測る。11号土坑等より新しい時期の遺構と思われる。遺物量が多い。11は瀬戸焼の瓶子である。肩の張る器形であり、頸部から肩部にかけて2～3条の楕目沈線が三段に配されている。12は青磁碗。口縁は外反し、外面には肉厚でやや細めの蓮弁文が並ぶ。13、14はⅡ類の中皿である。口縁部は横ナデにより弱く外反する。15～18はⅡ類の小皿である。平底を持ち、器形は歪んでいる。15、16の口唇部には油痕の付着が見られる。

### 17号土坑（第5-1-3図19～24）

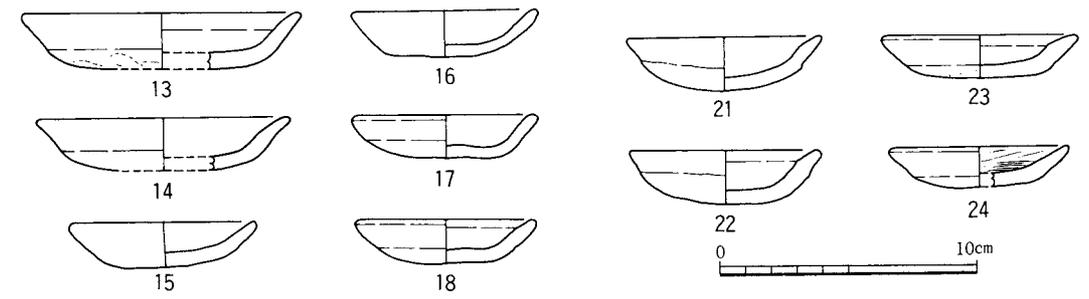
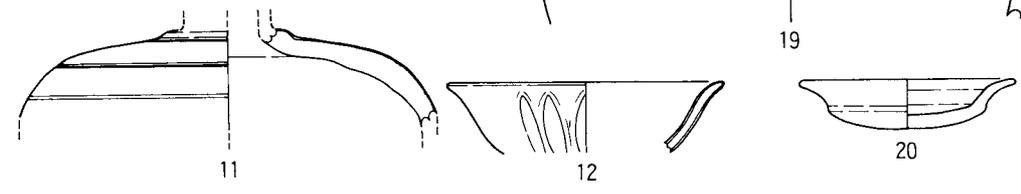
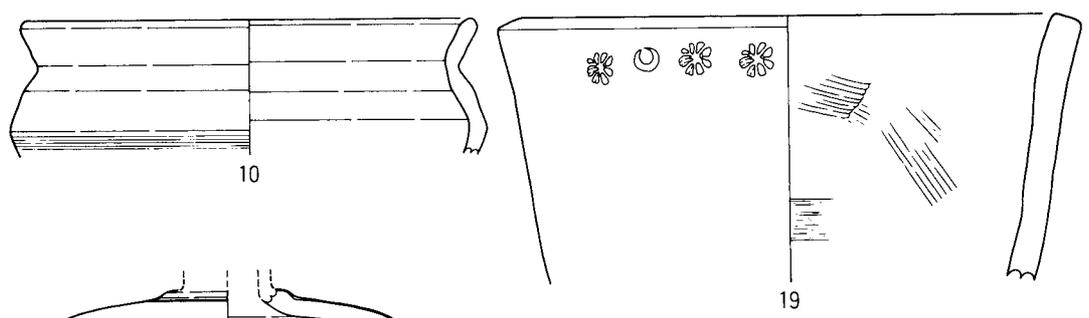
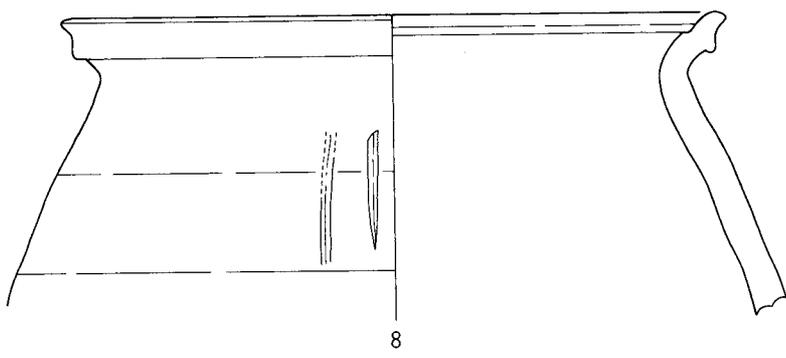
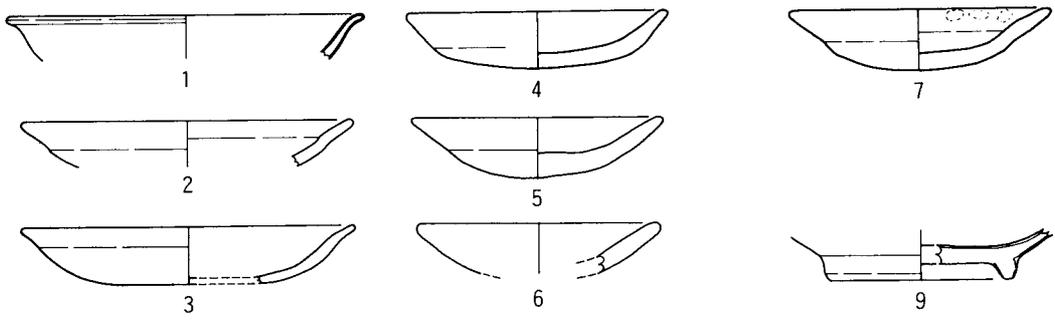
遺構の東側は攪乱を受けているため平面形は不明。深さは30cm前後を測る。19はやや深めの瓦質火鉢であろう。口唇部は面取りされ、外面はナデ、内面には一部ハケ調整痕が残る。口縁部上



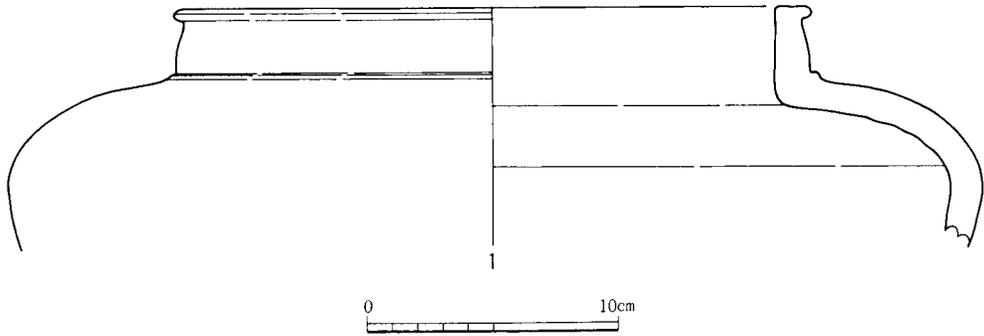
第5-1-1图 县道北侧调查区遗构图



第5-1-2図 県道北側地区出土遺物実測図1 (1/3)



第5-1-3図 県道北側地区出土遺物実測図2 ( 1 / 3 )



第5-1-4図 県道北側地区出土遺物実測図3 (1/3)

方には菊花、丸文のスタンプが一行に押されている。20は口縁部を横ナデにより強く外反させる。21、22は丸底で口縁の横ナデ幅が狭いタイプである。そのため口縁部内面にも弱い段がつく。23、24は平底で口縁の横ナデ幅は広い。なお21～24に付着している油痕には比較的明瞭に灯芯の痕跡が残っている。五点共にⅡ類の小皿である。

包含層（第5-1-2図2、18～23、第5-1-4図1）

2、18はⅠ類の大皿である。器厚等は異なるが口縁の横ナデ幅は狭く、底面には黒斑を持つ。19はⅠ類の中皿であり、数量的には極めて少ない。底部は小さく、口縁は斜め上方へ直線的に立ち上がる。口縁部には多量の油痕が付着している。20、21は須恵器の底部、22は越前焼の底部、23は凝灰岩質の砥石である。1は瓦質の風炉。口縁部は直立し、水平に面取りをした口唇部は外側にやや肥厚する。また頸部境には一条の凸帯が巡る。

## 第2節 遺物の組成

第5-3-1表は遺構別に見た出土遺物の内訳である。遺物の年代は中世後半期のものがその主体を占めると思われるが、加賀地方では現在のところ当該期の土器組成を抽出できる遺跡は非常に数少ない。この表の中で最も多いのは土師器皿であるが、ここでは口径残存率1/12以上のものを遺構中から抜き出し、前述の基準に沿って小・中・大皿と分けている。点数は破片数であるが、それぞれの形態、色調等を比較し同一個体と思われるのは点数には入れていない。また他の製品に関しても同様の扱いをしている。従って第5-3-1表に示した数字はある程度個体数に近いものと考えている。遺構別では4号溝、3号土坑、16号土坑からの遺物量が多い。全体の組成は土師器皿63点（57.3%）、瀬戸・美濃焼4点（3.6%）、瓦質土器5点（4.6%）、日常用器25点（22.7%）、貿易陶磁器13点（11.8%）である。土師器皿は総点数の半数以上を占めるが、法量による大きな偏りは見られない。また土師器皿以外では日常用器の越前焼甕、貿易陶磁器の青磁碗の点数がやや多くなっている。

第5-3-1図は遺跡別に見た主要構成器種比率をグラフ化したものである。左側は小野正敏氏が作成した室町期を中心にした各地の城館跡出土遺物の器種比率（破片数）である<sup>(2)</sup>。右側は同様

に作成した県内のグラフでありAは高堂遺跡、Bは高堂遺跡と地理的に近い能美郡辰口町の辰口西部遺跡群下開発遺跡（13世紀前半～14世紀前半）の構成比である<sup>3)</sup>。これを見るとeの福井県一乗谷と高堂遺跡が近似した比率を持つことに気付く。一乗谷では土師質土器50～60%、越前焼30%、瀬戸美濃焼1～4%、瓦質土器その他0.1～1%、中国陶磁6～8%の値を取る。もちろん遺跡の性格、遺物の量比等同等レベルでの比較ではないが、両者における共通項が中世後半期の北陸的な土器組成の一端を示している可能性は否定できない。逆に相違点を単純に見るならば、高堂遺跡の日常用器が越前焼一辺倒でない点に一乗谷との時間的な差が示されているとも言えよう。またBの下開発遺跡との比較では土師器皿の差異が顕著である。これが単に時期差によるものなのか、それとも都市・農村部といった遺跡の立地およびそれに伴う土師器皿の機能差によっても大きく左右されてくるのか等は、今後平安京を中心とした畿内からの影響力の問題も含めて考えていかねばならない。なおhの滋賀県小谷城での土師器皿の高率は京の様相の反映として理解されている。

### 第3節 土師器皿の分類

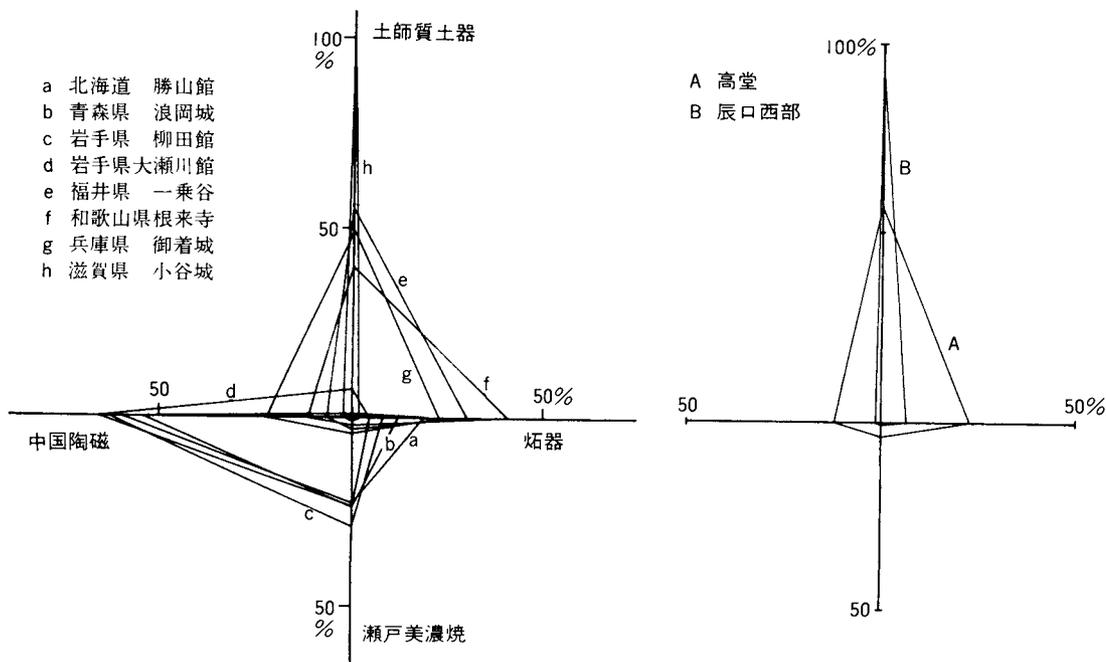
中世の出土遺物において機能的に人間の営みを最も鋭敏に感じとっているのは土師器皿であると思われる。ここでは土器器皿の分類を通して遺構の年代観を考えてみたい。

第5-3-2表は高堂遺跡の遺構別土師器皿分類表である。Ⅰ・Ⅱ類、小・中・大皿の別は先に示した通りであり、その他形態によりA～Eの五タイプに分けている（遺物観察表参照）。Aは口縁部一段ナデ。口縁の横ナデ幅は広く口縁端部は丸くおさめる。平底と丸底の両者がある。小・中皿のⅡ類に認められ、量的には最も多い（第5-1-2図13、第5-1-3図4他）。Bは口縁部一段ナデ。口縁の横ナデ幅は広く、外反する。小・中皿のⅡ類、大皿のⅠ類に認められる。ただし小・中皿のⅡ類はAタイプの範疇で考えられるものかもしれない（第5-1-3図20、第5-1-2図1）。Cは口縁の横ナデ幅が狭く、外反した口縁端部を内に肥厚させる。平底である。中・大皿のⅠ類に認められるが、そのほとんどは大皿である（第5-1-2図4、第5-1-3図3他）。Dは口縁の横ナデ幅が狭く、口縁部をつまみあげ気味に外反させる。手法としてはCタイプに似る。小皿のⅡ類に認められる（第5-1-2図12、第5-1-3図21、22）。Eは器形全体が均一の厚みを持ち、平底の小さな底部から口縁部が直接的に斜め上方へ立ち上がる。中皿のⅠ類に認められる（第5-1-2図19）。なお表の（ ）内の数字は油痕の付着が認められた点数を示している。

では以上の分類を踏まえて、遺構の時期的な同時性をその出土器種を中心に推測してみたい。まず全体的には、小皿はⅡ類のみ、大皿はⅠ類のみで構成され、大皿においては灯芯油痕が認められないといった法量的な作り分けおよび使い分けを指摘することができる。その中でも畿内の様相を持つ特徴的な大皿ⅠCは4号溝、17号溝、3号土坑でのみ認められ、数量的に少ない中皿のⅠ類（ⅠE、ⅠC）も同様の遺構内で確認されている。また第5-1-2図6（4号溝）、第5-1-3図5（3号土坑）のようなⅡ類のヘルメット型の形態を通して見ると、4号土坑（第5-1-3図7）などにも上記の遺構との共通性を見いだすことができる。続いて幾分Cタイプの作りにも似る小皿ⅡDの出土遺構を見ると、6号溝、17号土坑が挙げられる。前出の遺構群に較べる

第5-3-1表 遺構別出土遺物数

遺構	種別			瀬戸・美濃				瓦質土器				加賀焼				珠洲焼				越前焼				信楽焼		白磁	青磁		染付	計
	小	中	大	碗	皿	瓶子	他	火鉢	風炉	花瓶	甕	壺	鉢	壺	鉢	甕	壺	鉢	他	壺	他	皿	碗	皿	香炉	碗				
4号溝	3	3	8						1					1														17		
6号溝	3	1	1																				1					6		
9号溝								1																				1		
17号溝	2	4	1																									7		
18号溝																												1		
3号土坑	1	9	3																		1		1	3		1		19		
4号土坑		1													1													2		
7号土坑							1			1							4						1				1	8		
9号土坑																								1				1		
16号土坑	5	3	2	1		1		1			2	1			1	1		1	1			1		1			22			
17号土坑	6							1														1		1				10		
包含層	1	2	4		1				1						2	1	2							2				16		
小計	21	23	19	1	1	1	1	3	1	1	3	1	1	1	3	9	2	1	1	1	1	2	2	8	1	1	1	110		
合計	63			4				5				5				4				13				3		2	10		1	110
%	57.3			3.6				4.6				4.6				3.6				11.8				2.7		1.8	9.1		0.9	100



第5-3-1図 遺跡別主要構成器種比率

とⅠ類の製品はぐっと少なくなり、6号溝から大皿のBタイプが1点出土しているだけである。さて最後に一つ残ったのは16号土坑である。構成器種に大きな特徴はないが、小・中皿Ⅱ類に顕著な丸底の製品が見られないことから、上記遺構よりも古手の遺構と解釈できる。だが注意すべき点は、その中にも大皿ⅠBが2点確認されていることである。

このように、当遺跡の土師器皿出土遺構は大きく三時期を予想することができる。古段階は16号土坑である。15世紀代の特徴である土師器皿の丸底化は小・中皿共に見られず、他の出土遺物も古手の様相を示している。時期的には第5-1-3図13、14のような口径9、10cm大の製品が定量的に出土する14世紀後半以降と考えられるが、小皿の器高の高さおよび器厚の安定はその中でも新しい要素と言える。従ってここでは16号土坑の年代を14世紀末～15世紀初頭に比定しておきたい。同時期の遺構として7、9号土坑が挙げられよう。中段階は6号溝、17号土坑である。口縁部をつまみ上げ気味に仕上げるDタイプは金沢市普正寺遺跡の上層面からも出土しており、15世紀中葉の年代が与えられている。両遺構からの出土遺物が少ないため詳細は不明であるが、第5-1-3図19の瓦質火鉢の出土状況などから、6号溝、17号土坑の時期を15世紀中・後半に比定しておきたい。新段階は4、17号溝、3、4号土坑である。大皿ⅠCが特徴的であるが、同種の遺物は加賀市勅使館跡の1a・2土坑からも2点出土している<sup>(6)</sup>。15世紀後半に位置付けられており2点共に口径は15cmを越える。当遺跡の大皿は15cmを越えるものは認められず、器高もやや低く扁平になってきている。これらは系譜的に新しい要素であり、時期的には16世紀前半代を考へておきたい。また出土遺物、遺構の配置などから9、18号溝も同時期の遺構である可能性がある。

なお当遺跡での大皿の流れは古・中段階はBタイプ、新階段ではそれにCタイプが加わるようになるが、精良な胎土、しばしば底部内外面に黒斑を残す焼成技術はB・Cタイプに共通しており、同じ流れを持つ工人によって土器作りが行われていたと予想できる。大皿ⅠBがどのような系譜を持つ土器群かは定かではないが、白色系の京都を意識したと思われるような土器作りが当地において既に15世紀前後から認められることは興味深いことである。また機能面ではB・Cタイプ以外のみ灯芯油痕が認められ、小皿で約半数、中皿で約1/3(Aタイプでは約半数)に油痕の付着が見られる。土器を大量に一括廃棄したような遺構はなかったため、いずれも日常生活の中で使用されていた製品と思われる。このことは、土師器皿を製作する側と購入する側の器種による機能限定が特種な場合に限らず日常的用途においても一般化していたことを示すものであろう。

加賀地方の土師器皿は12世紀後半と15世紀後半近くに京都からの強い影響を受け、形態を変化させながら独自の発展を続けて行くが、その間の13～15世紀および16世紀においても決して周辺と没交渉ではなく、何等かの形で様々な情報を交換しながら土器作りを続けていったと推測される。そのため今後地方的な土師器皿の生産と流通を解明する上で、在地土器のより明確な認識が必要になってくるものと思われる。

(註)

- (1) 中島俊一他 1988 『白江梯川遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター  
 (2) 小野正敏 1984 「第4回貿易陶磁研究会・その成果と課題」 『貿易陶磁研究No.4』  
 日本貿易陶磁研究会  
 (3) 藤田邦雄 1988 「第4節 中世」 『辰口西部遺跡群Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター  
 (4) 藤田邦雄 1989 「中世土器素描」 『北陸の考古学Ⅱ』 石川考古学研究会  
 (5) 垣内光次郎 1984 『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
 (6) 田島正和 1981 『勅使館跡発掘調査報告書』 加賀市教育委員会  
 (7) 宇野隆夫 1987 「越中弓庄城跡の土師器—中世の北陸と畿内—」 『大境第10号』  
 富山考古学会

第5-3-2表 土師器皿分類表

器種 遺構	小皿(Ⅱ類)			中皿(Ⅰ類)		中皿(Ⅱ類)		大皿(Ⅰ類)		計
	A	B	D	C	E	A	B	B	C	
4号溝	3				1	2		1	7	14
	(2)				(1)	(2)				(5)
6号溝	2		1				1	1		5
	(1)									(1)
17号溝	2					2	2		1	7
						(1)				(1)
3号土坑	1			1		5	3		3	13
						(2)				(2)
4号土坑						1				1
						(1)				(1)
16号土坑	5					2	1	2		10
	(2)									(2)
17号土坑	3	1	2							6
	(3)		(2)							(5)
包含層	1				1	1			4	7
	(1)				(1)					(2)
小計	17	1	3	1	2	13	7	4	15	63
	(9)		(2)		(2)	(6)				(19)
合計	21			23				19		63
	(11)			(8)						(19)

\*下段( )内の数値は油痕付着点数を示す

遺物観察表凡例 色調：a・浅橙色系、b・白色系、c・白橙色系

(第5-3-3表)油痕：○・少量付着、◎・多量付着(小・中皿のみ)

黒斑：○・底部内外面あるいはそのどちらかに残る(焼成時のもの  
であり大皿にのみ見られる)

第5-3-3表 遺物観察表

挿図No	出土地点	器種等	分類等	法量 (cm)	色調	油痕	黒斑
第5-1-2図-1	4号溝	大皿	I B	口径14.8	b		○
第5-1-2図-2	包含層	大皿	I C	口径14.6	b		○
第5-1-2図-3	4号溝	大皿	I C	口径13.6	b		○
第5-1-2図-4	4号溝	大皿	I C	口径13.1・器高2.4	b		○
第5-1-2図-5	4号溝	中皿	II A	口径10.3	c	◎	
第5-1-2図-6	4号溝	小皿	II A	口径8.0・器高2.1	c	◎	
第5-1-2図-7	4号溝	小皿	II A	口径7.2・器高1.6	c	○	
第5-1-2図-8	4号溝	小皿	II A	口径7.5・器高2.0	c	○	
第5-1-2図-9	4号溝	甕	越前焼		灰褐色		
第5-1-2図-10	4号溝	花瓶	瓦質土器		黒色		
第5-1-2図-11	6号溝	小皿	II A	口径7.4・器高2.1	a		
第5-1-2図-12	6号溝	小皿	II D	口径7.4・器高2.2	b		
第5-1-2図-13	6号溝	小皿	II A	口径7.2・器高2.1	a	○	
第5-1-2図-14	9号溝	火鉢	瓦質土器		淡橙色		
第5-1-2図-15	15号溝	杯	須恵器	底径8.2	灰色		
第5-1-2図-16	17号溝	中皿	II A	口径9.8・器高2.0	c	○	
第5-1-2図-17	17号溝	中皿	II A	口径9.2・器高2.2	a		
第5-1-2図-18	包含層	大皿	I C	口径14.0・器高1.6	b		○
第5-1-2図-19	包含層	中皿	I E	口径9.0・器高1.7	b	◎	
第5-1-2図-20	包含層	壺	須恵器	底径5.5	灰色		
第5-1-2図-21	包含層	壺	須恵器	底径9.7	灰色		
第5-1-2図-22	包含層	甕?	越前焼	底径16.2	灰色		
第5-1-2図-23	包含層	砥石	石製品	幅3.4・厚0.8	灰黄色		
第5-1-3図-1	3号土坑	皿	白磁	口径13.6	灰白色		
第5-1-3図-2	3号土坑	大皿	I C	口径12.8	b		
第5-1-3図-3	3号土坑	大皿	I C	口径13.0	b		○
第5-1-3図-4	3号土坑	中皿	II A	口径10.1・器高2.2	c	◎	
第5-1-3図-5	3号土坑	中皿	II A	口径9.8・器高2.4	c		
第5-1-3図-6	3号土坑	中皿	II A	口径9.5	c		
第5-1-3図-7	4号土坑	中皿	II A	口径9.8・器高2.4	c	◎	
第5-1-3図-8	7号土坑	甕	越前焼	口径25.2	褐色		
第5-1-3図-9	9号土坑	皿	青磁	底径7.0	オリーブ灰色		
第5-1-3図-10	11号土坑	壺	須恵器	口径17.6	灰色		
第5-1-3図-11	16号土坑	瓶子	瀬戸		灰オリーブ色		
第5-1-3図-12	16号土坑	碗	青磁	口径10.8	青緑色		
第5-1-3図-13	16号土坑	中皿	II A	口径10.8	c		
第5-1-3図-14	16号土坑	中皿	II A	口径9.8	b		
第5-1-3図-15	16号土坑	小皿	II A	口径7.2・器高2.0	b	○	
第5-1-3図-16	16号土坑	小皿	II A	口径7.2・器高1.8	b	○	
第5-1-3図-17	16号土坑	小皿	II A	口径7.0・器高1.8	b		
第5-1-3図-18	16号土坑	小皿	II A	口径7.0・器高1.8	b		
第5-1-3図-19	17号土坑	火鉢	瓦質土器	口径20.8	黒色		
第5-1-3図-20	17号土坑	小皿	II B	口径8.2・器高2.0	c		
第5-1-3図-21	17号土坑	小皿	II D	口径7.6・器高2.2	b	◎	
第5-1-3図-22	17号土坑	小皿	II D	口径7.3・器高2.1	b	◎	
第5-1-3図-23	17号土坑	小皿	II A	口径7.4・器高1.7	b	◎	
第5-1-3図-24	17号土坑	小皿	II A	口径7.0・器高1.6	b	○	
第5-1-4図-1	包含層	風炉	瓦質土器	口径24.2	黒色		

## 第6章 高堂遺跡出土の木製品

### 第1節 木製品

本遺跡から出土した木製品については遺構ごとに記述することとし、遺構の年代については第3～5章を参照されたい。また、金沢大学の鈴木三男先生に樹種同定を実施していただき、その報告と考察が本章第2節に詳述されている。

#### 1号溝（第6-1-1～4図）

皿（第6-1-1図1・2） やわらかい材のためか、表面はブヨブヨになってしまっている。1の直径は約16cmと推定され、2の推定直径は19cmである。

曲物（第6-1-1図3・4） 同図3は小型の曲物で、内法の直径が約12cm、たかさ7cm、側板のあつさは3～4mmをはかる。かさなり部分は6.5cmで、幅8mmくらいのサクラの皮により、2箇所とじつづられている。ケビキの間隔は2～4mmで、木釘は5箇所確認されている。

同図4は完形の曲物であり、直径12.5cm、あつさ0.8cm、木釘の跡は6箇所みとめられる。

曲物底板（第6-1-1図5・6、第6-1-2図） 第1図5・6も曲物の底板になるのであるが、木釘孔が確認できなかった。5は直径15.5cm、あつさ0.7cmで、6は直径15.5cm～16.0cm、あつさ0.8cmである。

第2図の10点は、曲物の底板と推定される円形板である。側面の木釘孔はいずれも未確認である。底径のながさにより、底径が16～17cmのグループと底径が12.5cm前後のグループに分けられる。数量的には前者が圧倒的に多く、底径が確認できた8点のうち7点までをしめている。

ヨコ櫛（第6-1-3図1） 半分ほど欠損しており、ながさ3.1cm、残存幅5cmをはかる。櫛の歯は素材をけずりのこすことによりつくりだしており、ながさ2.6cm、あつさ0.5cmほどのうすい歯である。

ぬい針状木製品（第6-1-3図2） ながさ18.8cm、幅1.0cm、あつさ0.4cmをはかる。頭部では上端から3.5cmのところ、直径2.5cmの孔があげられている。先端（下端）はうすく、とがるように加工されている。

部材（第6-1-3図3～15、第6-1-4図） 第3図6～14はハン状木製品になるものかもしれない。

カゴ（図版35の上） 網代編みの編物が1点出土しており、縁巻きの部分が存在していることからカゴであるとかんがえられる。現場でのとりあげ後、10年あまり放置してあったために乾燥してバラバラになってしまっている。編み方については、確認できるものに関するかぎりでは、3本ゴエ3本クグリ1本ズレである。材料は幅3mm前後のうすいヒゴ材である。

2号土坑（第6-1-5図1・2）

狭鋤（第6-1-5図1） 刃部から刃縁にかけて一部欠損している。残存値で、ながさ22.5cm、幅11cm、あつき2cmをはかる。

縄（第6-1-5図2） ながさ約10cm、幅1cmである。2Aは実測図、2Bは編み方模式図であり、最小原体 a・b・c・d の4本を模式図のように編みあわせている。

3号土坑（第6-1-6・7図）

鋤（第6-1-6図1） 一木づくりの長柄鋤で、把手はT字形を呈する。全長は120.5cmで、柄のながさが64cm、身のながさが56.5cmである。身の幅は13cm、あつきは約2cmであるが、均一性がなく、このことは未製品であることをしめしているのであろう。

八の字状木製品（第6-1-6図2・3） あつき1cmほどの扁平な板の左右両端を「八」の字状にけずりだしたもので、2点出土している。同図2は中央部上端にくぼみをもち、同図3は中央部下端にくぼみをもち、両者が直交してくみあわさるようになっている。

杓子（第6-1-6図4） あつき7mmの扁平な板材の一端をけずりせばめて、柄をつくりだしている。ながさ27.5cm、身幅7.5cmをはかる。

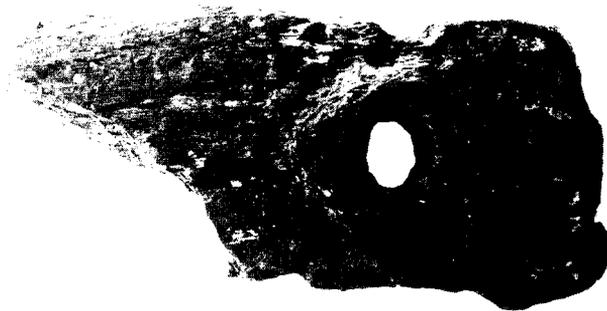
鉢形木製品（第6-1-7図） たかさ約15cm、最大幅約40cmの材の四辺を長方形に縁どったものである。上面中央部が幅15~20cm、ふかさ4cmほどにあさく半球形にほりこまれている。方鉢の未製品であろうか。

6号土坑（第6-1-5図3・4）

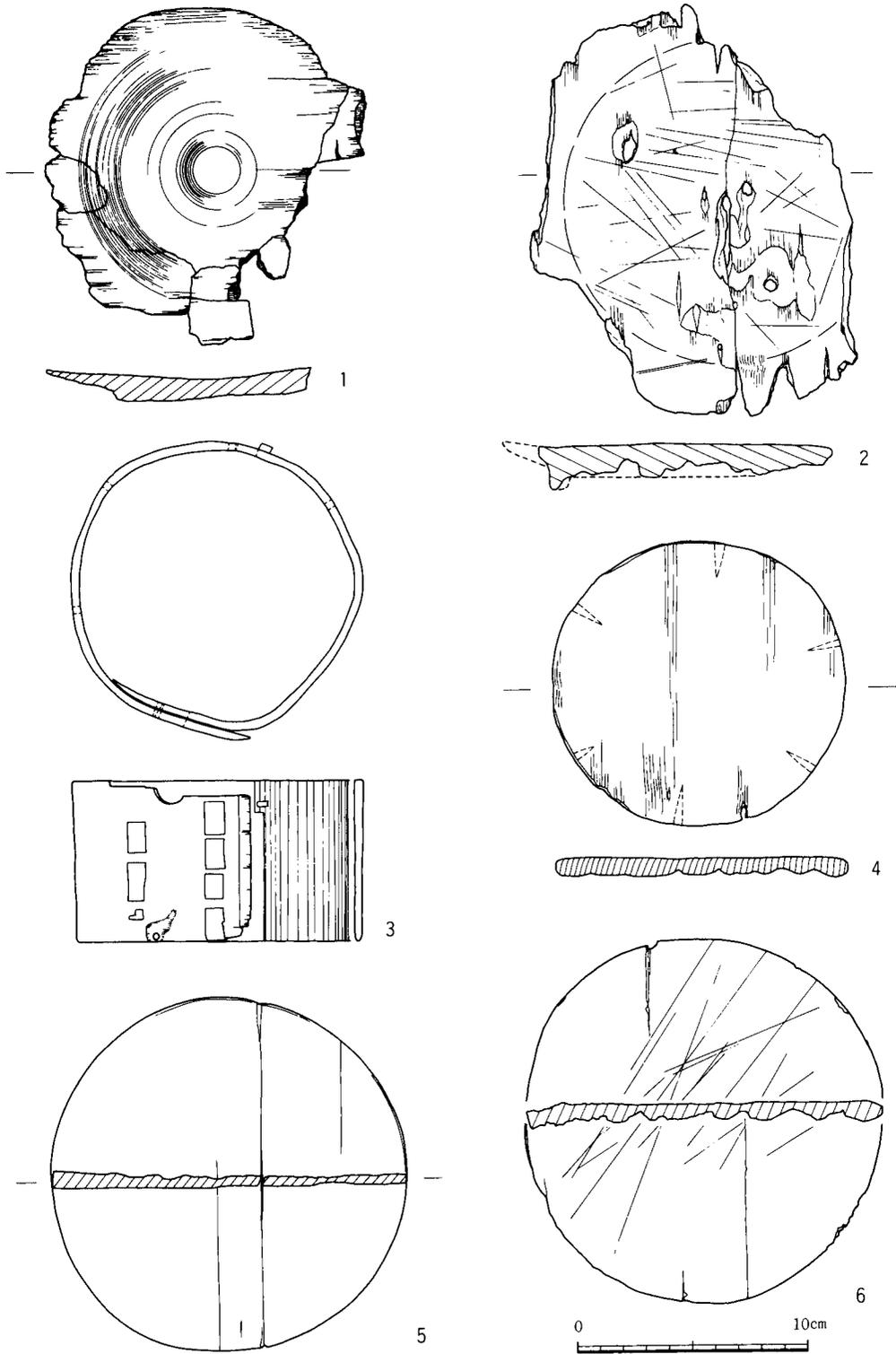
曲物底板（第6-1-5図3） 直径11.5cm、あつき0.5cmをはかる円形板で半欠しており、木釘孔は確認できなかった。

掘立柱建物群（第6-1-8~10図、第6-1-11図1）

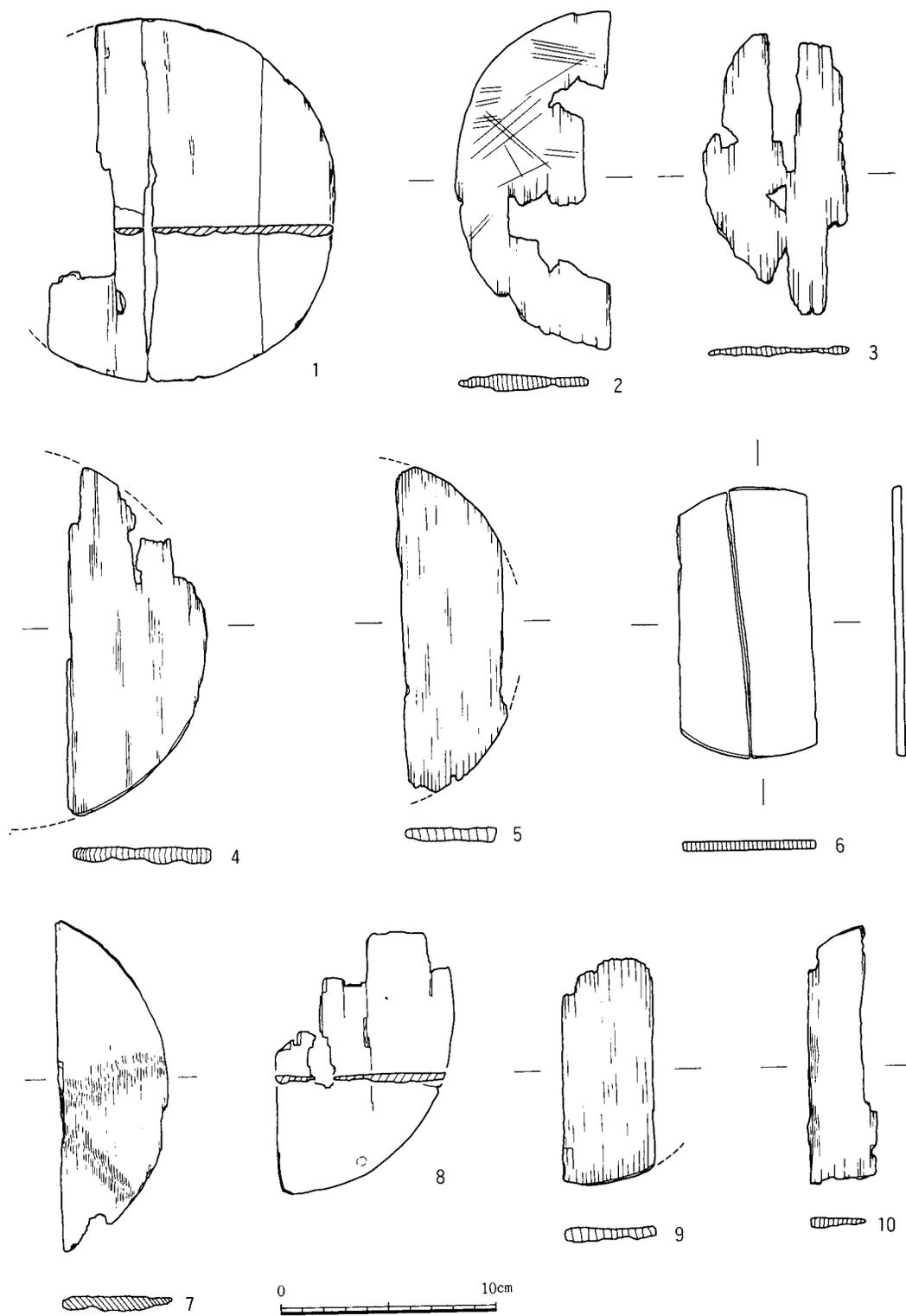
柱根（第6-1-8~10図、第6-1-11図1） 第9図1・4では底付近に溝が1条めぐらされている。第9図4・5の底面には加工痕がみとめられる。



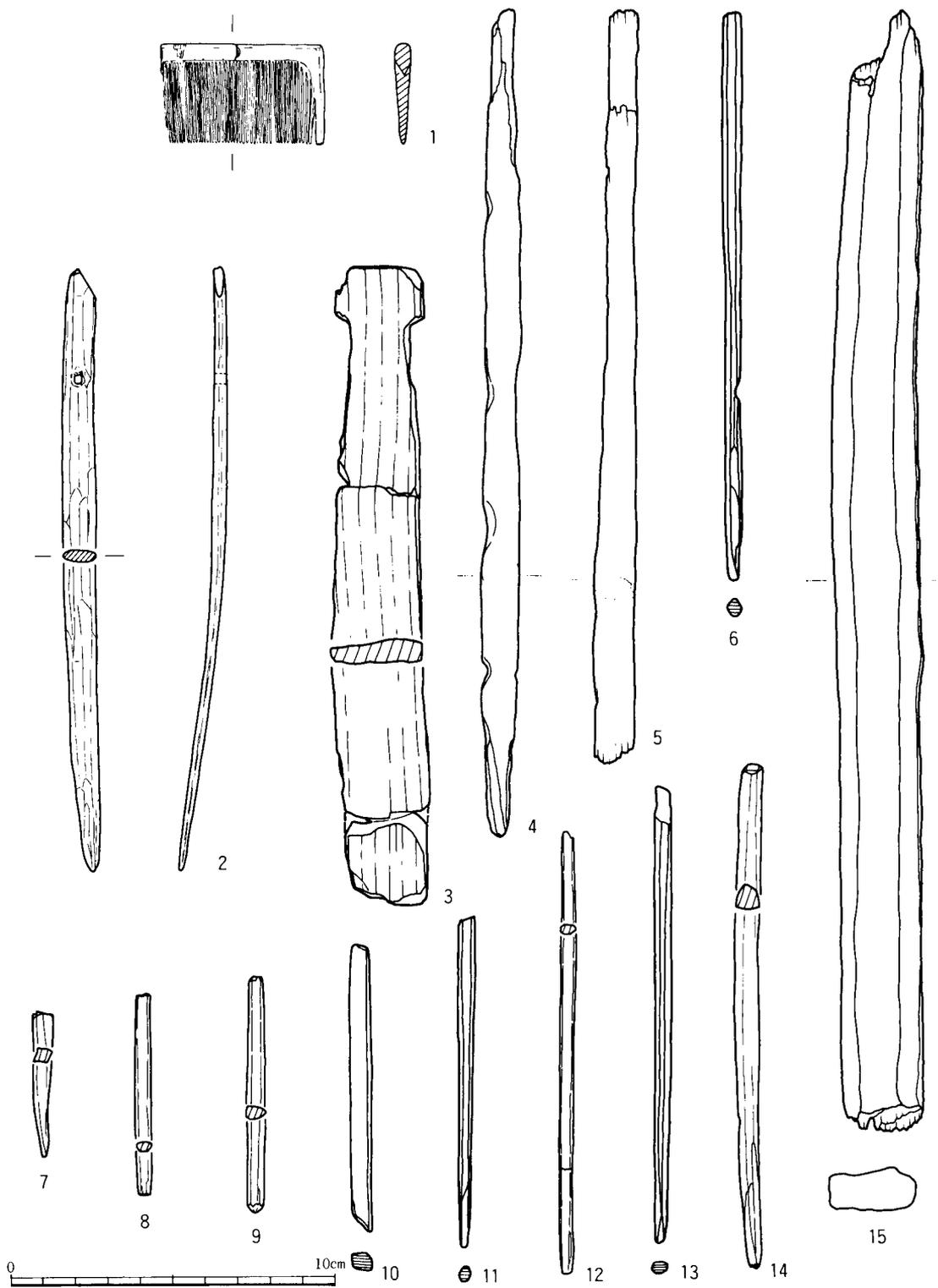
2号土坑出土狭鋤



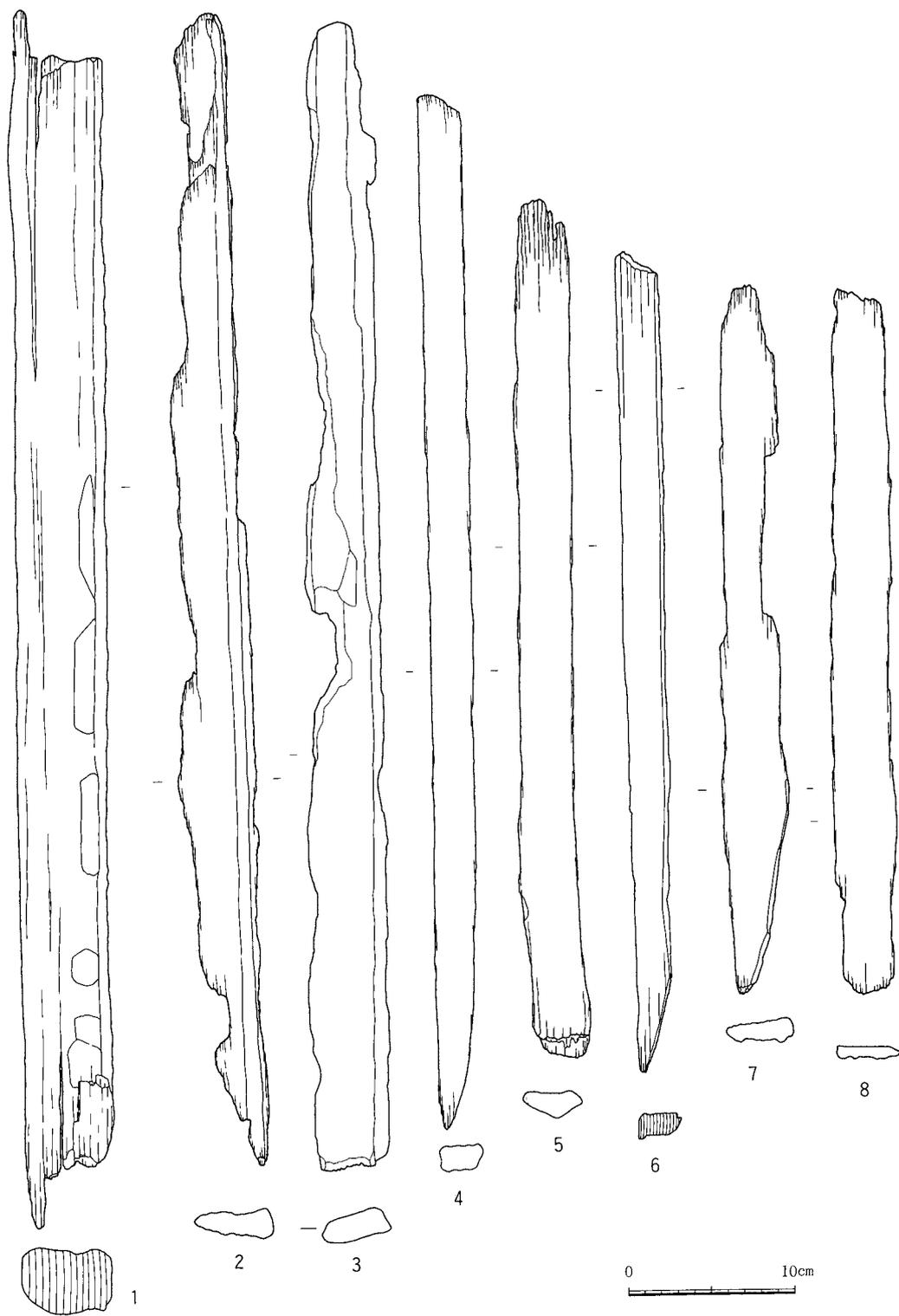
第6-1-1図 1号溝出土木製品実測図1 (縮尺1/3)



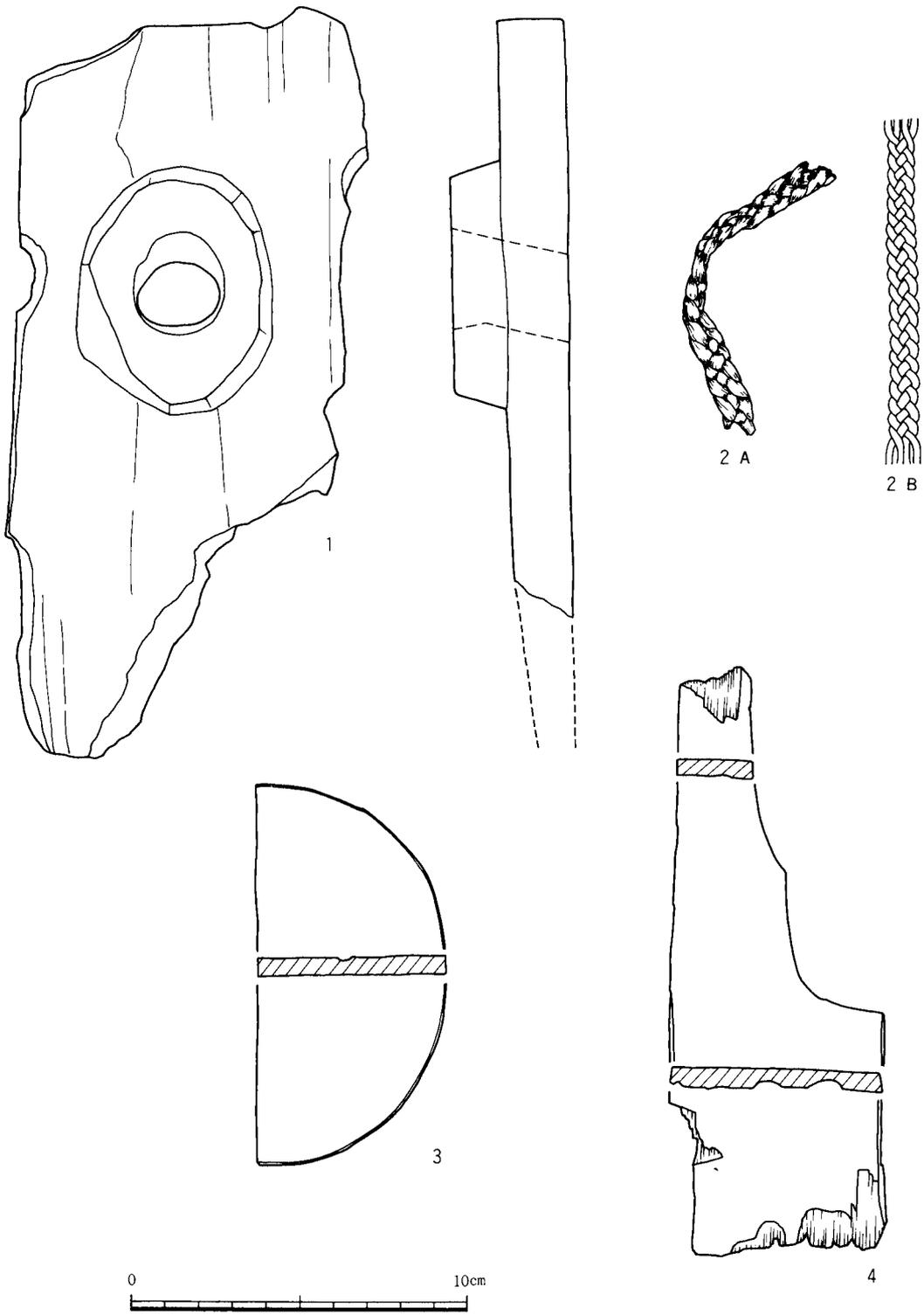
第6-1-2図 1号溝出土木製品実測図2 (縮尺1/3)



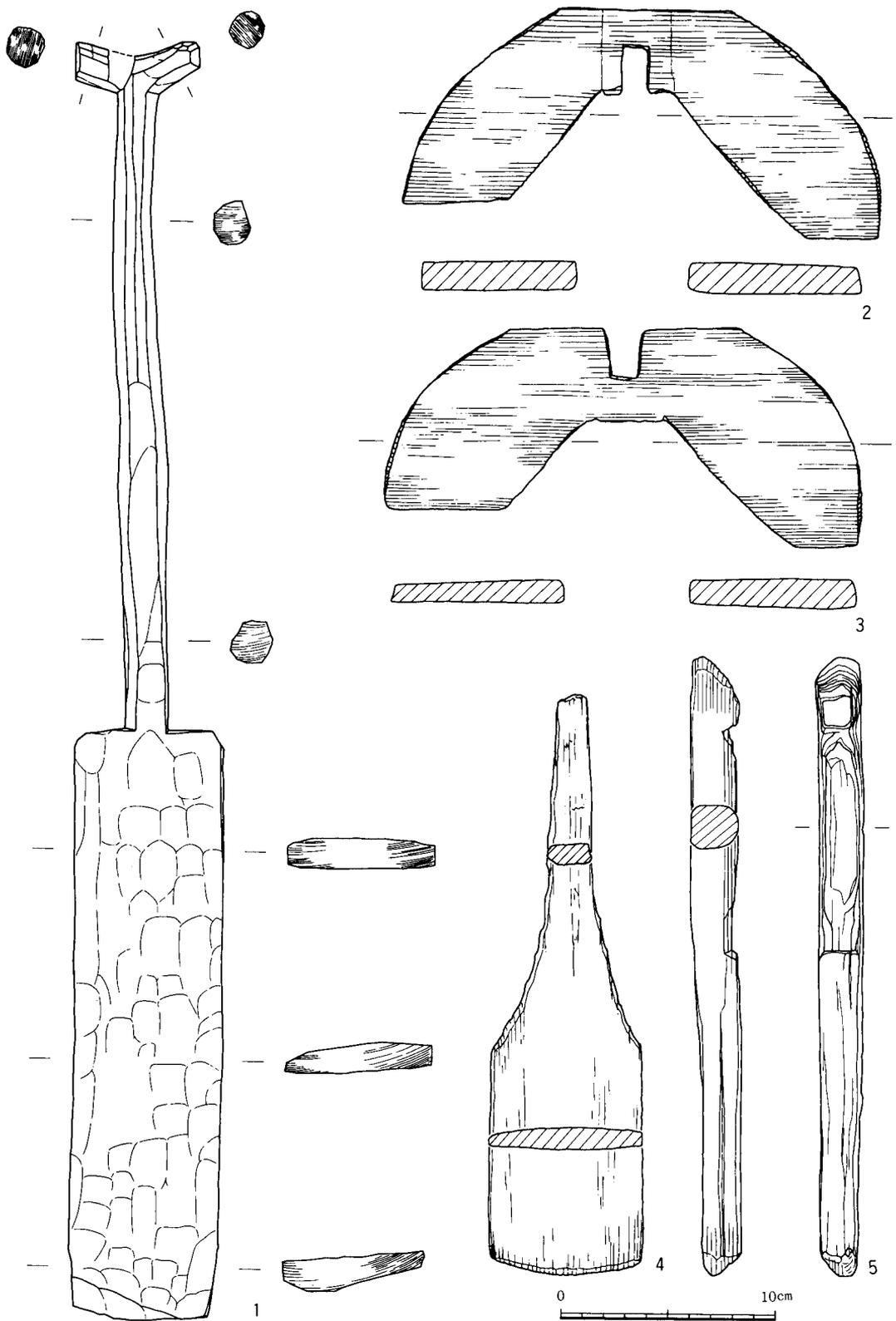
第6-1-3図 1号溝出土木製品実測図3 (縮尺1/2)



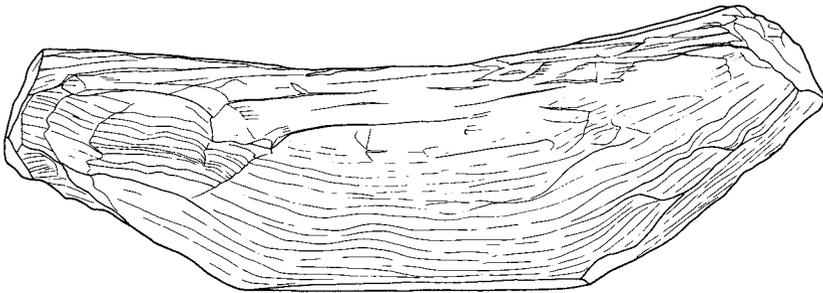
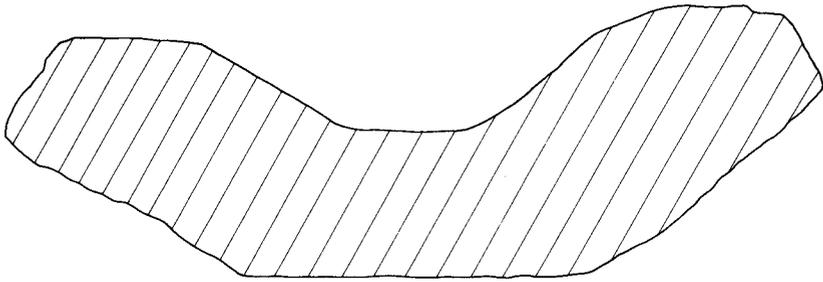
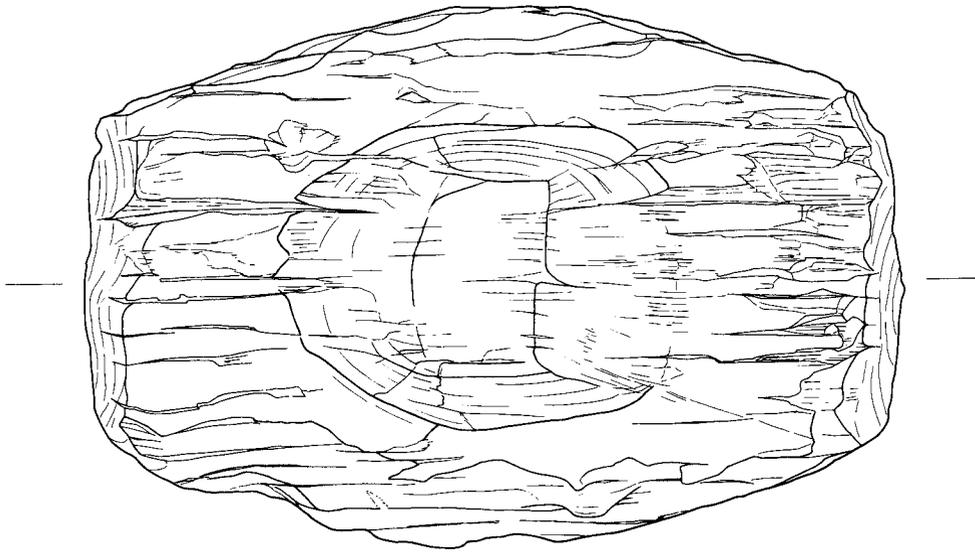
第6-1-4図 1号溝出土木製品実測図4 (縮尺1/4)



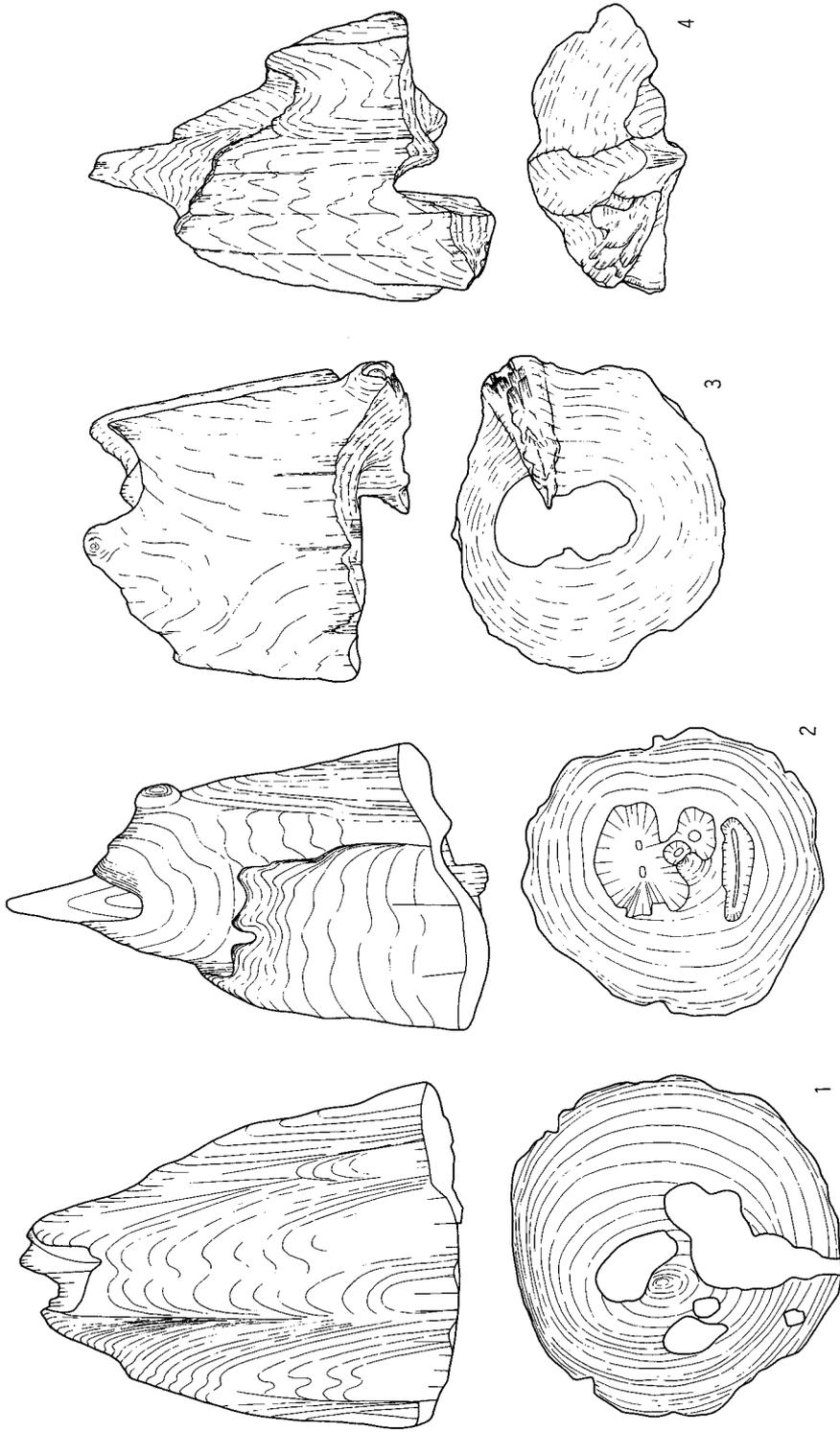
第6-1-5図 2号土塚・6号土塚出土木製品実測図（縮尺1/2）



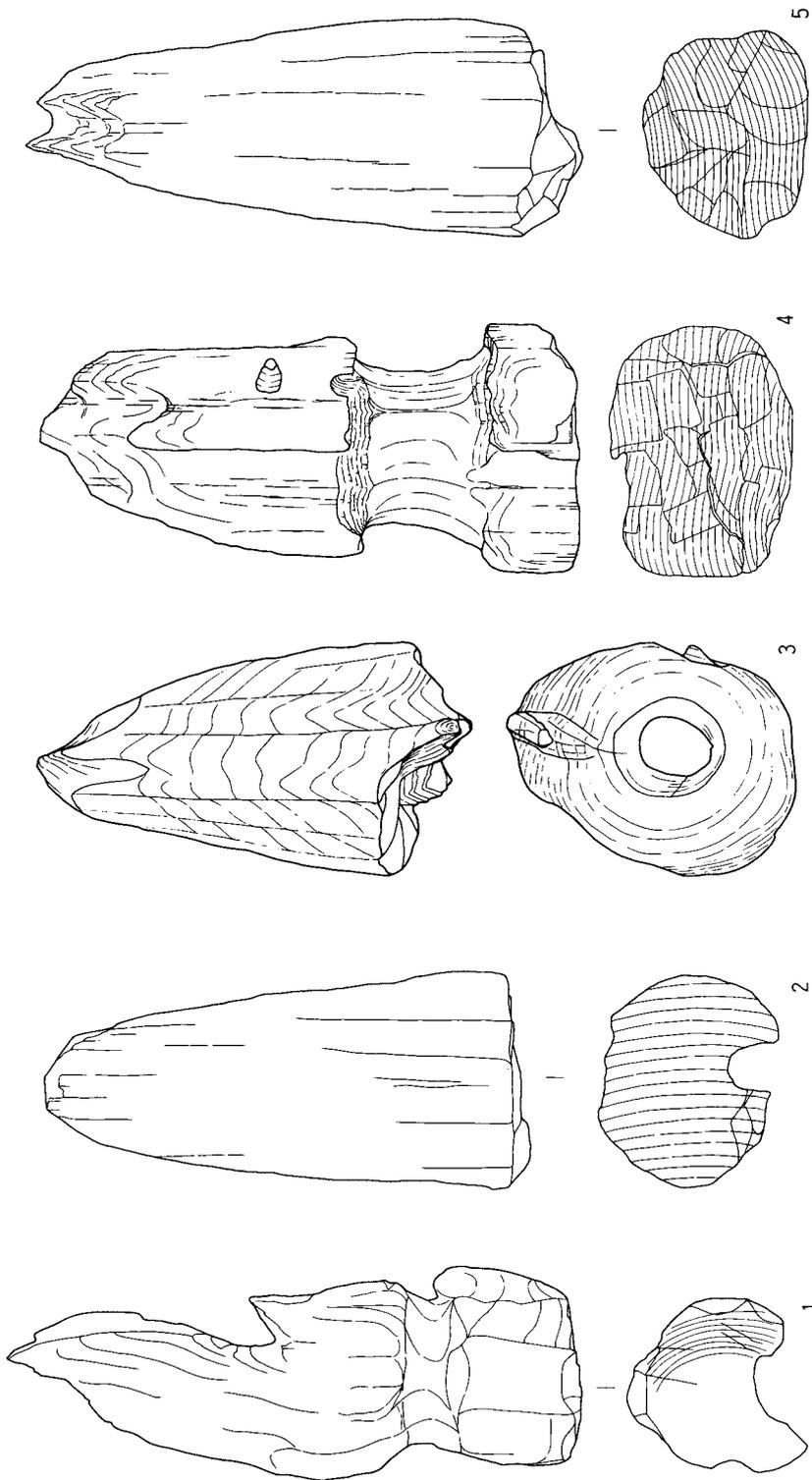
第6-1-6図 3号土塚出土木製品実測図1(縮尺1/3、ただし1は1/6)



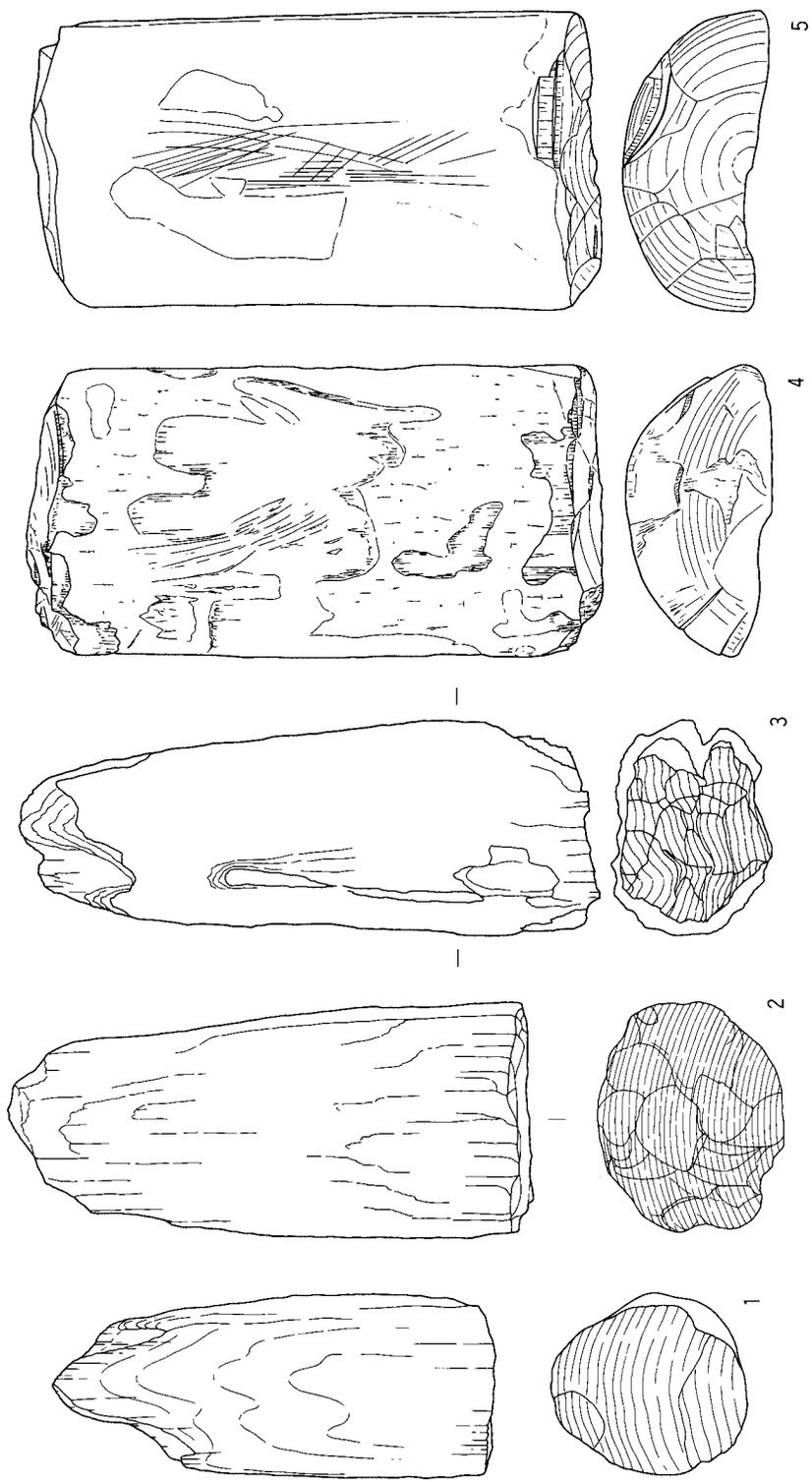
第6-1-7图 3号土坑出土木製品实测图2 (縮尺1/4)



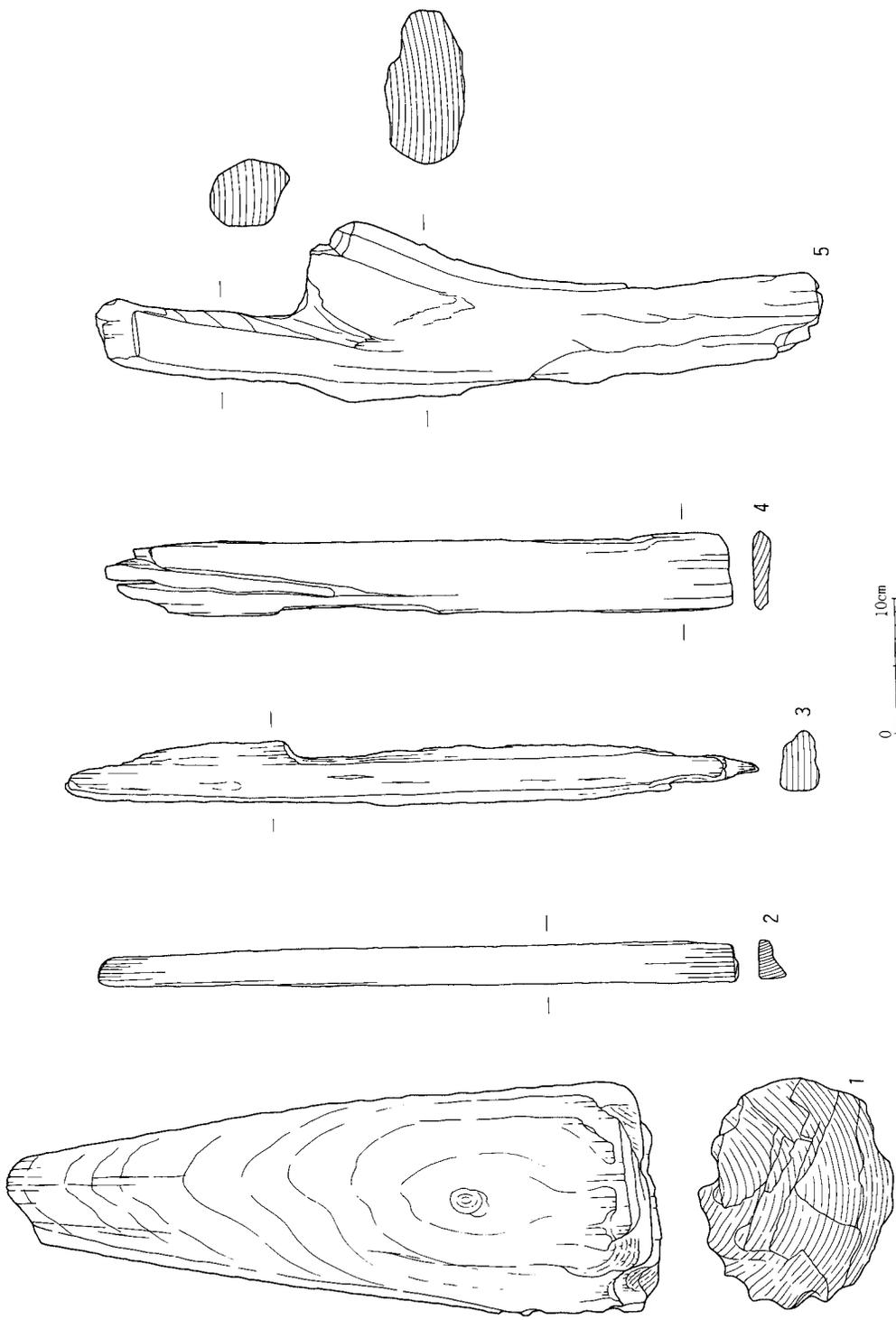
第6-1-8图 柱根实测图1 (缩尺1/5)



第6-1-9区 柱根実測図2 (縮尺1/5)



第6-1-10図 柱根・部材実測図1 (縮尺1/5)



第6-1-11図 柱根・部材実測図2 (縮尺1/5)



















高 堂 遺 跡  
寫 真 圖 版





高堂遺跡俯瞰（第3次調査北西上空より）



第2次調査全景（南西上空より）



第2次調査全景（南東より）



第3次調査出土 1号木簡



第3次調査出土 2号木簡



第3次調査北調査区全景



第3次調査南端調査区全景（北より）



第3次調査南端調査区全景（北東より）



第3次調査南端調査区全景（東より）



第3次調査南端調査区全景（西より）



第3次調査南端調査区全景（南より）



第3次調査南端調査区全景（西より）



第3次調査西側調査区俯瞰（南より）



第3次調査西側調査区全景



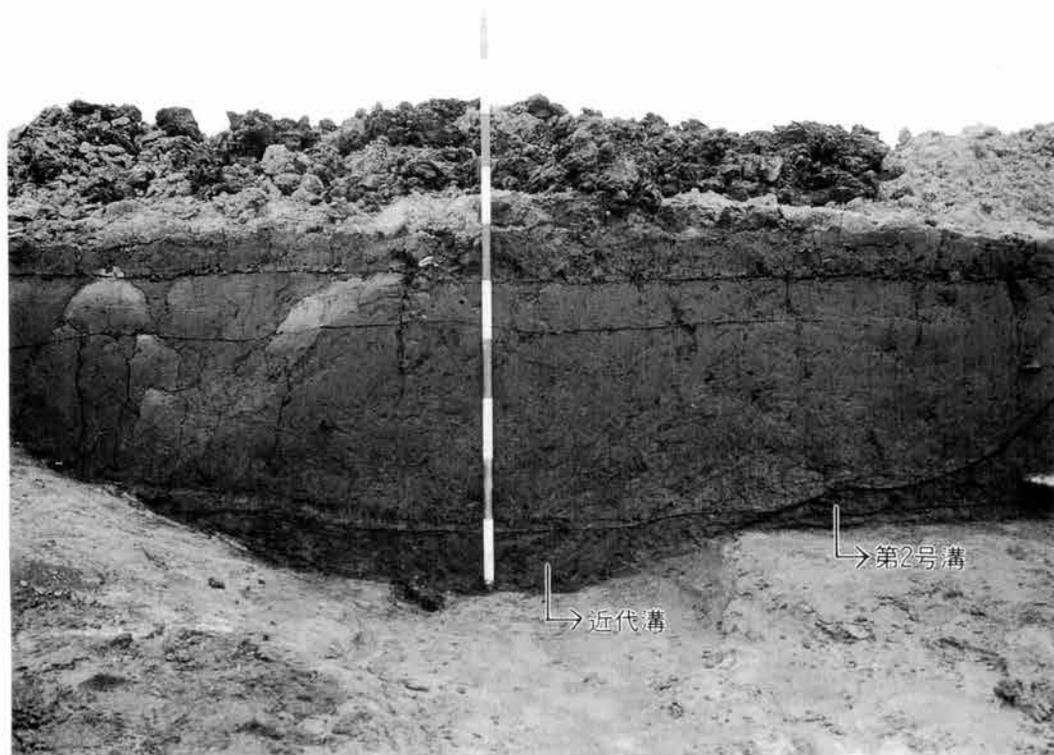
第3次調査西側調査区全景（南より）



遺跡周辺の航空写真



第2号溝(大溝・西から)



第2号溝と近代溝の切り合い



第2号溝南側(大溝・北から)



第14号溝(大溝・北から)



第14号溝北側土器出土状況(西から)



第2号溝土器出土状況



第14号溝土器出土状況



第14号溝土器出土状況



第14号溝土器出土状況



第14号溝調査状況



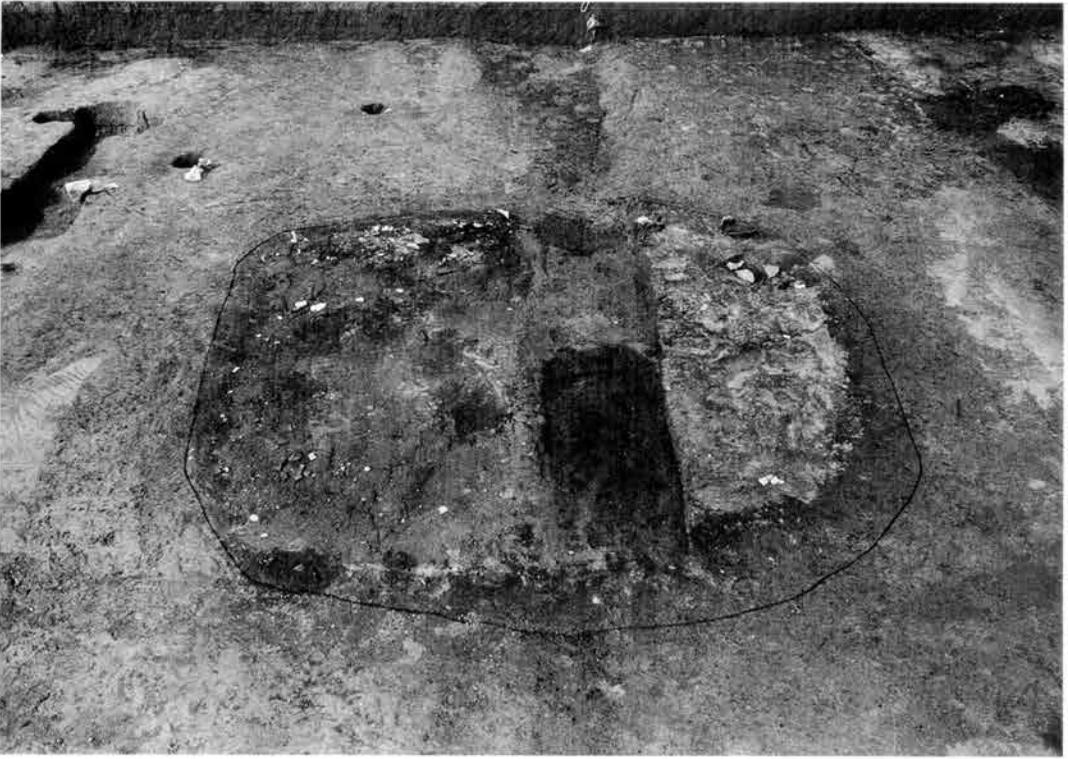
現地説明会



第1号土坑



第2号土坑



第3号土壇検出状況



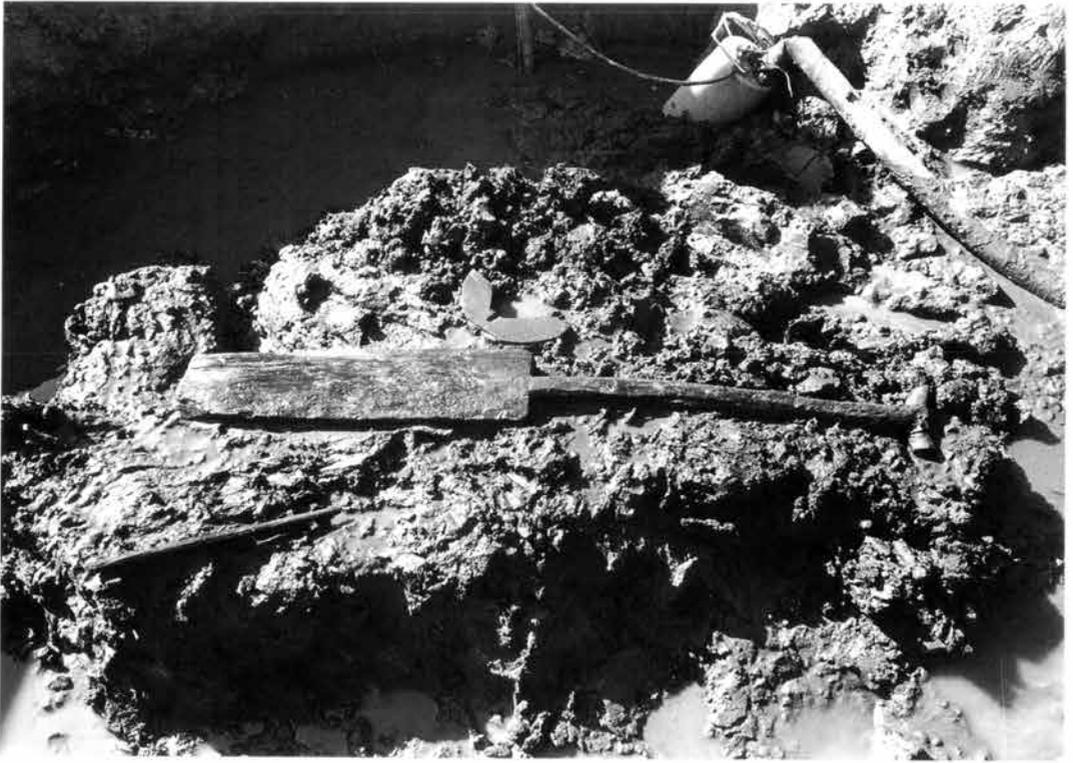
第3号土壇遺物出土状況



第3号土坑遺物出土状況



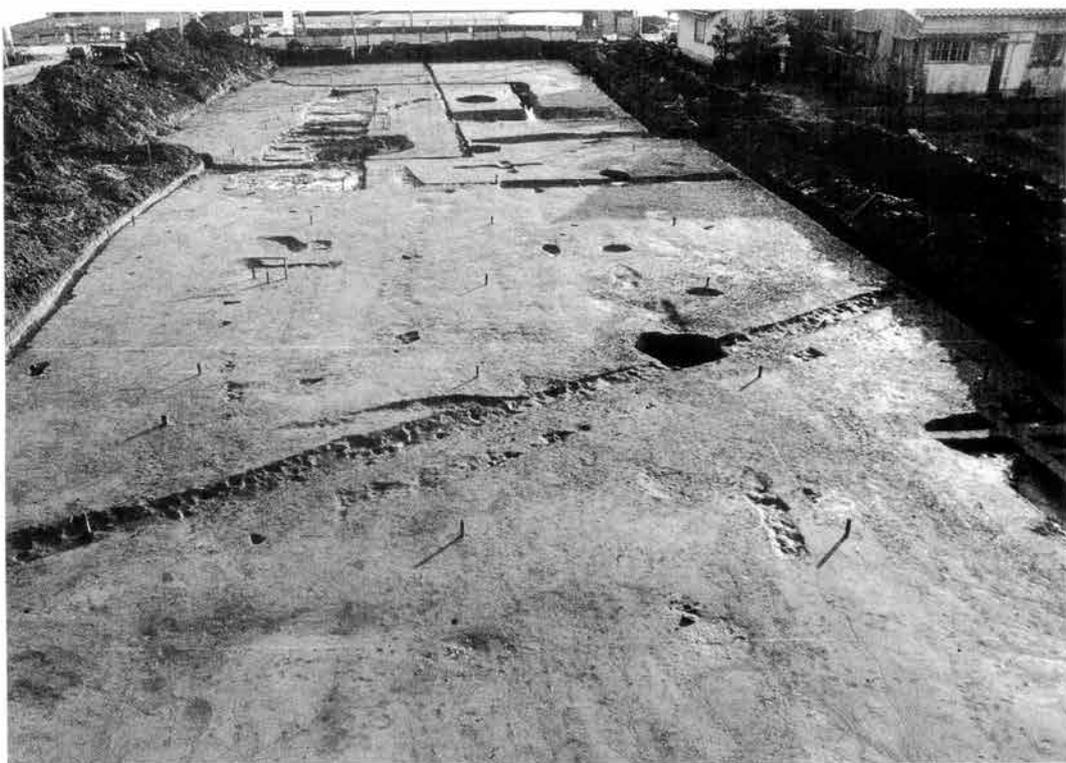
第3号土坑鉢形木器等出土状況



第3号土坑鋤出土状況



第3号土坑完掘状況



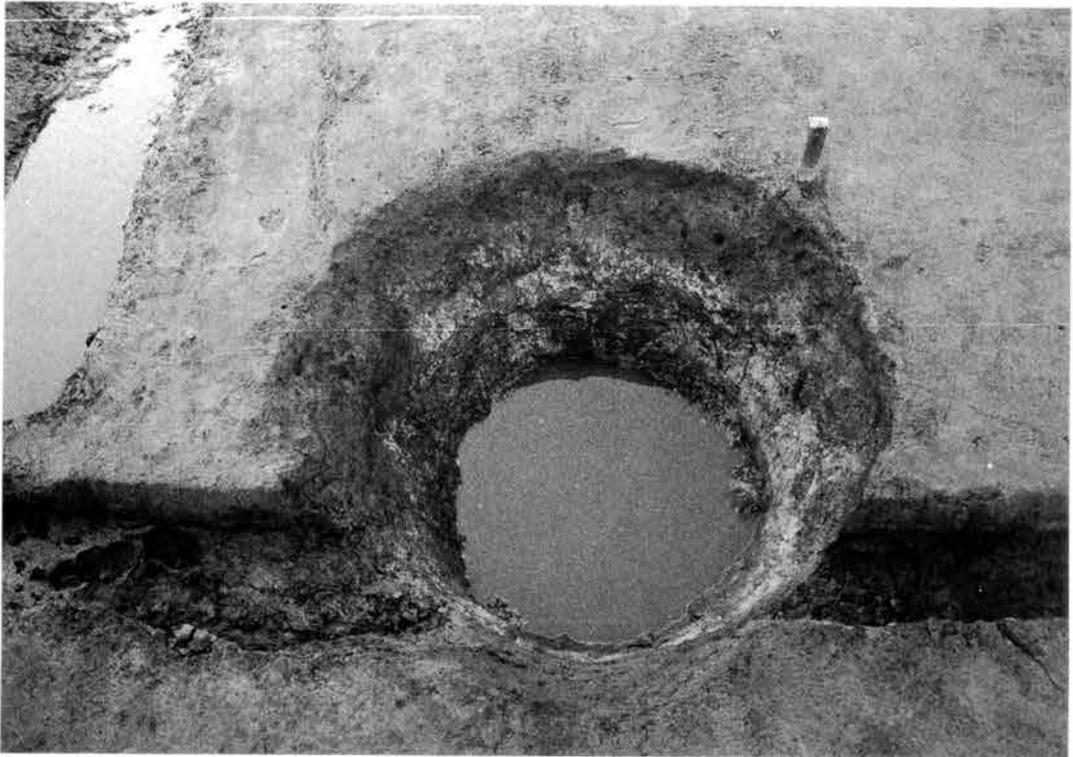
県道北側調査区(手前15号溝・北から)



県道北側調査区第2号土坑(南から)



県道北側調査区第3号土坑(東から)



県道北側調査区第4号土坑(東から)



第2次調査区俯瞰(西より)



第2次調査区北側調査開始時の状況



第12号掘立柱建物跡(南から)



第2号掘立柱建物跡(西から)



第8・9号掘立柱建物跡(西から)



北掘立柱建物跡群全景



第5号掘立柱建物跡(北から)



第6号掘立柱建物跡



第117号ピット銅銭出土状況



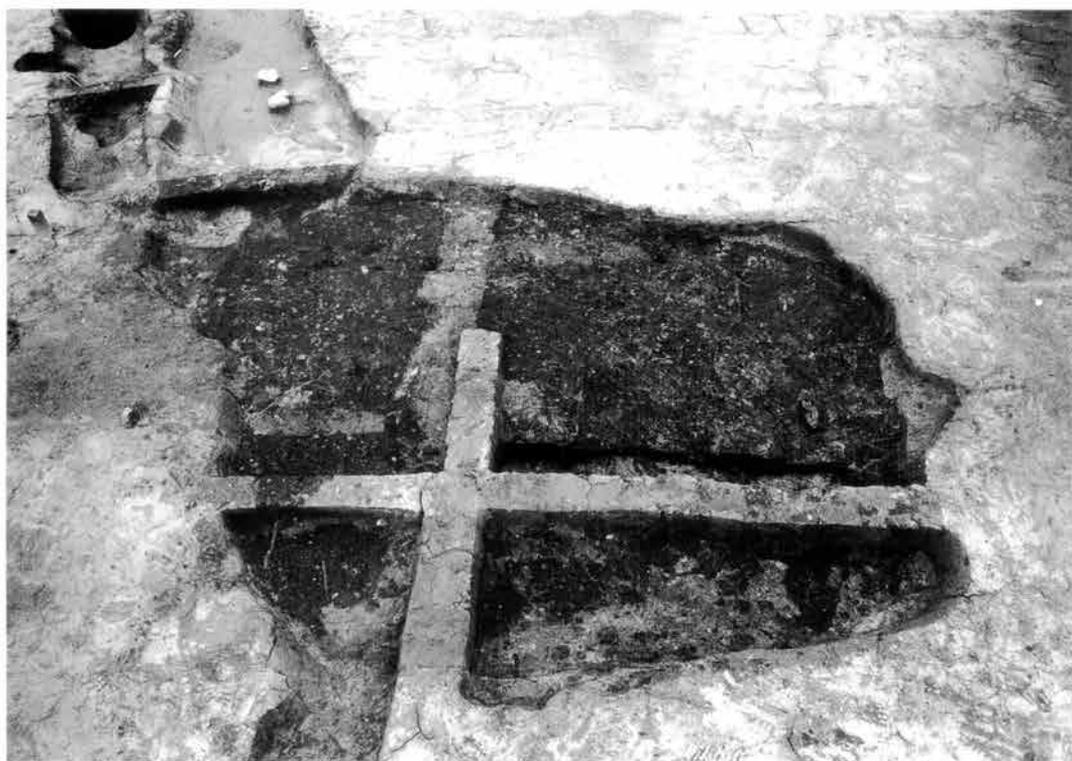
同上出土状況細部



第161号ヒット銅銭出土状況



同上出土状況細部



竪穴状遺構炭化物層検出状況(北から)



竪穴状遺構完掘状況(北から)



第14号溝 (西から)



第14号溝 (東から)



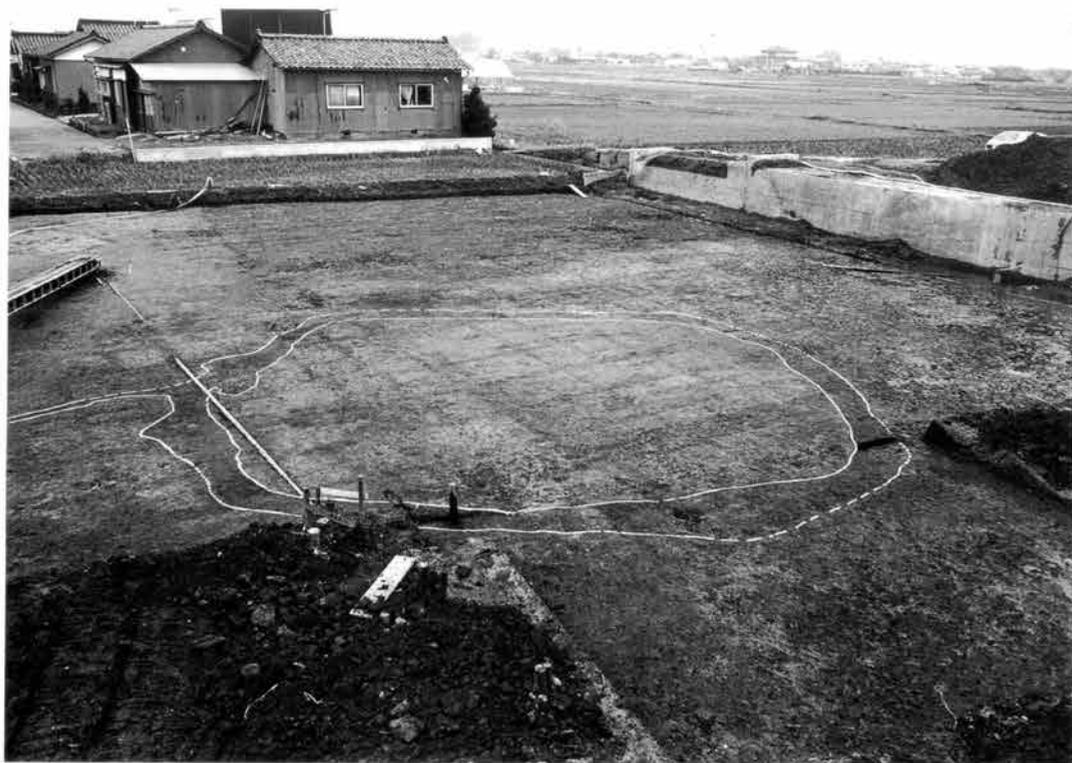
第15号溝 (東から)



第14号溝土器出土状況



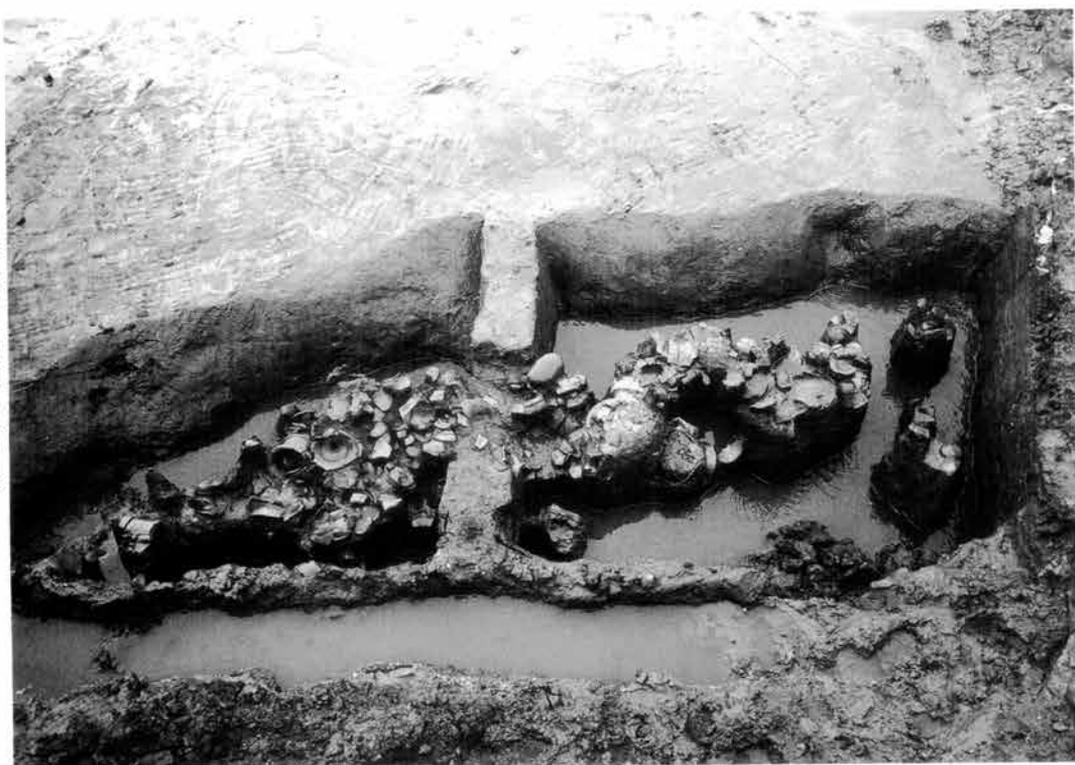
第14号溝セクション



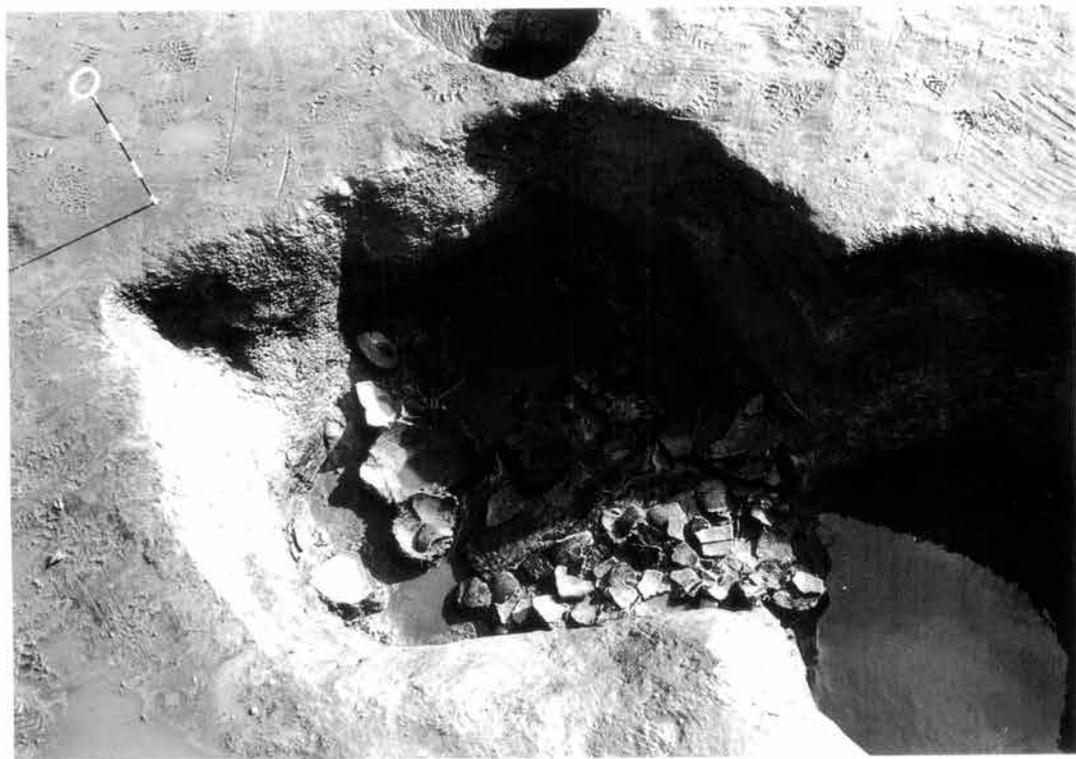
方形周溝状遺構検出状況(西から)



方形周溝状遺構(南から)



溝状遺構(第二次20号溝)土器出土状況(北から)



第4号土壇土器出土状況(西から)



発掘調査作業状況



土器の発掘状況



第1・2号溝(空中写真)



第1号溝南端部(南から)



第1号溝(南から)



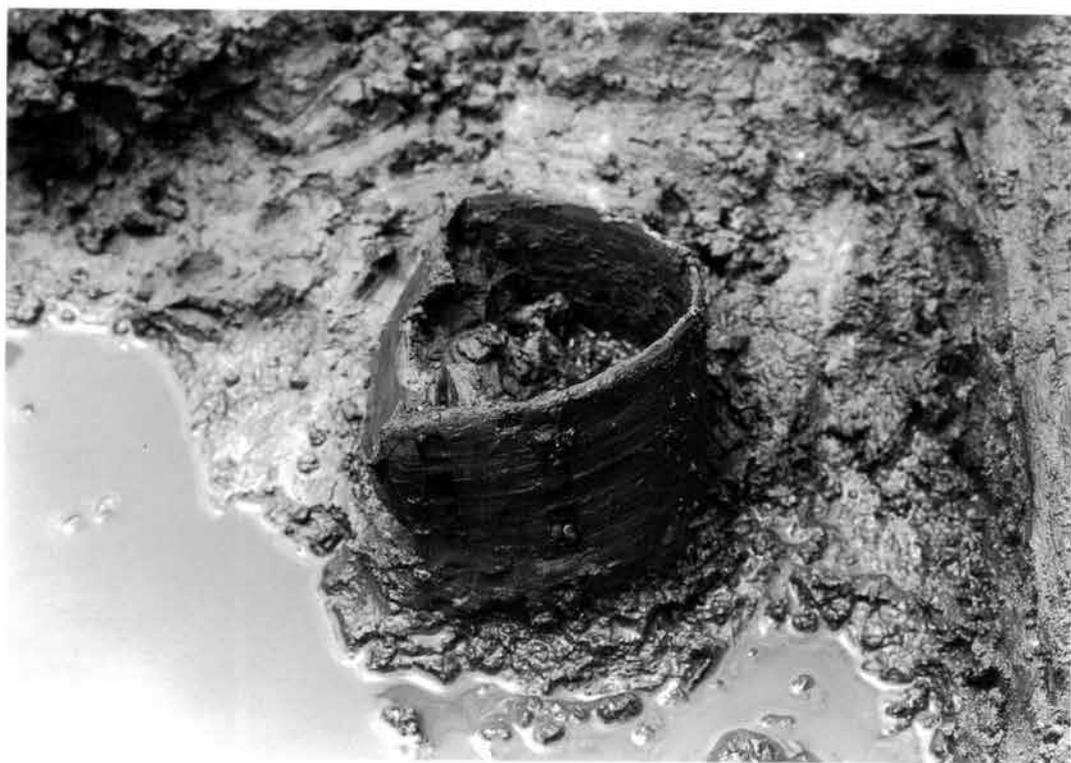
第1号溝南端部遺物出土状況(東から)



第1号溝南端部セクション



第1号溝カゴ状編み物出土状況



第1号溝曲物出土状況



第2号溝(西から)



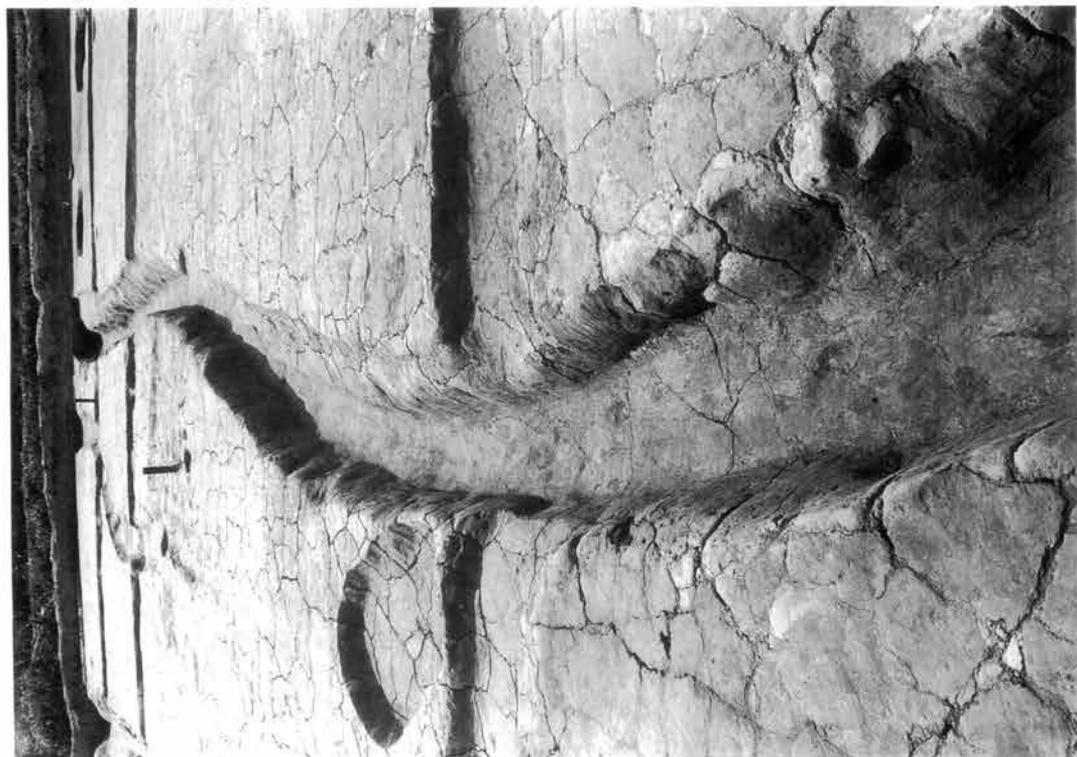
第2号溝(東から)



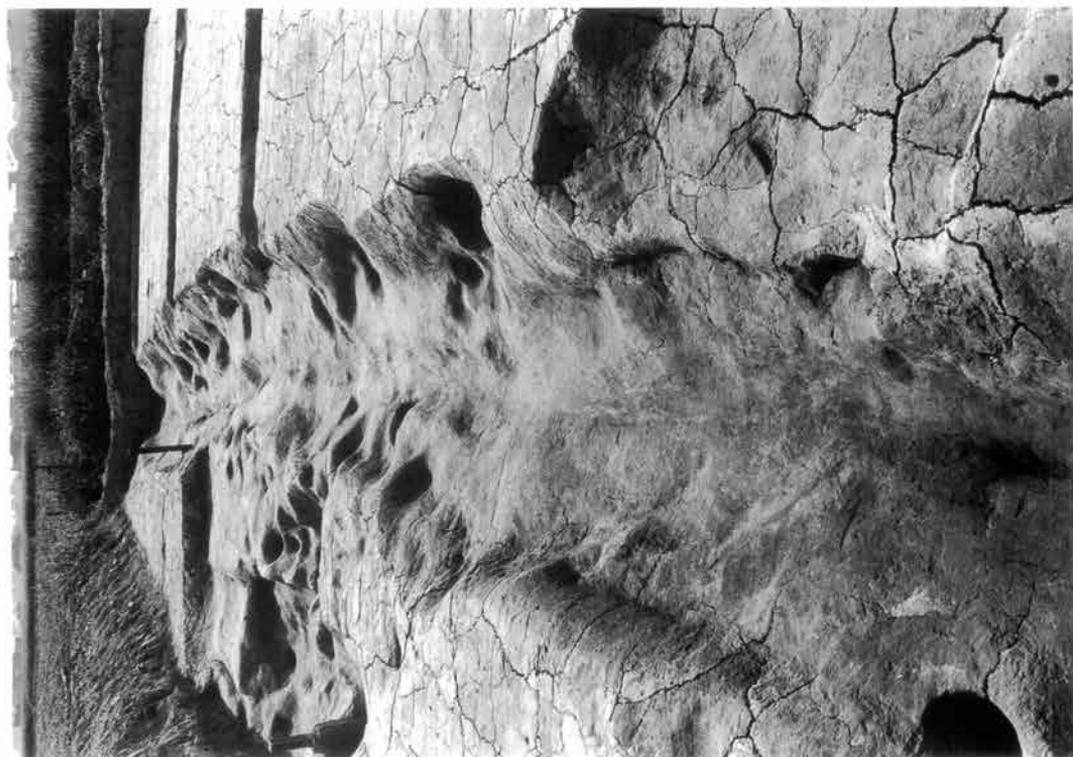
第2号溝高環出土状况



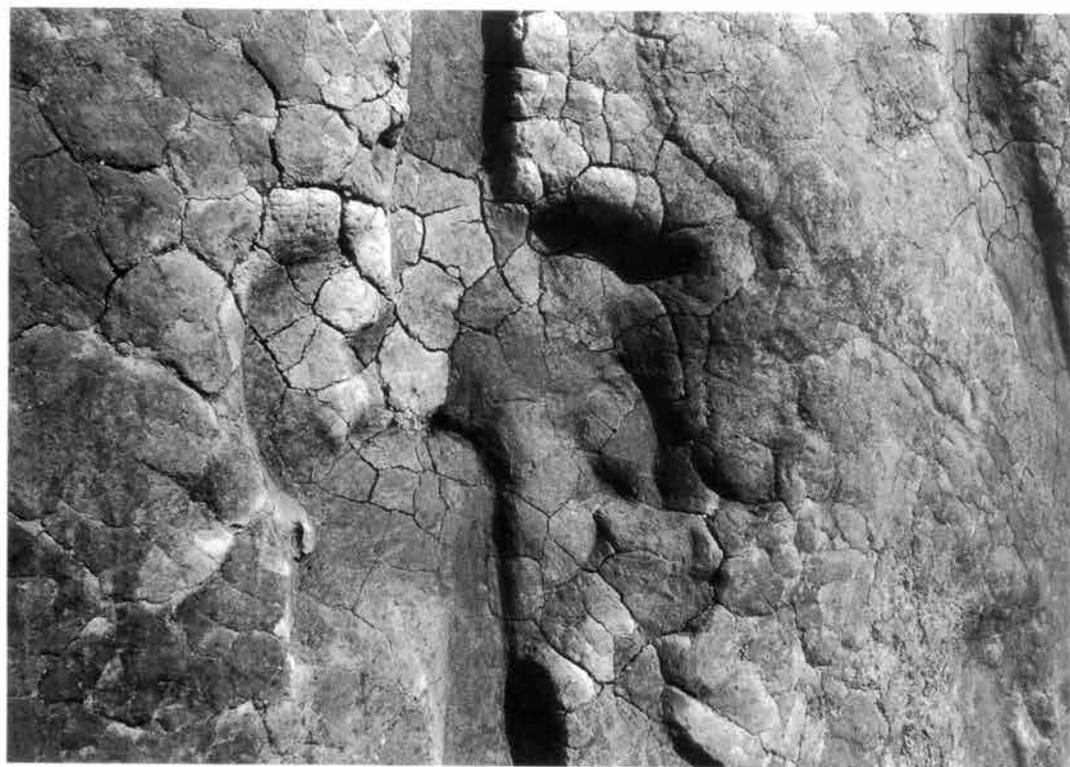
第2号溝石器出土状况



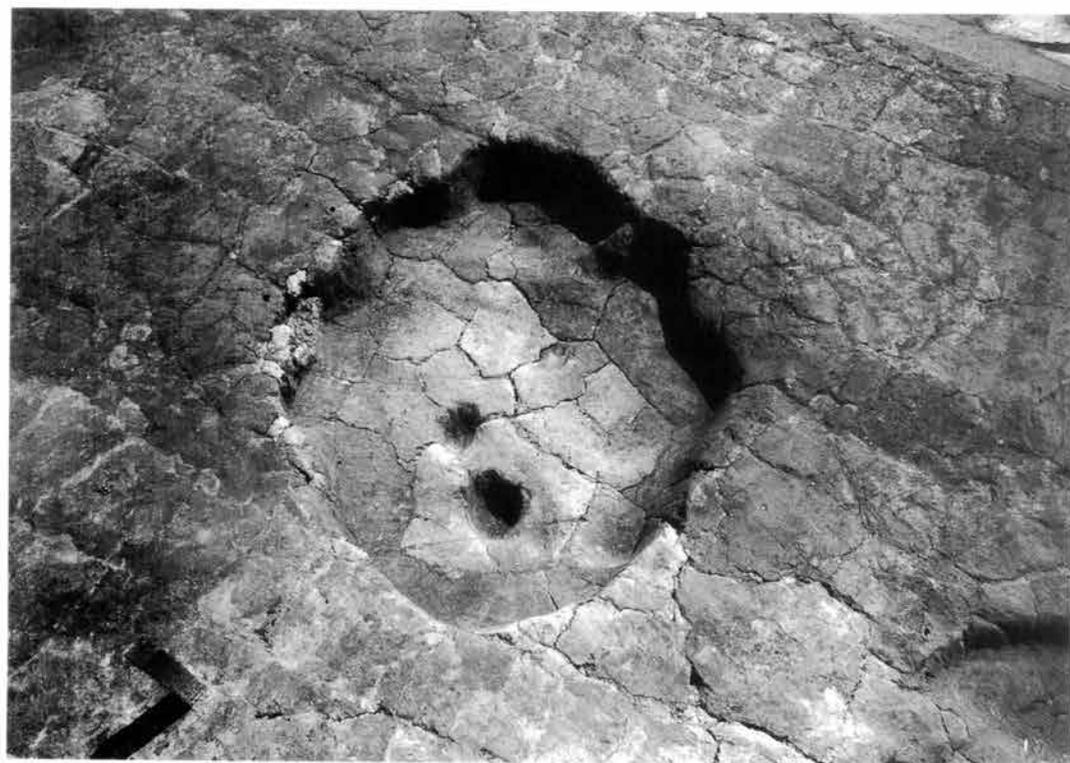
第10号溝



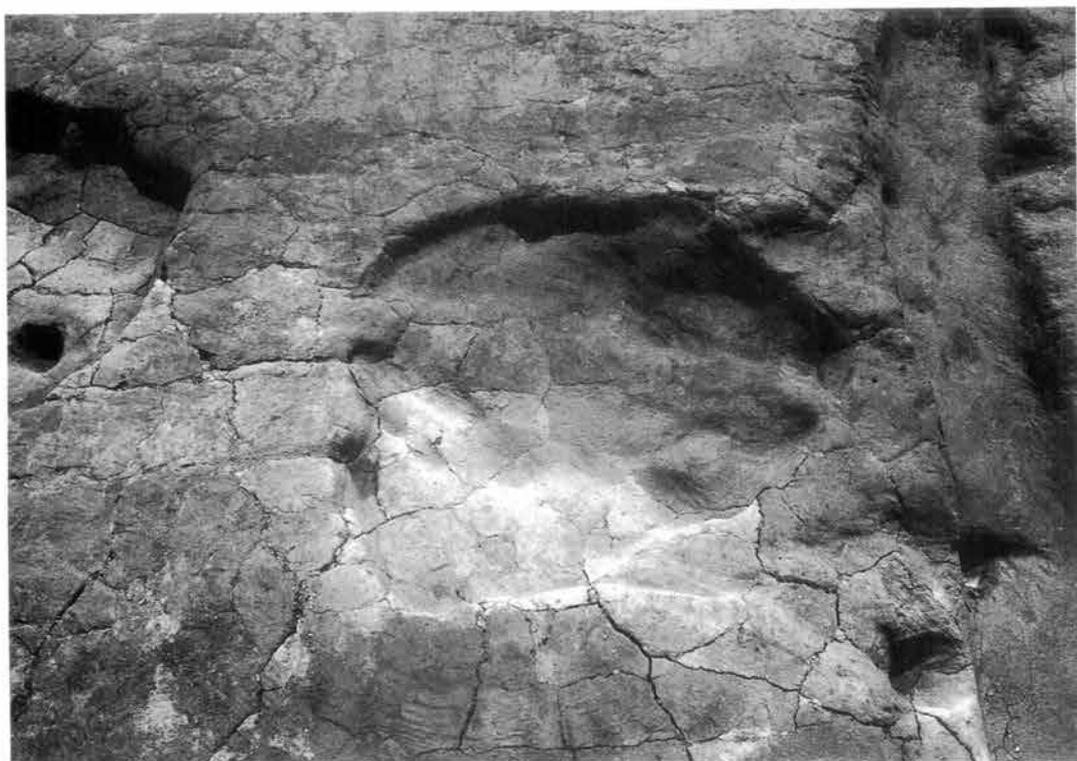
第11号溝



第1号土壇(北から)



第3号土壇(南から)



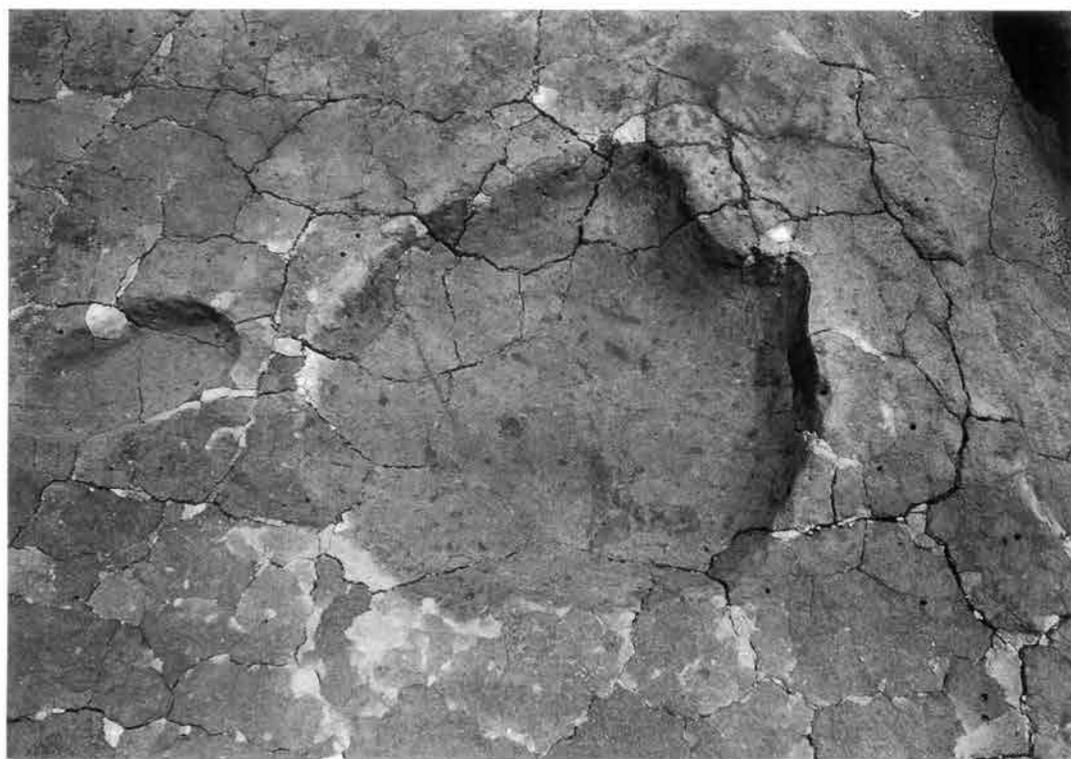
第4号土壇(西から)



第5号土壇(西から)



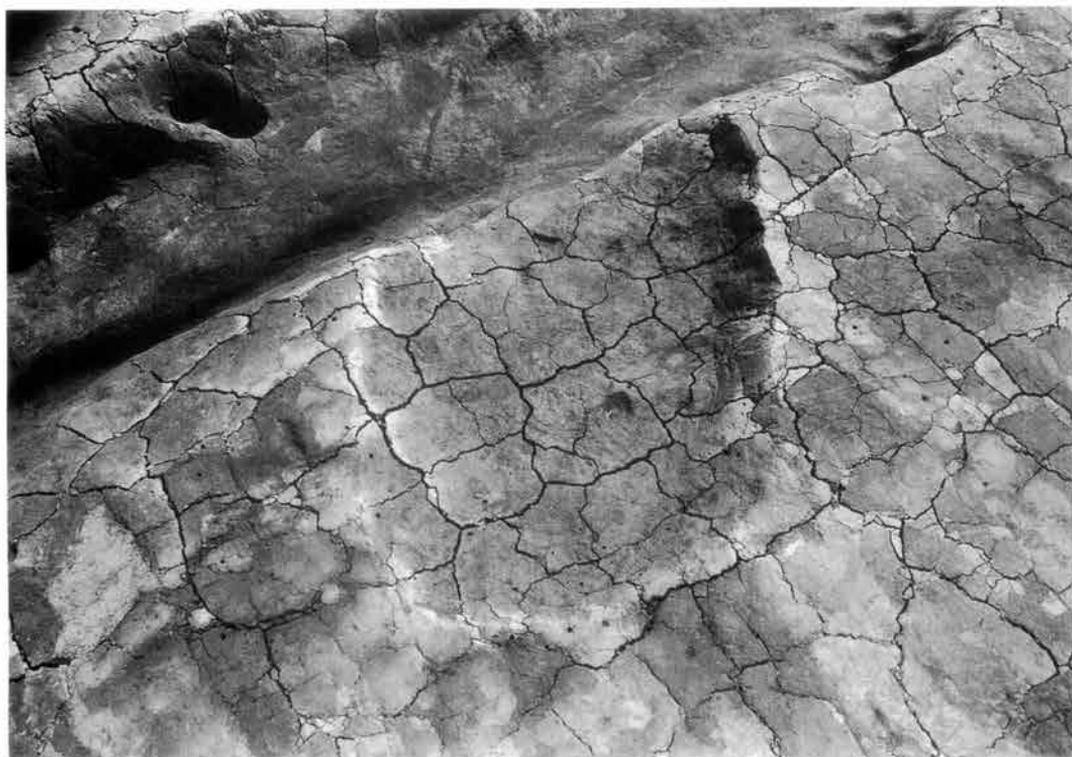
第6号土壇(南から)



第7号土壇(北から)



第8号土壇(西から)



第10号土壇(南から)



第11号土壇(東から)



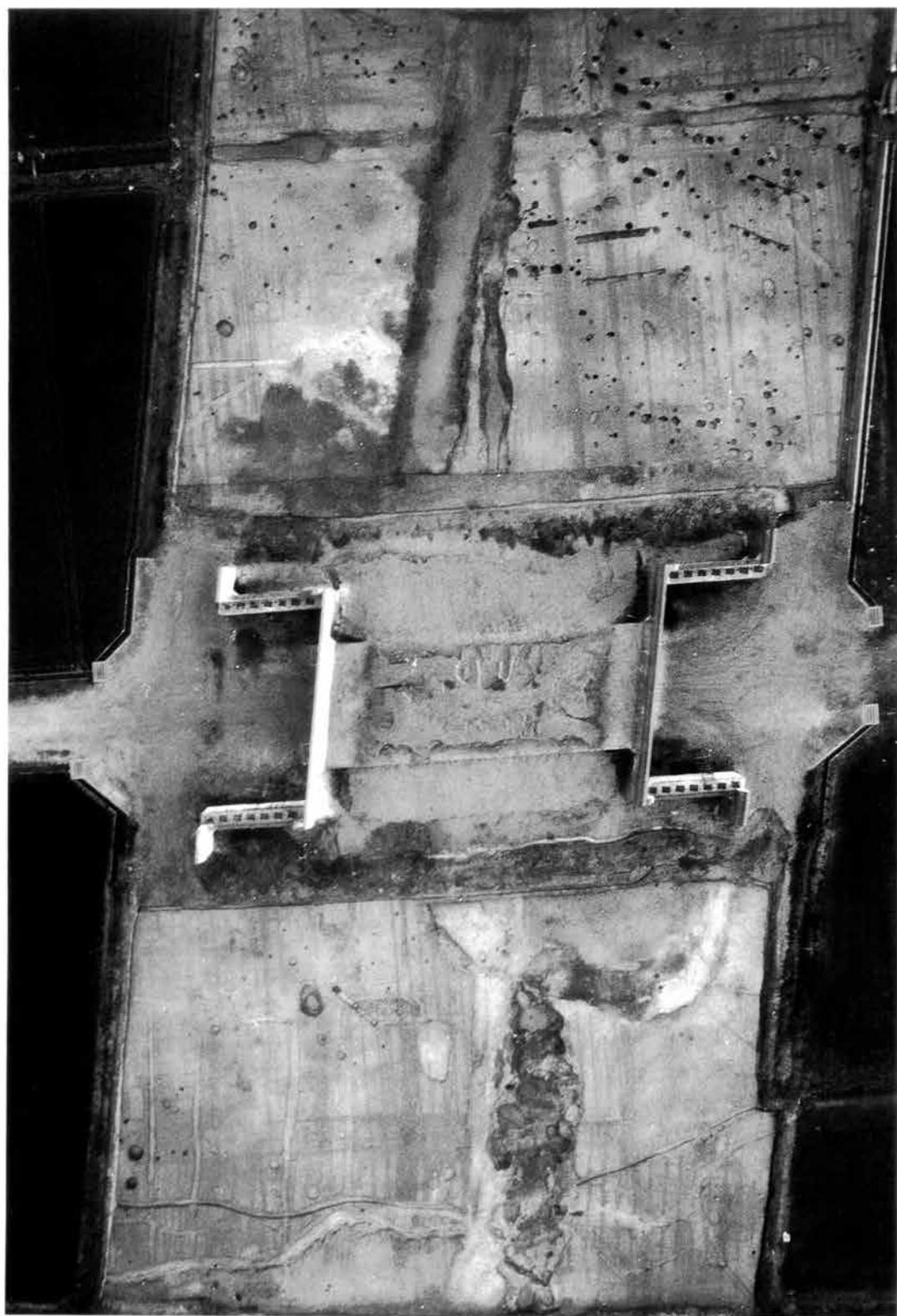
第12号土壇(北から)



第14号土坑 (南から)



第1号掘立柱建物跡 (北から)



第3次南側調査区空中写真



第3次南調査区西側掘立柱建物跡群(空中写真)



第3次南調査区東側掘立柱建物遺跡群(空中写真)



第2号掘立柱建物跡(北から)



第3号掘立柱建物跡(北から)



第4号掘立柱建物跡(南より)



第5号掘立柱建物跡(南より)



第6号掘立柱建物跡(西から)



第7号掘立柱建物跡(西から)



第8号掘立柱建物跡(東から)



第1号布掘掘立柱建物跡(西から)



第2号布掘掘立柱建物跡(東から)



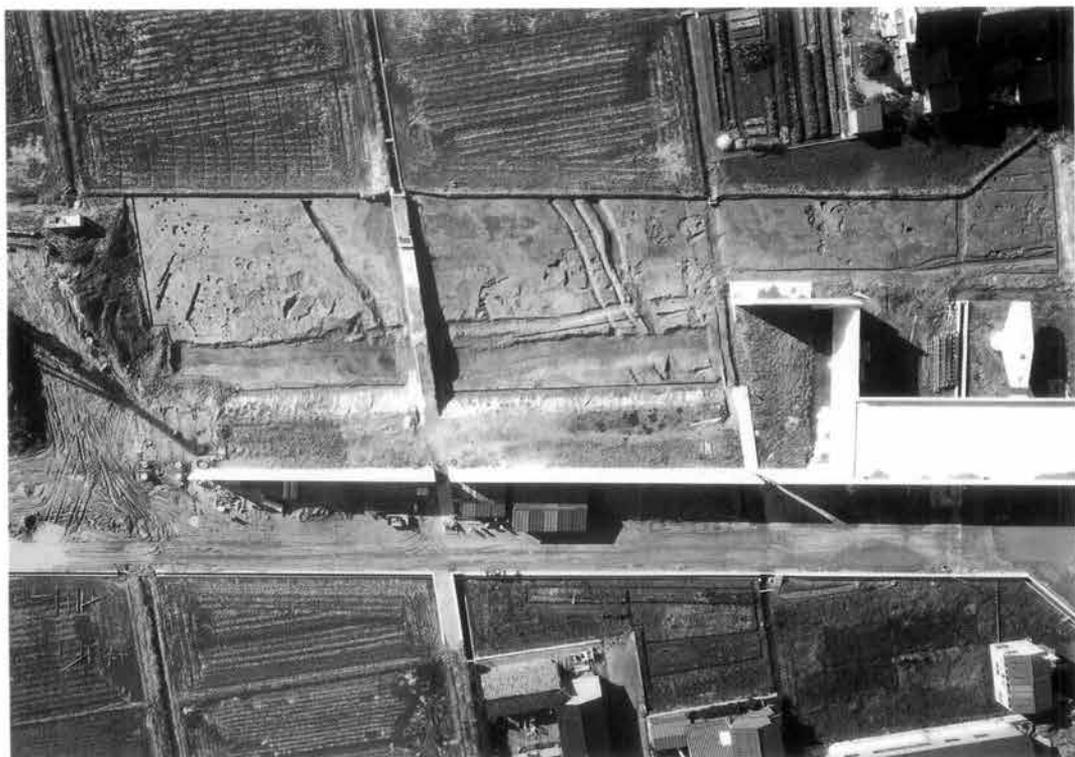
第3号布掘掘立柱建物跡(東から)



第4号布掘掘立柱建物跡(北から)



第4号布掘掘立柱建物跡木柱根出土状況(西から)



第3次北調査区空中写真



第3次第40号溝空中写真



第40号溝土器出土状況(西から)



第40号溝土器出土状況(北から)



第40号溝土器出土状況



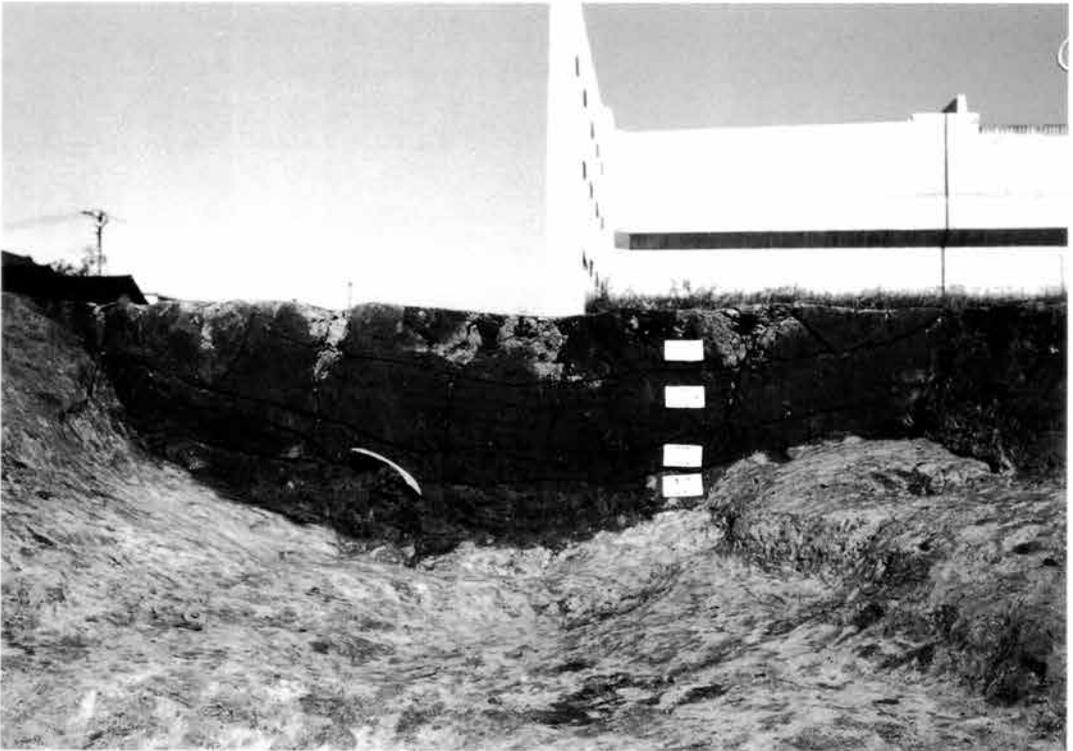
第40号溝土器出土状況



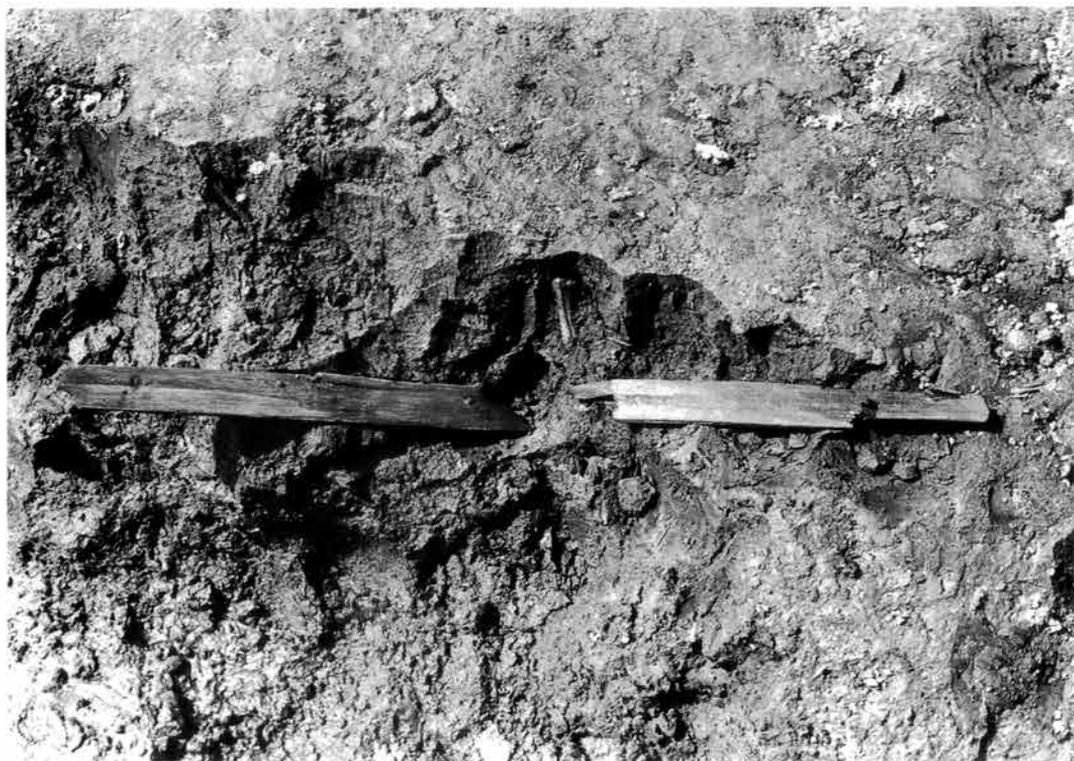
G30区付近の第1号溝 (南から)



I15区付近の第1号溝 (南から)



第1号溝 I15区セクション



第1号溝木簡出土状況(2号木簡)



第1号溝楠出土状況



第1号溝木製品出土状況



第1号溝木製品出土状況



第1号溝K-5区土器出土状況(東から)



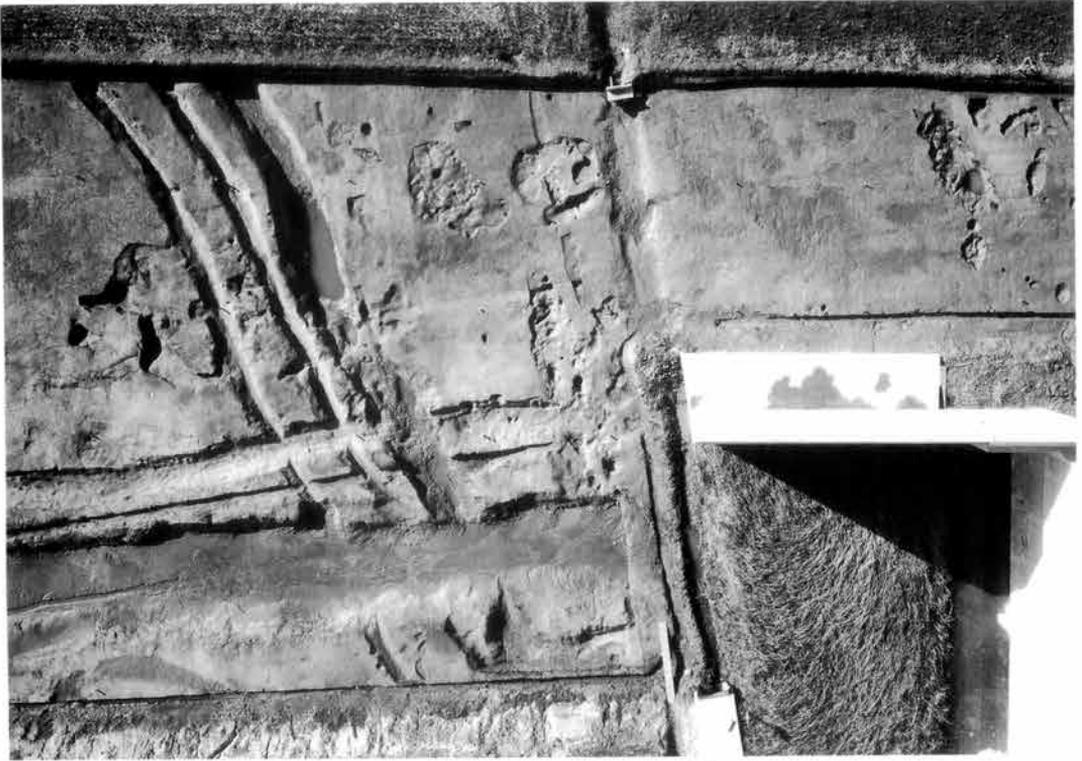
同上細部(東から)



第1号溝セクション(東から)



第13号～16号溝(東から)



第13号～16号溝(空中写真)



第三次北側調査区(空中写真)



1



8



3

1・3：3号土塚

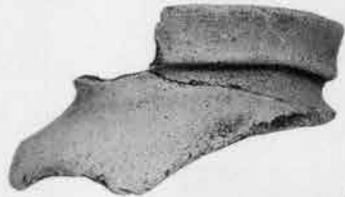


9

4・8・9：4号土塚  
10～12：5号土塚



4



10

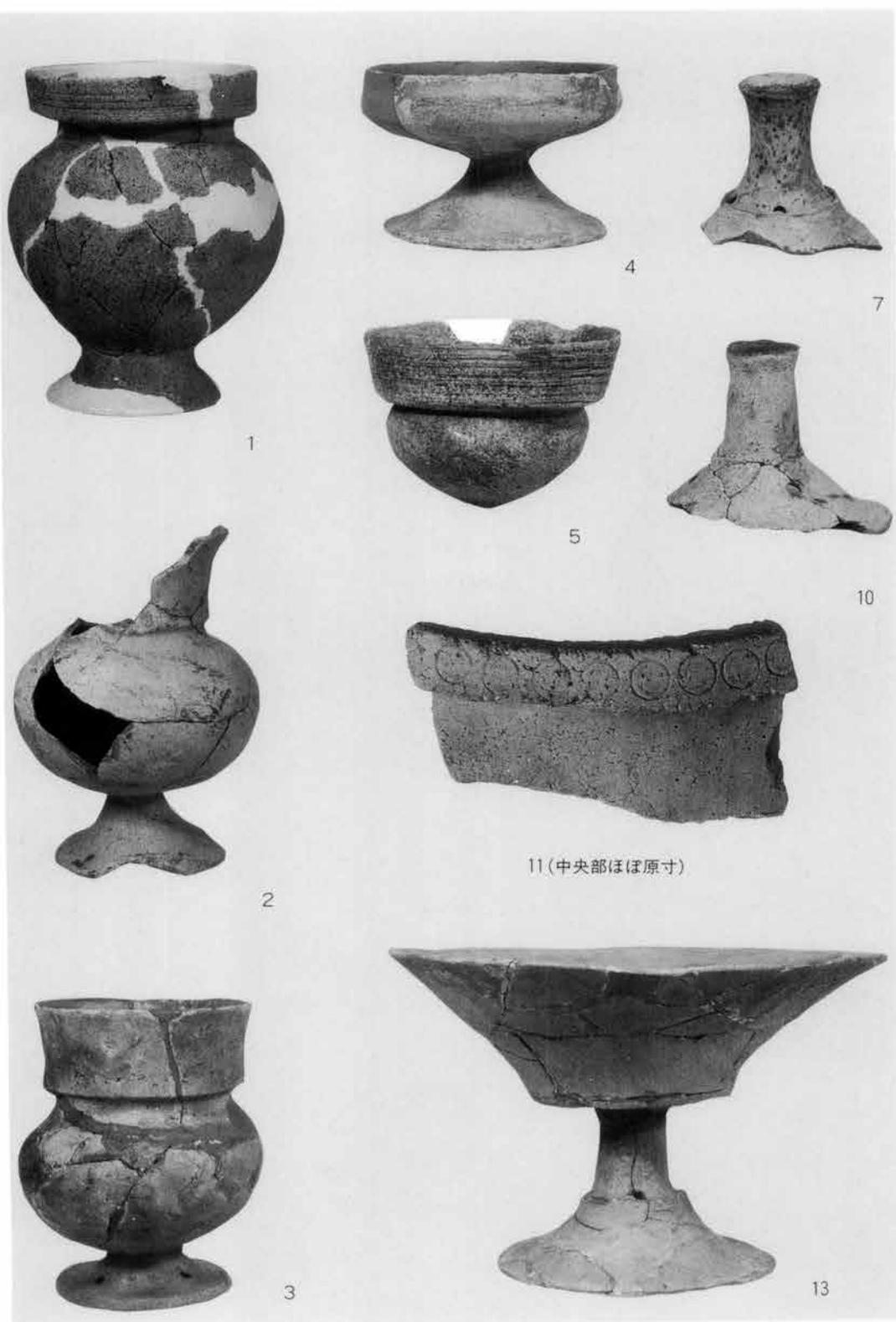


11



12

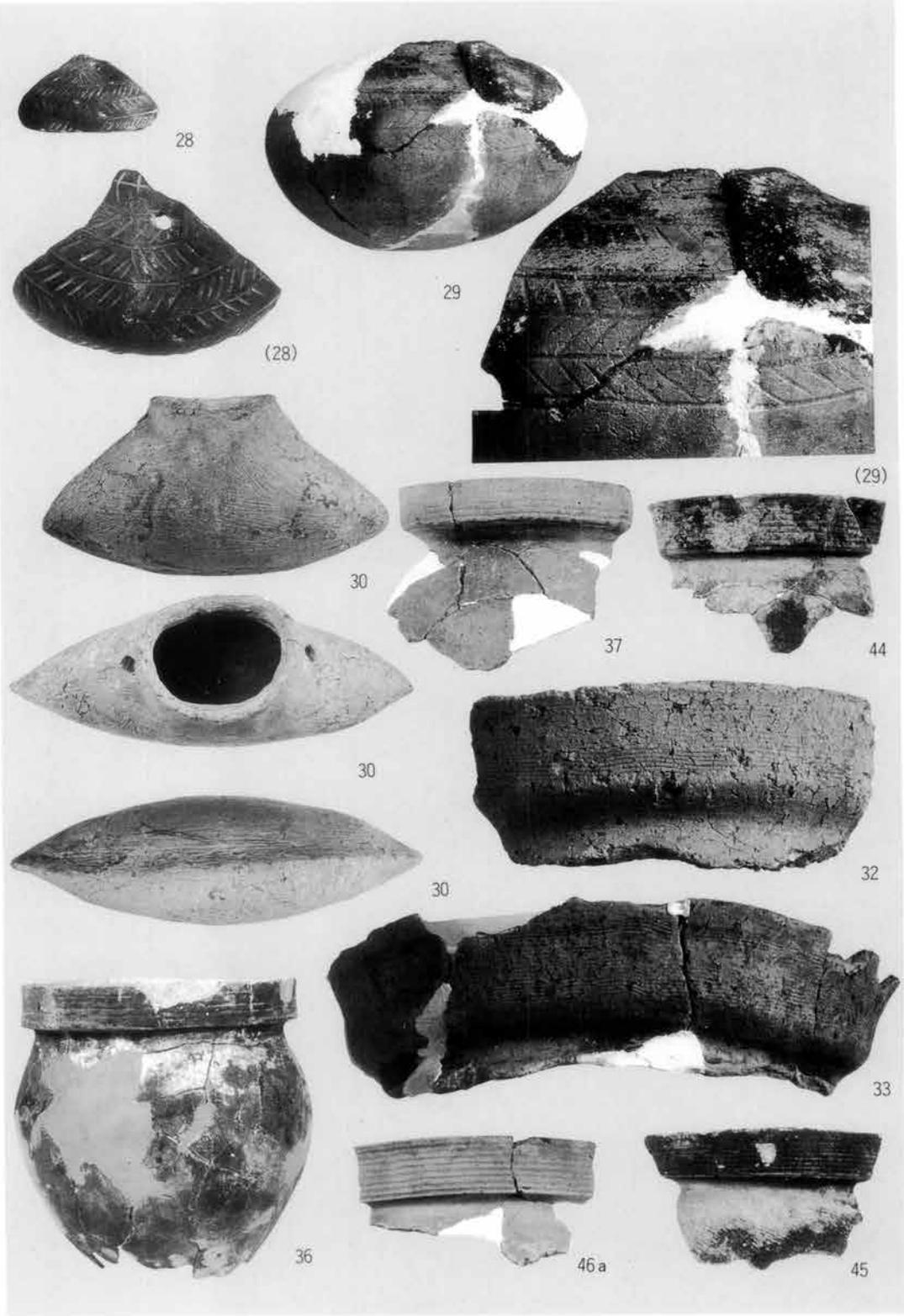
第2次調査1号建物出土土器



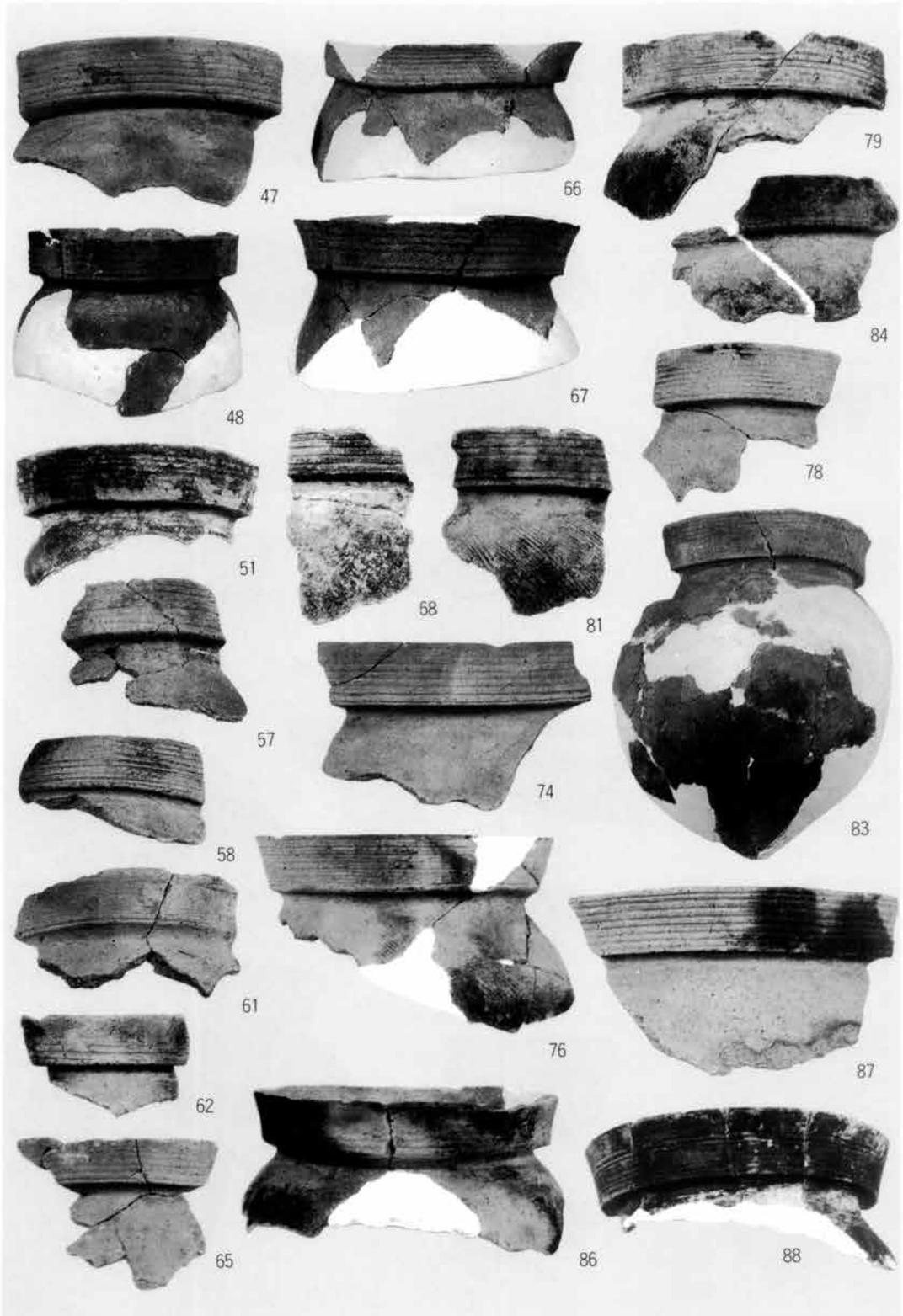
第1次調査2号溝出土土器



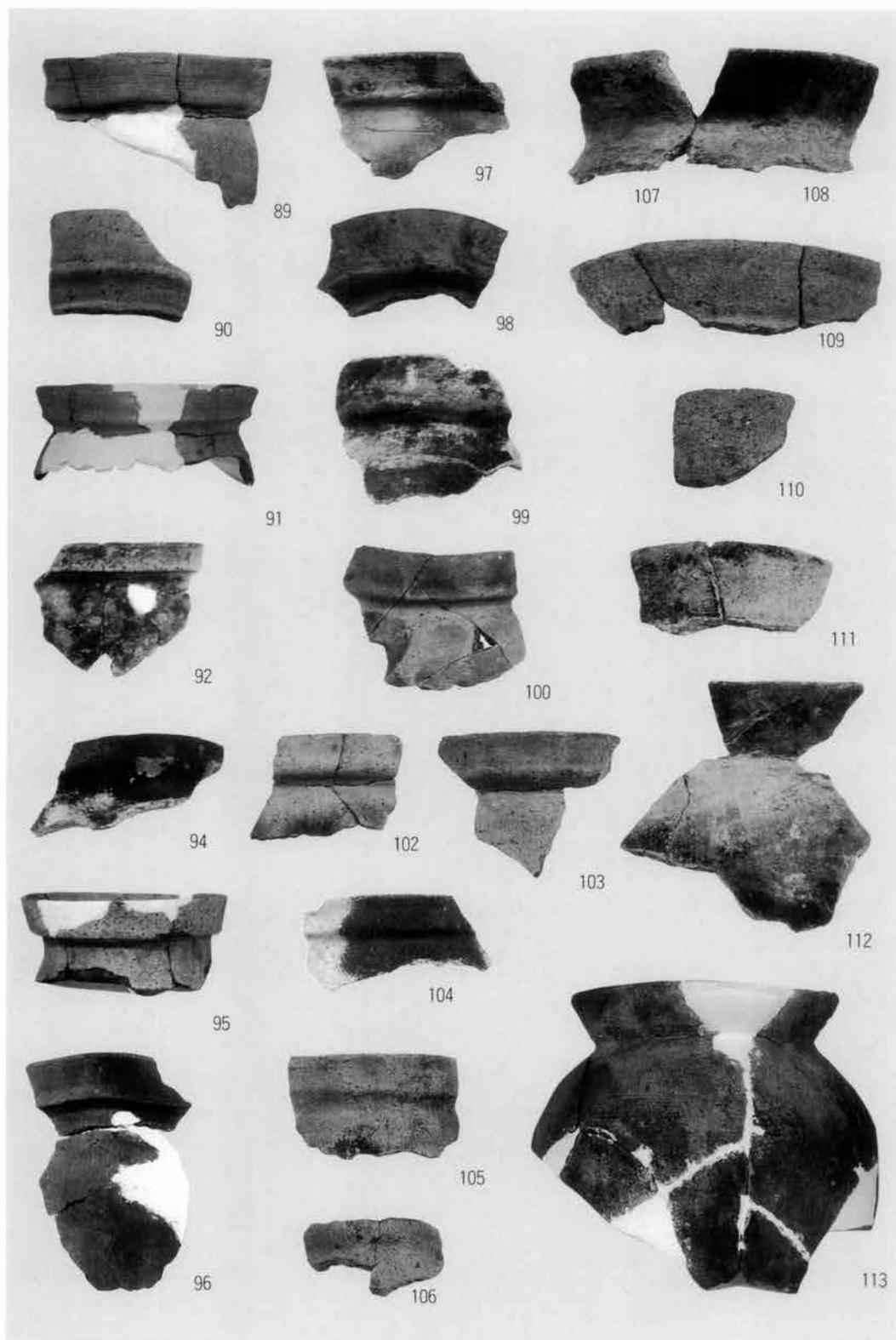
第1次調査14号溝出土土器 1



第1次調査14号溝出土土器 2



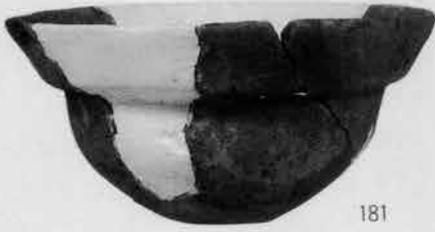
第1次調査14号溝出土土器3



第1次調査14号溝出土土器4



第1次調査14号溝出土土器 5



181



186



195



194



193



192 (中央部ほぼ原寸)



190



192



(原寸)

第1次調査14号溝出土土器6



第1次調査14号溝出土土器7



第1次調査14号溝出土土器 8

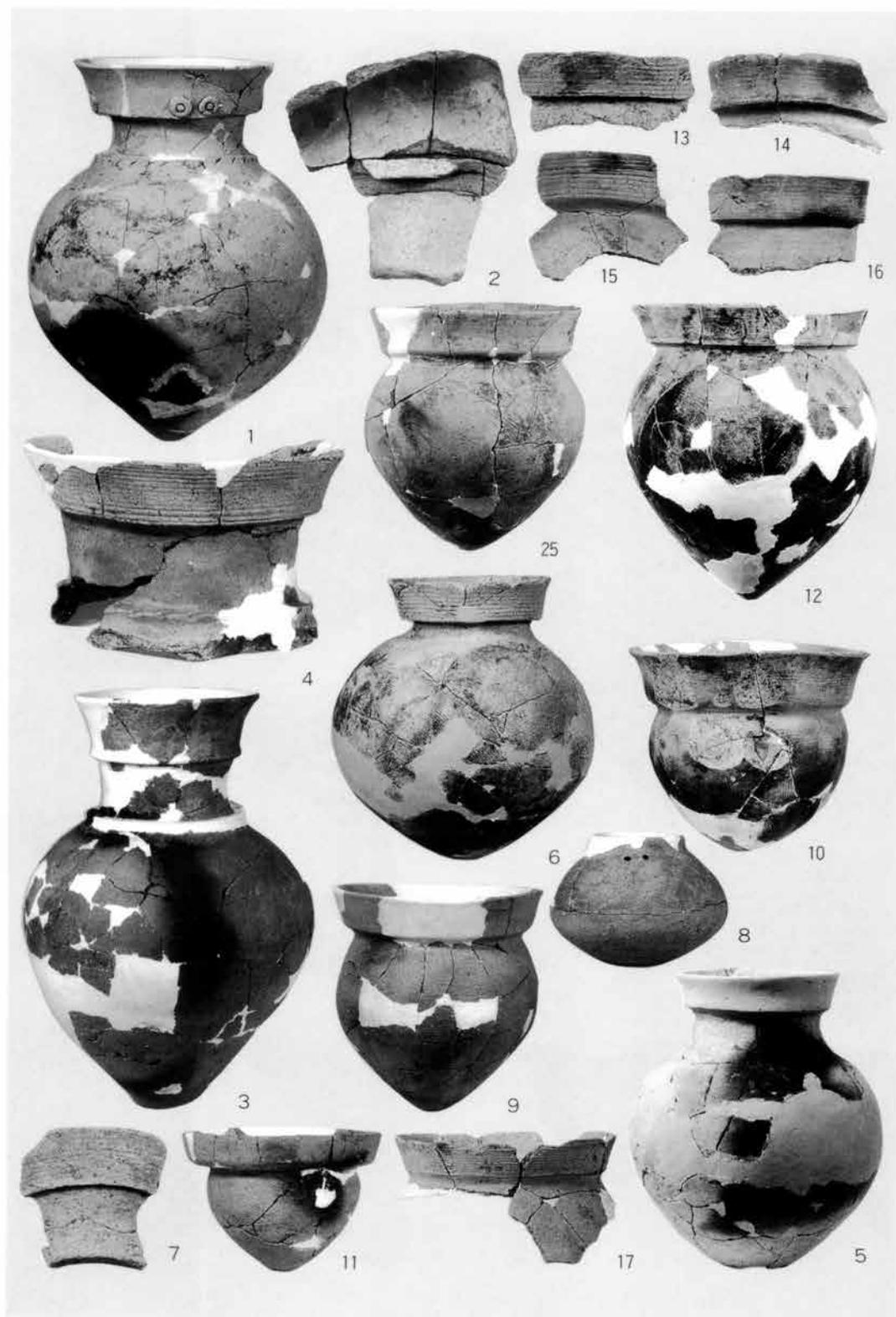


(部分は中央部が)  
ほぼ原寸

第1次調査14号溝出土土器9



第3次調査2号溝出土土器



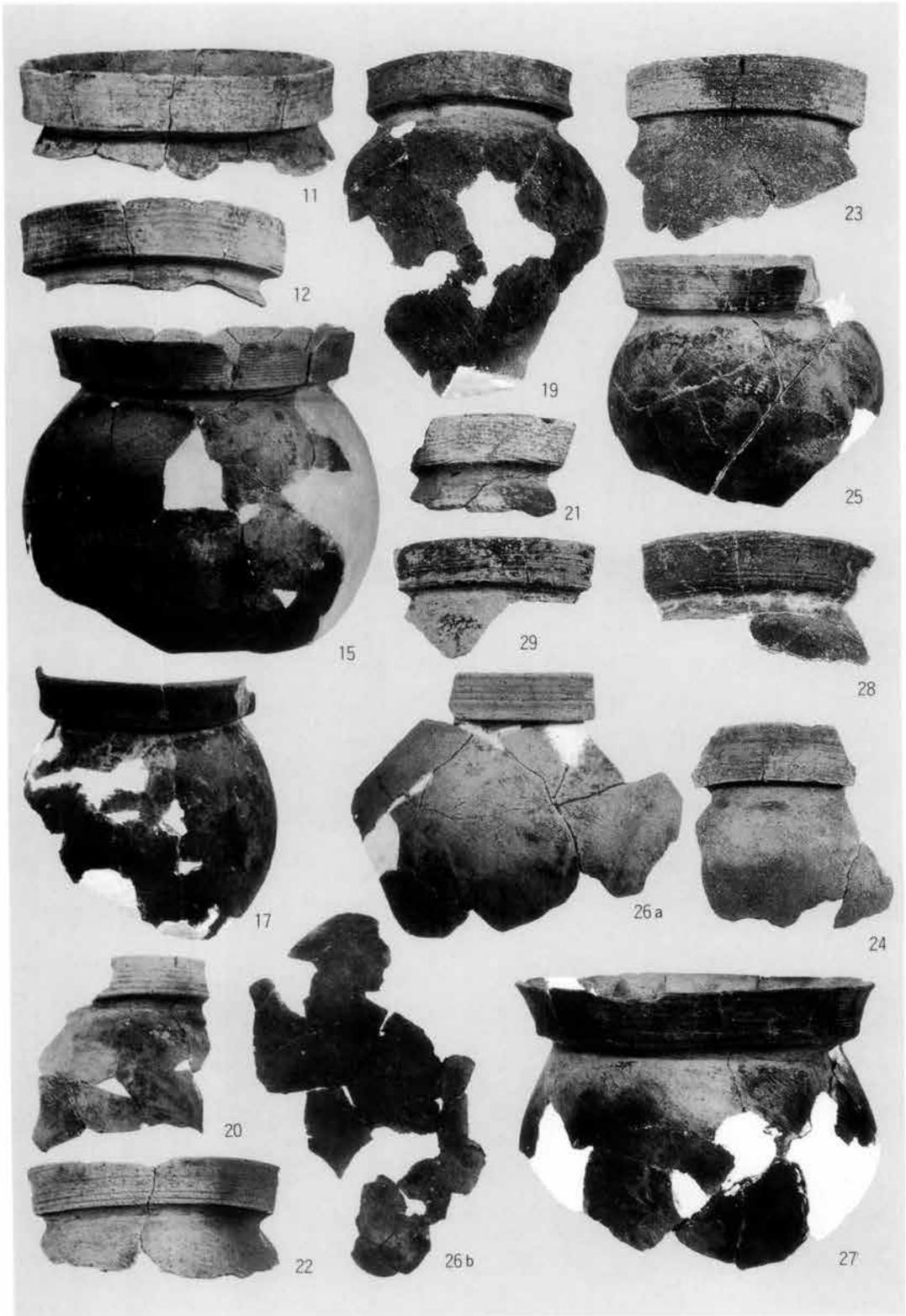
第2次調査20号溝出土土器 1



第2次調査20号溝出土土器2



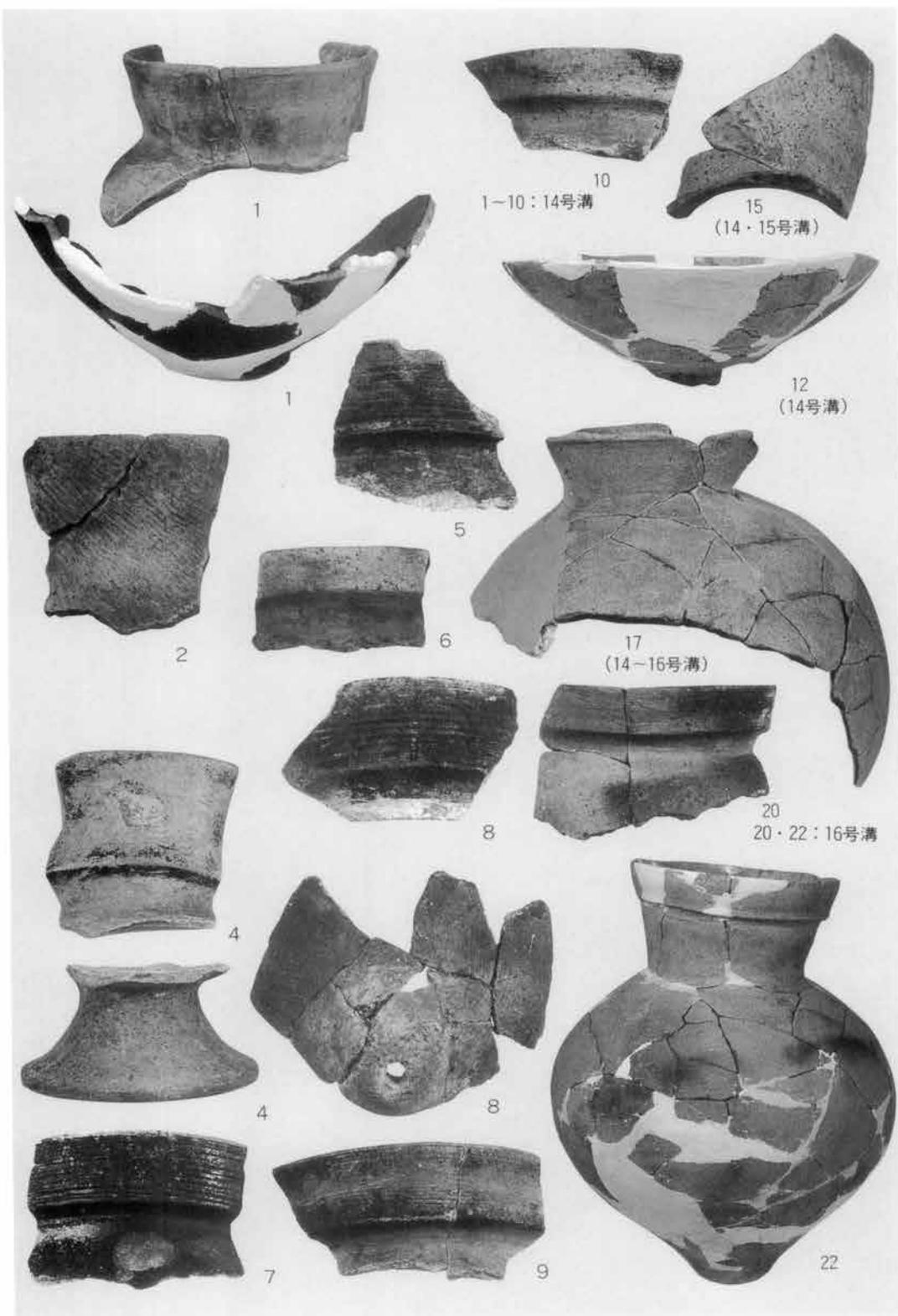
第3次調査40号溝出土土器1



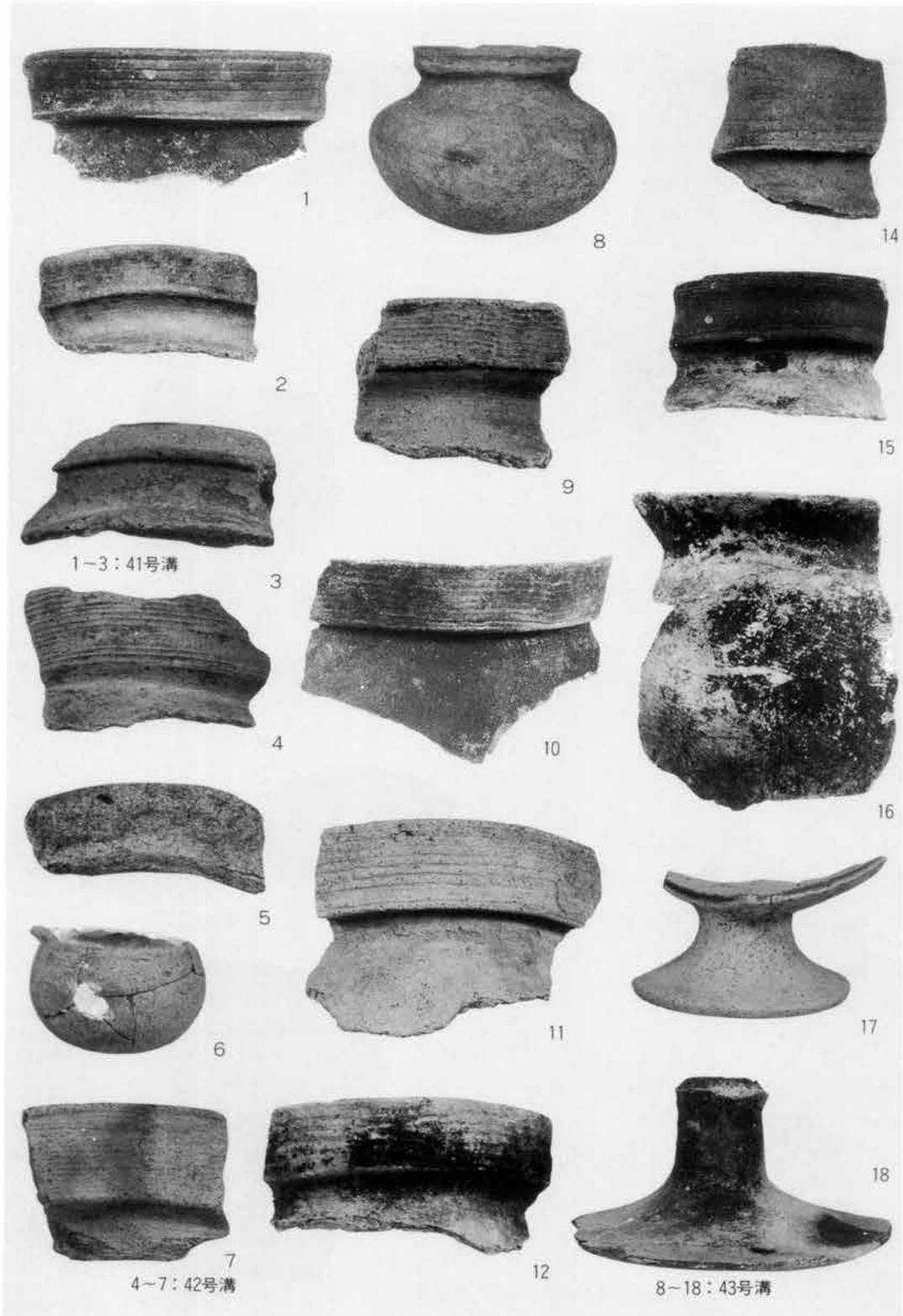
第3次調査40号溝出土土器 2



第3次調査40号溝出土土器 3



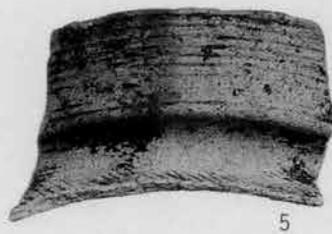
第2次調査14～16号溝出土土器



第3次調査41~43号溝出土土器



第2次調査12号土壇



第3次調査25号土壇



第3次調査29号土壇



第3次調査1号溝上面(原寸)



第2次調査8号土壇



第2次調査8号土壇(原寸)



第1次調査14号溝



第3次調査20号土壇



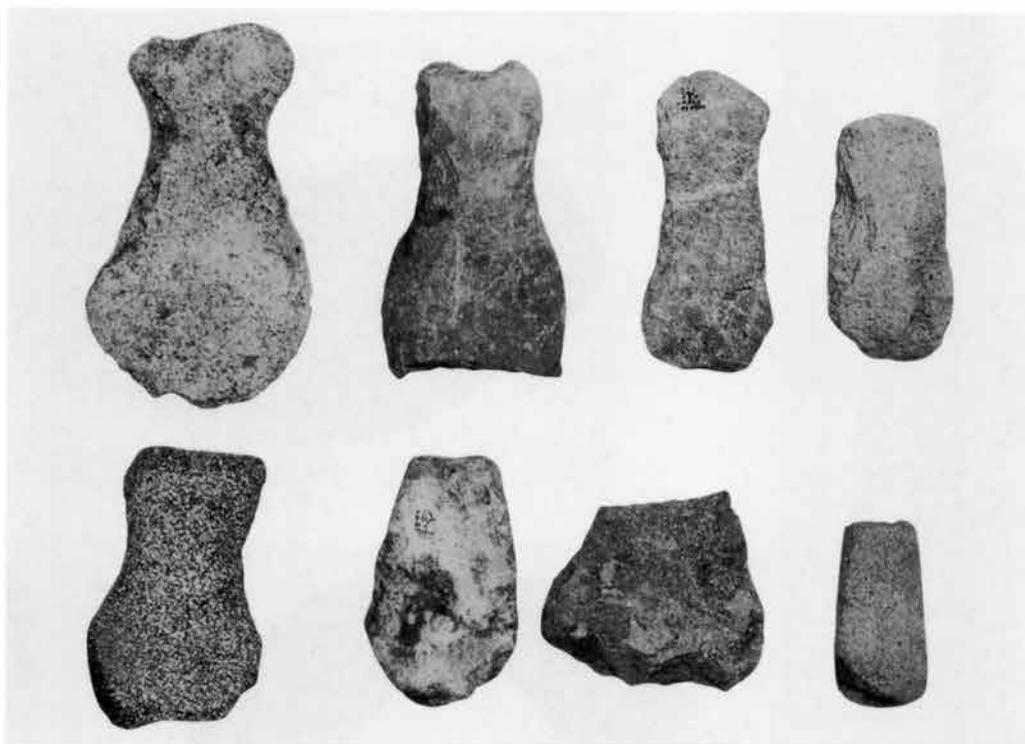
第2次8・12号土壇、第3次20・25・29号土壇他出土遺物



古墳時代初頭の大溝（第2号溝）



石器出土状況



大溝出土の石器類



2号土塚出土壺形土器



2号土塚出土壺形土器



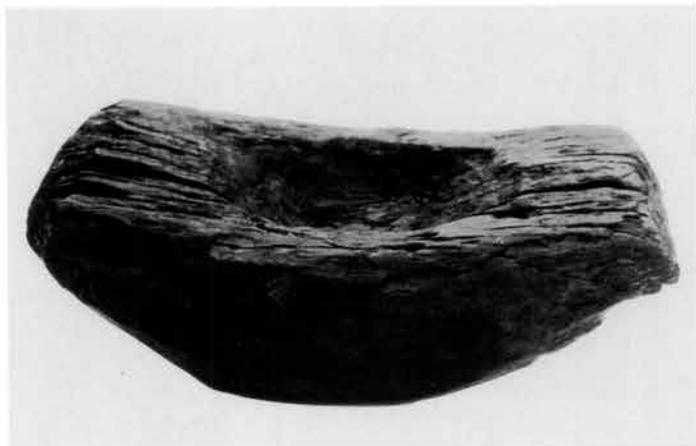
2号土塚出土「ナワ」



鋤 (未製品)

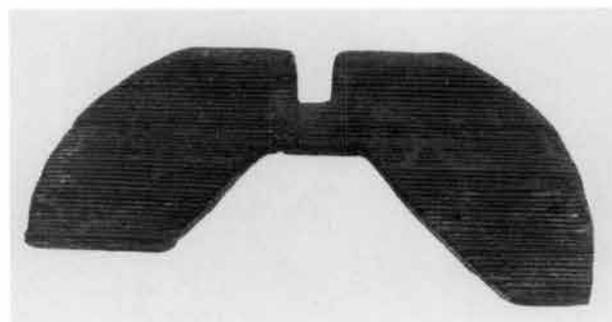
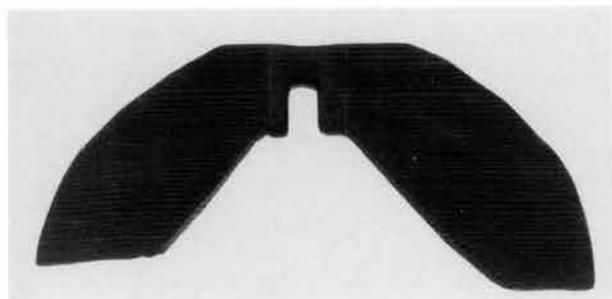


(上面)



(側面)

鉢形木器 (未製品)



用途不明木器



杓子



金光明取勝王經四天王護  
目品



2号木簡

(釈文)

金光明取勝王經四天王護目品



木造  
宿女力

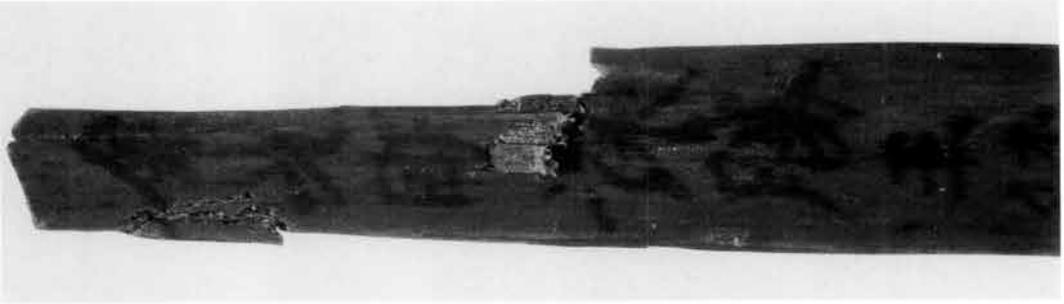
(左)  
木造  
宿女力

(釈文)

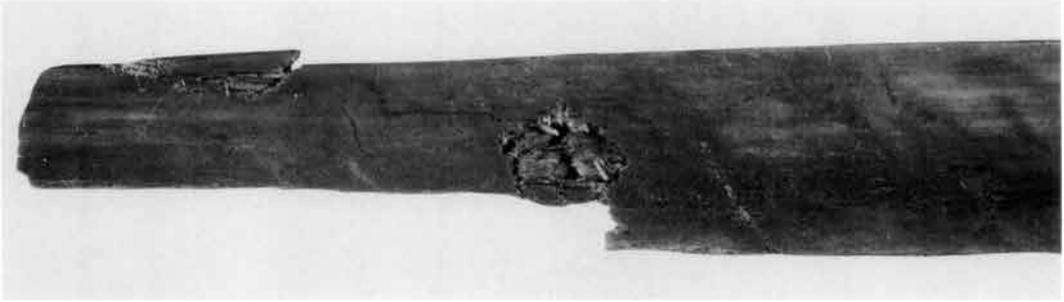
1号木簡 (原寸)

表

2号木簡細部



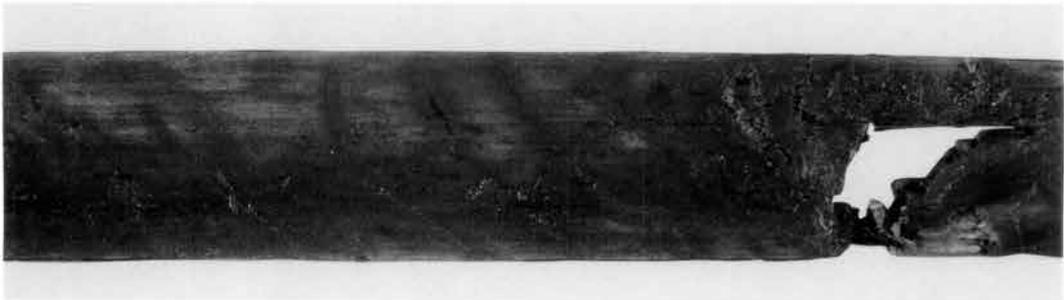
裏



表



裏





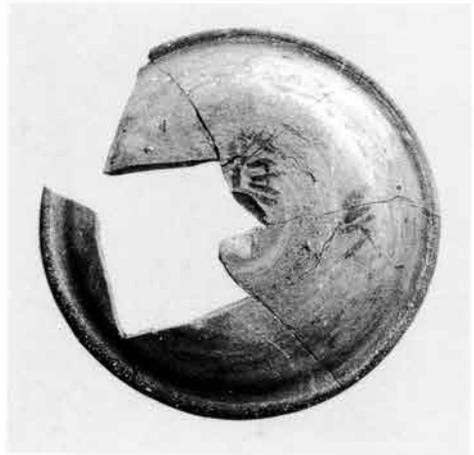
墨書「在在」



墨書「隆」



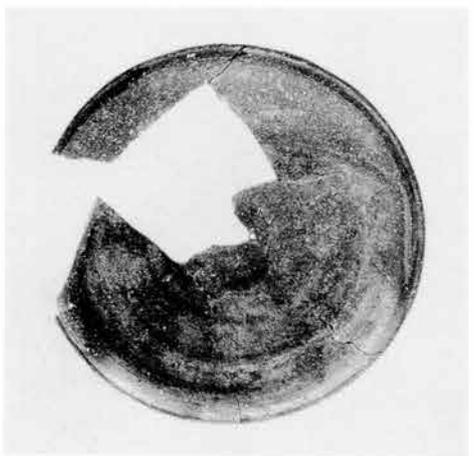
墨書「秋」



墨書「隆茂」



墨書「得」



内面 転用硯



墨書「在」



墨書「改吉」



墨書「隆」



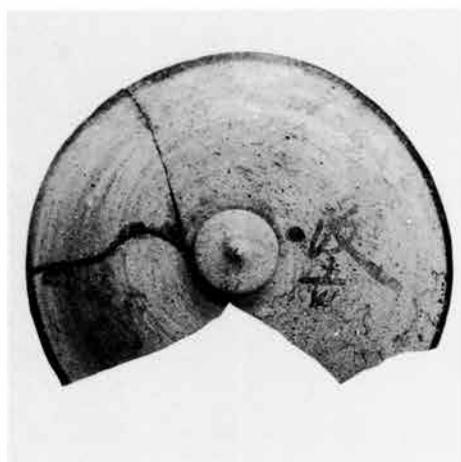
墨書「良」



墨書「隆」



墨書「六」



墨書「改吉」



墨書「平」



墨書「改吉」



墨書「良」



墨書「改吉」



墨書「鮑益山」

---

## 小松市高堂遺跡

一般国道8号改築（金沢西バイパス）事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

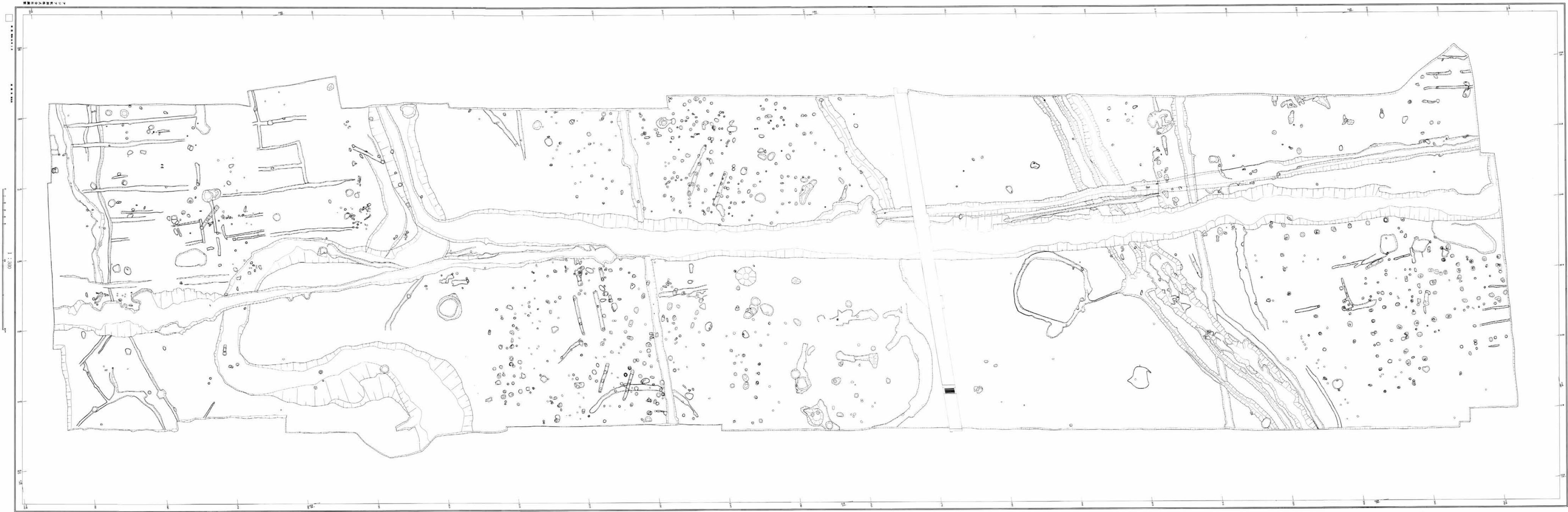
編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
〒921 金沢市米泉町4丁目133  
0762-43-7692

発行日 平成2年3月30日(1990)

印刷所 北國書籍印刷株式会社

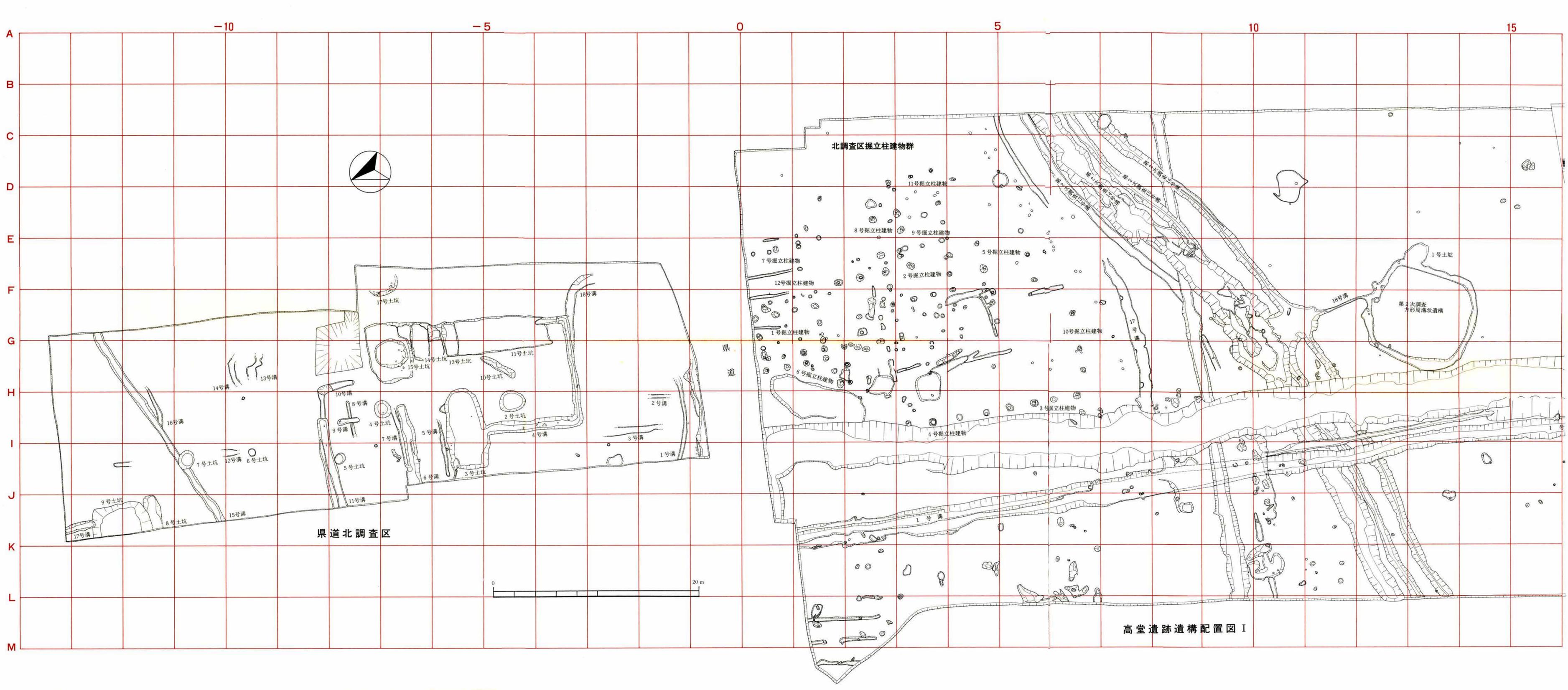
---

小松市高堂遺跡遺構平面圖



小松市高堂遺跡遺構平面圖

小松市高堂遺跡遺構平面圖



北調査区掘立柱建物群

県道北調査区

高堂遺跡遺構配置図 I

15

20

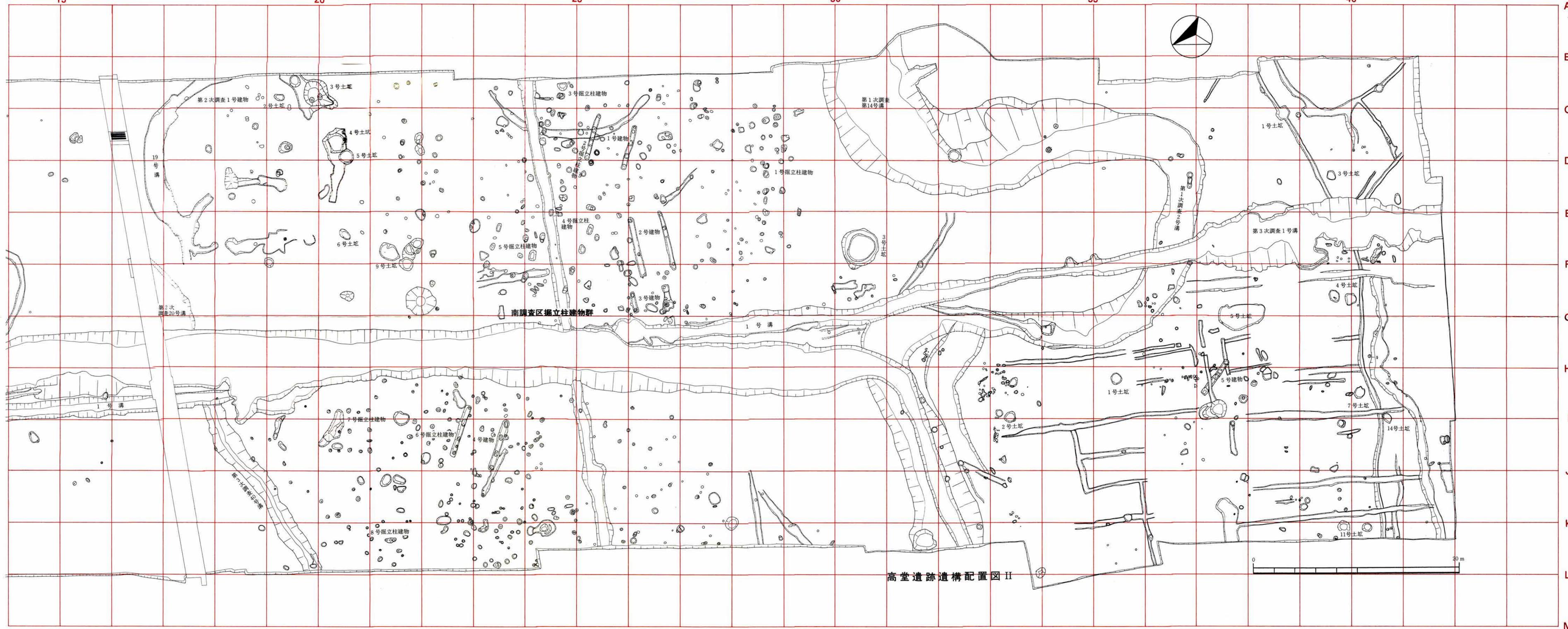
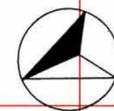
25

30

35

40

A  
B  
C  
D  
E  
F  
G  
H  
I  
J  
K  
L  
M



南調査区掘立柱建物群

第1次調査  
第14号溝

第1次調査  
2号溝

第3次調査  
1号溝

第2次  
調査  
20号溝

高堂遺跡遺構配置図 II

